

よし　たけ

吉武遺跡群

XVI

飯盛・吉武園場整備関係調査報告書 10

—古墳時代生活遺構編 1 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第831集

2004

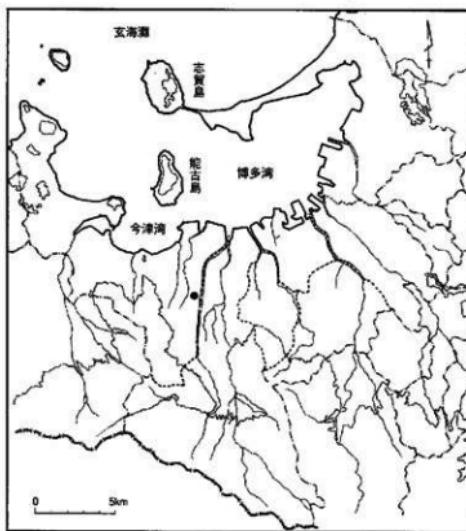
福岡市教育委員会

吉武遺跡群

XVI

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書
—古墳時代生活遺構編 1 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第831集



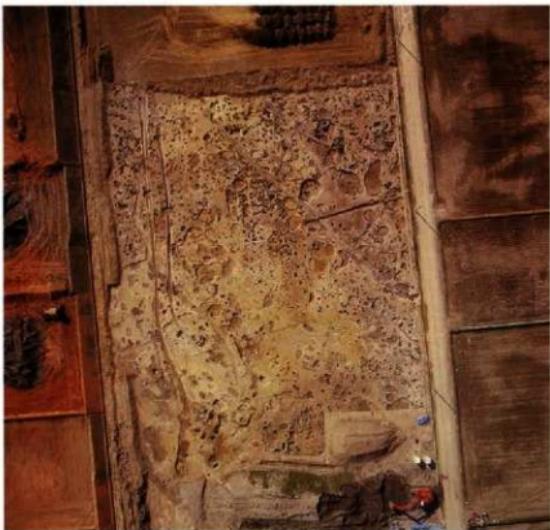
遺跡略号 YST4・6・9
調査番号 8335, 8416, 8535

2004

福岡市教育委員会



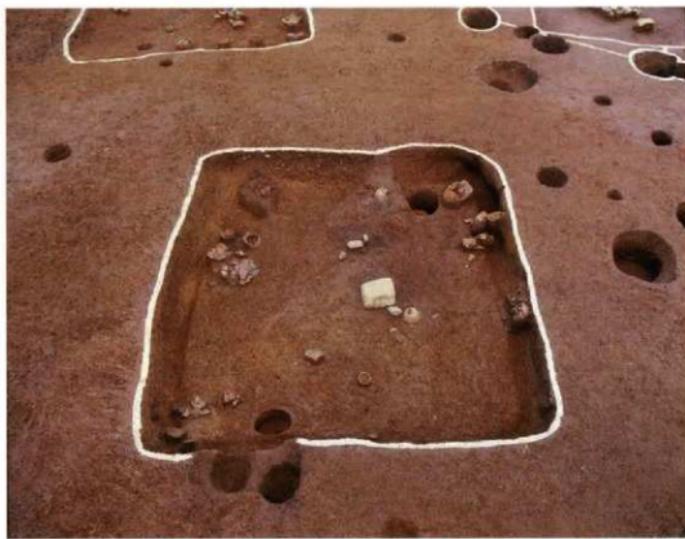
1. 9次調査1・2区遠景（東から）



2. 9次調査1・2区全景（東から）



1. 9次調査3区住居群（南東から）



2. 9次調査SC20遺物出土状況（南から）

序

古来より大陸文化流入の門戸であった福岡市域には、中国大陸、朝鮮半島をはじめとする東アジア地域との長い交流を示す多くの遺跡が残されています。

ここ福岡市西郊の早良平野では、平野を北流して今津溝に注ぐ室見川の中・下流域を中心として縄文時代から古代までの多くの遺跡が形成されており、なかでも吉武遺跡群は弥生時代の中心をなす遺跡と考えられています。

さて、今年度報告いたしますのは、同地域の圃場整備事業に伴い、昭和58年度から60年度まで発掘調査を行なったもののうち古墳時代集落堅穴住居群についての成果であります。

これらは本地域の山麓に広く分布する古墳群を支えた集落として歴史的に非常に重要な位置を占めるものと考えられます。

最後になりますが、本報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献することができましたならば幸甚に存じます。

また、本報告書の作成にあたりご協力をいただきました関係者の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第であります。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　言

1. 本書は、飯盛・吉武地区土地改良事業に伴い発掘調査を実施した、福岡市西区大字吉武・飯盛地区内に所在する『吉武遺跡群』の第4・6・9次調査の古墳時代集落堅穴住居群についての報告書である。
2. 発掘調査は、昭和58年度(1983)から60年度(1985)までの間、福岡市教育委員会が実施した。
3. 調査で検出した各遺構は、土壙(→S K)、溝状遺構(→S D)、堅穴住居跡(→S C)、掘立柱建物(→S B)、柱穴(→S P)、木棺墓(→M)、堀付墓(→K)、石棺墓(→S S)、石巻土壙(→S G)の様に頭に記号を付して呼んだ。
4. 本書に掲載した遺構実測図は、各年度の調査担当者及び調査補助員の他、第9次調査分では西日本航業株式会社に作成委託した航空測量図を併用した。図中の数字は絶対高である。また、遺物実測図は、第4・6次調査分を横山、第9次分を加藤・井上加代子・平川敬治で作成した。
遺物復元は、第4・6次調査分を臨時職員小森佐和子・土斐崎つや子・安野 良・副田則子、第9次調査分を国武真理子・木村厚子・芦馬恵美子で行った。
5. 本書に使用した図面類の整図および製図は、調査担当者の他に臨時職員安野 良・副田則子で行った。
6. 本書に使用した遺構写真は、下村 智(現別府大学助教授)の他、第9次調査分を本課力武卓治・常松幹雄が担当し、全景は稻富興彦(当時)・西日本航業株式会社による。
遺物写真については第4・6次調査分を横山、第9次調査分を加藤が担当した。
7. 本書に使用した方位は第4・6次調査分は磁北で、第9次調査分は旧国土地標第2系による座標北である。磁北はこれに6° 2' 東偏する。
8. 本書の執筆は、第一・二章を加藤、第三章第一・二節を横山、第三節以降を加藤が担当した。
また、編集は協議の上、加藤が行った。
9. 本書に収録された出土遺物、写真、図面などの記録類は、平成15年度に埋蔵文化財センターに本取扱の予定である。
10. 表紙題字は、元埋蔵文化財センター杉山悦子氏にお願いした。記して感謝します。

本文目次

第一 章 はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
第二 章 遺跡の立地と環境	5
第三 章 調査の記録	9
第一 節 第4次調査報告	9
1. 調査概要	9
2. 壊穴住居跡	12
3. 小結	26
第二 節 第6次調査報告	27
1. 調査概要	27
2. 壊穴住居跡	27
3. 小結	46
第三 節 第9次調査報告	47
1. 調査概要	47
2. 壊穴住居跡	48
3. 混入資料	151
4. 小結	154
第四 章 おわりに	155

挿 図 目 次

Fig. 1	早良平野古墳時代集落分布図(1/30,000)	6
Fig. 2	吉武遺跡群調査区配置図(1/5,000)	7
Fig. 3	調査区地形図(1/2,500)	8
第4次調査		
Fig. 4	第4～6次調査区配置図(1/4,000)	9
Fig. 5	第4次調査遺構全体図(1/1,250)	10
Fig. 6	F-11地区遺構全体図(1/500)	13
Fig. 7	第4次調査SC01住居跡出土状況実測図(1/60)	14
Fig. 8	第4次調査SC01住居跡出土遺物実測図(1/3)	15
Fig. 9	第4次調査SC02住居跡出土状況実測図(1/60)	16
Fig.10	第4次調査SC02住居跡出土遺物実測図(1/3)	17
Fig.11	26-1地区遺構全体図(1/500)	18
Fig.12	第4次調査SC03住居跡出土状況実測図(1/50)	19
Fig.13	第4次調査SC03住居跡出土遺物実測図(1/3)	20
Fig.14	第4次調査SC04住居跡出土状況実測図(1/50)	21
Fig.15	第4次調査SC04住居跡出土遺物実測図(1/4)	21
Fig.16	第4次調査SC05住居跡出土状況実測図(1/50)	22
Fig.17	第4次調査SC05住居跡出土遺物実測図(1/3)	22
Fig.18	第4次調査SC06住居跡出土状況実測図(1/50)	23
Fig.19	第4次調査SC06住居跡出土遺物実測図(1/3)	24
Fig.20	第4次調査SC07住居跡出土状況実測図(1/50)	25
Fig.21	第4次調査SC08住居跡出土状況実測図(1/50)	26
Fig.22	第4次調査SC08住居跡出土遺物実測図(1/3)	26
第6次調査		
Fig.23	第6次調査地区(E・F-17,I-18,J-18地区)配置図(1/1,000)	28
Fig.24	E・F-17地区遺構全体図(1/500)	29
Fig.25	第6次調査SC09住居跡出土状況実測図(1/50)	29
Fig.26	第6次調査SC10住居跡出土状況実測図(1/50)	30
Fig.27	第6次調査SC09-10住居跡出土遺物実測図(1/3)	31
Fig.28	第6次調査SC11住居跡出土状況実測図(1/50)	32
Fig.29	第6次調査SC11-12住居跡出土遺物実測図(1/3)	33
Fig.30	第6次調査SC12住居跡出土状況実測図(1/50)	34
Fig.31	第6次調査SC13住居跡出土状況実測図(1/50)	35
Fig.32	第6次調査SC13住居跡出土遺物実測図(1/3)	36
Fig.33	I18・J18地区遺構全体図(1/500)	37
Fig.34	第6次調査SC14住居跡出土状況実測図(1/50)	38
Fig.35	第6次調査SC14住居跡出土遺物実測図(1/3)	39
Fig.36	第6次調査SC15住居跡出土状況実測図(1/50)	40

Fig.37	第6次調査SC15住居跡出土遺物実測図(1/3)	40
Fig.38	第6次調査SC16住居跡出土状況実測図(1/50)	(折り込み)
Fig.39	SC16住居跡断面実測図(1/50)	41
Fig.40	第6次調査SC16住居跡出土遺物実測図(1/3)	42
Fig.41	M・N-16地区遺構全体図(1/500)	43
Fig.42	第6次調査SC17住居跡出土状況実測図(1/50)	44
Fig.43	第6次調査SC17住居跡出土遺物実測図(1/3)	44
Fig.44	第6次調査SC18住居跡出土状況実測図(1/50)	45
Fig.45	第6次調査SC18住居跡出土遺物実測図(1/3)	45
第9次調査		
Fig.46	A群竪穴住居分布図(1/500)	48
Fig.47	SC51-50-45-36-35-49-29-46-54実測図(1/50)	(折り込み)
Fig.48	SC51-50-45出土遺物実測図(1/3,1/2)	49
Fig.49	SC29-54出土遺物実測図(1/3)	50
Fig.50	SC47-41-42実測図(1/50)	54
Fig.51	SC47-41-42出土遺物実測図(1/3)	55
Fig.52	SC40-30-23-32-44-52-27実測図(1/50)	(折り込み)
Fig.53	SC30-23出土遺物実測図(1/3,1/2)	57
Fig.54	SC32-44出土遺物実測図(1/3,1/2)	59
Fig.55	SC52出土遺物実測図.1(1/3)	61
Fig.56	SC52-27出土遺物実測図(1/3)	62
Fig.57	SC38-37-39実測図(1/50)	63
Fig.58	SC38-37-39出土遺物実測図(1/3)	64
Fig.59	SC33-34-53-48実測図(1/50)	66
Fig.60	SC22-24実測図(1/50)	68
Fig.61	SC33-53-48-22-24出土遺物実測図(1/3,1/2)	69
Fig.62	SC18-17-14-16-15実測図(1/50)	71
Fig.63	SC18-14-15出土遺物実測図(1/3,1/2)	73
Fig.64	SC80実測図(1/50)	74
Fig.65	SC80出土遺物実測図(1/3,1/2)	76
Fig.66	SC19-20-21-31実測図(1/50)	78
Fig.67	SC19出土遺物実測図(1/3)	79
Fig.68	SC20出土遺物実測図.1(1/3)	80
Fig.69	SC20出土遺物実測図.2(1/3)	81
Fig.70	SC21出土遺物実測図.1(1/3)	82
Fig.71	SC21出土遺物実測図.2(1/2,1/3,1/4)	83
Fig.72	SC31出土遺物実測図.1(1/3)	84
Fig.73	SC31出土遺物実測図.2(1/3)	85
Fig.74	SC43実測図(1/50)	87
Fig.75	SC43出土遺物実測図(1/3,1/2)	88

Fig.76	B群堅穴住居分布図(1/500)	90
Fig.77	SC25・26実測図(1/50)	91
Fig.78	SC25出土遺物実測図.1(1/3)	92
Fig.79	SC25出土遺物実測図.2(1/3)	93
Fig.80	SC26出土遺物実測図(1/3)	94
Fig.81	SC10・06実測図(1/50)	95
Fig.82	SC07・08実測図(1/50)	96
Fig.83	SC10・06・08出土遺物実測図(1/3)	97
Fig.84	SC11実測図(1/50)	98
Fig.85	SC01・09実測図(1/50)	99
Fig.86	SC01出土遺物実測図(1/3)	100
Fig.87	SC02・05実測図(1/50)	101
Fig.88	SC12・13実測図(1/50)	103
Fig.89	SC02・05・12出土遺物実測図(1/3,1/4)	104
Fig.90	SC03・04実測図(1/50)	106
Fig.91	SC03・04出土遺物実測図(1/3)	107
Fig.92	SC60・61実測図(1/50)	108
Fig.93	SC60・61出土遺物実測図(1/3)	109
Fig.94	SC62・63実測図(1/50)	110
Fig.95	SC62出土遺物実測図(1/3)	111
Fig.96	SC63出土遺物実測図(1/3)	113
Fig.97	SC64・68実測図(1/50)	115
Fig.98	SC68出土遺物実測図(1/3.1/2)	116
Fig.99	SC73・72・69実測図(1/50)	(折り込み)
Fig.100	SC73・72出土遺物実測図(1/3)	118
Fig.101	SC69出土遺物実測図.1(1/3)	120
Fig.102	SC69出土遺物実測図.2(1/3)	121
Fig.103	SC65実測図(1/50)	122
Fig.104	SC65出土遺物実測図(1/3)	123
Fig.105	SC71実測図(1/50)	124
Fig.106	SC66・100実測図(1/50)	125
Fig.107	SC66・100出土遺物実測図(1/3)	127
Fig.108	C群堅穴住居分布図(1/500)	128
Fig.109	SC101実測図(1/50)	129
Fig.110	SC74・75実測図(1/50)	130
Fig.111	SC74・75出土遺物実測図.1(1/3)	132
Fig.112	SC75出土遺物実測図.2(1/3)	133
Fig.113	SC106・102実測図(1/50)	135
Fig.114	SC103実測図(1/50)	136
Fig.115	SC105A・B実測図(1/50)	137

Fig.116 SC105A・B出土遺物実測図(1/3・1/2).....	138
Fig.117 SC104A・B実測図(1/50).....	139
Fig.118 SC104A・B出土遺物実測図(1/3).....	140
Fig.119 4区住居分布図(1/200).....	142
Fig.120 SC420・421実測図(1/50).....	143
Fig.121 SC420・421出土遺物実測図(1/3・1/2)	145
Fig.122 SC422実測図(1/50)	146
Fig.123 SC422出土遺物実測図(1/3)	147
Fig.124 2号排水路住居分布図(1/500)	148
Fig.125 2号排水路住居1区SC01・02・03、2区SC01実測図(1/50).....	149
Fig.126 2号排水路SC01・02出土遺物実測図(1/3・1/2)	150
Fig.127 住居混入遺物実測図.1(1/3・1/2)	152
Fig.128 住居混入遺物実測図.2(1/3)	153
Fig.129 遺跡群I・II期竪穴住居分布図.....	156
Fig.130 遺跡群III・B期竪穴住居分布図	157
Fig.131 遺跡群IV・V期竪穴住居分布図	158

図版目次

第4次調査

- PL.1 1. SC01・02住居跡検出状況全景(南西から)
2. SC01住居跡検出状況近景(南から)
- PL.2 1. SC01住居跡検出状況遠景(南から)
2. SC02住居跡検出状況近景(南西から)

第6次調査

- PL.3 1. SC09住居跡検出状況(西から)
2. SC10住居跡検出状況近景(北から)
- PL.4 1. SC13住居跡検出状況近景(南から)
2. SC16住居跡検出状況遠景(西から)
- PL.5 1. SC16住居跡検出状況遠景(西から)
2. SC17・18住居跡検出状況遠景(北から)
- PL.6 SC17・18住居跡出土状況(南から)
- PL.7 SC01・02住居跡出土遺物
- PL.8 SC02・03住居跡出土遺物
- PL.9 SC03～06住居跡出土遺物
- PL.10 SC08・10住居跡出土遺物
- PL.11 SC10～12住居跡出土遺物
- PL.12 SC13～16住居跡出土遺物
- PL.13 SC16・17住居跡出土遺物
- PL.14 SC18住居跡出土遺物

第9次調査

- PL.15 1. SC45(手前)29・49・51・50(右より、南西から)
2. SC30(東から)
- PL.16 1. SC31土器出土状況(南から)
2. SC31軟質系土器甌出土状況(南から)
- PL.17 1. SC29(北東から)
2. SC19(南から)
- PL.18 1. SC20(南から)
2. SC20土器出土状況(東から)
- PL.19 1. SC21(北から)
2. SC43(南から)
- PL.20 1. SC01・09・07・06・11・10(手前右より、東から)
2. SC03・04他J13グリッド住居群(南東から)
- PL.21 1. SC02(南から)
2. SC02甌部分(南から)
- PL.22 1. SC05(東から)
2. SC12(東から)

- PL.23 1. SC04・03(手前より.北から)
2. SC03(東から)
- PL.24 1. SC04(東から)
2. SC63(北から)
- PL.25 1. SC64(南から)
2. SC69・68・65(手前より.南から)
- PL.26 1. SC68・65・72・71(手前右より.西から)
2. C群住居全景(東から)
- PL.27 1. 4区遠景(北から)
2. SC420・422・421(手前より.北から)
- PL.28 1. 2号排水路2区SC01他(西から)
2. SC01(北から)
- PL.29 SC50・45・29・47・30・23出土遺物
- PL.30 SC32・52出土遺物
- PL.31 SC52・38・37・48・53・22・24出土遺物
- PL.32 SC14・15・80出土遺物
- PL.33 SC19・20出土遺物
- PL.34 SC21出土遺物.1
- PL.35 SC21出土遺物.2
- PL.36 SC31出土遺物
- PL.37 SC43・25出土遺物
- PL.38 SC26・10・06・01出土遺物
- PL.39 SC12・03・61・62出土遺物
- PL.40 SC63・68出土遺物
- PL.41 SC73・72・69・65出土遺物
- PL.42 SC69・66・100出土遺物
- PL.43 SC74・75・105A・105B・104A・104B出土遺物
- PL.44 SC420・421・422・2号排水路2区SC01出土遺物・竪穴住居混入遺物

表 目 次

Tab.1 吉武遺跡群調査一覧表	4
Tab.2 吉武遺跡群堅穴住居分析表	155
Tab.3 吉武遺跡群堅穴住居一覧表(1)	159
Tab.4 吉武遺跡群堅穴住居一覧表(2)	160

付 図 目 次

付図.1 吉武遺跡群第9次調査堅穴住居分布図(1/500)
付図.2 吉武遺跡群第1~9次調査堅穴住居分布図(1/1,000)

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

吉武遺跡群は、昭和44年に行われた九州大学考古学研究室が行った分布調査とその後行われた市教育委員会による分布調査によって弥生時代～古墳時代の遺物が散布していることが知られていた。

本遺跡の本格的調査の開始は、昭和55年(1980)年6月11日付で計画が明らかとなった「飯盛・吉武团体営圃場整備事業」の施工を契機とする。当時の教育委員会文化課と農林水産局農業構造改善部農業土木課は、この事業計画について遺跡遺存の状況を把握するための試掘調査などの必要な事項について事前の協議を進めた。

当初の事業計画は、総対象面積46.4haで、昭和55年度3.6ha、昭和56年度9.0haで、昭和57年度以降33.8haを順次整備していく計画であった。

この事業に伴う発掘調査は、各年度の規模が膨大であることと、当然ながら工事施工と調査が並行・時間的に重複するため、各年度の事業規模を設計変更などによって最低に絞り込むための定期的な協議が土地改良組合理事・農業土木担当者・文化課担当者の三者によって続けられた。

実際の発掘調査は、昭和56年度8.3haの内1.2ha、昭和57年度7.9haの内2.1haの調査を行ったが、調査の着手時期が刈り入れ後の秋から始まる状況であり、また造構密度も非常に濃いこともあって作業は年度末まで継続することとなった。

続く昭和58年度は対象10.1haの内2.5ha、同59年度2.6ha、同60年度2.8haの発掘調査を行った。

調査では、旧石器包含層から「最古の王墓」とされた高木遺跡やこれに次ぐ有力者層の共同墓地であった大石遺跡・墳丘墓の橋渡遺跡などの弥生時代前期末～中期末期の壇棺墓地の発見、帆立貝式前方後円墳である橋渡古墳と卓抜した量の陶質土器・初期須恵器を検出した古墳時代造構群、氏寺と考えられる9～10世紀代の大規模造構群など、他に例を見ない集約度で造構が検出された。

2. 調査の組織

(昭和58年度)

【調査委託】農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査総括】文化財部長 中田宏、文化課長 生田征生、埋蔵文化財第2係長 折尾学

【調査庶務】埋蔵文化財第1係 岡島洋一・古藤岡生

【発掘調査】下村智・横山邦郷、出中寿夫(試掘調査)

【発掘・整理補助員】田中克子、緒方俊輔(現高千穂町教育委員会)

【発掘作業】村本健二、溝口武司、中山章、牧茂幸、川田初、橋哲也、大賀敏明、青柳貴子、青柳弘子、青柳陽子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上キヨ子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上啓智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、岸田浩、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光イワ子、倉光スマ子、倉光ナツ子、倉光信子、倉光初江、小柳和子、齊藤邦子、柴田志子、柴田タツ子、柴田春代、滝良子、高松美智子、筒井ひとみ、堤直代、土斐崎つや子、富崎栄子、富崎フミ子、富永ミツ子、島原タキ子、永井鈴子、中島栄子、中西ヒデ子、中西美由紀、中牟田チエ子、中山サダ子、西島美千代、西原春子、野下久美子、花畠照子、原幸子、

原口マサ子、平田節子、平田美絵子、三角清子、溝口博子、宮原富代、宮崎泰子、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、結城千代子、吉岡朱美、吉岡津幾子、吉積ハル子、吉積フサノ、横溝恵美子、横溝チエ子、脇坂マキノ

【整理作業】花畠照子、溝口博子、安野良、剛田則子、伊藤美紀、鳥飼悦子、室井佐子、酒井香代子、持原良子

(昭和59年度)

【調査委託】農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査総括】文化財部長 中田宏二、文化課長 生田征生、埋蔵文化財第2係長折尾学

【調査庶務】埋蔵文化財第1係 岡島洋一・松延好文

【発掘調査】常松幹雄・下村智・横山邦經、田中寿夫(試掘調査)

【発掘・整理補助員】田中克子、岩本陽児・溝口孝司(九州大学)、矢野健一(京都大学)、諸方俊輔(現高千穂町教育委員会)、樋口秀信・進藤敏雄(早稲田大学)

【発掘作業】村本健二、松田定実、溝口武司、池上宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、吉岡勝美、辻繁一郎、川田初、橋哲也、亀川照義、北園論、小路永智明、末松一馬、藤島博、青柳貴子、青柳弘子、青柳洋子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上キヨ子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上磨智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、甲斐美佐江、川口シゲノ、岸田浩、木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、倉光初江、小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、青藤邦子、坂田セイ子、柴田常人、柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝良子、高松芙蓉子、田中カヨ子、筒井ひとみ、富崎栄子、富出マチ子、富永ミツ子、舩川春江、水井鉢子、中島栄子、中牟田チエ子、中山サタ子、西山ヒテ子、能美須賀子、原ナナエ、西原春子、野下久美子、原幸子、原口マサ子、平出節子、平田美絵子、三角清子、宮原富代、宮崎泰子、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、結城千代子、吉岡朱美、吉岡津幾子、吉積ハル子、吉積フサノ、横溝恵美子、横溝チエ子、脇坂マキノ

【整理作業】花畠照子、溝口博子、安野良、剛田則子、伊藤美紀、上斐崎つや子、小森佐和子、鳥飼悦子、室井佐子、酒井香代子、持原良子

(昭和60年度)

【調査委託】農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎

【調査総括】文化財部長 河野清一、文化課長 柳田純孝、埋蔵文化財第2係長 飛高憲雄

【調査庶務】埋蔵文化財第1係 岡島洋一・松延好文

【発掘調査】力武卓治・下村智・常松幹雄・加藤良彦

【発掘・整理補助員】田中克子、岩本陽児・溝口孝司(九州大学)、矢野健一(京都大学)、諸方俊輔(現高千穂町教育委員会)、樋口秀信・進藤敏雄(早稲田大学)

【発掘作業】村本健二、松田定実、溝口武司、池上宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、吉岡勝美、辻繁一郎、川田初、橋哲也、亀川照義、北園論、小路永智明、末松一馬、藤島博、青柳貴子、青柳弘子、青柳洋子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上キヨ子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上磨智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、甲斐美佐江、

川口シゲノ、岸田浩、木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、
倉光初江、小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、齊藤邦子、坂田セイ子、柴田常人、柴田タツ子、
柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝良子、高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、
土斐崎つや子、富崎栄子、富田マチ子、富永ミツ子、舍川春江、永井鈴子、中島栄子、中牟田チエ子、
中山サダ子、西山ヒデ子、能美須賀子、原ハナエ、西原春子、野下久美子、花畠照子、原幸子、
原ロマサ子、平田節子、平田美絵子、三角清子、宮原富代、宮崎泰子、矢富富士子、柳井順子、柳浦
八重子、山口タツエ、結城千代子、吉岡朱美、吉岡津幾子、吉積ハル子、吉積フサノ、横溝恵美子、
横溝チエ子、脇坂マキノ

【整理作業】芦馬恵美子、木村厚子、国武真理子、
池田光太・井上愛子・片岡加奈子・横山恵（福岡大学）



9次調査作業風景

Tab. 1 吉武遺跡群調査一覧

番号	調査番号	次 数 名	所 在 地	調査期間	調査面積(㎡)	担当者	報 告 書
1	8102	圓場整備第1次	西区大字板塙字本名地内	19811101~ 19820315	12,000	二宮忠司・小林義彦 田中寿夫	②・④・⑥~⑫
2	8234	圓場整備第2次	西区大字板塙字地内	19820901~ 19830215	21,000	二宮忠司	②・④・⑥~⑫
3	8235	田・飯塙整第1次	西区大字板塙字トイ地内	19820922~ 19830212	5,200	山崎紘雄	①
4	8335	圓場整備第3次	西区大字吉武字桜町110地内	19830912~ 19840324	25,000	横山邦耕 下村 賢	②・④~⑪
5	8415	田・飯塙整第2次	西区大字板塙地内	19840413~ 19840531	1,600	浜石哲也	④
6	8416	圓場整備第4次	西区大字吉武字高木194地内	19840701~ 19850320	25,000	横山邦耕・下村 賢 常松幹雄	②・④~⑪ ⑬・⑭
7	8426	野方・金武塙第2次	西区大字吉武字三十六146地内	19850326~ 19850531	2,300	横山邦耕 下村 賢	③
8	8518	圓場整備第5次	西区大字吉武字高木地内	19850702~ 19850724	470	横山邦耕	②・④~⑪・⑬・⑯
9	8535	圓場整備第6次	西区大字吉武字大石地内	19850801~ 19860331	28,000	力武卓治・下村 賢 常松幹雄・加藤良彦	②・④~⑪・⑬・⑯
10	8650	圓場整備第7次	西区大字吉武字大石36地内	19861116~ 19870227	5,000	力武卓治 常松幹雄	未刊
11	8662	野方・金武塙第6次	西区大字板塙地内	19860901~ 19860510	23,000	二宮忠司 佐藤一郎	⑤
12	8714	野方・金武塙第7次	西区大字板塙字トイ地内	19870601~ 19870909	2,810	二宮忠司 佐藤一郎	⑤
13	8752	圓場整備第8次	西区大字吉武地内	19880301~ 19880331	1,000	力武卓治 常松幹雄	未刊
14	8838	圓場整備第9次	西区大字吉武字美木地内	19880725~ 19880916	724	山崎紘雄	未刊
15	9940	下水道第1次	西区大字吉武地内	19990906~ 19990908	37	大堀紀宣	未刊
16	0311	下水道第2次	西区大字板塙地内	20030509~ 20030518		松浦一之介	未刊
17	0365	圓場整備第1次	西区大字吉武地内	20040119~ 開令寺		本田浩二郎	未刊

- 調査報告書
- ①「吉武遺跡」 Ⅰ・市道田・飯塙整備調査文化財調査報告書 『福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集』 1985
 - ②「吉武高木」 - 佐生時代住居遺構の調査報告書 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第133集 1986
 - ③「吉武遺跡」 - 佐生時代・式經墓に伴う埋蔵文化財の福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988
 - ④「吉武遺跡」 Ⅱ・市道田・飯塙整備調査文化財調査報告書 『福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集』 1989
 - ⑤「吉武遺跡」 - 福岡市方今式經建設に伴う埋蔵文化財の福岡市埋蔵文化財調査報告書第303集 1991
 - ⑥「吉武遺跡」 Ⅲ・飯塙・吉武塙整備調査会実業係研究報告書 - 1-先生時代古墳建築物の報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集 1995
 - ⑦「吉武遺跡」 Ⅳ・飯塙・吉武塙整備調査会実業係研究報告書 - 2-先生時代埴輪の報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第61集 1995
 - ⑧「吉武遺跡」 Ⅴ・飯塙・吉武塙整備調査会実業係研究報告書 - 3-先生時代古墳墓の調査報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集 1997
 - ⑨「吉武遺跡」 Ⅵ・飯塙・吉武塙整備調査会実業係研究報告書 - 4-先生時代の墓地の調査報告書 - 1- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集 1998
 - ⑩「吉武遺跡」 Ⅶ・飯塙・吉武塙整備調査会実業係研究報告書 - 5-先生時代墓地の調査報告 - 2- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集 1999
 - ⑪「吉武遺跡」 Ⅷ・飯塙・吉武塙整備調査会実業係研究報告書 - 6-先生時代墓地の調査報告 - 3- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第659集 2000
 - ⑫「吉武遺跡」 Ⅸ・飯塙・吉武塙整備調査会実業係研究報告書 - 7-第1・2次織文・古墳-平安時代の調査報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第675集 2001
 - ⑬「吉武遺跡」 Ⅹ・飯塙・吉武塙整備調査会実業係研究報告書 - 8-第4・6・9次泊石墓・古墳群の報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第721集 2002
 - ⑭「吉武遺跡」 Ⅺ・飯塙・吉武塙整備調査会実業係研究報告書 - 9-第4・9・9次古墳調査報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第775集 2003

第二章 遺跡の立地と環境

福岡市域は西から、背振山系から北流する諸河川流域である糸島・早良・福岡平野、犬鳴山地から北西に流れる諸河川流域である柏原平野が主要な部分を占め、これらが博多湾を囲むように広がっている。

吉武遺跡群が位置する早良平野は、西側を背振山系から北に派生した西山・飯盛・高祖地星山地に、東を同じく北に派生する油山山地と更に北に延びる飯倉台地によって両され、中央部を背振山地を源流とする室見川が北流し博多湾へと注いでいる。平野の北辺には姪浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、後背には沖積低地が広がっている。また両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位砂礫面が残され、小田部台地にはこの上位の火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。

吉武遺跡群は室見川中流域左岸の、金武から北東に伸びる中位段丘下位砂礫面上に形成された標高20~30mの扇状地上の、これが更に開析された舌状の低台地上に立地し、北を日向川に、南を大北遺跡群が立地する中位段丘との間折谷に区切られ、第1次調査区と第2次調査区、樋渡地区の第4次調査区と大石地区の第9次調査区、高木地区の第6次調査区のそれぞれが立地する3つの低台地上に広がっている。

昭和56~60年にかけての圃場整備に伴う6次の調査で約10haが調査され、旧石器時代細石器文化期の良好なユニット、縄文時代中期~後期初頭の焼窯穴群、殊に弥生時代前期後半~中期にかけての大規模な集落に伴う墓地からは、「特定集団墓」とされ多量の朝鮮製青銅利器や多錨細文鏡・銅鏡などの装身具が検出され、中期中頃には前漢鏡・鉄製利器を副葬する墳丘墓が検出されている。古墳時代には中期から後期にかけて、樋渡前方後円墳から宮々と宮まれる28基の円墳群と同時期の集落が広範囲に展開している。各遺構からは多くの初期須恵器や土師器に伴って多量の半島系の陶質土器・軟質土器が出土しており、本遺跡出土分のみで全市域出土量を凌駕している。弥生時代以上に半島からの渡来人との関わりを深くしている。また自然流路からは鍬・鋤等の農具の他、準構造船のミニチュア、木製軸・鍾など特殊な木器が出土している。奈良時代末から平安時代前期にかけては多くの鍛冶遺構と多量の鉄滓とともに越州窯系青磁・墨書き器・円面鏡・瓦を伴う建物群と方形区画溝等が検出され寺院と考えられている。

平野内の古墳時代集落遺跡の分布は、平野低地・低位段丘部に2湯納・3拾六町ツイジ・4四箇・5原遺跡・6田村遺跡・7免遺跡・8次郎丸高石遺跡・9重留村下遺跡が、海岸砂丘上に10西新町遺跡、室見川中流域左岸の山麓部から広がる標高22~54m程の中位段丘上・浸食された中位段丘下位面残丘の台地上に1本遺跡や、11野方中原遺跡・12野方久保遺跡・13羽根戸遺跡・14太田遺跡・15広石C遺跡・16都地遺跡・17金武城田遺跡・18浦江遺跡群・19浦江谷遺跡群が、右岸の段丘や同じく下位面残丘の台地・独立丘上に20有田遺跡・21飯倉遺跡群・22野井遺跡群・23梅林遺跡・24東入部遺跡群が分布し、上流域には集落は展開しない。このうち、湯納・拾六町ツイジ・四箇・免遺跡で井堰や大量の木器が検出され、西新町遺跡では前期初頭の住居群から多量の半島系土器が出土し、野方中原遺跡では100軒を超す竪穴住居群が、同じく大集落の野方久保遺跡・広石C遺跡では7世紀代の大型建物群を検出、金武城田遺跡では大壁建物と人型建物群を、有田遺跡では「那津官家」と考えられる6世紀代の欄列と大型建物群、次郎丸高石遺跡では5世紀代の河川から祭祀土器とともに多量の鍛冶滓を、梅林遺跡ではオンドル構造の竈を持つ竪穴住居群と大壁建物を検出しており、本遺跡を含め早良平野では半島との

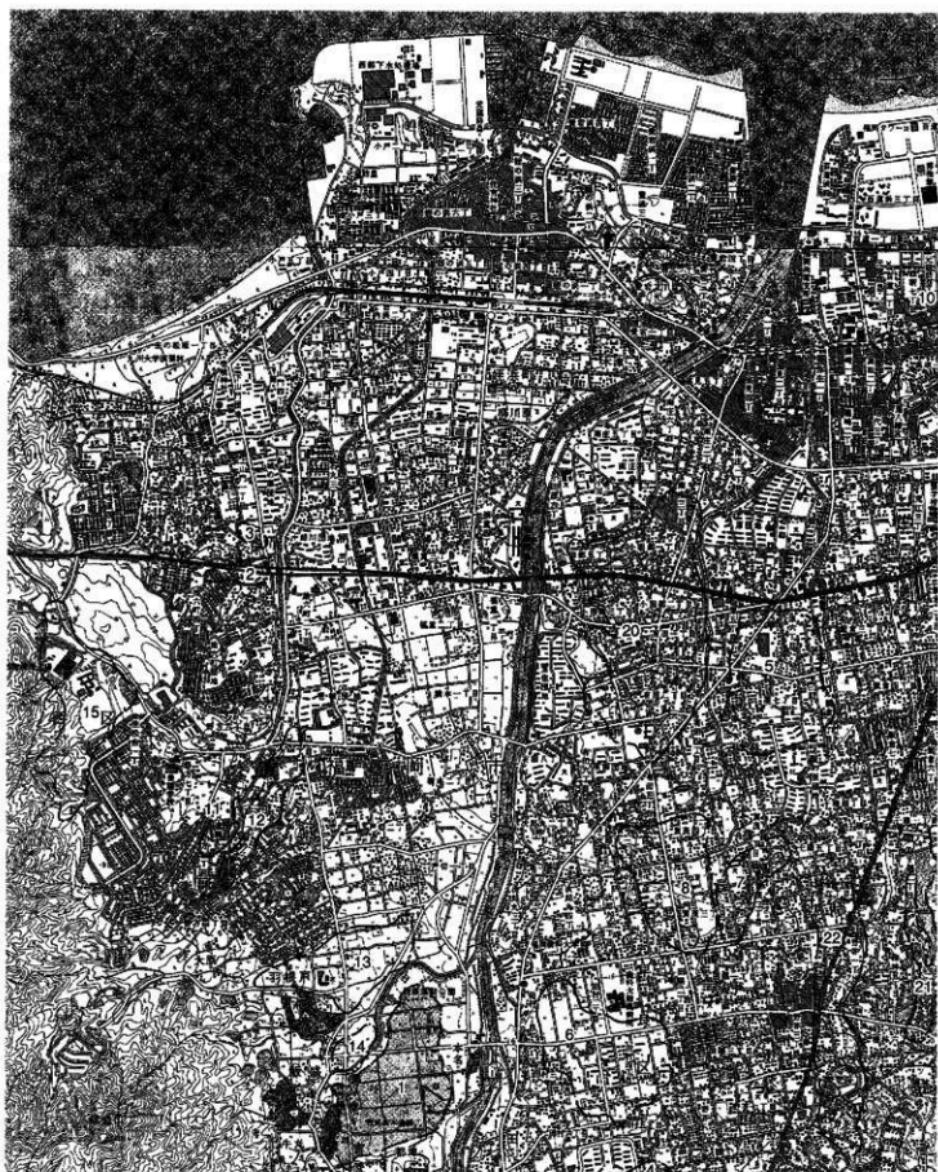


Fig. 1 早良平野古墳時代集落分布図 (1/30,000) ※番号は本文と一致

関わりを示す遺跡が特徴的である。また、重留遺跡東側丘陵上の重留古墳C群の調査ではⅡ期の須恵器登窯が1基検出され、本遺跡出土品を焼成している可能性がある。

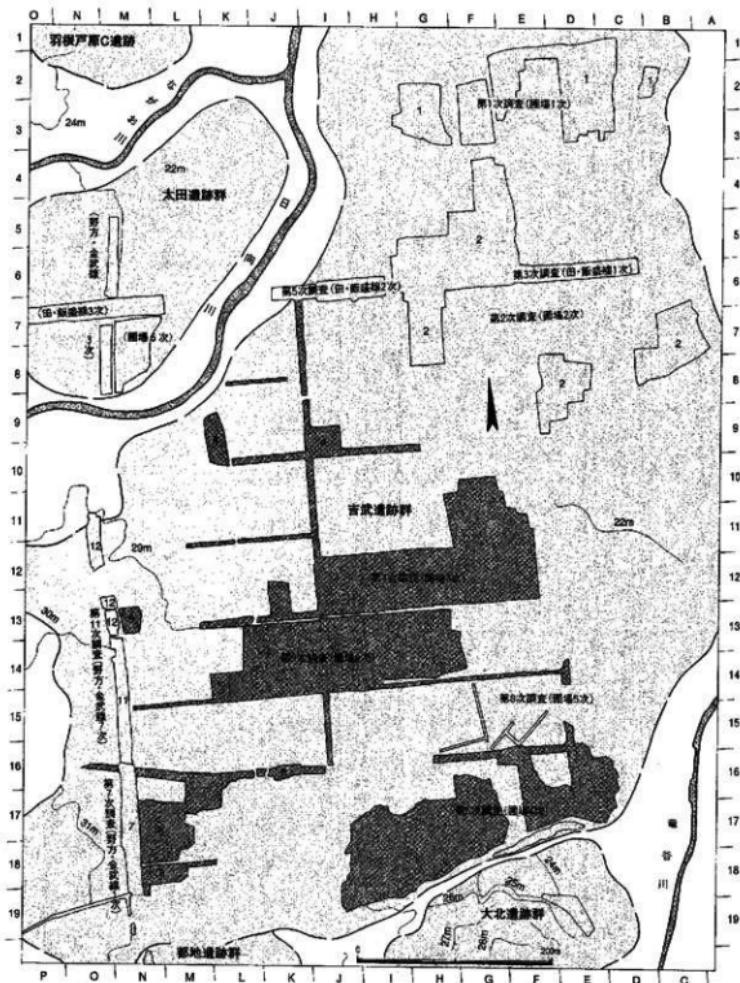


Fig. 2 吉武遺跡群調査区配置図 (1/5,000)

吉武遺跡群内の、本報告を除く調査での古墳時代集落は、第1次調査Ⅱ区で前期の竪穴住居8軒・祭祀造構・掘立柱建物13棟、Ⅲ区で自然流路、第2次調査Ⅶ区で掘立柱建物30棟・井戸1基・土壙30基・自然流路2条、Ⅸ区で竪穴住居1軒・掘立柱建物64棟・井戸1基・土壙43基、Ⅹ区で自然流路1条を、第3次調査で掘立柱建物4棟・土壙24基を、第5次調査で掘立柱建物11棟・井戸6基・土壙47基・自然流路2条を、第11・12次調査で掘立柱建物3棟・竪穴住居1軒・自然流路1条を検出している。

後世の削平の程度によって遺構の分布の粗密が大きく変わってきてていると思われるが、概して前期遺構は希薄であり、後期でも各地点の竪穴住居の検出は少なく掘立柱建物がこれを凌駕している。このなかで、80軒を超える竪穴住居群を検出した第9次調査域が本遺跡後期集落の中心域と考えられる。

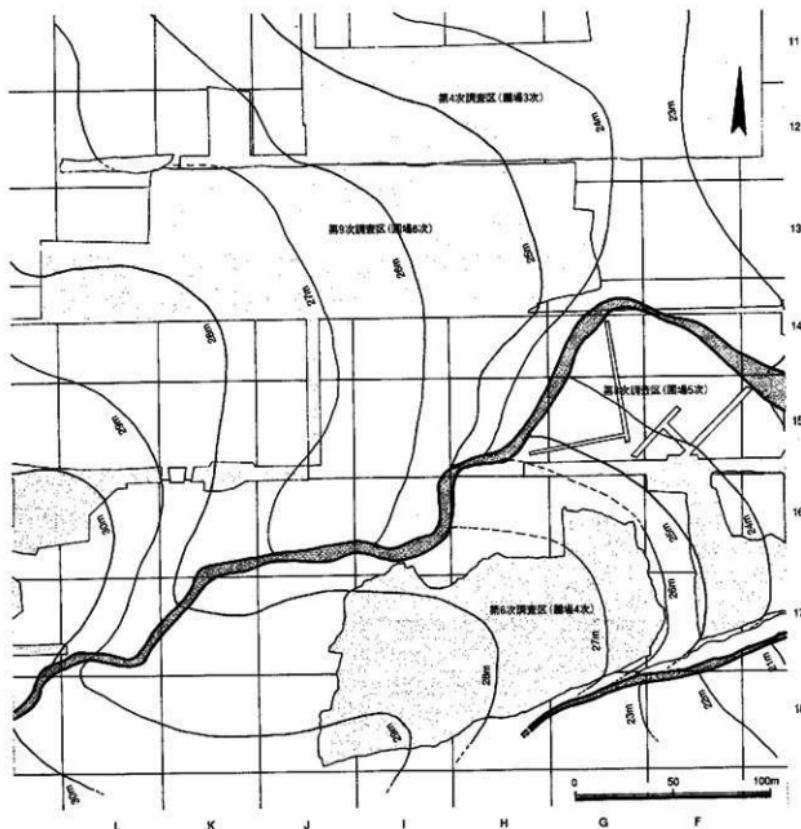


Fig. 3 調査区地形図 (1/2,500) ※等高線は現地表高

第三章 調査の記録

第一節 第4次調査報告

1. 調査概要

第4次調査では、飯盛・古武大石地区の計画道路・水路及び削平を受ける田面区域が調査対象となつた。

計画道路は、北側を東西方向に走る8号支線道路・北側から南北方向に走る2号支線道路等があり、検出された古墳時代の遺構としては何れも交叉する複数の自然流路、不定形土壙、掘立柱建物群、ピット群、方形豊穴住居跡が見られる。

また、自然流路では木製農具や模造船・建築部材等の木器、大量の初期須恵器・土師器、滑石製子持ち勾玉・小玉等の祭祀遺物が伴って出土している。



Fig. 4 第4～6次調査区配置図 (1/4,000)

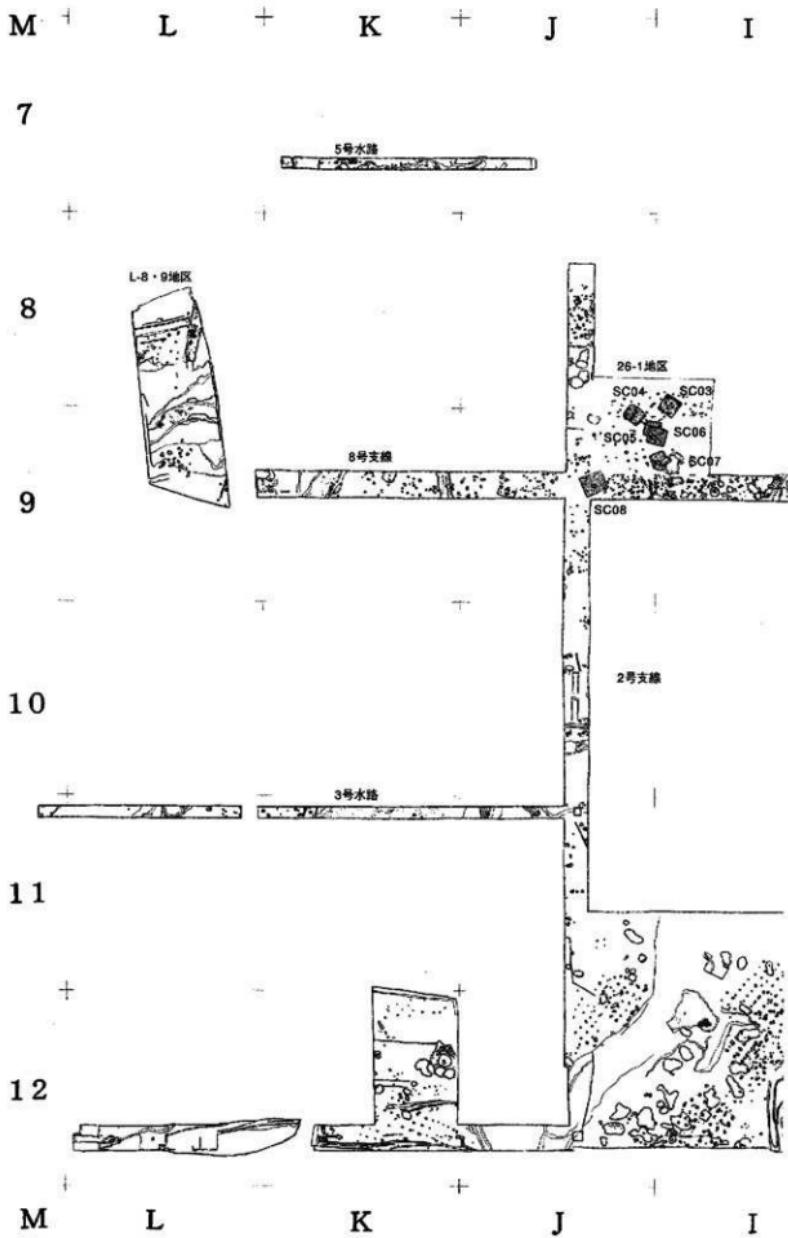


Fig. 5 第4次調査造構全体図 (1/1,250)

H

G

F

E

7

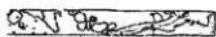
8

9

10

11

12



-1 1 1 4

+ 1 1 1

— 0 0 0

— 0 0 0

— 0 0 0

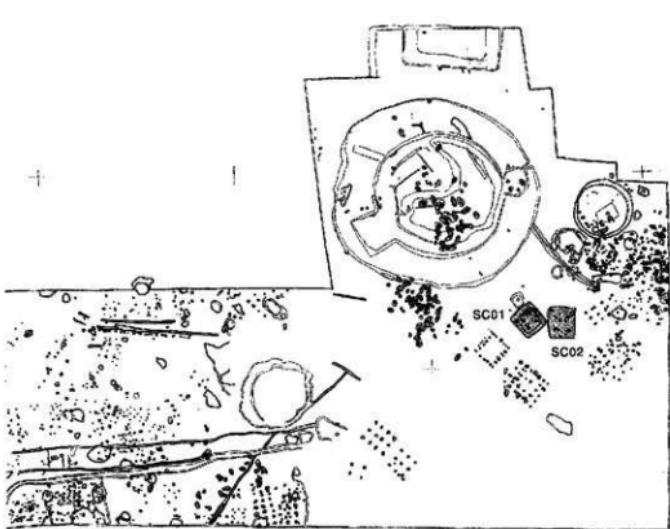
+ 1 1 1

H

G

F

E



水路は、何れも東西方向に走る北側の5号水路・南側の3号水路であり、交叉する不整な自然流路、少數のピット群が検出された。流路では初期須恵器・陶質土器・土師器などが多く出土した。

田面調査区では、北西側のL-8・9地区で自然流路等、中央部のI・J-8・9地区(26-1地区)で堅穴住居跡6軒・不定形土壙・掘立柱建物・ピット群が検出された。

また、第4次調査区南端にあたるE～L-10・12区の東端には樋渡前方後円墳・同方墳があり、これらの南側・西側一帯では古墳時代中～後期の遺構が多く検出された。

しかしながらこの地区にも堅穴住居跡は少なく、純柱掘立柱建物(倉庫)群、自然流路、不定形土壙、井戸跡等が特徴的である。

これらの不定形土壙・自然流路からは、初期須恵器・土師器などが多量に共伴して出土した。

今回報告するのは古墳時代堅穴住居のみである。調査区南端のF-11地区2軒(SC01～02住居跡)、26-1地区と8号支線道路の交差する地区(I・J-8・9地区)の6軒(SC03～08住居跡)の計8軒である。

第4次調査では、調査対象が道路・水路といった狭長な部分に集中しており、検出できた堅穴住居跡は少數であるが、多くの自然流路や廃棄土壙が存在することやこれらから多量の遺物が出土する状況から、未調査区には多数の住居跡が残されていると想定できよう。

2. 堅穴住居跡 (Fig. 5～22 Pl. 1・2)

① F-11地区 (Fig. 6～10) 本地区は、吉武古墳群1号墳(樋渡前方後円墳)の周溝南側に隣接しており、2軒(SC01・02住居跡)が近接して検出された。住居跡周辺には2×2間純柱・4×5間純柱建物等が検出されているが、これらは造営時期の検討作業を十分行って共伴遺構であるかどうかを判断することになり、次年度に報告を予定している。

S C01住居跡 (Fig. 6～8 Pl. 1・2)

(平面プラン) 本住居跡は、SC02住居跡の西側に隣接して検出され、平面プランがほぼ隅丸方形をなす堅穴住居跡である。壁面は、北側辺がやや膨らむ形状になっているが、他辺ではほぼ直線的な形状をなしている。

プランの隅部は、隅丸をなしているが、各壁の辺長は北壁長6.6m・南壁長6.3m・東壁長7m・西壁長6.6mを測る。また、壁上端からベッド上面までの遺存は全体に不良であり、残りの高さは15cm～20cm程度である。

床面に残る主柱穴は1本である。南隅付近の柱穴は60×50cmの長楕円形の掘り方で、深さ30cm程度を測る。また、東隅の主柱穴の位置には3個のピットが知られるが、位置的に西側のものは浅く、東側の2個のピットのいずれかと考えられる。何れも直径20cm程度の円形をなしており、深さは35cm程度を測る。西隅の主柱穴は、径35cm程度の円形で、約30cmの深さを測り、柱痕から柱径は12～13cmと想定できる。また、北隅の主柱穴は、50×45cmを測る楕円形の掘り方で、深さ45cm弱の規模である。

これら主柱穴間の心身長を記すと、南・西の主柱穴間で2.9m、西・北主柱穴間で3m、北・東主柱穴間で3m、東・南主柱穴間で2.7mを測り、東・南間の柱間の実長がやや短い。

(付属施設) 住居跡は、主軸線を磁北から45度ほど西に振る方向にあるが、内壁に沿った四方向に低いベッド状の遺構を伴っている。

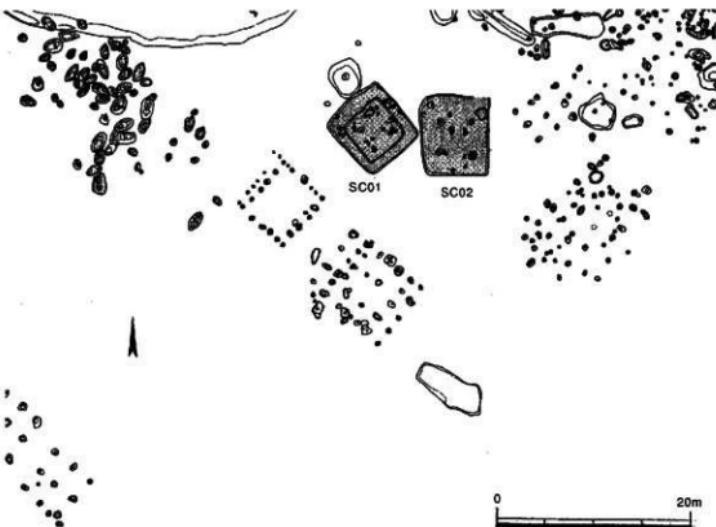


Fig. 6 F-11地区遺構全體図 (1/500)

壁の四面に造りつけのベッド状遺構は、ほぼ住居の外壁に沿う平行位置にあるが、西側辺を除く縁辺では緩くカーブを描き、兩部も整っていない。床面との比高差は10cm程度である。また、壁長は、東壁で4.6m、西壁4.5m、南壁4.7m、北壁4.6mを測る。

(出土遺物) (Fig. 8 Pl.7)

本住居跡では、床面および覆土中から須恵器杯類や高杯・壺・ハケ、土師器高杯などの土器類が少量出土している。

(須恵器杯類) 05001は、杯蓋の小破片である。口縁部と天井部との境に浅い沈線をめぐらし、境は緩い段状突帯となる。口縁部端部は丸くおさめ、内面に緩い段が付く。器面調整は内外ともにヨコナデで、器色は、内外面とも暗赤褐色を呈する。復元口径12.6cm・残存高3.2cmを測る。胎土は砂質で密、焼成は軟質である。

05002は、杯身である。ほぼ垂直な立ち上がりを持ち、受け部は短く、小さい。立ち上がり部および受け部とも丸味を帯び、器壁はやや肉厚である。口縁端部は段をなさない。受け部より1cmほど下がった外面以下に回転ヘラケズリを施す。内面は全面回転ヨコナデである。内底部には巻き上げ痕が一部に観察できる。

口径は、10.5cm・残存高4.6cmを測る。器色は、内面及び外面口縁部が暗灰色で、外面体部は淡灰～セピア・灰色を呈する。胎土は石英粗砂を混入し、密である。また、焼成は堅緻である。

05003も須恵器杯身である。体部の殆どを欠失する製品である。立ち上がりはやや内傾気味で、内面端部は明瞭な段をなす。また、受け部はやや垂れ気味である。製品としてはシャープな出来上がり様相である。口径は、10.6cm・残存高3.1cmを測る。器面調整は、内外面ともに回転ヨコナデである。器色は、内外面ともに淡灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。

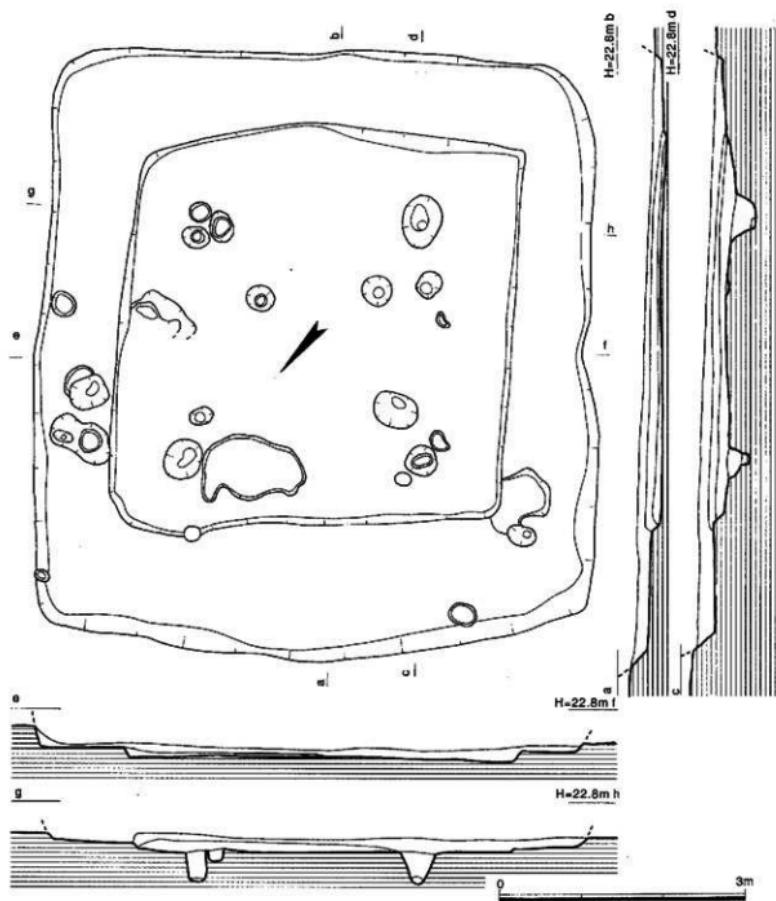


Fig. 7 第4次調査SC01住居跡出土状況実測図 (1/60)

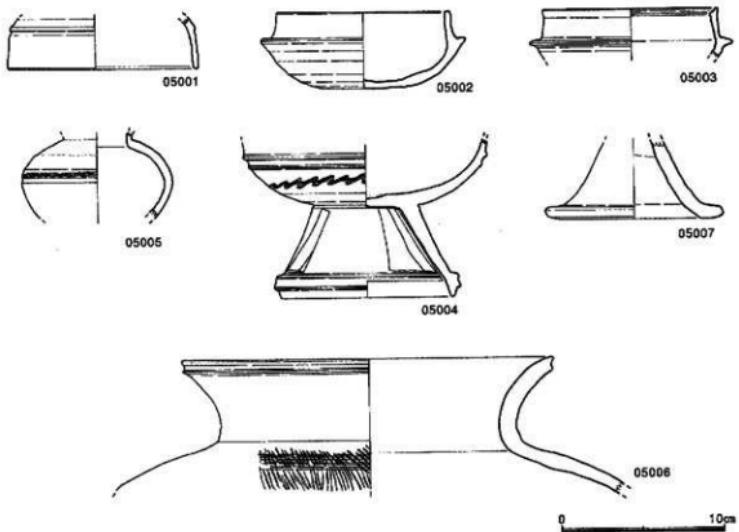


Fig. 8 第4次調査SC01住居跡出土遺物実測図 (1/3)

05005は、須恵器の小形ハソウである。口縁部・底部を欠損する。全体の約1/5が残存する。外面は灰かぶりで全体に淡緑色の自然釉を発色する。胴部中央には1条沈線をめぐらし、この上部に細かい波状文をめぐらしている。調整は、頸部近くに横ヘラケズリを残す。また、内面はヨコナデである。器色は、内外面ともに淡灰色である。胴最大径9.8cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

05004は、須恵器の無蓋高杯である。口縁部端を失う。杯部の口縁部と胴部との境に、上端部が平坦な2条の低い突帯をめぐらす。また、脚部付け根との中間位置に波長の長い細かい波状文を施す。脚は短脚で、四方に長方形の透かしを施す。また、脚は外側して踏ん張る形態で、端部は肥厚して段をなす。杯内底部は中央部が窪み、粘土巻き上げの痕跡が残る。器面調整は、杯部下端がヘラケズリ・内面はヨコナデである。脚部は内外面ともにヨコナデである。器色は、内外面ともに暗赤褐色を呈する。脚部径10.4cm・脚付け根径6.3cm・残存高9.7cmを測る。胎土は砂質で、密である。焼成はやや軟質である。

05006は、須恵器中型壺である。短い口縁部を持ち、頸部から急激に反転する口縁部を持つ。端部は工具による調整で中央部が窪む。外面の口縁端部から胴部編までと内面の口縁部の殆どは灰かぶりである。器面調整は、外面口縁部と内面がヨコナデ、外面胴部では斜めの平行タタキ後にカキ目状のヨコナデが残る。器色は、内外面ともに暗灰～淡灰色を呈する。口径22.5cm・残存高8.4cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

(土師器類) 05007は、土師器高杯の脚部破片である。形状から中空短脚のもので、端部は踏ん張る。内外面ともに暗赤褐色を呈し、外面がヨコナデ、内面はヘラケズリが見られる。脚径10.9cm・残存高4.9cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

SC02住居跡 (Fig. 6・9・10 Pl. 1・2)

(平面プラン) 本住居跡は、SC01住居の東側に隣接して検出された竪穴住居で、ほぼ南北方向

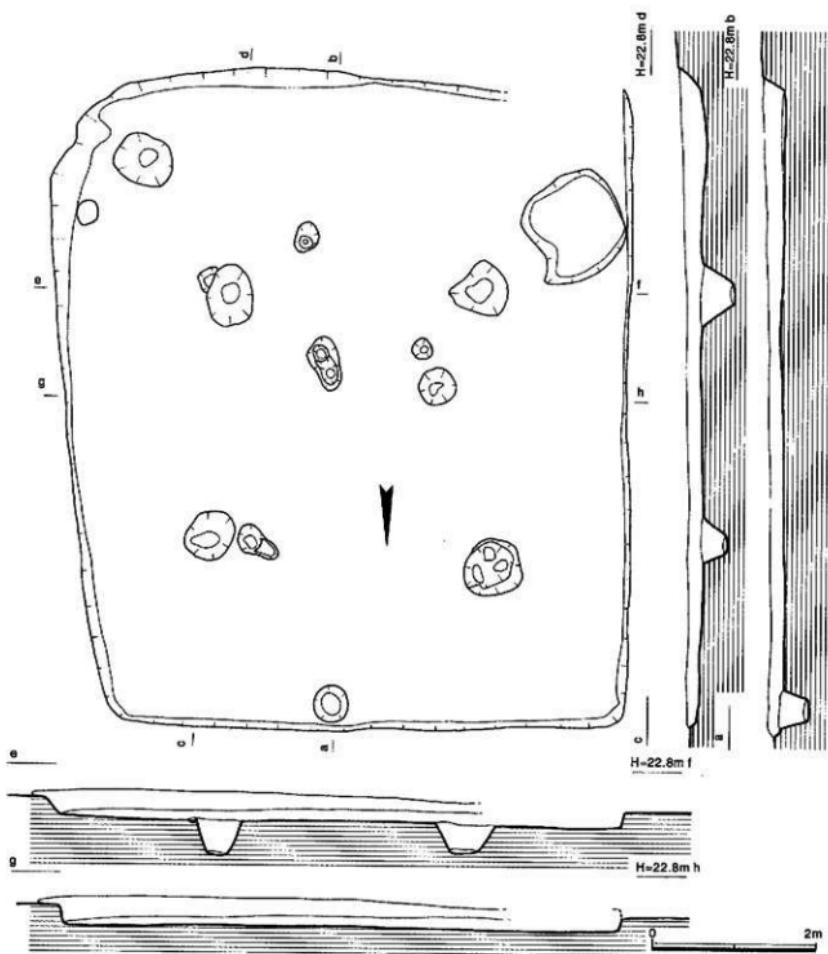


Fig. 9 第4次調査SC02住居跡出土状況実測図 (1/60)

を向く長方形住居で、ベッド状造構は伴わない。南東部の隅部は緩いカーブをなし、南西の隅部は削平によって失なわれている。

また、床面までの残存高は、中央部で約30cm・壁付近で20cm程度を残す。壁面の各辺での実長は、東辺7.3m・西辺7.8m以上・北辺6.2m・南辺6.7mを測る。

(付属施設) SC02住居は、主柱穴4本を有する竪穴住居であるが、掘り方の規模はいずれも比較的大型である。南隅主柱穴は65×70cmの不整形・深さ35cm弱、北隅主柱穴は60×55cmの円形・深さ35cm弱、東隅主柱穴は75×55cmの長円形、西隅主柱穴は径70cmの円形・深さ30cm弱の規模である。

(出土遺物) (Fig.10 PL.7・8)

本住居跡では、覆土中から須恵器杯類、上飾器甕、土師器マリ等が出土している。

(須恵器類) 05010は、須恵器杯蓋である。天井部が低く、口縁部が緩く踏ん張るように開く。

口縁部端の内面は明瞭な段をなす。また、天井部と口縁部の境には鋭い突帯をめぐらす。器面調整は、天井部外面にはカキ目を施し、灰かぶり・重ね焼きの痕跡も見られる。器色は外面暗灰色・内面淡灰色を呈する。口径11.4cm・残存高4.5cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

05008も須恵器杯蓋である。口縁部・天井部との境には明瞭な突起をめぐらす。口縁端部の内面は明瞭な段をめぐらす。また、天井部のほぼ半分に回転ヘラケズリを加える。口縁部外面はヨコナデが残る。器色は、外面が淡灰色・内面暗灰色を呈する。口径は、11.6cm・残存高4.7cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

05009は、やや大振りの須恵器杯蓋である。やや低い天井部に短い口縁部を持つ。全体に薄づ

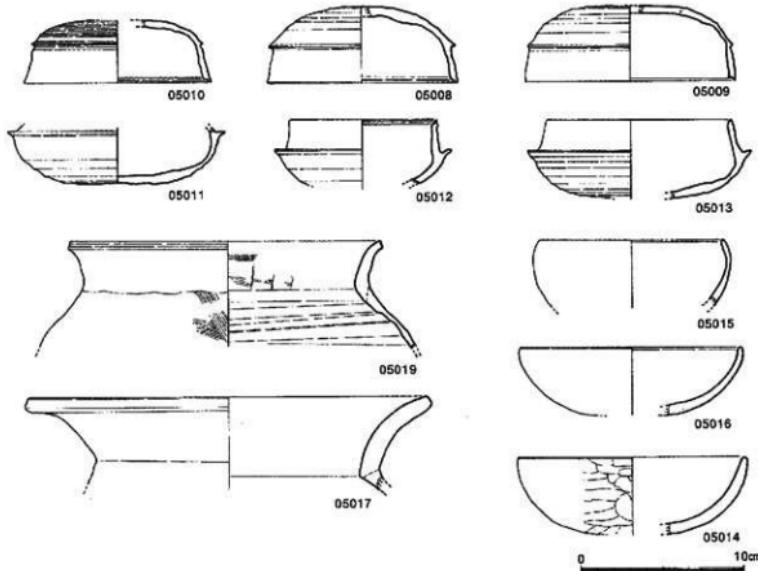


Fig.10 第4次調査SC02住居跡出土遺物実測図 (1/3)

くりの製品である。口縁の端部内面は緩く窪む。天井部との境は細く鋭い突帯となっている。天井部の約2/3にはヘラケズリを加える。内面はヨコナデである。器色は、外面が淡灰色で、内面は褐色を帯びた淡灰色である。口径12.8cm・残存高4.5cmを測る。胎土は石英粗砂の混入あり、密である。焼成は堅緻である。05011は、須恵器の杯身である。口縁部の立ち上がりを失する。全体に受け部などの造りが華奢である。底部の下半はヘラケズリを加える。器色は外面上部が黒灰色、下部が淡灰色である。内面は暗灰色である。タガ部の径13.3cm・残存高3.4cmを測る。胎土は、石英粗砂・赤色粒を混入し、密である。焼成は、堅緻である。05012は、須恵器の杯身である。やや小形の製品である。受け部は跳ねており、口縁部は殆ど垂直に立ち上がる。また、上端部は段をなす。底部の下半はヘラケズリ、口縁部・内面はヨコナデである。器色は、外面が暗灰色、内面は淡灰色を呈する。口径9cm・残存高4.1cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。05013は、須恵器の杯身である。全体に薄づくりで、口縁部は立ち上がりは高く、器が深い。口縁部外面には蓋の一部が固着している。底部の殆どにはヘラケズリを施す。また、内面はヨコナデである。器色は、外面が暗灰色、内面は暗赤褐色を呈する。口径10.2cm・残存高4.9cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

(土師器類) 05019は、短く外開する口縁部を持つ甕である。外面口縁部はヨコナデで、胴部は細かいハケ目後にナデ調整、内面は口縁部ヨコナデ・胴部は横位のヘラケズリを施す。器色は、外面暗褐色～赤褐色を呈する。口径19cm・残存高6.5cmを測る。胎土は密で、焼成堅緻である。

05017は、頸部から急激に外開する肉厚の口縁部を有する土師器甕である。内外面は、赤褐色を呈し、外面にススが付着する。口径29.7cmを測る。胴部内面はヘラケズリ調整。胎土は密で、焼成も堅緻である。05015は、口縁端部が内湾する薄づくりの土師器マリである。器色は、内外面ともに黒～黒褐色を呈し、内面はナデ・下方はヘラナデである。口径11.2cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。05014もやや浅い土師器のマリである。外面は全面が手持ちのヘラケズリを加えている。内面はヨコナデ・指オサエなどの調整が見られる。全体に厚い造りである。器色は赤褐色を呈する。口径14cmを測る。胎土は密で、焼成は堅緻である。05016も薄い造りの土師器マリである。器面は、内外面ともに工具によるナデ調整である。口径13.6cmを測る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

② 26-1地区 (I・J-8・9地区相当) (Fig.11~22) 本調査区では、堅穴住居跡6軒 (SC03~08) を検出した。このうちSC05(古)→SC06(新)や廃棄土壙に切られたSC05などの住居

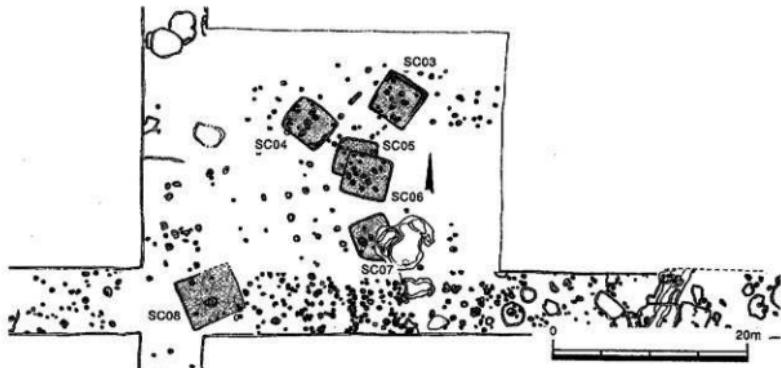


Fig.11 26-1地区遺構全体図 (1/500)

跡がある。以下個別に説明を加えて行く。

SC03住居跡 (Fig.11~13)

本住居跡は、調査区東端で検出した。ほぼ方形をなすプランで、主柱穴は4本である。また、中央部に棟持ちと考えられる2個の大型掘り方を確認できる。南隅部を除き、他ではほぼ壁に沿って細い壁溝が伴っている。各壁の長さ、東壁が4.35m・西壁3.9m・北壁4.5m・南壁4.55mを測る。残存する壁高は15~20cm弱である。また、北西側にあたる北壁では壁溝が途切れることから住居への出入口と想定される。また、主柱穴の間隔は東壁側で2.7m、西壁側で2.5m、北壁側で3.1m、南壁側で3.1mを測る。また、中央部の棟持ち柱は径50cm前後の円形で、深さ45~60cmを測る。

(出土遺物) (Fig.13 Pl.8 ·

9)

(土師器類) 05026は、

半球形の胴部に外開する口縁部を有する土師器小形丸底壺である。外面・口縁内面に荒いハケメを加える。外面に黒色顔料を塗布する。器色は、暗褐色を呈する。口径8.8cm、器高10cmを測る。胎土は密で、焼成は堅板である。05027も、土師器小形丸底壺である。頸部のしまりが緩やかで、胴の張りは弱い。外面は荒いハケメを施し、黒色顔料を塗布する。器色は、淡褐色を呈する。口径10cm、器高9.6cmを測る。胎土は密で、焼成は堅板である。

05025は、土師器二重口縁小形壺である。口縁端部を失する。半球状の胴部に緩く外開する口縁部を有する。外面の胴部上半以上は細かいハケメを施し、以下では斜め・縱方向のヘラナデである。内面のII縁はヘラナデ、胴部は横のヘラケズリを施す。器色は赤褐色を呈する。頸部径7.4cm・残存高10.1cmを測る。05028は、土師器壺である。球形の胴部に短く外開するII縁部を有する。口縁部・頸部外面は、ヨコナデで、胴部は非常に細かいハケメを施す。内面の口縁は荒いハケメ、胴部は幅広いヘラケズリである。外面上半部にスス付着。口径15.4cm・器高26.6cmを測る。胎土は密で、焼成は堅板である。05029は、口縁部が小さく屈曲する土師器壺である。外面ハケメ、内面荒いヘラケズリである。器色は赤褐色で、口径30cmを測る。05020は、土師器マリである。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデを施す。赤褐色を呈し、口径13.2cmを測る。05023は、土師器高杯の杯部である。杯屈曲部の段は弱く、外開する口縁部もシャープさに欠ける。外面はタテハケメ後に横

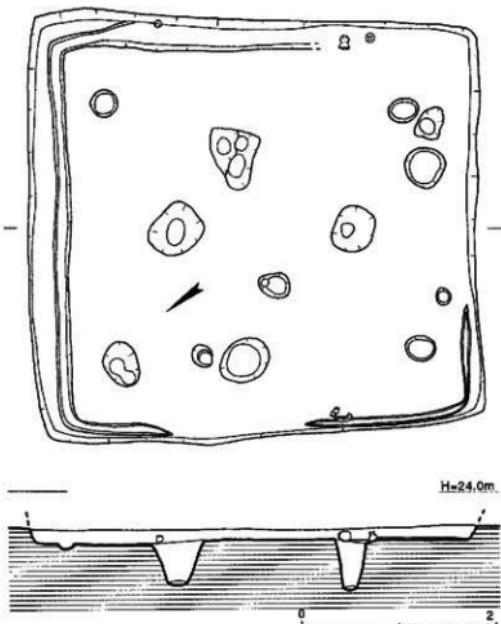


Fig.12 第4次調査SC03住居跡出土状況実測図 (1/50)

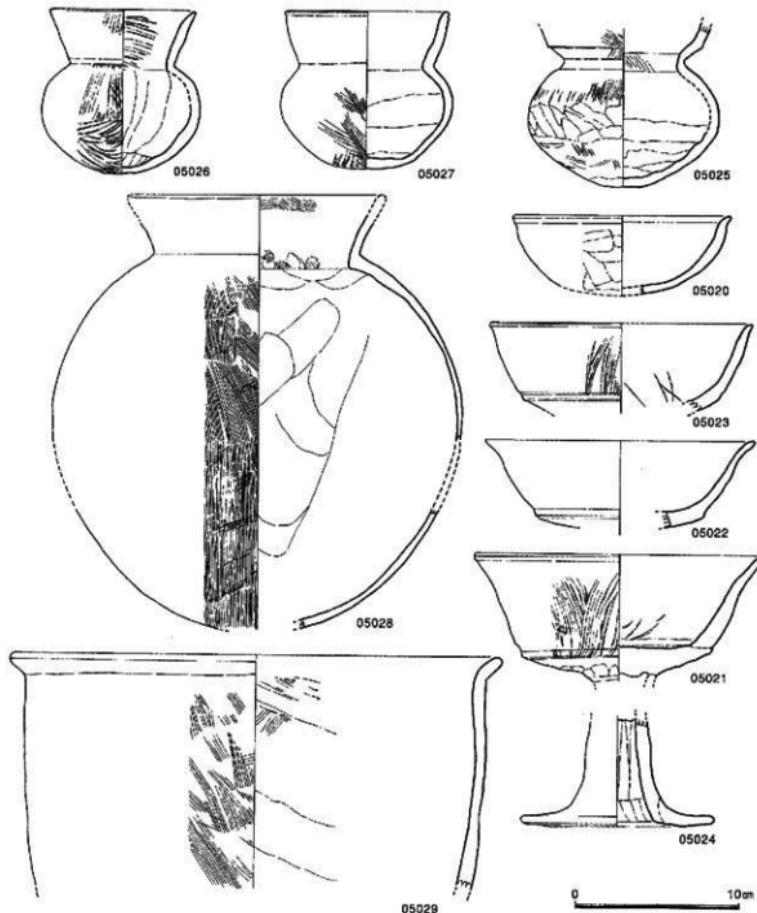


Fig.13 第4次調査SC03住居跡出土遺物実測図 (1/3)

ナデ、内面ヘラナデを施す。器色は赤褐色で、口径16cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。05022は、土師器高杯の杯部である。杯底部付近は肥厚し、II線との境に緩く段をなす。器色は赤褐色で、口径16.5cmを測る。05021は、土師器高杯の杯部である。中空の脚の一部を残す。外面は荒いタテハケを残し、端部に指押さえを施す。内面はヘラナデである。器色は暗褐色を呈し、口径17.6cmを測る。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。05024は、土師器高杯の脚である。豊み付きの広い中空の脚部である。器色は赤褐色を呈し、脚径11.8cmを測る。外面は磨減が著しく、内面筒部はヘラケズリを施す。胎土は密で、焼成は堅緻である。

**S C 04住居跡 (Fig.11・
14・15)**

本住居跡は、S C 03住居の西側に隣接して検出された。床面が不安定であるが、不整な長方形のプランを呈する。

壁は、北壁及び東壁部分が直線をなさず、やや膨らんだ隅部となっている。

また、壁高は10cm前後と非常に残りが悪く、主柱穴も特定できない。

それぞれの壁延長は、東壁が3.6m、西壁は3.8m、南壁が4.1m、北壁が4.5mを測る。床面には13個程の小ピットが検出されているが、明確に主柱穴と考えられるピットは対応する配置・深さのものが見あたらない。ここでは竪穴住居跡としているが、廐棄土壌の可能性も考えることができよう。

(出土遺物) (Fig.15 Pl.9)

(須恵器類) 0 5 0 3 0は、天井部を欠く須恵器杯蓋である。全体に薄づくりである。

口縁部の開きは緩く、端部は小さく窪んでいる。天井部は低く、口縁部との境には鋭い三角突帯1条をめぐらす。天井部のケズリは小さく、ロクロ回転は時計回りである。

器面調整は、口縁部の内外面とともに回転ナードを施す。器色は外面が淡灰色で、内面は暗灰色を呈する。復元口径は11.6cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

0 5 0 3 2は、土師器甕の頸部小破片である。頸部周辺はヨコナデで、これ以下は整った格子目のタタキ痕を残す。また、内面は丁寧なヨコナデを施している。器色は外面が暗褐色で、内面は淡黒灰色を呈する。朝鮮半島系タタキか。胎土は密で、石英粗砂・赤色粒を含む。焼成はやや軟質である。

0 5 0 3 1は、底部を欠く土師器マリである。口縁部の立ち上がりが弱く、浅い製品である。器面調整は、外面下部に細いタテハケメを一部に残す以外はヨコナデを施す。また、内面は磨減のため不詳である。器色は、外面が暗黒褐色で、内面は赤褐色を呈する。復元口径は14.2cm、残存器高は4cmを測る。胎土は密で、焼成はやや軟質である。

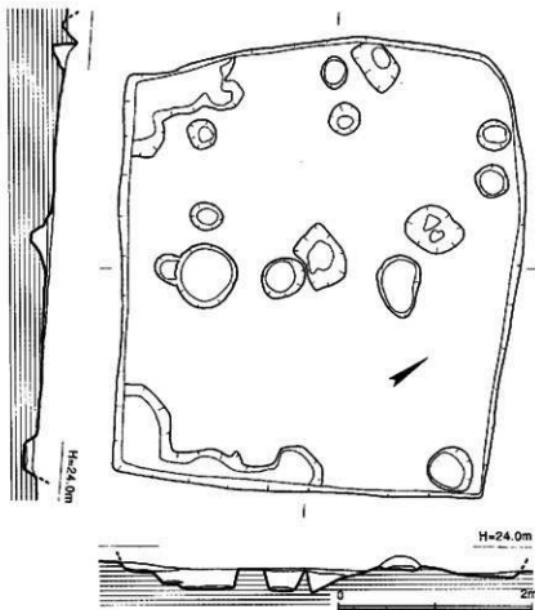


Fig.14 第4次調査SC04住居跡出土状況実測図 (1/50)



Fig.15 第4次調査SC04住居跡出土遺物実測図 (1/4)

SC05住居跡 (Fig.11・16・17)

本住居跡は、SC06住居跡と重複しており、切り合いからこの住居跡よりも古い時期の所産である。

住居跡は、小形の長方形プランと考えられる。壁高は25cm程度を残しており、中央部床面はやや低くなる。

SC06住居跡との切り合いから西壁・南壁を欠失するが、南東隅・北東隅・北西隅部を比較的良く残している。

また、残存する各壁の辺長は、北壁3.7m・南壁1.1m以上・東壁3.3m・西壁1.3m以上を測る。

住居跡の主柱穴は、4本と考えられ、西北隅の長円形ピット（長径40cm・短径35cm・深さ25cm）、北西隅の小ピット（径22cm・深さ18cm）及び南西隅の円形ピット（径30cm・深さ18cm）の3本が相当すると考えられる。

(出土遺物) (Fig.17 Pl.9)

(土器器類) 05033は、底部を欠失する十師器マリである。

胴部の膨らみは弱く、口縁端部は緩く外方に引き出される。

器色は、外面口縁部付近が暗赤褐色、胴部が暗褐色～黒褐色である。また、内面は暗赤褐色を呈する。

また、器面調整では、外面口縁の端部付近に非常に細かい横ハケメ調整が残り、これ以下の胴部は横方向の細かいヘラケズリを施す。また、内面口縁部では細かい横ハケメ調整後にヨコナデを施し、これ以下の胴部では底部から上方に向けての丁寧なヘラナデを加えており、器面は光沢を放っている。復元口径は13cmで、残存高5.2cmを測る。

また、胎土は密であり、焼成も堅緻である。

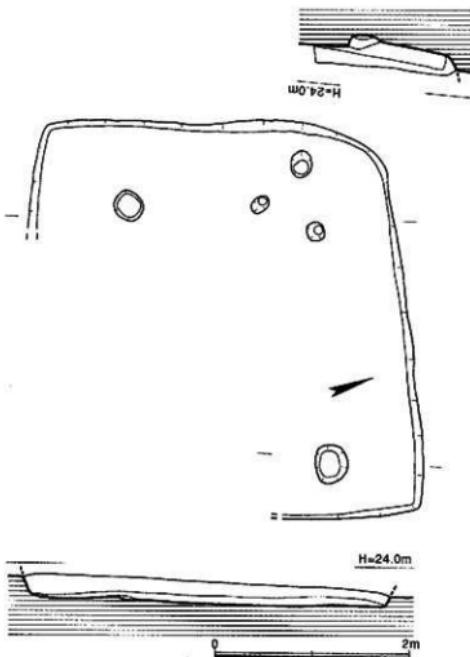


Fig.16 第4次調査SC05住居跡出土状況実測図 (1/50)

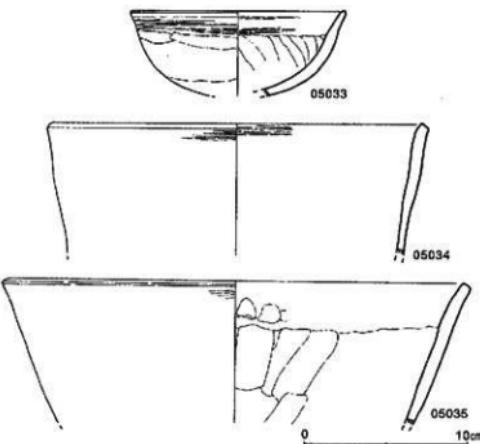


Fig.17 第4次調査SC05住居跡出土遺物実測図 (1/3)

05034は、胴部以下を欠失する小形の土師器瓶の口縁部破片である。口縁部は直立に近い傾きをなし、口縁部にしたがって器壁が厚くなる造りとなっている。比較的長胴の形態となるかと考えられる。

器色は、外面が淡褐色を呈し、使用時のススが薄く付着する。内面は淡灰褐色～淡灰色を呈する。

また、器面調整は、外面の口縁端部付近に一部細かい横ハケメが残るが、胴部はヨコナデ調整か。また、内面は口縁端部の一部に細かい横ハケメが残る。これ以下の胴部は底部方向からのヘラケズリである。復元口径は、23.4cmで、残存高8cmを測る。また、胎土は石英粗砂を多く混入し、粗であり、焼成は軟質である。

05035は、胴部の下半を欠失する土師器瓶である。口縁部の約1/6を残す破片である。口縁部は傾きが強く、直線的に外方に開く形態から比較的浅い鉢形の器形が想定される。

器色は、内外面ともに淡赤褐色を呈する。また、器面調整は、内外面ともに磨滅が著しく十分な観察ができないが、外面は口縁端部に細かい横ハケメが残り、他の胴部は縱・横方向のナデ調整である。下半部に使用時のススが薄く付着している。また、内面は口縁部付近の一部に指オサエが残り、これ以下では底部方向からのヘラケズリが残る。

器は、復元口径28.6cmを測り、残存高は8.7cmである。また、胎土は石英・長石の粗砂を多く混入し、粗である。焼成もやや軟質である。

S C06住居跡 (Fig.11・18・19)

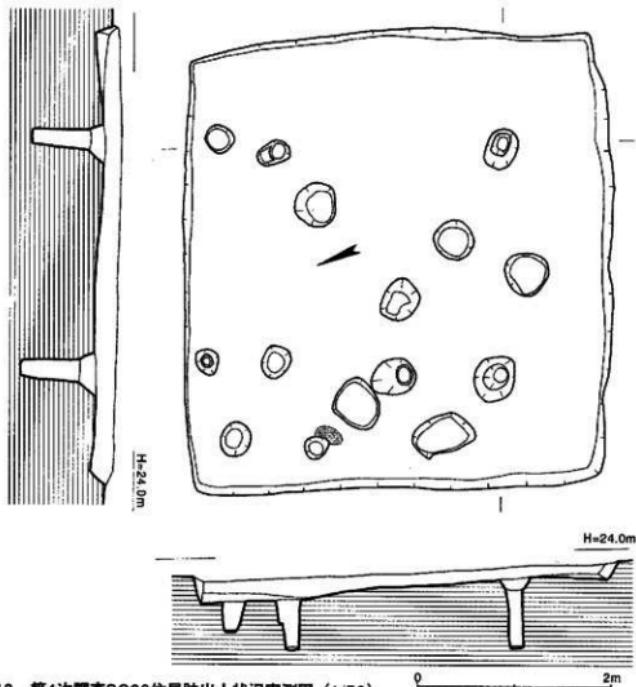


Fig.18 第4次調査SC06住居跡出土状況実測図 (1/50)

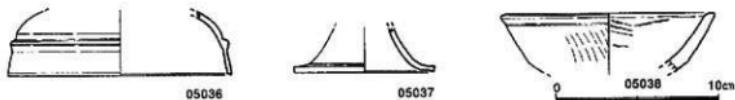


Fig.19 第4次調査SC06住居跡出土遺物実測図 (1/3)

本住居跡は、SC05住居跡と切り合ってこれを切っており、SC05住居より新しい時期のものである。過去の削平を受けており、壁高はほぼ20cm程度が残っている。また、床面は東西方向はほぼ水平となっているが、南北方向では南から北側にやや傾斜している。

住居跡は、東西方向にやや長い長方形のプランで、壁の各隅部も良く残っている。また、各壁の実長は、北壁4.4m、南壁4.55m、東壁4.1m、西壁4.05m程度を測る。

また、床面に残る住居跡主柱穴は4本である。床面のはば中央位置に配置される。北西側の主柱穴は径30cm・深さ55cm程度を測る長円形ピットである。

また、北東側の主柱穴は、径20×30cm・深さ55cmを測る長円形ピットである。南東側主柱穴は、径42×30cm・深さ75cmを測る長円形ピットである。また、南西側の主柱穴はやや大きく、径50×40cm・深さ80cmを測る不整円形ピットである。

また、各主柱穴間の実長は、北辺が2.2m、南辺が2.4m、東辺が2.3m、西辺が2.3mと考えられ、ほぼ方形に近い平面配置となっている。

(出土遺物) (Fig.19 Pl.9)

(須恵器類) 05036は、天井部端を欠失する須恵器杯蓋である。全体に薄づくりの製品である。口縁部はやや直線的に開き、端部は緩く窪む。また、口縁部と天井部との境は低い突帯状の段をなしている。天井部は低く、上半部に回転ヘラケズリを施している。

器面調整は、天井部上半以外では内外面ともにヨコナデ調整である。器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。復元口径は、13.4cmで、残存高3.9cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

05037は、小形の須恵器高杯脚部破片である。全体に器壁の薄い製品である。脚裾部は緩く外開する。また、端部は緩く窪む。

器面調整は、内外面ともに回転ヨコナデを施している。また、器色は内外面ともに暗灰色を呈する。復元口径は、8.5cmで、残存高2.2cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

(土師器類) 05038は、底部端を欠失する土師器マリである。口縁部の1/6程度を残す。全体に内厚な製品で、浅い器形となろう。口縁端部は小さく折れ、外方に開く。

器面調整は、外面の口縁部にヨコナデを施し、これ以下には上部より下方に向かうヘラナデを加えている。また、内面は全面が横方向のヘラナデ調整である。

また、器色は内外面ともに赤褐色を呈する。復元口径は、13cmで、残存高3.5cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

SC07住居跡 (Fig.11・20)

本住居跡は、SC06住居の南側に隣接した位置にあり、古墳時代中期の大墓土塚と切り合い関係にあり、これによって東南側を切られている。このために住居跡東壁及び南壁の一部を失っている。

住居跡壁の残りは悪く、壁高15~20cm程度しか残っていない。また、壁の内、南壁は直線をなさず、やや膨らみ気味の延長となっている。各壁の実長は、北壁で3.7m、西壁で3.8m、南壁2m以上、東壁

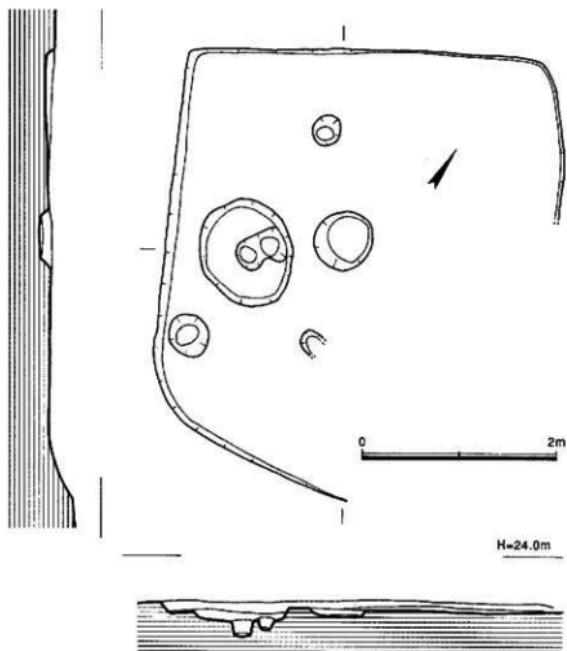


Fig.20 第4次調査SC07住居跡出土状況実測図 (1/50)

1.6m以上を測る。また、主柱穴に相当すると考えられるピットは2本あり、北壁近くの径30cm・深さ25cmを測る円形ピットと南壁側に全体の半分が残る径20cm・深さ12cmの長円形ピットと考えられる。出土遺物では、固化に耐えるものはない。平面プランのいびつなや主柱穴の不足などの点で性格を再考する必要があろう。

S C08住居跡 (Fig.11・21・22)

本住居跡は、第2号及び8号支線道路が交叉する地点で検出された。過去の削平によって壁の全周が影響を受けており、かろうじてその平面形を確認することができる。

住居跡壁は、北東コーナーを失っているが、住居跡の平面プランはやや東西に長い長方形と考えられる。

各壁の実長は、北壁が2.6m以上、南壁が5.8m、東壁が3.1m以上、西壁が4.7mを測る。各辺の壁もほぼ直線的に走ることから、完存する南壁・西壁の実長を援用すると5.8×4.7m規模の住居跡と想定できる。なお、住居跡の床面積は26m²程度と考えられる。

次に床面の主柱穴であるが、規則的な配置をとどめていない。南西コーナー付近の円形ピット（径30cm）や北壁に沿う2個の円形ピット（西側ピット径40cm・東側ピット径32cm）が見られるが、いずれも深さが10cm程度と浅い。

また、南壁では壁に沿って径10~20cm程度の小ピットが4個見られ、壁の構築材の痕跡であっ

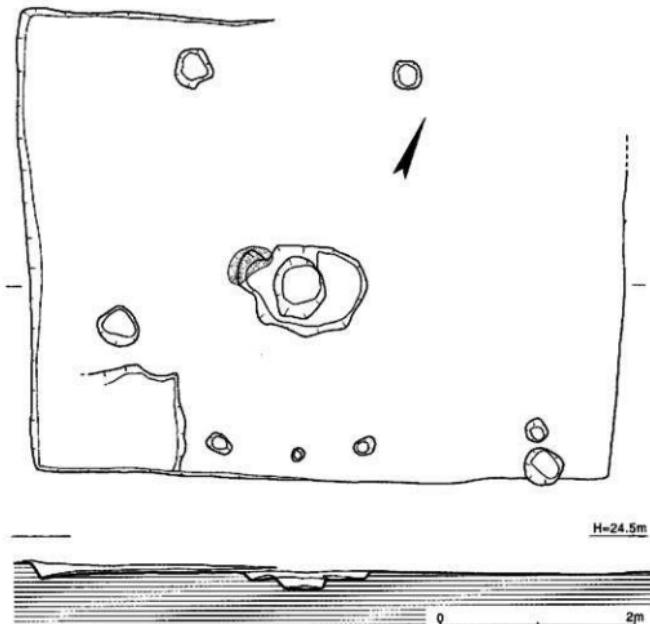


Fig.21 第4次調査SC08住居跡出土状況実測図 (1/50)

た可能性がある。

また、床面中央にある大型ピットは長径1.3m、短径0.9mを測り、中央部に 0.6×0.5 mの円形の浅い掘り込みを持つが、西側縁辺の一部には焼土がかぶっており、炉跡の可能性を考えることもできる。

(出土遺物) (Fig.22 Pl.10)

(須恵器) 05039は、杯部を欠く須恵器高杯の脚部破片である。外面は全体に灰かぶりで淡灰色にくすんでいる。

脚部は裾で良く外方に開き、端部付近は肥厚して嘴状に尖る。器面調整は、内外面ともにヨコナデである。器色は、外面が灰白色、内面暗灰色を呈する。復元脚径は、11.2cmで、残存高5.5cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

第4次調査では2地点(F-11地区・26-1地区)で8軒の竪穴住居跡を検出した。これらはSC03住居跡(26-1地区)の様に古式土師器のみで須恵器を伴わない住居や古式須恵器を伴うSC01・02住居(F-11地区)、両地区に共通する比較的新しい須恵器を伴う住居でなっていることから、時期的に古墳時代中期後半～後期(5世紀後半～6世紀後半)の集落の一部が姿を見せたことになる。集落を構成する倉庫群や廐棄土壌、自然流路などの他の遺構については報告を来年度に予定しており、この中で集落の具体的な構成について整理を行うこととした。

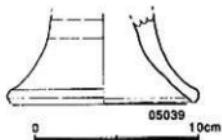


Fig.22 第4次調査SC08住居跡出土遺物実測図 (1/3)

第二節 第6次調査報告

1. 調査概要

第6次調査は、吉武遺跡群の南端部にあたる調査区で、後述する第9次調査区とともに古墳時代集落遺構の密度が高い区域である。

また、この古墳時代集落の南西・南東側を中心とした区域には吉武S古墳群が形成されており、5世紀後半～6世紀後半代の円墳群3群で構成される。南西側の一群は円墳17基からなる。円墳は径が10～20m規模で、内部土体には小振りな腰石を使用した横穴式石室を採用している。また、副葬品・供獻遺物では各時期の須恵器を主とした土器類の他に、石室内での鉄製農具（鉄鎌）・工具（鍛造鉄斧・鍛造鉄斧・ヤリガンナ・刀子）・武器（刀・鉢・鎧）などの出土が目立っている。これらの古墳群と対応する時期の集落の抽出作業も今後の課題となっている。

さて、第6次調査での堅穴住居跡の検出地区は、調査区東端部のE・F-17地区で5軒（SC09～13住居跡）、南部丘陵上のI・J-18地区で3軒（SC14～16）、さらに南西部のM・N-16地区で2軒（SC17・18）であり、全体で10軒が検出されたことになる。

これらの三地区では、地区毎の全体図でも分かるように弥生時代中期から古代までの遺構が重複して密度濃く残されている。このような重複の中から住居跡の痕跡を十分に把握することは困難な面も多く、今回報告できる住居跡数は確認できる最低のものと考えている。

なお、調査区南部区域を中心に東端部・南西部区域でも堅穴住居跡の他に古墳時代遺構と考えられる掘立柱建物（倉庫）や溝遺構、そして多数の不整形な廃棄土壠、多くのビット群が検出されていることから、古墳時代集落全体についてこれらは整理報告年度に合わせて各時期の検討を行って行くことをしたい。以下、各調査地区毎に報告を行う。

2. 堅穴住居跡（Fig.23～45 PL.3～14）

① E・F-17地区（Fig.23～32 PL.3・4）

本地区では比較的狭い区域に5軒が検出されているが、他遺構との重複や後世の削平による影響から平面形を十分に残している住居は少なく、殆どが住居壁の一辺を残すのみである。

また、住居に伴う土器・須恵器からみると6世紀後半から7世紀初頭に至る時期の所産であると考えられる。

SC09住居跡（Fig.24・25・27 PL.3）

本住居跡は、調査地区北西側に位置し、住居の東壁と南東側コーナーを確認できる。

また、住居の壁は10～15cm程度の壁高がかろうじて残されている。壁は、西及び北側壁は全く残されていない。住居の平面プランとしては長方形乃至は方形であろう。

住居の残存する壁実長は、東壁で5.3m以上、南壁で2.4m以上を測る。また、床面で検出されたビットで主柱穴となりうる位置のものは南東コーナー側で2個がある。何れも径が25～30cm・深さ20cmを測るビットである。住居跡の覆土内からは少量の遺物が出土した。

（出土遺物）（Fig.27 PL.10）

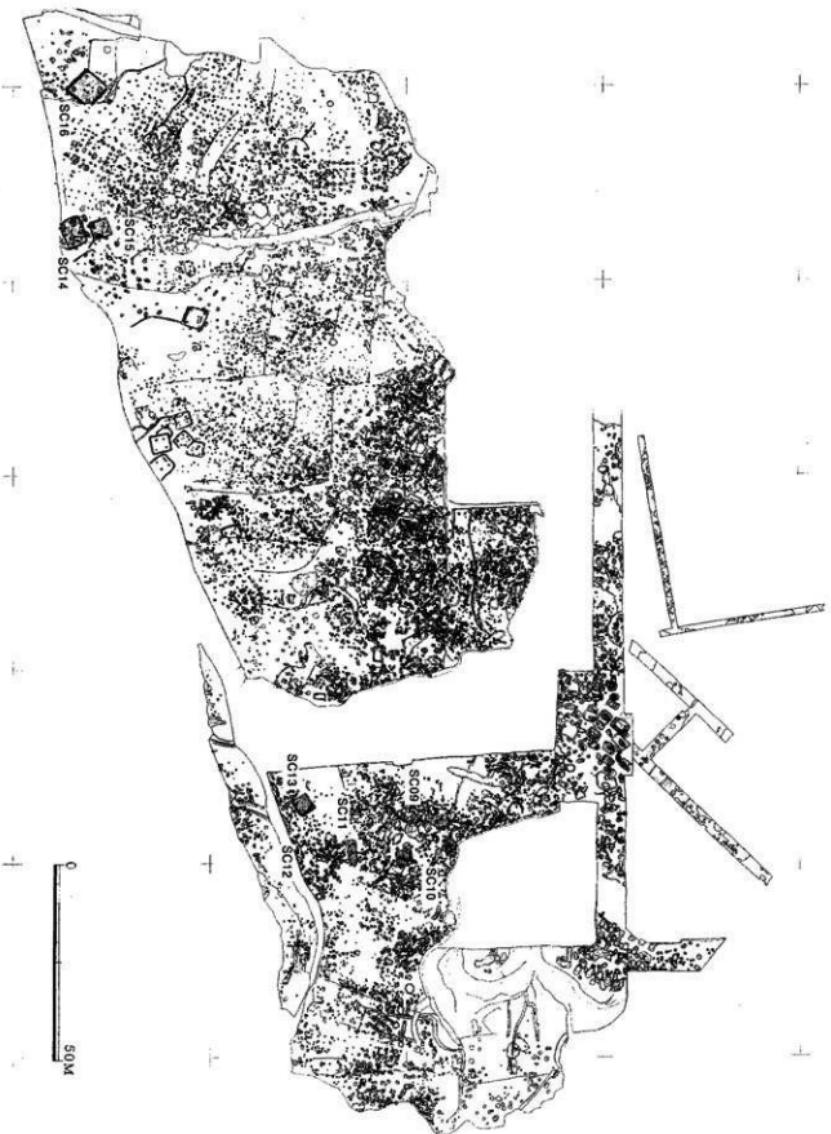


Fig.23 第6次調査地区(E-F-17, I-18, J-18地区)配置図(1/1250)



Fig. 24 E・F-17地区遺構全体図 (1/500)

(須恵器) 06001は、底部を失う須恵器杯身である。全体に器壁が厚く、造りも粗雑である。立ち上がりは低く、受け部は丸味を帯びて、寸詰まりの感を与える。

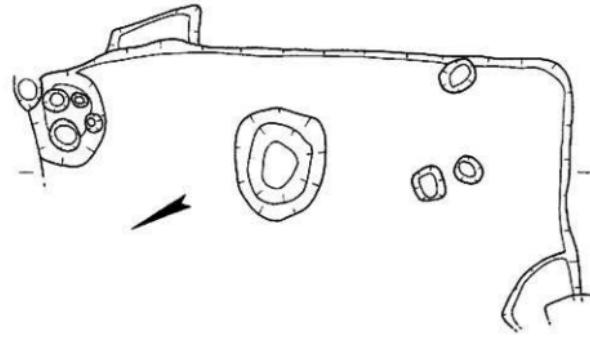
器全体に磨滅が著しい。

器面調整は、外面底部に回転ヘラケズリを施す。

また、内面にはヨコナデが僅かに残る。

器色は外面口縁部が暗赤褐色、底部が淡灰色を呈する。内面は暗赤褐色となる。

復元口径は、11.8cmで、残存高3.6cmを測る。胎土は密で、焼成は軟質である。



SC10住居跡 (Fig.24・
26・27 Pl.3)

本住居跡は、調査区北側に位置する小形住居である。平面プランは、出土状況図に見られる様に住居各壁の辺が平行せず、いびつな平面形

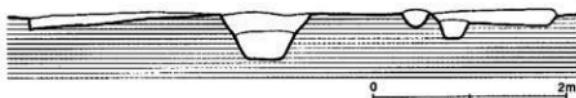


Fig. 25 第6次調査SC09住居跡出土状況実測図 (1/50)

となる。

特に北壁は削平されてい
ると考えられる。

住居の壁相当部分では
全体的に深さが約25cm
程度を残している。

また、主柱穴は4本か
と考えられ、その配置は
やや東側に片寄ってい
る。北東側の主柱穴は、
径45cmの円形ピットで
土器高杯を出土してい
る。

また、南東側の主柱穴
は、径35cmの円形ピッ
ト、南西側の主柱穴は、
長径が40cm・深さ20cm
を測る長円形ピット、北
西側の主柱穴は、径
30cm・深さ35cmの円形
ピットと考えることもで
きる。また、住居の各壁
の実長は、北壁4.5m

(?) - 南壁3.3m・東壁3.15m・西壁3.75mを測る。SC10住居はプランの不規則性から廃棄土壌など
の可能性を捨てきれない。遺構の床面ピットや土壌状遺構及び覆土内から土器・須恵器の破片が出土した。

(出土遺物) (Fig.27 Pl.10・11)

(須恵器) 06003は、天井部を欠失する須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境は緩い沈線
をめぐらす。口縁部は内済気味に収まり、端部は内面に低い段をもつ。器面調整は、天井部に一部回
転ヘラケズリが見られ、内面はヨコナデである。器色は、外面がセピア色で、内面が淡灰色を呈する。
復元口径は、14cmで、残存器高3cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

06002も天井部を失う須恵器杯蓋である。天井部は器壁が非常に分厚く、ヘラケズリ調整が十
分に行われていない結果と考えられる。口縁部との境は沈線で区別される。また天井部のケズリは小
範囲である。器色は内外面ともに淡灰色を呈する。復元口径は14.2cmで、残存器高4.4cmを測る。胎
土は密で、焼成も堅緻である。

(土器) 06004は、土器高杯蓋である。口縁部と天井部の境は非常に低い段をなしている。
口縁部は直線的に伸びて端部が尖る。また、天井部は殆ど全面が不定方向のヘラケズリ調整である。
須恵器の形態と製作手法の影響が見られる。器色は外面が暗赤褐色～黒褐色、内面赤褐色～暗褐色を
呈する。口径13.4cm・器高4.2cmを測る。胎土は密で、赤色粒・石英を混入する。また、焼成は軟質
である。

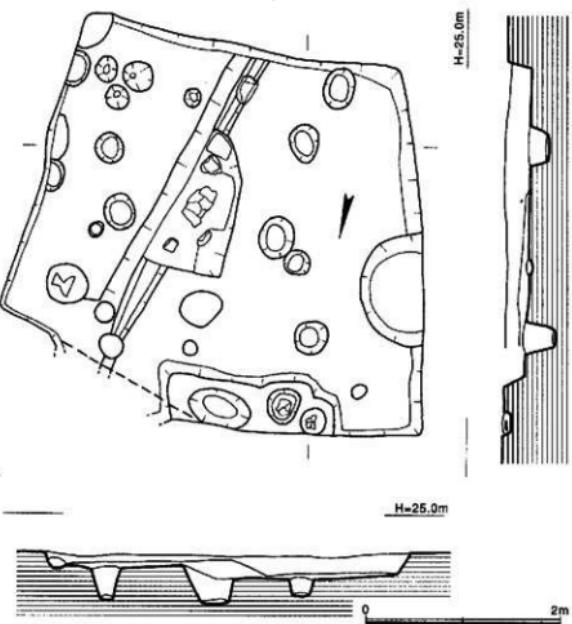


Fig.26 第6次調査SC10住居跡出土状況実測図 (1/50)

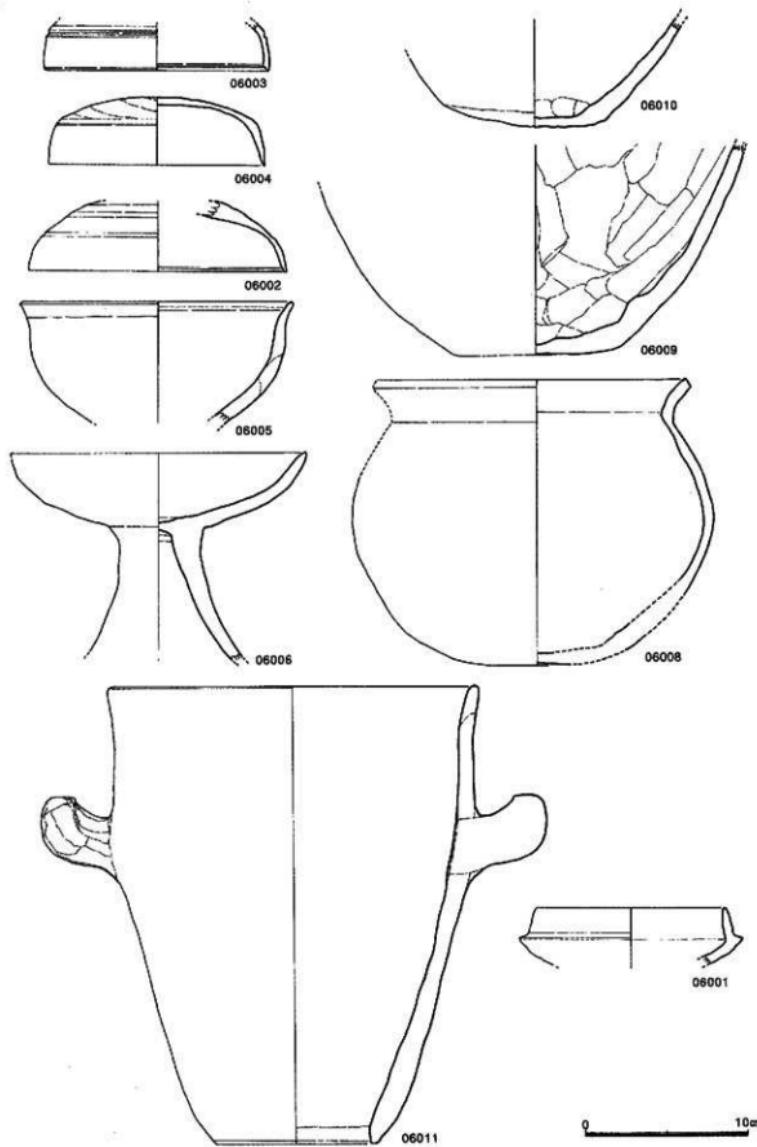


Fig.27 第6次調査SC09・10住居跡出土遺物実測図 (1/3)

06005は、七脚器鉢である。膨らみの少ない胴部から口縁部が緩く外反する。器面の磨滅が激しい。器色は淡赤褐色を呈する。口径16.8cmで、残存高8.6cmを測る。胎土はやや粗で、焼成も軟質である。06006は、脚端部を欠く土師器高杯である。全体に肉厚で、浅い杯部に太く、裾が大きく外方に開く脚部をもつ。内外面ともに淡黄褐色～赤褐色を呈し、外面は丹塗の可能性がある。口径18.4cm・残存高12.9cmを測る。胎土は非常に密で、焼成は軟質である。06008は、土師器壺である。器形は、胴部の中央を最大径として絞まらない頸部につながり、短い外開する口縁部をもつ。外面の胴部下半は擬格子タキを全面に施しており、また使用時の火に遭っている。内外面ともに暗褐色を呈する。口径は、18.4cmで、器高17.8cmを測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。

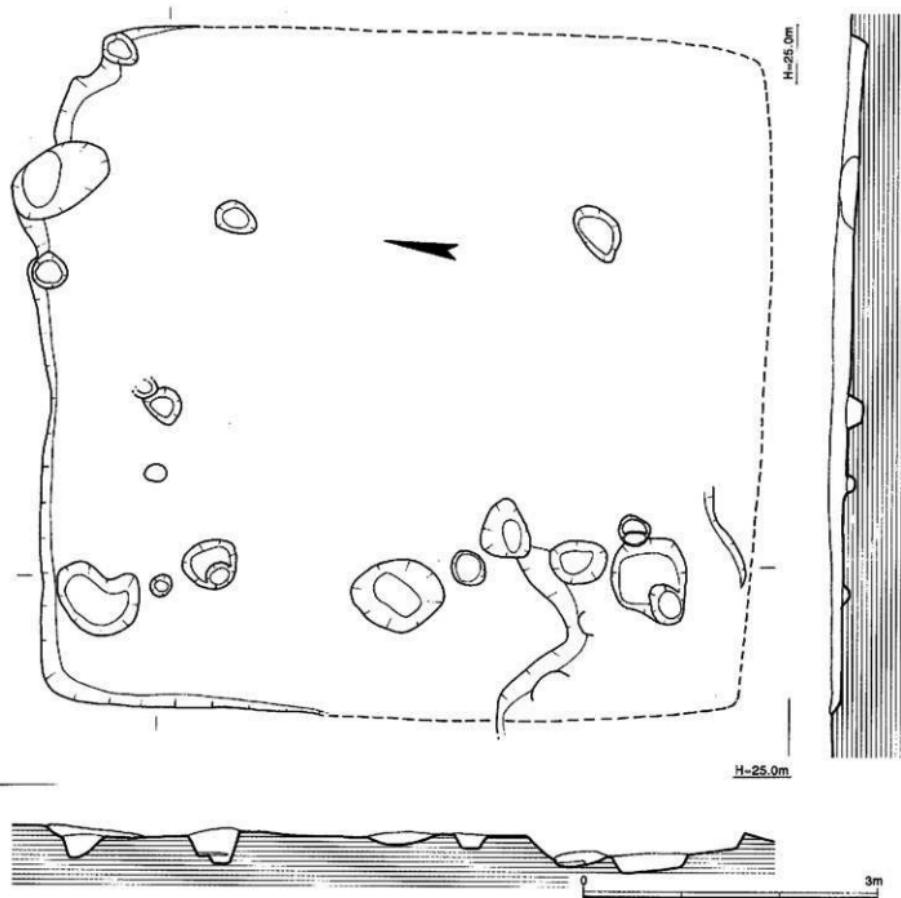


Fig.28 第6次調査SC11住居跡出土状況実測図 (1/50)

06009・06010は、土師器甕底部である。ともに脣部上半以上を欠く。何れも不安定な平底をなし、06009では外面に荒いハケメを施す。内面は何れもヘラケズリ調整である。器色は外面が暗赤褐色～暗褐色を呈し、焼成は何れも堅緻である。06011は、土師器甕である。ほぼ直立する口縁部をなし、器壁は底部付近が最大となる。器高の2/3位のところに上向きの把手一对を付ける。器面の荒れが激しく、調査では内面に斜め方向のヘラケズリが見られるのみである。器色は外面が暗褐色、内面暗黄灰色～淡黄褐色を呈する。口径22.2cm、器高28.3cm、底径10cmを測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。

SC11住居跡 (Fig.21・28・29)

本住居跡は、調査区南側で検出された。南側の大半を削平によって失っている。壁は北壁延長を残し、他に東西壁の一部が残る。また、主柱穴は4本が配置され、この主柱穴の位置から推定すると住居は僅かに南北に長い方形プランであったと想定される。

壁は北壁付近で約20cm程度残っている。また、壁の実長は、北壁が6.7m、西壁2.8m以上、東壁0.9m以上であり、主柱穴の位置から折り返して想定すると東西7m、南北7.3m前後の平面規模となろう。

主柱穴は不整円形のピット4本が壁面に平行に配置されていると考えられ、主柱穴間の距離は南北3.7m、東西3.3m程度を測ることができる。主柱穴は深さは何れも20～35cmと浅いものである。

住居内覆土からは須恵器・土師器などの遺物が細片ながら出土している。

(出土遺物) (Fig.29 Pl.11)

06015は、非常に器壁の薄い土師器甕の小破片である。つまつた頸部から急激に外方に開く口縁を有する。器面調整は、外面と内面口縁部がヨコナデで、他の内面は指オサエとこれ以下が底部方向からのヘラケズリとなっている。器色は内外面ともに暗褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。

06013は、須恵器杯蓋で、小破片である。口縁部は低く、内側に小さく折れる。全体に薄づくりである。天井部との境は突出し、受け部も十分である。器面調整は、外面が不詳で、内面はヨコナデが見られる。器色は、外面天井部が黒灰色・口縁部淡灰色で、内面は淡灰色を呈する。復元口径は、8.6cmで、残存高2.3cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

06012は、須恵器杯身である。底部を失う小破片で、口縁の約1/4を残す。立ち上がりは非常に低く、受け部の造りも弱く、全体にしまりのない製品である。

器面調整は、外面の底部のはば全面に回転ヘラケズリを加え、内面はヨコナデである。

器色は、外面の口縁部が明灰色、底部は灰かぶりとなって淡灰色を呈する。また、内面は暗灰色である。復元口径は、9.6cmを測り、残存高2.8cmである。胎土は密で、焼成も堅緻である。

06014は、土師器の杯身である。立ち上がりの一部を残すが、内傾する造りとなり端部を欠失

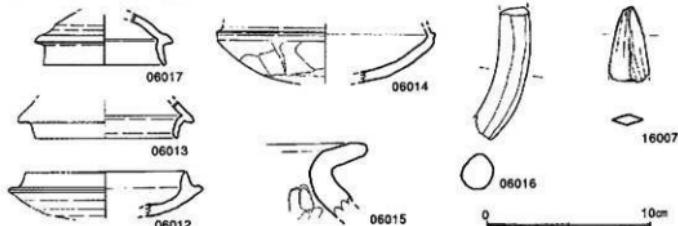


Fig.29 第6次調査SC11・12住居跡出土遺物実物図 (1/3)

する。底部と立ち上がりの境は鈍い段をなしている。須恵器の製作手法と形態をとっている製品である。器面調整は、底部全面に不定方向のヘラケズリを施し、内面はヘラナア?かと考えられる。器色は外面が黒~暗褐色を呈し、内面は黒色となる。復元最大径は、13.3cmで、残存高3.4cmを測る。胎土は密で、焼成は軟質である。

(その他の遺物) 06016は、土製把手の破片である。ややカーブする円棒状製品である。全体に磨滅が著しい。器面には緩い面取りが観察できる。器色は、淡赤褐色を呈する。断面の長径は2.1cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。16007は、磨製石剣の切先片である。背中火には鏽が画面とも良好に通り、断面菱形をなす。残存長4.6cmを測る。弥生時代の所産である。粘板岩製。

S C12住居跡 (Fig.24・29・30)

本住居跡は、調査区の南西端でその一部が検出された。これは西側のコーナーと東側の壁カーブからほぼ北壁の全長が検出されていると判断した。壁は10~15cm程度の残りである。

また、北壁の実長は5.3m前後を測り、住居は南側に壁が伸びる方形若しくは長方形の平面プランの

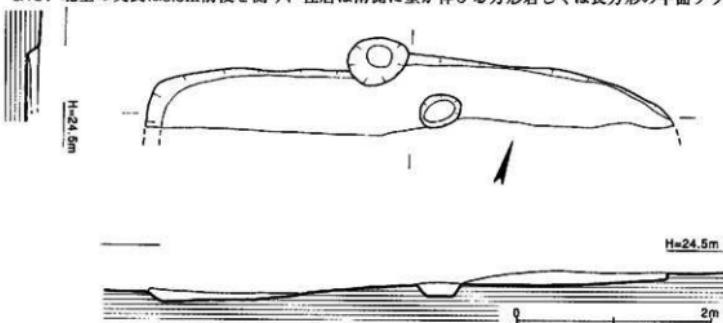


Fig.30 第6次調査SC12住居跡出土状況実測図 (1/50)

ものと考えられる。床面は東から西へやや傾斜している。また主柱穴の内容については不詳である。本住居跡では北壁を含む僅かの範囲の調査で、住居内覆土からの遺物の出土は少なく、図示できるものは少ない。

(出土遺物) (Fig.29 Pl.11)

06017は、天井部を欠失する須恵器小形蓋である。全体に小振りな製品である。口縁部は直立せず、外方に開く。また、天井部との境は明瞭に段をなし、受けも十分に造り出されている。器面調整は、外面天井部が強いヨコナデ調整、内面ヨコナデである。また、器色は内外面ともに暗灰色を呈する。復元口径は、7.4cmで、残存高3.2cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

S C13住居跡 (Fig.24・31・32 Pl.4)

本住居跡は、調査区西端近くで検出され、この地区では比較的の残りの良好な住居である。検出の位置は丘陵縁辺にあり、過去の削平の影響がやや少なかったのではないかと考えられる。

住居は、平面形が東西方向にやや長い隅丸長方形プランと考えられる。

住居内の施設では、東壁側に幅狭いベッド状の区画が見られる他、西壁側を除く北・南・東壁に沿って壁溝がめぐる。壁の残りは25~35cmを測り、同地区的他の住居に比べて残りは良い。

また、床面に配置された主柱穴は4本である。

住居の各壁の実長は、東壁で4.55m、西壁4.25m、北壁4.6m、南壁4.45mを測るもので、東壁・北壁の辺がやや湾曲する。

次に住居内施設であるが、西壁を除く各壁にめぐる壁溝は全体に浅く、幅10~35cmの規模である。特に南壁側は壁縁辺に沿って整然と付設されている。

また、東壁では縁辺に掘られた壁溝の内側に平行しない斜めの小溝が掘られ、北壁・南壁のそれぞれに連絡している。東壁ではこの壁溝に挟まれた部分が北端で70cm、南端で15cm幅の規模で三角形の空間をなしているが、特に床面とのレベル差をもつてはない。

次に床面の主柱穴であるが、何れの柱穴も小形である。北東側の主柱穴は径14cm前後の円形ピット、南東側の主柱穴は径20cmの円形ピット、北西側主柱穴は30×24cm前後の長円形ピット、南西側主柱穴は38×25cmの長円形ピットで深さ40cmを測る。また、底部に礫石の板石を置く。また、各主柱穴間の実長は、東壁側で2m、西壁側2m、北壁側で2.4m、南壁側で2.4mを測り、配置の企画性が窺える。

住居の覆土内からは少量ではあるが、須恵器・土師器などの土器類が出上した。

(出土遺物) (Fig.32 Pl.12)

(須恵器) 06019は、須恵器の小形杯身である。口縁部の1/8程度の小破片である。器は非常に浅く、立ち上がりは小形であるがほぼ直立する。また、受け部の造りも小形ながら整っている。

器面調整は、内外面ともにヨコナデを加える。器色は、外面口縁部が淡灰色、底部黒~黒灰色を呈する。また、内面は淡灰色となる。復元口径は、10cmを測り、残存高2.6cmである。胎土は密で、焼成も堅緻である。

06018は、底部端を欠失する小形の須恵器杯身である。全体に器形は整っており、丁寧な造りの製品である。内傾する低い立ち上がりは、端部が反り上がり上端部に段をなす。

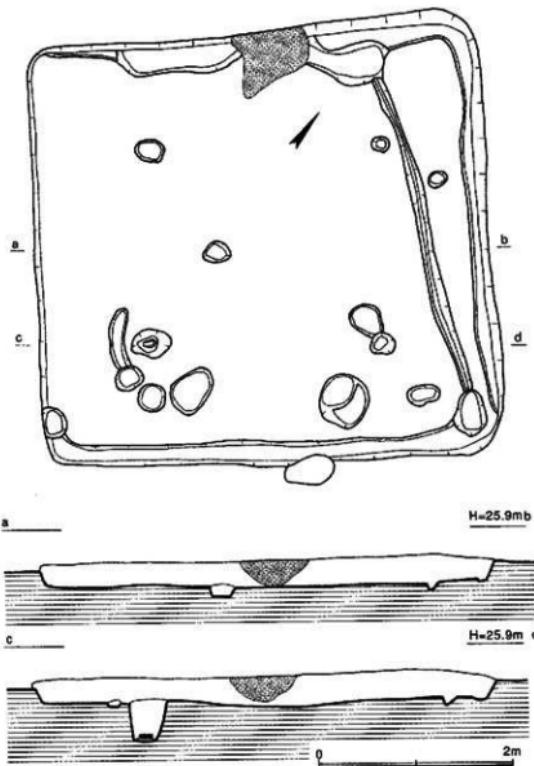


Fig.31 第6次調査SC13住居跡出土状況実測図 (1/50)

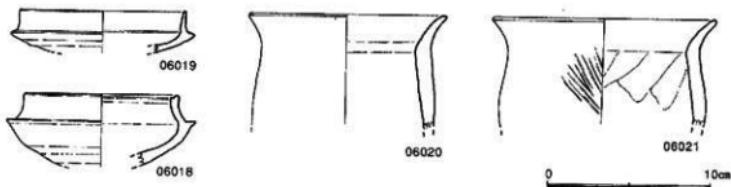


Fig.32 第6次調査SC13住居跡出土遺物実測図 (1/3)

また、受け部も小形ながら平坦面を保っている。器面調整は、外面の口縁部・底部上半がヨコナデで、底部の下半部に回転ヘラケズリを加える。内面はヨコナデである。器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。復元口径は、9.2cm前後で、残存高3.5cmを測る。胎土は密で、焼成はやや軟質である。

(土師器) 06020は、土師器小形壺の小破片である。胴部下半を失う。内外面ともに器面の磨滅が激しい。膨らみの少ない胴部から、器壁を減じながら緩く外方に開く口縁部をもつ。

器面調整は、外面は磨滅のために不明であるが、内面は胴部に底部方向からのヘラケズリが残る。また、器色は外面が淡赤褐色、内面が暗赤褐色～暗褐色を呈する。復元口径は、14cm前後で、残存高6.3cmを測る。胎土は石英・長石の混入が多く、齊である。焼成は堅緻である。

06021は、土師器小形壺の小破片である。胴部下半を失う。胴部の最大径が下半部にある臺で、口縁部は殆どしまらない頭部から器壁を減じながら緩く外方に開く。器面調整は、外面胴部に荒いタテハケメが残る。内面は、胴部が底部方向からのヘラケズリ調整である。また、器色は、外面が暗赤褐色で、内面は黒～暗赤褐色を呈する。復元口径は、13.7cm前後で、残存高6.4cmを測る。胎土は粗で、石英・雲母片を多く混入する。焼成は堅緻である。

② I・J-18地区 (Fig.23・33~40 Pl.4・5)

本地区は、6次調査の南端区域にあたり、弥生時代中期前半から後期に至る集落が重複しており、遺構密度は非常に高い地区である。

また、調査地区的東側100m付近には5世紀後半代を主とする円墳群(吉武S群16~21号墳)が形成されている。

調査地区的旧地形は後代の水田化に伴う変化を受けているが、全体的に南西から北東方向に緩く傾斜する丘陵で、南側と北側に谷の侵入が見られ、本地区はこの丘陵の付け根部分にある。

古墳時代の遺構としては、今回報告する堅穴住居跡の他に大型溝遺構やまとまった数の掘立柱建物群(倉庫・住居)、不整形の廐棄土塚群と十分な整理のつかない多数のピット群などが密度濃く、この調査地区を含む丘陵上に見いだされている。

これら堅穴住居跡以外の遺構については、次年度に整理・報告予定であり、堅穴住居跡と合わせて古墳時代集落としてのとりまとめを行うこととした。

さて、本調査区で今回報告を行うのは堅穴住居跡3軒(SC14~16)である。何れも丘陵の南側近くに位置し、通常サイズの住居(SC15)や大型住居(SC14・16)がある。また、これらの住居跡には何れも住居のコーナーから伸びる排水溝と考えられる施設を作っており、SC14・15では南側へ、SC16では北側へ小溝が伸びている。住居はサイズの区別はあるが、何れも主柱穴が4本と考えられる。この中でも西側のSC16は特異な大型住居跡で、一辺が14m四方の方形プランをなし、各壁のコーナー近くに4本の主柱穴を配置する。そして各壁の縁辺に沿って規則的に柱が配置されており、

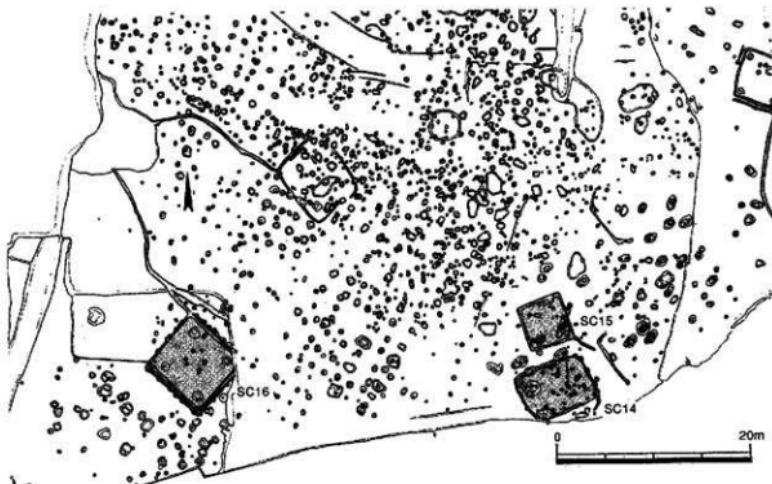


Fig.33 I-18・J-18地区遺構全体図 (1/500)

住居周囲の立ち壁の存在を窺わせる構造となっている。各住居跡ではこれに伴う遺物はそれほど多くなく、覆土内から少量の須恵器・土師器が出土している。

SC14住居跡 (Fig.33~35)

本住居跡は、調査区東側の丘陵縁で検出された東西に長辺を向けた住居と考えられる。

住居は殆ど整溝部分のみが残っている状況と考えられ、このような状況の中では旧状の平面プランを正確に把握することは困難である。

しかしながら、壁溝と考えられる小溝がほぼ全周にめぐり、南壁側には整溝コーナーから伸びる排水用と考えられる小溝があり、また東整側の垂溝に沿って柱穴が並ぶ状況などから整溝外周部をほぼ住居の外形ととらえることができよう。

この様に考えると各壁の実長は、東壁4.7m前後、西壁5m前後、北壁6.7m前後、南壁6.7m以上の規模となる。床面積は31.5m²程度となる。また、壁溝は幅20cm程度の比較的細い造りである。

次に主柱穴は、床面に残る3個のピットが相当すると考えられる。配置はやや南寄りとなる。東南側主柱穴は径25cm・深さ30cm程度の円形ピット、北東側主柱穴は径35cm・深さ25cmの円形ピット、南西側主柱穴は径30cmの円形ピットであると考える。また、北西側主柱穴は、南西側にある大型土壙によって切られ、無くなつた可能性がある。想定したこれらの主柱穴間の実長は、東壁側で3.2m、南壁側で3.7mを測る。住居内覆土からは少量の須恵器類破片が出土している。

(出土遺物) (Fig.35 Pl.12)

(須恵器) 06022は、天井部を欠く須恵器杯蓋の小破片である。口縁部と低い天井部の境は緩い沈線状をなしている。外面は、調査の不十分さから表面の凹凸が明らかである。

器面調整は、全体に磨滅が著しく、天井部のヘラケズリなども観察できない。器色は、外面が暗灰色（紫灰色に近い）、内面が淡灰色を呈する。復元口径は、13.2cm前後で、残存高3cmを測る。胎土は密で、焼成は軟質である。

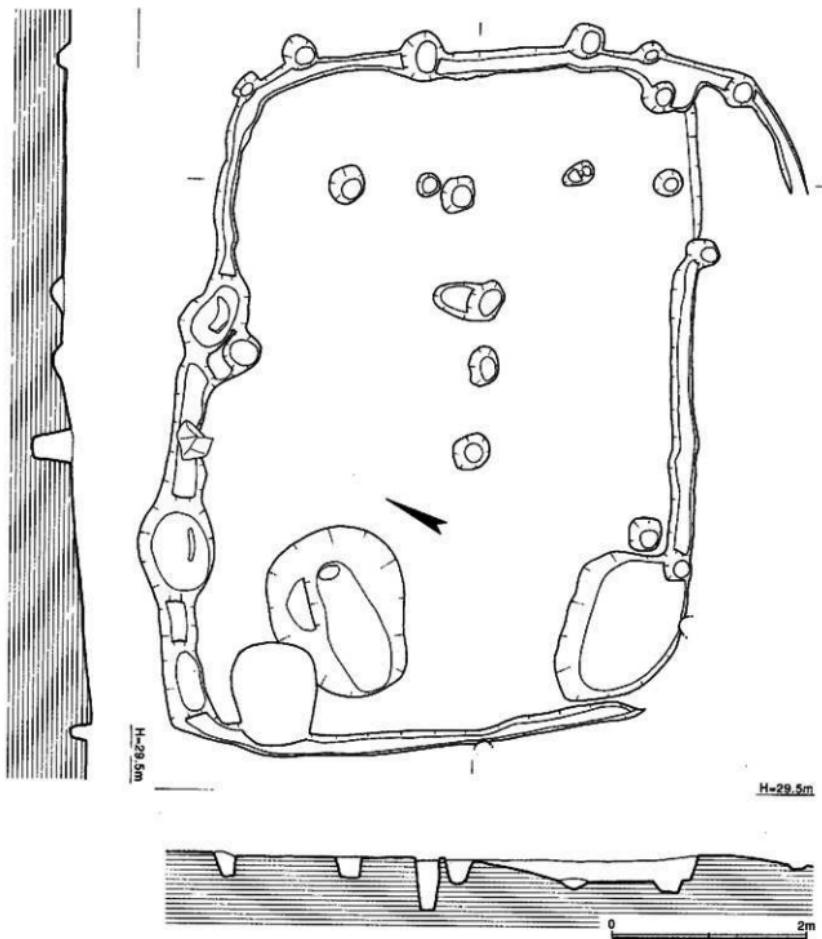


Fig.34 第6次調査SC14住居跡出土状況実測図 (1/50)

06023は、須恵器杯身の小破片である。口縁部の1/5を残す。底部の大半を欠失する。立ち上がりは低く、直立して上端部が外方に開く。また、受け部は立ち上がり付け根から丸味を持って下方に垂れる様相である。また、受け部から底部への移行は直線的で、底部中央は丸く尖る形態となろう。

器面調整は、内外面ともにヨコナデを残す。器色は、外面立ち上がりが明灰色、底部暗灰色を呈し、内面は明灰色となる。復元口径は、11.6cm前後で、残存高2.7cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻で

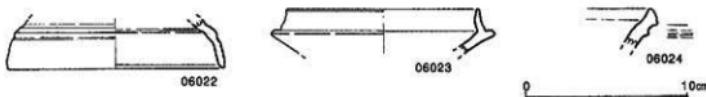


Fig.35 第6次調査SC14住居跡出土遺物実測図 (1/3)

ある。

06024は、須恵器小型壺の口縁部小破片である。端部は口縁部内側が窪み、跳ね上げ口縁状となっている。口縁部直下には低い一条突帯をめぐらす。内外面ともに灰かぶりである。器色は、外面が淡灰色、内面黒褐色を呈する。小破片のため径は復元できない。胎土は密で、焼成は堅緻である。

SC15住居跡 (Fig.33・36・37)

本住居跡は、調査区東側のSC14住居北側の位置で検出された。

住居の平面プランはほぼ正方形と考えられる。また、各壁に沿って壁溝が全周に配置されている。南東のコーナーからは南東に伸びる小溝が付設されており、住居外への排水施設と考えられる。壁の残りは、北側で20cm前後、他で10cm前後を測る。

また、主柱穴は4本と考えられるが、北東側及び北西側の2本が径30~40cmを測る小型円形ピットである。他の南東側、南西側の主柱穴2本は位置はほぼおさえられるものの掘り方規模を十分に残さない。また、主柱穴の実長は、北壁側で2.2m、南壁側で2.1m強、東壁側で2.3m前後、西壁で2.3m程度を測ることができる。

また、各壁の実長は、北壁で4.4m、南壁で4.5m、東壁で4.7m、西壁で4.4mを測る。住居内から出土遺物は多くないが、図化可能なものとして須恵器杯身が出土している。

(出土遺物) (Fig.37 PL12)

(須恵器) 06025は、須恵器杯身である。ほぼ完形の製品である。底部は焼けひずみのために大きくゆがんでいる。立ち上がりは低く、内傾化している。全体に浅く、薄造りの器である。

器面調整は、外面の立ち上がり・底部上半部がヨコナデで、底部の下半部の小面積が回転ヘラケズリを施す。また、内面はヨコナデで、内底部に輪状のアテ具痕が見られる。

器色は、外面が淡灰色~黒灰色(一部)を呈し、内面は淡灰色である。口径は、12.1cm程度で、残存高は3.25cmを測る。胎土は粗で、焼成は堅緻である。

SC16住居跡 (Fig.33・38~40 PL.4・5)

本住居跡は、調査区の西端に位置する大型の竪穴住居で、水田化の切り下げによって東側のコーナーを失っている。

平面プランはほぼ方形を呈し、西側壁を除いて壁周辺は小溝が二重に囲繞している。また、外周の周溝線に沿って柱穴が規則的に配置されている。北側のコーナーからは北西方向に排水と考えられる小溝が伸び、3m程行ったところで枝分かれして、北西方向と南東方向に伸びることから両方向に排水していたものと考えられ、主流の北西側溝は延長が16m以上となる。南東側のものは幅60cm程度で浅い。北東側の溝も下降するにしたがって細くなっていく。

住居は、前述のように東側のコーナーを失うが、二重にめぐる溝と外周部分の規則的な柱穴の配置

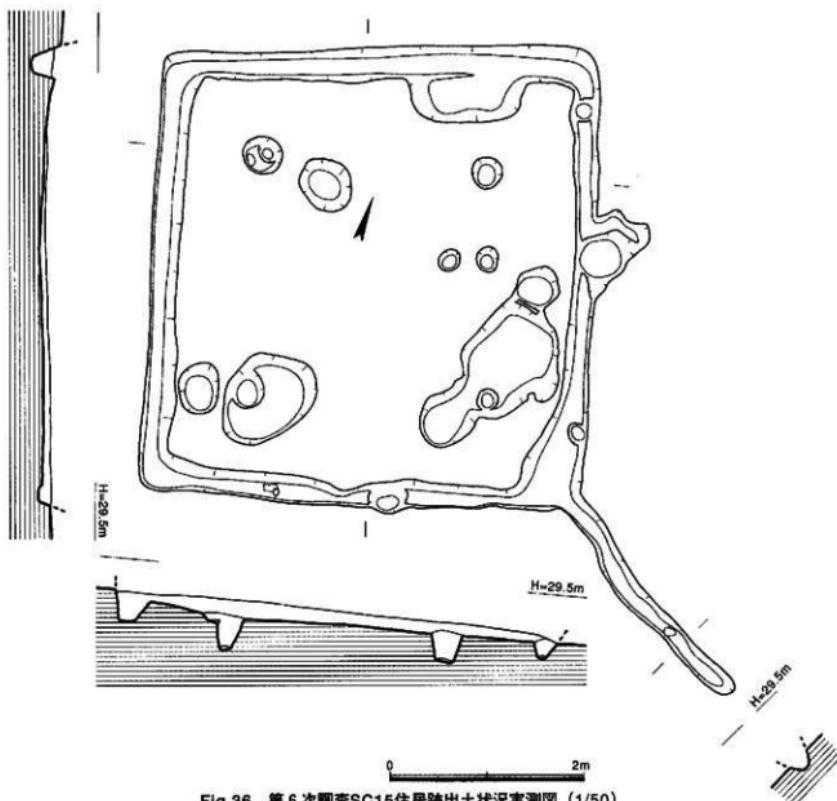


Fig.36 第6次調査SC15住居跡出土状況実測図 (1/50)

が特徴である。

(外周溝と施設) 外側をめぐる溝は、南側辺で残存部からコーナーまでの延長が5.35m以上、幅20cmを測る。また、南西側コーナーから0.3m・2.2m・4.2mの位置に径20—25cm程度の柱穴を配置する。柱間隔はほぼ2mである。

次に西側辺では、延長が7.3m、幅20—25cmを測る。また、コーナーを外して延長上に6本の柱穴が配置されている。南西側コーナーからの距離を記すと、0.6・2.2・3.1・3.9・5.3・6.9mの位置に径25cm程度の柱穴を配置している。柱間隔は0.8—1.7m程度である。

次に北側辺では、延長が7.3m、幅20cmを測る。延長上にはコーナーを外して7本の柱穴が配置されている。北西側コーナーからの距離を記すと、0.5・2.2・3.7・4.0・5.0・5.5・6.0の位置に径20—

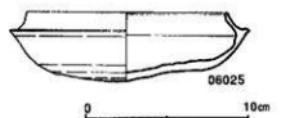


Fig.37 第6次調査SC15住居跡出土遺物実測図 (1/3)

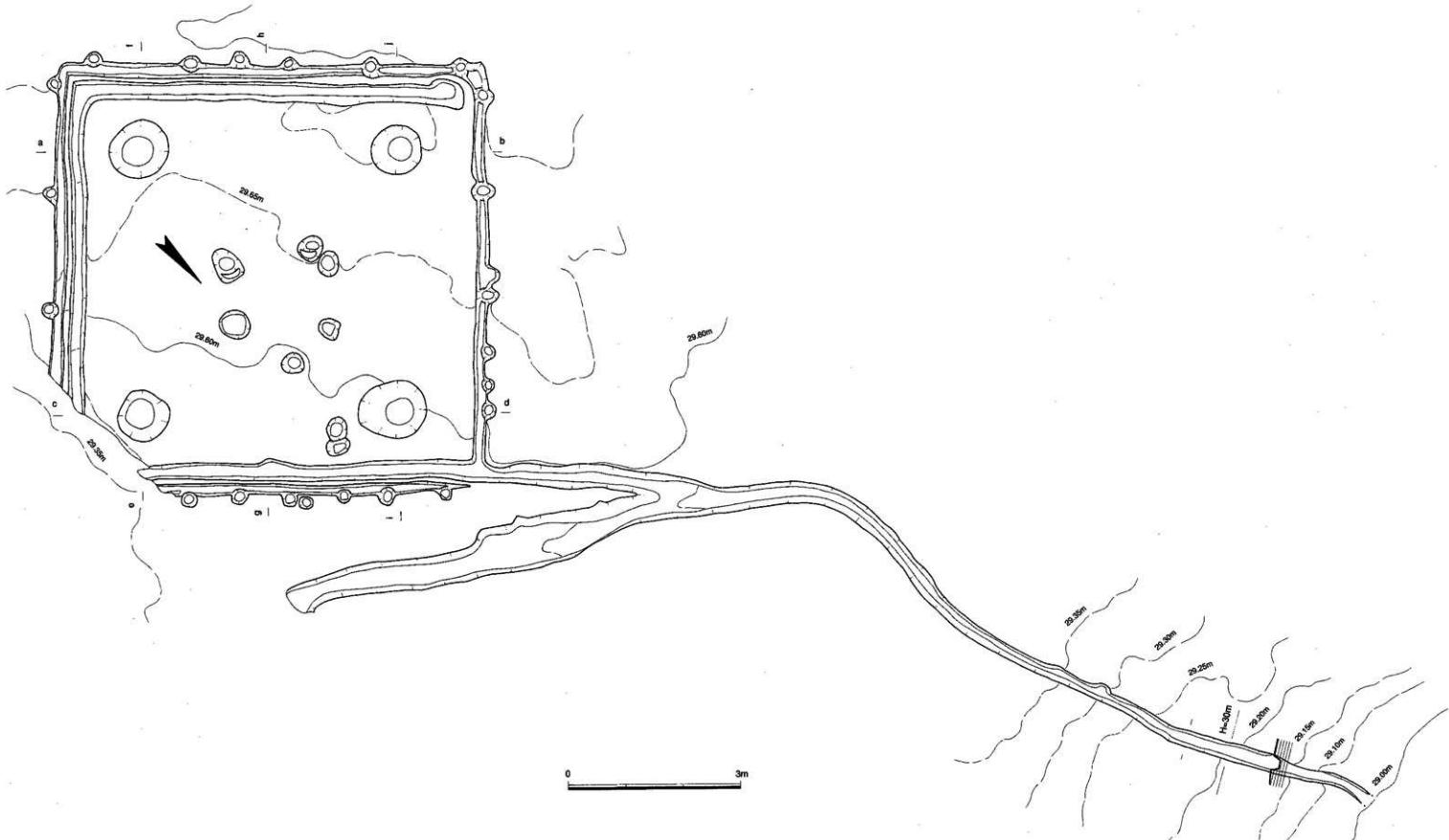


Fig.38 第6次調査SC16住跡出土状況実測図

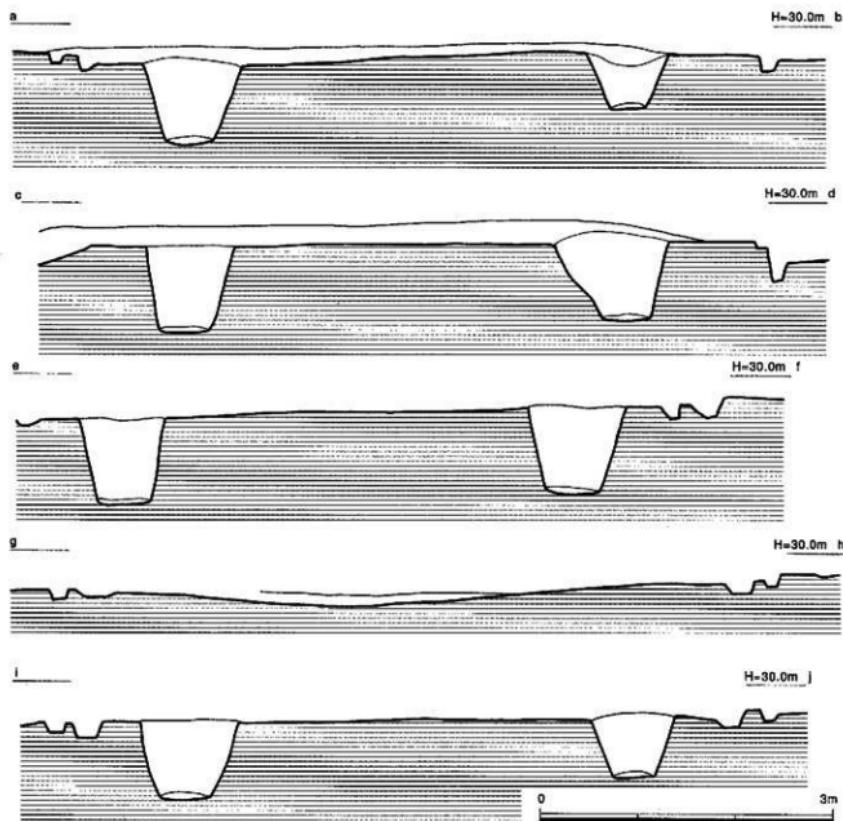


Fig.39 SC16住跡断面実測図 (1/50)

30cmの柱穴を配置している。柱穴間隔は1.8mなどのものもあるが、東側の3個の柱穴のように集合して間隔の短い配置も見られる。次に北側辺では延長が5.8m以上で、幅20cm程度を測ることができる。北側辺はコーナーは起点とできないが、延長上4.5m間に径が25cm程度の6個の柱穴が配置されている。各柱穴間の距離は80~90cm程度である。これら側辺に配置されている柱穴群は頭上の観察で対向する辺上にある柱穴同士の位置が対応することが分かった。これらは外周部全面にあることから立ち上がり壁の保持材と考えておきたい。

(主柱穴) 本住居跡の主柱穴は、コーナー部に寄って配置され、掘り方もかなり大型なものである。その掘り方サイズを記すと、南西コーナーの主柱穴は径1m・深さ0.9m、南東コーナー主柱穴径0.85m・深さ0.9m、北東コーナー主柱穴径1×1.2m・深さ0.9m、北西コーナー主柱穴径0.9m・深さ0.9mを測る。何れも平面円形で、掘り方底面は平坦である。主柱穴間の距離は、心身で南壁側4.6m、西壁側4.6m、北壁側4.6m、東壁側4.6mとなり、計画的な配置が窺える。

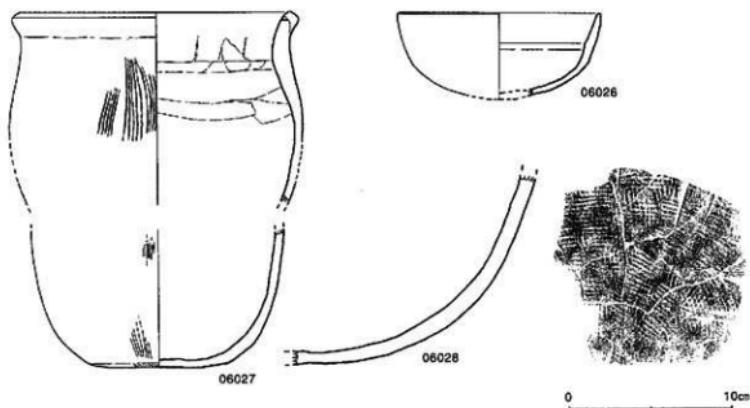


Fig.40 第6次調査SC16住居跡出土遺物実測図 (1/3)

住居から出土した遺物は、壁溝や掘り方からの土師器類が少量ある。

(出土遺物) (Fig.40 Pl.12・13)

(土師器) 06027は、土師器壺である。これらは同一個体と考えられるが、破片部分で接点が無く、並べて図示した。底部は不安定な平底と考えられ、膨らみの少ない胴部は緩く反転する口縁部へつながる。口縁部は肥厚し、頸部は角張った仕上げとなっている。器面調整は、外面胴部に荒いタテハケメを施し、内面口縁はヨコナデで、これ以下の胴部は横方向のヘラケズリを加える。器色は内外面ともに暗赤褐色を呈する。復元口径は、16.4cm程度で、残存高12cm以上である。胎土は粗で、焼成も軟質である。

06028は、土師器壺の底部破片である。外面には使用時のススが全面に付着する。

器面調整は、外面が荒い振格子タタキを全面に施す。また、内面は全面ヘラケズリと考えられる。

器色は、外面が暗褐色～黒褐色を呈し、内面は淡褐色となる。胎土は粗砂を多く混入し、粗である。焼成は堅緻である。

06026は、土師器マリである。半円状の底部に緩く内湾する口縁部がつく。非常に丁寧な造りで、胎土も精良な粘土を使用する。焼成はやや軟質である。

器面調整は、外面の口縁部及び内面はナデ調整か。器面の磨滅のために不詳である。外面胴部はヘラケズリの可能性がある。口径は、7.4cmを割り、器高は5.3cm前後と考えられる。

I・J-18地区ではSC16住居跡のように特異な構造をもつものも見られることから、他の同時期の集落を構成する遺構の整理を次年度に行うなかで、合わせてこれらの住居群についての理解を進めていきたい。

③M・N-16地区 (Fig.41~45 Pl.1.5)

本地区は、6次調査区の南西側に位置し、弥生時代中期壺棺墓列、古式S古墳群(円墳群)、古代製鉄跡などが重複・密集する地区にある。

古墳時代住居跡は、調査区北端側で2軒 (SC17・18) が検出された。何れも小型のもので、群集する古墳群より時代が下り、7世紀を前後する時期の所産である。

SC17住居跡 (Fig.41~43 Pl.1.5・6)

本住居跡は、壁の立ち上がりを殆ど残さないほど削平を受けている小型の住居である。

平面プランは、南北方向を向く長方形をなす。各辺の実長は、東壁3.9m、西壁3.8m、北壁2.6m、南壁2.5mを測る。住居内は、北壁の中央にカマドが配置され、主柱穴は4本と考えられ、径30cm程度の円形ピットを配置する。主柱穴間の距離は、北壁側2.2m、西壁側2.7mを測り、壁際には斜めに配置されている。カマド内及び床面から須恵器・土師器の出土があった。

(出土遺物) (Fig.43 Pl.1.3)

(須恵器) 06030は、小型の広口壺破片である。外開するII線部直下には鋭い突帯をめぐらす。

また、やや下がった位置に上端部に丸味を持った突帯をめぐらし、この下に均整な波状文を配する。器面調整は、外面にヨコナデが残り、内面は灰かぶりのため不詳である。器色は外面黒色、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。古式須恵器の混入品であろう。

06032は、カマド出土の須恵器横瓶の頸部付近の破片である。外面に丁寧なカキ目調整、内面ヨコナデを加える。器色は、外面が灰黒色で、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。

06031も須恵器横瓶頸部破片である。外面は灰かぶりとなっている。器面調整は、外面が丁寧なカキ目調整で、内面は半円状のアテ具痕を多く残し、この上からヨコナデを加えている。

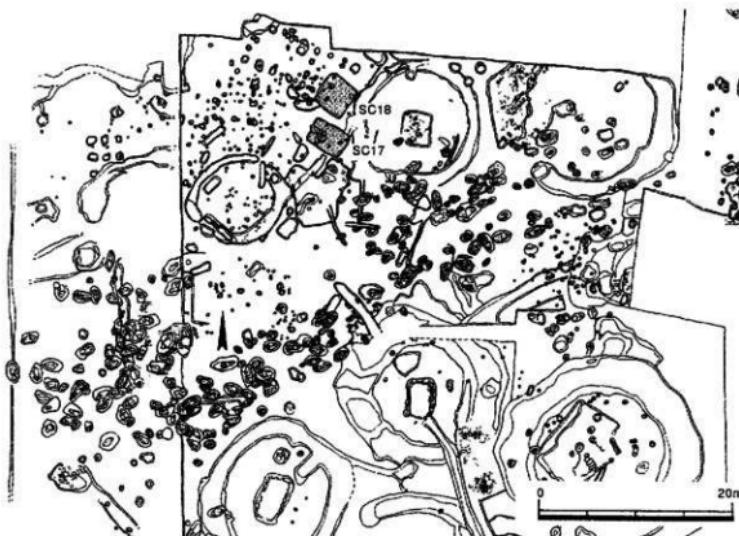


Fig.41 M・N-16地区遺構全体図 (1/500)

器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。

06029は、非常に器高の低い須恵器杯身である。底部の下端を除き、全体の約1/4を残す。

立ち上がりは非常に低く、基部が非常に分厚い造りである。また、受け部は一応の形状を保っている。

器面調整は、外面の口縁部・底部上半にヨコナデを加える。また、底部下半には回転ヘラケズリを施す。内面はヨコナデである。

器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。

復元口径は、10.8cm程度で、残存高2.6cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

(土器部) 06033は、土器器腕の口縁部破片である。カマド内より出土した。非常に薄い造りで、全体にシャープに仕上げる。

器面調整は、外面が丁寧なヨコナデで、内面は小振りなヘラケズリを施している。

器色は、外面が暗褐色～赤褐色、内面は淡褐色を呈する。復元口径は、14.4cm程度で残存高3.9cmを測る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

06034は、土器器把手の破片である。上方に伸び上がる大型の把手である。器色は、淡赤褐色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。

SC18住居跡 (Fig.41・44・45 Pl.5・6)

本住居跡はSC17住居の北側に検出された平面がほぼ方形をなす小型の住居である。削平を受けており、壁の残りも10cm強程度しか無い。住居内の南壁中央に造りつけのカマドを付設している。

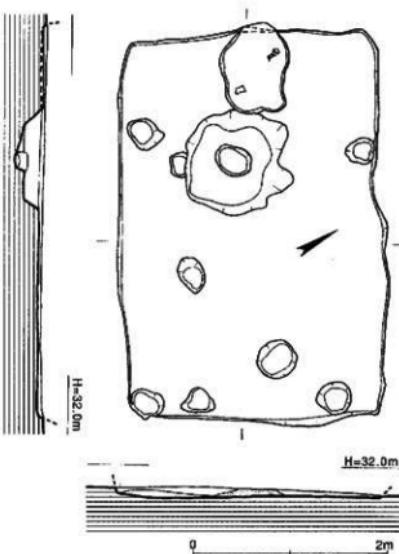


Fig.42 第6次調査SC17住居跡出土状況実測図 (1/50)

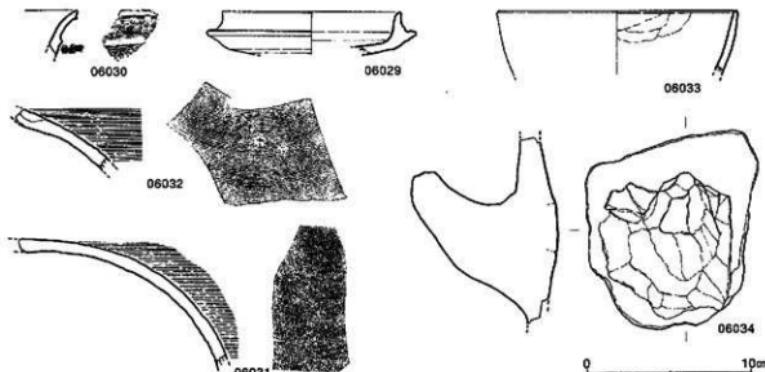


Fig.43 第6次調査SC17住居跡出土遺物実測図 (1/3)

各壁の実長は、北壁3.35m、南壁3.35m、東壁3.3m、西壁3.35m程度で、ほぼ方形となる。

床面の主柱穴は明確に判断できるものは見つからない。

住居ではカマド内とカマドの東側床面で土師器を主とした土器類が出土している。

(出土遺物) (Fig.45 Pl.14)

(須恵器) 06036は、須恵器小型蓋である。丸い天井部をもつ。端部が外に聞く口縁部と天井部との境は浅い沈線状の窪みとなっている。

器面調整は、天井部上半をヘラケズりで、他は内外面ともにヨコナデである。器色は外面暗灰色で、内面青紫色を呈する。

復元口径は、9.6cmで残存高3.4cmを測る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

06035は、須恵器の小型蓋である。天井部と口縁部の境は緩い段をなすが、それほど明瞭なものではなく、周辺はケズリによって圓線状となっている。内面はヨコナデである。器色は、内外面とともに黒灰色を呈する。復元口径は10cmで、残存高3.6cmを測る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

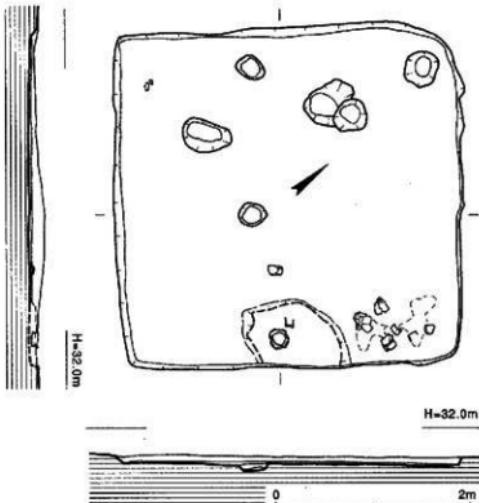


Fig.44 第6次調査SC18住居跡出土状況実測図 (1/50)

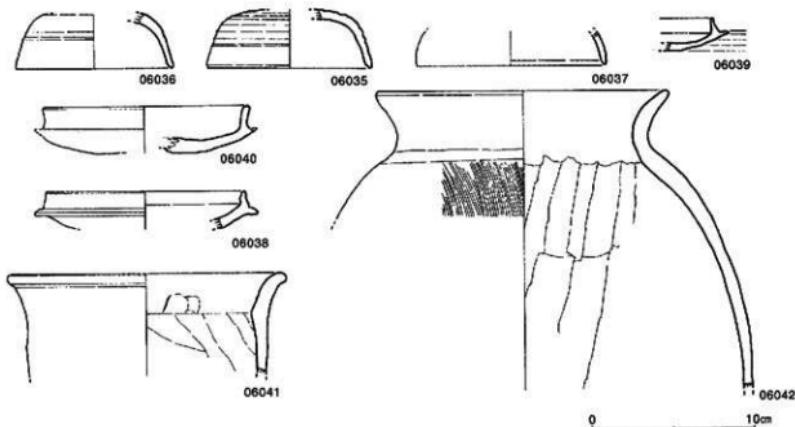


Fig.45 第6次調査SC18住居跡出土遺物実測図 (1/3)

06037は、須恵器蓋の小破片である。口縁部しか残さない。薄づくりの製品で、外面は灰かぶり、内面ヨコナデを加える。器色は外面灰白色で、内面灰黒色である。復元口径は11.6cmである。胎土は粗で、焼成は堅緻である。

06039は、須恵器の小型杯身の破片である。立ち上がりがほぼ垂直な細身の杯で、底部の最下部のみヘラケズリ調整である。器色は黒灰～暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。

06040は、器高の非常に低い須恵器杯身の破片である。低い立ち上がりは反転して外方に開いている。受け部を欠損する。底部付近は器壁が厚く、器面の調整が十分に行われていない。

全体に器面の磨滅が著しく、器色は内外面ともに淡灰色を呈する。

復元口径は12.6cmで残存高2.9cmを測る。胎土は密で、焼成は軟質である。

06038は、小型の須恵器杯身である。立ち上がりは1cm程度と低く、受け部も垂れる形状をなす。器面調整は、内外面ともにヨコナデである。器色は、外面が淡灰～暗灰色を呈し、内面淡灰色である。復元口径は12cm程度で、残存高2.3cmを測る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

(土師器) 06041は、土師器甕である。胴部の下半を失う。ほぼ直立する胴部に緩く外半する口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。外面は二次焼成の火に遭っている。

器面調整は、胴部内面に底部方向からの顎著なヘラケズリが見られる。器色は、外面が暗褐色～赤紫色、内面黒～黒褐色を呈する。復元口径は17cmで、残存高6.3cmを測る。胎土は粗で、焼成も軟質である。

06042は、球状胴部に反転する短い口縁部をもつ土師器甕である。器面調整は、外面口縁部に強いヨコナデ、以下の胴部に荒い斜めハケ調整を施す。内面は口縁部がヘラナデで、胴部は底部からのヘラケズリ調整となっている。器色は、内外面ともに暗褐色を呈する。

復元口径は18cmで、残存高18.2cmを測る。胎土は粗で、焼成は堅緻である。

3. 小 結

第6次調査では、3地区で10軒の竪穴住居跡を検出し、これまで各個の住居跡の出土状況と共に出土した遺物について説明を加えてきた。

今回の古墳時代住居の報告では、整理の都合上他の同時代の建物群や土壤・溝・自然流路などの遺構と共に収録することができなかった。

第三節 第9次調査報告

1. 調査概要

本調査区は古武遺跡群の中央の低台地のはば中央に位置し (Fig.3)、圃場整備事業の第6次調査で最終年度にあたる。標高は24~30mで南西から北東に1.4%程で緩傾斜している。調査対象地は削平を伴う東西300m南北80mの圃場整備本体工事部分と、同部分中央を南北に貫通する幅7mの2号支線道路部分、本体工事部南辺に沿って東西に貫流する2号支線排水路部分である。調査対象地が広大であり、調査と圃場整備工事を円滑に並行に進めるため、本体工事部分を東西に二分し、東の壇棺墓「大石地区」を1区、東半の他の部分を2区、西半部分を3区、3区の北西100m地区を4区、3区南の2号支線道路部分を2号支線道路区、3区西の2号支線排水路部分を2号支線排水路1区、1区東側の2号支線排水路部分を2号支線排水路2区として調査を実施した。小区は第1次調査で設定した、南北を軸線とした50mグリッドを採用している。

調査は2号支線道路部・3区・2号支線排水路1区・2号支線排水路2区・1・2区の順番で実施した。2号支線道路部・2号支線排水路1区・2号支線排水路2区は1/20スケールの全体実測図を作成したが、他は調査区が広大かつ遺構総数が膨大であるため、作業時間を短縮する目的で、個別実測以外の全体図は西日本航業株式会社に委託し航空測量図を作成した。補助図として平板測量図を作成し、これを1/50スケールに拡大し要所のレベルを記録、航空測量図はこのレベル図を援用し作成され、第9次調査分の遺構実測図の大半は航空測量図より抜き出している。図中の細かな数字は絶対高であるが、原図に全てのポイントのレベルが記入されてはおらず、また、長い年月の間にレベル図の多くを紛失しており、遺構断面図の作成が困難になっている。

現況は水田で、耕作土とこの床土の直下約20cmほどが遺構の検出面となっており、この検出面近くまでを重機を用いて掘り下げ、その後手作業で遺構検出を行っている。地山は扇状地形のため疊層から粘土層まで様々に切れ替わっており、遺構検出を困難にしている。

検出した遺構は、3区西端部の水成堆積層より、624点にのぼる良好な縞石器製作ユニットを、弥生時代は「大石地区」で壇棺墓202基・木棺墓8基・土墳墓12基・祭祀遺構5基からなる共同墓地が検出され、12点の細型青銅武器と玉類が副葬され、「高木地区」の下位の「特定集団墓」と位置づけられた。2号支線道路区では35基の壇棺と鉄剣1点・堅篠1点の副葬品・祭祀遺構1基が出土、古代では大型掘立柱建物群と方形区画溝から多量の越州窯系青磁・瓦・八稜鏡・「寺」の墨書き器が出土し、寺院と考えられている。

古墳時代の遺構は5世紀以降のみで、前期は1基の上器棺以外検出されていない。2号支線排水路1区では陶質土器・初期須恵器を伴う円墳2基 (S群27・28号墳) を検出、掘立柱建物は1×2間・2×2間の倉庫を中心に20棟以上が検出され、多数の土壙・溝とともに半島系の陶質土器・軟質土器を検出している。

竪穴住居は計85軒を検出し、第9次調査域が本遺跡群の該期集落の中心であることを示している。

2. 積穴住居

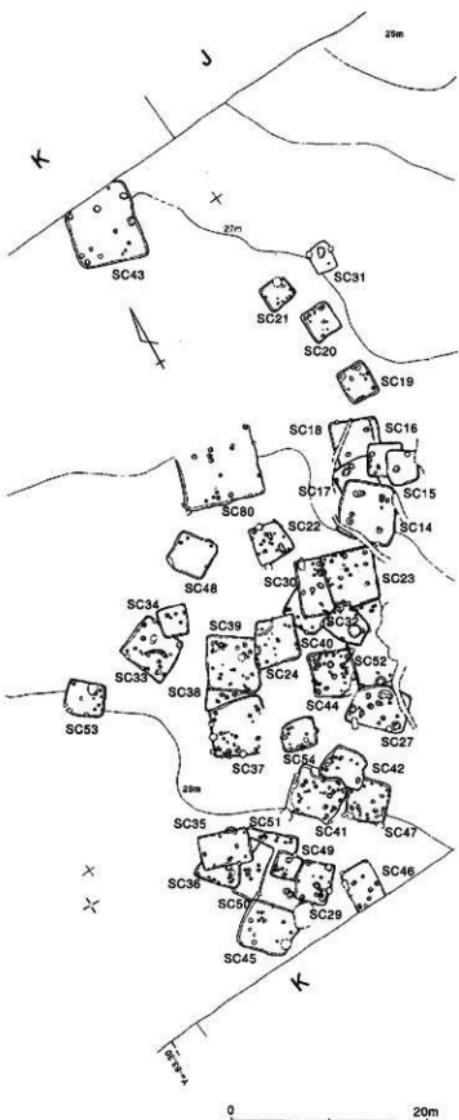


Fig.46 A群竪穴住居分布図 (1/500)

堅穴住居は方形で竈を持つか穴を持つものを堅穴住居として、遺構を選択した。堅穴住居は2・3区で78軒、4区で3軒、2号支線排水路1区で3軒、2号支線排水路2区で1軒の計85軒を検出した。総数からして本遺跡群の該期集落の中心であることを示している。

遺構は深い削平を受けて遺存状態は悪く、深さ数cm～十数cmのものが大半を占める。

2・3区では標高25~28mの等高線稜線上、南西から北東方向の幅約120mの帯状に74軒が分布している。集中の度合いは西から東へ粗になる傾向にある。1区及び2号支線道路区の斐菅墓域では検出されていないが、成人棺の半分以上が削平されている状況では竪穴住居は削平されきっていると考える方が妥当である。2号支線排水路1区ではⅠ期～ⅢB期の28号墳の埋没した周溝を切って住居が設けられており、古墳に隣接して集落が広がっている可能性がある。竪穴住居のタイプは一辺3m前後の小型住居・4~6m前後の中型住居・8mを超える大型住居の3タイプがあり、また、竪を持つもの・持たないもの、主柱穴が4本のもの・主柱穴が明確でないもののタイプがある。周壁溝を持つものは極めて少ない。

後世の削平の影響も考慮に入れなければならないが、見かけ上、西から南北に幅10m程の空白域を2カ所挟んで3群に分けられる。これを西からSC51~SC43・43軒のA群、SC25~SC100・27軒のB群、SC101~SC104・8軒のC群とし、各群・地区毎に詳説する。

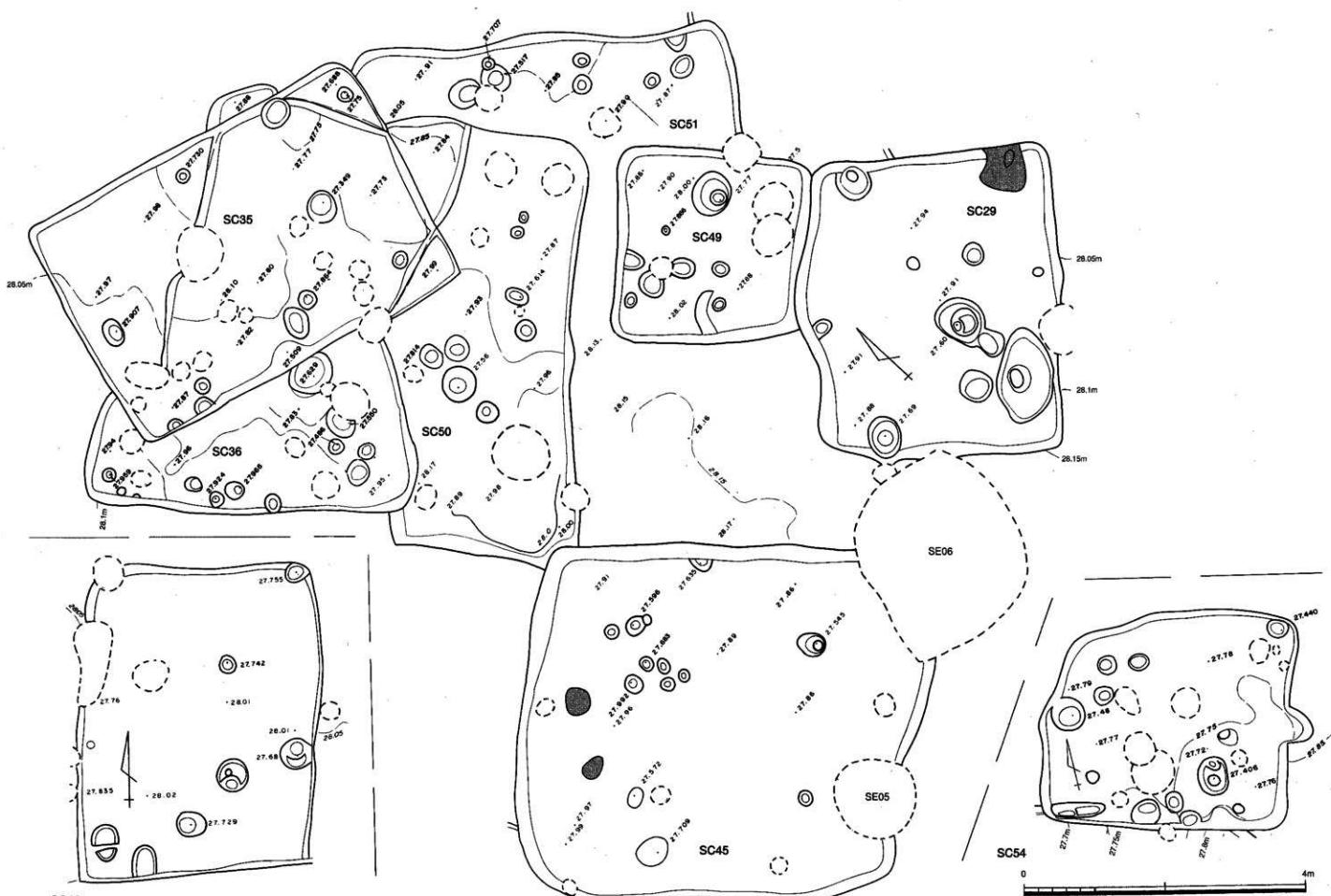


Fig. 47 SC51・50・45・36・35・49・29・46・54実測図 (1/50)

1). A群

A群は堅穴住居群の西部、標高27~28m付近に南西から北東方向の幅30m程の範囲に43軒が分布し、住居群の中心部分を成している。

各住居同士の切り合いが著しく、最大で11軒が切り合っており、切り合いの無い住居は11軒のみである。

南側に集中の中心があり一辺4~6mの中型住居が多く、北端に切り合いを持たない幅8mの大型住居SC80がある。

北側は5軒と散漫で、中型が分布せず、4軒の小型住居が切り合わずに近接して分布し、これらと離れた北側に大型住居SC43がある。

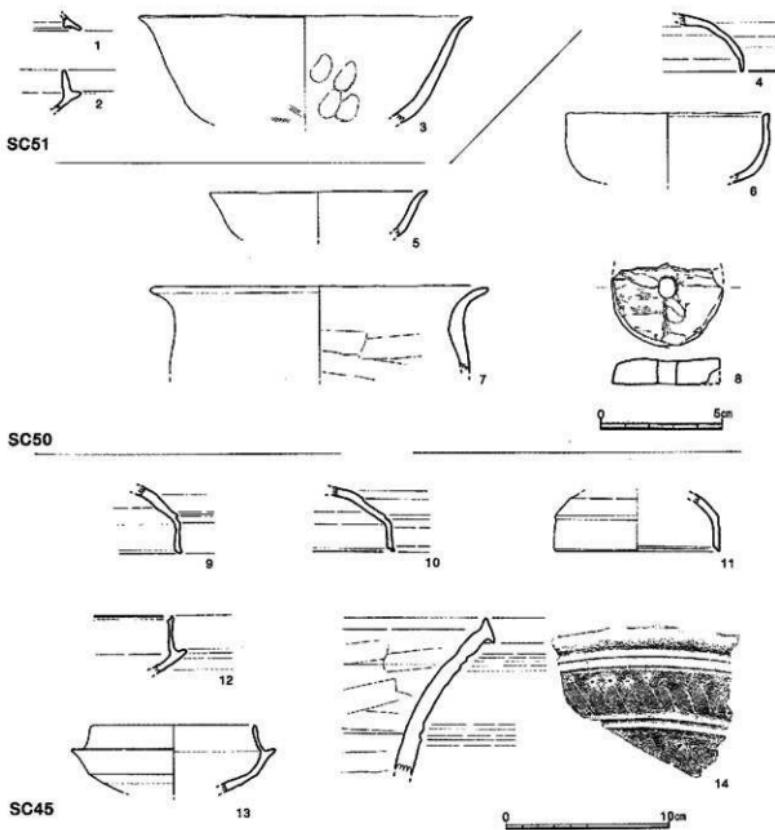
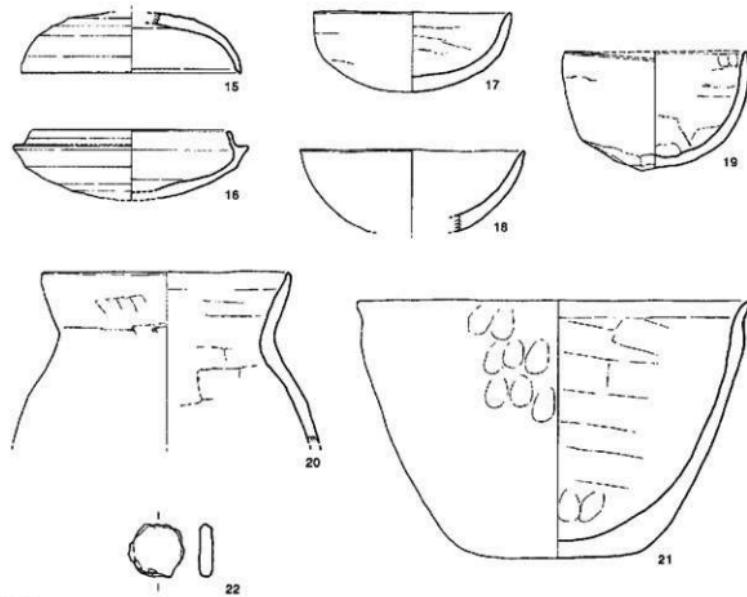


Fig.48 SC51・50・45出土遺物実測図(1/3,1/2)

(1) SC51 (fig. 47 Pl. 15)

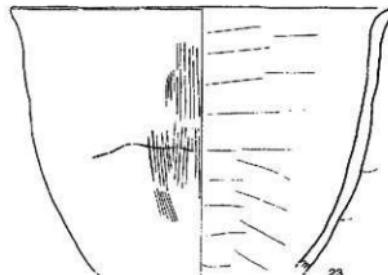
SC51はA群南端、7軒切り合いの最下部で検出され、SC49・50に切られる。

平面プランは方形で長軸方向はN-50°-Wにとる。規模は5.4m×1.9m - αで、深さは17cmを測る。
著しい切り合いのため主柱穴・窓の有無は明確でない。



SC29

SC54



0 10cm

Fig.49 SC29・54出土遺物実測図(1/3)

SC51出土遺物 (fig. 48 Pl.)

遺物は住居本体から出土せず、住居内の柱穴から若干の土師器・須恵器小片が出土している。

須恵器 1はⅣ期の坏蓋小片で、胎土は精良で焼成は甘く、還元焼成が成されておらず橙色を呈する。調整不明。2はⅢB期の坏身小片で胎土・焼成は良好で、灰色を呈する。

土師器 3は高坏の坏部で、復元で口径20.4cmを測る。調整はナデで、外面下位に刷毛目が、内面に指圧痕が残る。全周の1/6が残存する。

切り合いの最下位にあることから、1は混入であり、2のⅢB期の時期である。

(2) SC50 (fig. 47 Pl. 15)

SC50は7軒切り合いのなかでSC51を切りSC36・35・45に切られて検出された。

平面プランは方形で長軸方向はN-47°-Eにとる。規模は5.7m×6.0mで、深さは5cm程を測る。

SC35の床面下にプランが残って検出される。主柱穴は不明瞭で、竈の有無は明確でない。

SC50出土遺物 (fig. 48 Pl. 29)

須恵器 4はⅢBからⅣ期の坏蓋小片で、胎土は粗い石英粒を含み、焼成は甘く、灰黄褐色を呈する。

土師器 5・6は坏で、5は口縁は直口し復元口径12.6cmを測る。6は体部が開き口縁が緩く外湾する。復元口径13.3cmを測る。ともに胎土は粗い石英粒を含み、色調は橙色を呈する。全周の1/6から1/8が残存する。7は甕で、口縁は外済し、頸部内面はケズリによって棱を成す。復元口径20.7cmを測る。外面から内面頸部まではナデを施す。胎土は粗い石英粒を含み、色調は黄橙色を呈する。

石製品 8は滑石製の薄い裁頭円錐形の筋車で、径4.6cm厚1.1cm輪内径0.8cmを測る。欠損したものを石鎚に転用しており、断口を粗く整形し、孔の上方に組ずれがある。重量21.5gを測る。

切り合いの下位にあり、ⅢB期の時期と思われる。

(3) SC45 (fig. 47 Pl. 15)

SC45は7軒切り合いの南側でSC50を切り、井戸SE05・06に切られて検出された。

平面プランは方形で、長軸方向はN-43°-Wにとる。規模は5.7m×5.0mで、深さは30cm程、床面積26.1m²を測る。主柱穴は径20~40cmの小形の柱穴が多いが、柱間2.2~2.4mの4柱が対応するとおもわれる。竈は持たない。

SC45出土遺物 (fig. 48 Pl. 29)

須恵器 9・10は坏蓋の小片。9はⅠB期で、体部外面境が稜を成す。口唇内面に沈線を施す。胎土は細かい石英粒を含み、焼成は良好、淡灰色を呈する。10はⅡ期で、体部外面境は段となり、口唇内面も段を成す。胎土は細かい石英粒を含み、焼成は良好、灰色を呈する。11はⅡ期の壺蓋で、復元口径10.2cmを測る。体部外面境は緩い段となり、口唇内面も段を成す。胎土は細かい石英粒を含み、焼成は良好、明灰色を呈する。全周の1/6が残存。12・13は坏身。12はⅡ期で、立ち上がりは高く、ほぼ直口する。口唇内面に沈線を施す。体部外面1/3以下に回転ヘラケズリを施す。胎土は粗い石英粒を含み、焼成は良好、明灰色を呈する。13はⅡ期で、立ち上がりは高く緩く内傾する。受部径で12.5cmを測る。体部下半は右回転のヘラケズリを施す。胎土は粗い石英粒を含み、焼成は良好、灰色を呈する。全周の1/6が残存。14は大壺口縁で、平坦な口唇の内外が強り出し幅1.5cmに肥厚する。外面には低い2条単位の突帯を2カ所施し、間に18条単位の櫛描波状文を施す。内面には横方向の粗いヨコナゲが残る。胎土は粗い石英粒を多く含み、焼成は良好、灰色を呈する。

SC50の上位にあり、ⅢB~Ⅳ期と考えられるが、Ⅱ期の資料がまとまっている。

(4) SC36 (fig. 47)

SC36は7軒切り合いのなかで北側に位置し、SC50を切りSC35に切られて検出された。

平面プランは方形で長軸方向はN-65°-Eにとる。規模は4.7m×2.6m + αで、深さは7cm程を、床面積は約13.5m²を測る。切り合いが著しく、主柱穴は不明確で、竪の有無も明確ではない。

SC36出土遺物

出土遺物は住居本体からは無く、柱穴内より、図下に堪えない須恵器壺・坏小片2片、土師器小片8片、鉄滓1点が検出されている。

SC50の上位にあり、ⅢB～Ⅳ期と考えられる。

(5) SC35 (fig. 47)

SC35は7軒切り合いのなかでSC51・50・36を切り、切り合いの最上位に位置して検出された。平面プランは長方形で長軸方向はN-72°-Wにとる。規模は5.2m×3.5mで、深さは7cm程、床面積18.0m²を測る。SC50の床面と大半が重なっており、また、主柱穴が定型化されておらず不明確で、竪は持たない。

SC36出土遺物

出土遺物は住居本体から、図下に堪えない土師器小片2片が検出されている。

SC36の上位にあり、Ⅳ期以降と考えられる。

(6) SC49 (fig. 47 Pl. 15)

SC49は7軒切り合いのなかでSC51を切りSC29に切られて検出された小型の住居である。

平面プランは方形で長軸方向はN-48°-Eにとる。規模は2.8m×2.8mのほぼ正方形で、深さは13cm程、床面積は約7.1m²を測る。径15～60cmの柱穴がいくつか存在するが2穴・4穴など定型化された位置はない。竪は持たない。

SC49出土遺物

SC49からは遺物は検出されていない。

SC51の上位にあり、ⅢB～Ⅳ期と考えられる。

(7) SC29 (fig. 47 Pl. 15)

SC29は7軒切り合いのなかでSC35・45とともに切り合いの最上位に位置し、SC49を切りSE06に切られて検出された。平面プランは長方形で長軸方向はN-45°-Eに、規模は4.3×3.8mで、深さは20cm程、床面積15.1m²を測る。主柱穴は径15～40cmのいくつかが存在するが、明確ではない。竪は東の隅付近の壁に接して40×40cmの範囲に焼上がりが広がり、土器片が散布する。

SC29出土遺物 (fig. 49 Pl. 29)

須恵器 15はⅢB期の坏蓋で、復元口径13.4・器高3.7cmを測り、体部外面2/3から上に回転ヘラケズリを施す。胎土は精良で石英粒を殆ど含まない。焼成は還元焼成がなされず純い赤橙色を呈す。16はⅢB期の坏身で、立ち上がりは低く受部で径14.4・器高4.3cmを測る。体部外面1/3以下に回転ヘラケズリを施す。胎土は細かい石英粒を含み、焼成は良好、明青灰～灰色を呈する。

土師器 17～19は坏で、17は復元口径12.2・器高5.0cmを測る。外面体部は横方向のケズリ後緩いナデ。胎土は粗い石英粒を含み、焼成は良好、にぶい橙色を呈し、外底に黒斑がある。18は復元口径13.8cmを測り、口縁外面を若干くぼます。調整は不明で、胎土は細かい石英粒を含み、焼成は良好、

にぶい黄橙色を呈する。19は口径13.0・器高7.3cmを測る深い器形で、小さな平底を持つ。内外に横方向のケズリ後縫いナデを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、焼成は良好、にぶい橙色を呈し、外底に黒斑がある。20は小型の壺で口径15.2cm。外面にハケメ痕、内面頸部以下にヨコケズリを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、黄褐色を呈し、口縁外面は煤ける。21は半島系の大型の鉢で、口縁は短く外反し底部は平底を呈する。口縁の1/4が残存し、体部に把手がつく可能性がある。口径24.0・器高15.8cmを測る。外面は調整不明、内面はヨコケズリ後縫いナデを施し、全面が炭素を吸着して黒灰色を呈す。胎土は粗い石英粒を多く含む。22は土師器壺脇部を用いた土器片円盤で、外面から周開を打ち欠いて円形に整形する。3.3×3.4×0.8cm・10gを測る。

SC49の上位にあり、ⅢB期と考えられる。

(8) SC46 (fig. 47)

SC46は7軒切り合いの住居群の東側で単独で検出された。平面プランは長方形で長軸方向はN-1°-Wに、規模は4.3×3.8mで、深さは4cm程、床面積14.6m²を測る。主柱穴は北側に径22cmが1穴、南側に40cm程がいくつか存在するが、柱間1.6mの2穴と思われる。竪は存在しない。

SC46出土遺物

出土遺物は住居本体からは無く、住居内の柱穴から圓化に耐えない土師器小片6片を検出した。
時期は不詳である。

(9) SC54 (fig. 47)

SC54はA群南側の住居が切り合う部分の隙間で検出された小型の住居で、平面プランは不整長方形で長軸方向はN-73°-Wに、規模は3.5×3.1mで、深さは10cm程、床面積10.1m²を測る。主柱穴は径20~50cm程のものがいくつか有るが明確ではない。竪の粘土は確認できないが、西壁中央に幅50cm程の掘り込みがあり、可能性を示している。

SC54出土遺物 (fig. 47)

土師器 23は壺で口径23.4cm。外面はタテハケ後縫いヨコヘラナデ、脇部下位に把手の痕跡がある。内面は頸部下にヨコケズリ、胎土は石英粒を多く含むが精良。焼成は良好で、橙色を呈す。
住居の方向はSC37・39に近く、時期はⅣ期と思われる。

(10) SC47 (fig. 50)

SC47はSC54の南側、3軒切り合いの住居群の最下位で検出され、SC42・建物SB15に切られる。平面プランは方形で長軸方向はN-42°-Eに、規模は4.3×4.3mで、深さは4cm程、床面積は約17.2m²を測る。主柱穴は中央寄りの径30~40cmの柱間1.6~2.4mの4穴と思われ、竪はない。

SC47出土遺物 (fig. 51 Pl. 29)

須恵器 24はⅢA期の壺身で、立ち上がりが高く復元受部径14.0・器高4.0cmを測る。体部外面の1/3以下に回転ヘラケズリを施す。胎土は粗い石英粒を含み焼成良好、暗灰色呈す。25は半島系の平底壺の底部片で、径20~25cm程。胎土は粗い石英粒を含み、焼成は良好、灰色を呈す。

時期はⅢA期である。

(11) SC41 (fig. 50)

SC41はSC47の北側、3軒切り合いの住居群で、SC42に切られる。平面プランは方形で長軸方向はN

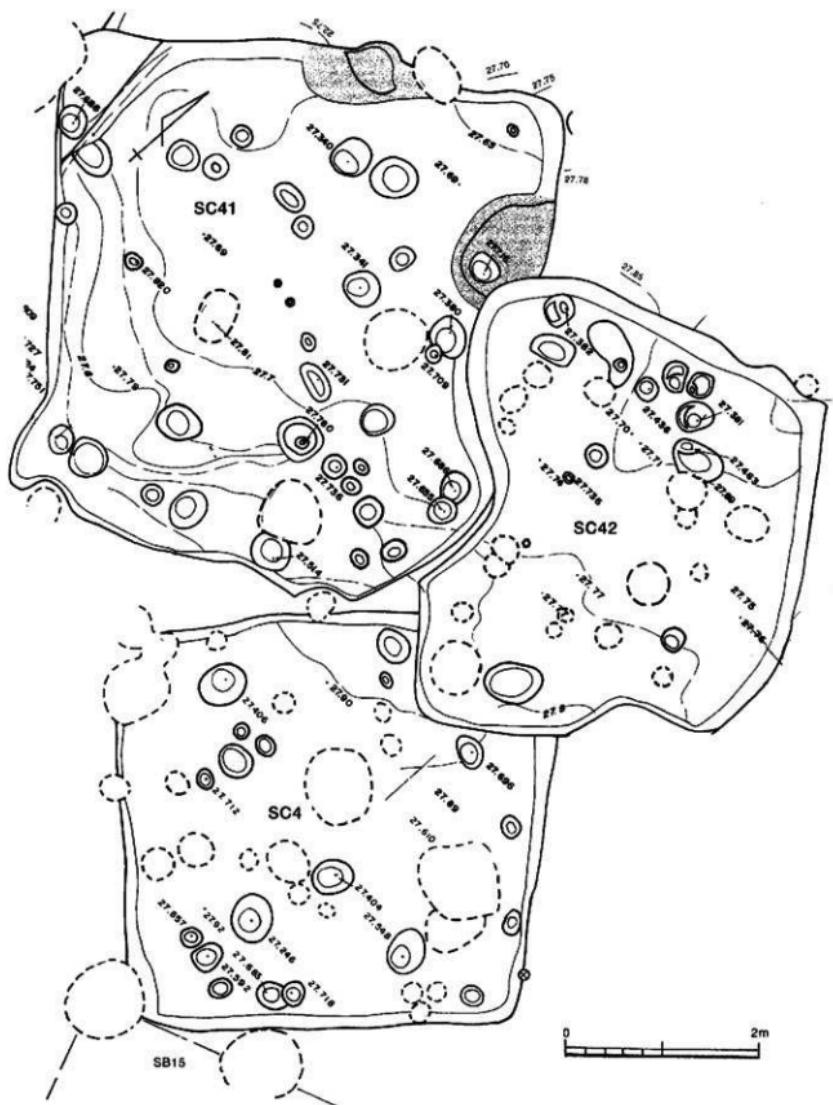


Fig.50 SC47・41・52実測図(1/50)

-40° -Wに、規模は5.6×5.2mで、深さは10cm程、床面積は約24.7m²を測る。主柱穴は中央寄りの径30~40cmの柱間2.2~2.8mの4穴と思われ、焼土が北壁・東壁に接して2カ所ある。

SC41出土遺物 (fig. 51)

須恵器 30はⅡ~ⅢA期の坏蓋小片で、外面体部境が段を成す。胎土は粗い石英粒を含み焼成はやや緩く、淡灰色呈す。31は甌の胴部小片で、2本の沈線間に押引の連続刺突文を施す。径11.8cm。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成は良好、暗灰色を呈する。

時期はⅢA期である。

(12) SC42 (fig. 50)

SC42はSC41の東側、3軒切り合いの住居群で、SC41・47を切る。平面プランは不整形で長軸方向はN-35° -Wに、規模は4.8×3.9mで、深さは15cm程、床面積は14.7m²を測る。柱穴は南北に数個分布するが、明確でない。窓は無い。

SC42出土遺物 (fig. 51)

須恵器 26はⅢA期の坏蓋小片で、体部外面と口唇内面に沈線を施す。胎土は粗い石英粒を含み焼成良好、灰色を呈す。27ⅢA期の坏身で立ち上がりが高く復元受部径14.8cmを測る。体部外面の1/3以下に回転ヘラケズリを施す。胎土は粗い石英粒を含み焼成良好、暗灰色呈す。28はⅢB期の無蓋高坏の坏部小片で、外底にカキメが残る。胎土は粗い石英粒を含み、焼成は良好、灰色を呈する。

土師器 29は甌口縁部で径18.4cmを測る。口頸部はヨコハケ、以下はタテハケ後ヨコナデ。内面は頸部以下にケズリ様の粗いヨコハケを施す。

時期はⅢB期である。

(13) SC40 (fig. 52)

SC40はSC54の北側、11軒切り合いの住居群で最下位に位置し、SC30・32・24に切られる。平面ブ

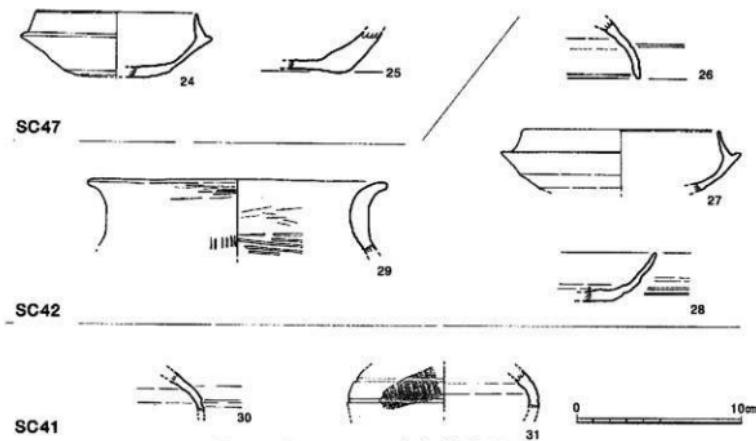


Fig.51 SC47・41・42出土遺物実測図(1/3)

ランは方形で長軸方向はN-60°-Eに、規模は $4.4 \times 3.3 + \alpha$ mで、深さは10cm程を測る。主柱穴は四隅に近い径20~40cm、柱間2.1~2.9mの4穴と思われ、窓は不明。

SC40出土遺物

SC40からは固化不能な須恵器小片2点と土師器小片十数点・焼土塊1点が出土している。

ⅢA~ⅢB期のSC30に切られるため、これ以前の時期である。

(14) SC30 (fig. 52 Pl. 15)

SC30はSC40の東側に位置し、SC40を切り、SC23に大半を切られる。平面プランは方形で長軸方向はN-71°-Wに、規模は $5.9 \times 3.3 + \alpha$ mで、深さは10cm程を測る。主柱穴は明確でない。壁際の窓は確認できないが、中央に70×40cm程の焼土部分が広がっている。

SC30出土遺物 (fig. 53 Pl. 29)

須恵器 32はⅢA期の坏身で、復元受部径15.6cmを測る。体部外面の1/2以下に回転ヘラケズリを施す。内底に同心円当具痕が残る。胎土は精良で焼成良好、暗灰色を呈す。

土師器 33は小型の壺口縁部で径12.8cmを測る。口縁内外はヨコナデ、内面頸部以下にケズリ様の粗いナナメハケを施す。胎土は細かな石英粒を含み、暗褐色を呈し、外面は煤ける。

石製・土製品 34は太鼓形の滑石製紡錘車で径4.2厚2.6・軸孔0.25cmでこれは上下から穿孔する。重量85.5gを測る。35は土師器底部片を用いた土器片円盤で径4.4cmを測る。主に外面からの打裂で円形に整形し、破断面は摩滅する。半分を欠損する。

時期はⅢA期である。

(15) SC23 (fig. 52)

SC23はSC30の東側に隣接してこれを切り、SC32・52に切られる。平面プランは方形で長軸方向はN-14°-Eに、規模は 5.7×5.4 mで床面積は28.4m²、深さは10cm程を測る。柱穴は径20~40cm程のものが十数個有るが定型化された位置はない。窓は持たない。

SC23出土遺物 (fig. 53 Pl. 29)

土師器 36は丸底壺で胴径11.4cmを測る。内外面にケンマを施す。胎土は細かな石英粒を含み精良で、赤褐色を呈する。37~41は壺、37は黒色土器で、復元口径14.4・器高5.3cmを測る。外面は粗いヨコハケ後緩いケンマ、内面はヨコナデ後緩いケンマを施す。胎土は細かな石英粒を含み精良、黒褐色を呈する。38は復元口径12.6・器高5.0cmを測る。口縁が緩く外反し、外面は体部下半を手持ちケズリ後緩いヨコナデ、内面はヨコナデ後ケンマを施す。胎土は細かな石英粒を含み精良、淡赤褐色を呈する。39はほぼ完形で口径13.9・器高5.5cmを測る。器面が荒れ調整は不明。胎土は細かな石英粒を含み、赤褐色を呈する。40は復元口径8.4・器高5.2cmを測る小型品。口縁以外の器壁が厚く、器面は荒れ調整は不明。胎土は細かな石英粒を含み精良、淡赤褐色を呈する。41は復元口径10.5・器高4.5cmを測る。底部が厚く、外底は粗く手持ちケズリを施す。他は器面が荒れ調整不明。胎土は粗い石英粒を含み、黄褐色を呈する。42は小型の壺の口縁部で径13.4cmを測る。外反する口縁部から胴が大きく張り出す。口縁内外はヨコナデ、外面胴部にタテハケを、内面頸部以下に粗いヨコケズリを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、内面は灰褐色、外面は灰褐色で煤ける。43は復元口径25.4・器高21.9cmを測る半島系軟質の壺。口縁が外反し、緩い平底に径2cmの円孔を数個穿つ。円柱状の把手には定例の切り込みを入れる。外面は斜位の平行叩、内面は丁寧なナデを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、黄褐色を呈する。

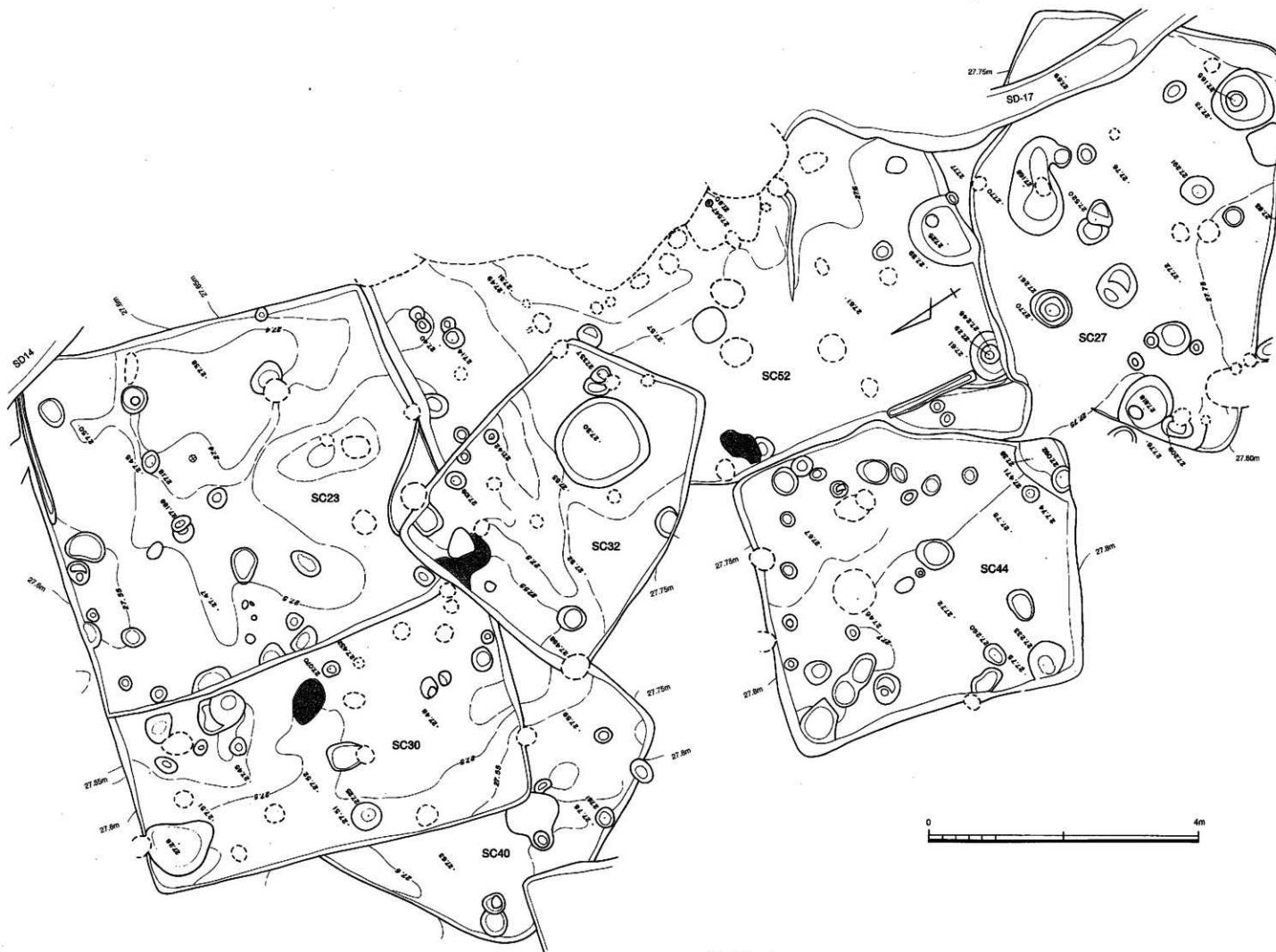


Fig. 52 SC40・30・23・32・44・52・27測図 (1/50)

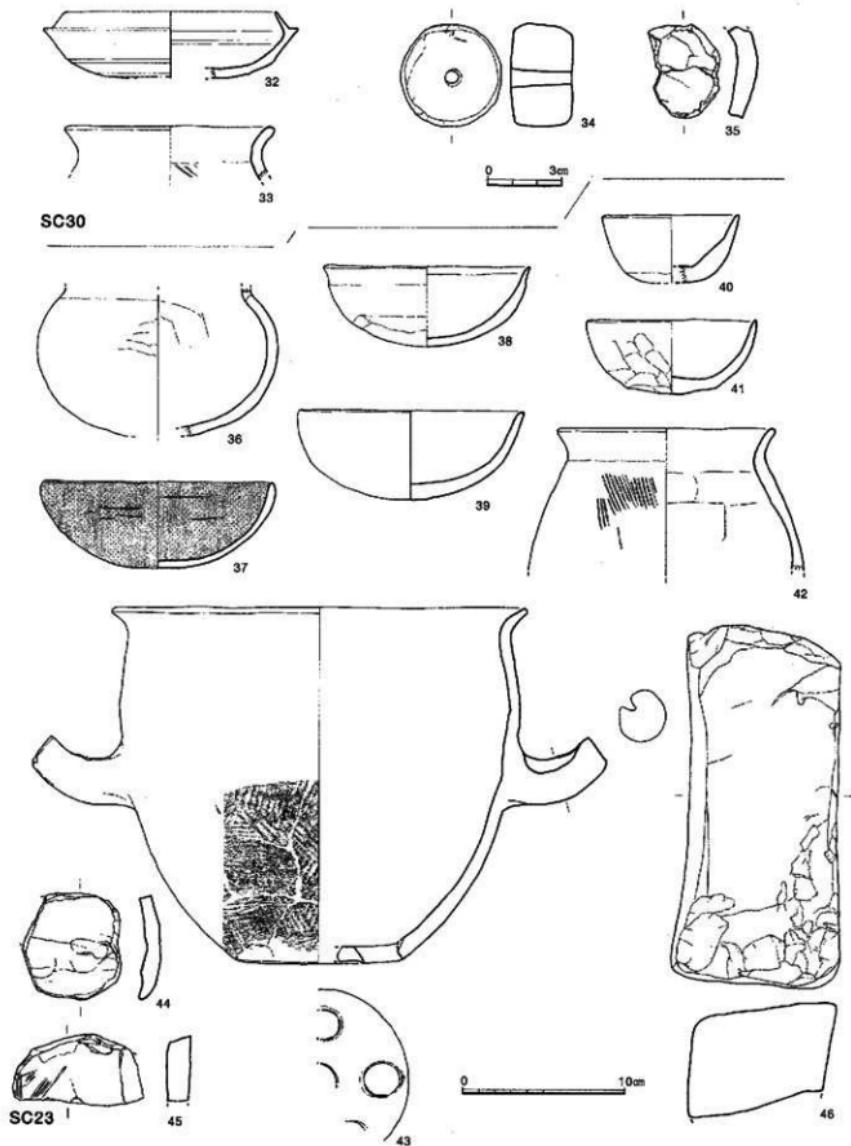


Fig.53 SC30・23出土遺物実測図(1/3,1/2)

土製品 44・45は土師器片を転用した土器片円整で、44は胴部片を利用し径 6.6×6.0 厚 1.0 cm・重量45gを測る。主に外面からの打裂で円形に整形し、破断面は摩滅する。一部欠損する。45は平底の底部片を利用したもので、径 7.9×1.5 cmを測る。同じく外面からの打裂で円形に整形し、破断面は摩滅する。半分欠損する。

石器 46は石英斑岩製の中砥石で、縦半分を欠損する。残存長 22.3 高 10.5 cmで、小口を除く全面を使用しており、中央が $5 \sim 10$ mm窪む。破断面が摩滅しており、破損後も使用している。

Ⅲ A期のSC30を切っており、時期はこれ以降である。

(16) SC32 (fig. 52)

SC32はSC23の南側に隣接し、11軒切り合いの住居群で最上位に位置し、SC23・30・40・52を切る。平面プランは台形で長軸方向はN-14°-Wに、規模は 4.6×3.5 mで床面積は 12.6 m²、深さは20cm程を測る。柱穴は径 $20 \sim 40$ cm程のものが壁周辺に数個有るが定型化された位置にはない。南側中央に径 1.4×1.3 m深さ20cm程の上槽を持つ。竈は北壁中央寄りに接して焼土が広がる。

SC32出土遺物 (fig. 54 Pl. 30)

須恵器 47はⅢ A期の坏身で、復元受部径 15.0 器高 3.7 cmを測る。体部外面の1/2以下に右回転ヘラケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み精良。焼成良好で、外面は灰を被り灰色を呈す。48はⅢ A期の無蓋高坏で復元口径 11.4 器高 14.6 cmを測る。坏部と脚部に小さな三角突帯を各1条施し、脚部上位から坏部下位にかけカキメを施す。脚部内側には沈線を1条施す。脚部にはシボリ痕が残る。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成良好で暗灰～灰色呈す。

土師器 49は半島系軽質の瓶で口径 31.4 cm、器高は 30 cm前後。口縁外面は玉縁状に肥厚し下に沈線を1条施す。木目直交の平行叩を施し、粗くナデる。内面は丁寧にナデる。底面は抜けており、薄い柱状の受けを有する可能性がある。肩上位に径 5 cm程の把手の痕跡が有る。胎土は粗い石英粒・赤色粒を含み、橙色を呈し外面は煤ける。50・51は甕で、50は口径 17.0 cmを測る。外反する口縁部から胴が強く張る。内面頸部以下に粗いヨコケズリを施し、他は調整不明。胎土は粗い石英粒を多く含み、内面は淡褐色外面は黒褐色で煤ける。51は径 15.0 cmを測る。口縁内面は粗いヨコハケ、頸部以下に丁寧なナナメケズリを、外面胴部に粗いタテハケを施す。胎土は粗い石英粒を含み、黄橙色を呈す。

石製・土製品 52は土師器胴部片を用いた土器片円整で径 4.9 厚 1.0 cm。打裂で円形に整形し、断面は摩滅する。一部を欠損。53は円盤状滑石製紡錘車で径 7.4 厚 1.4 ・輪孔 0.5 cmで重量 135.3 gを測る。

時期はⅢ B期である。

(17) SC44 (fig. 52)

SC44は11軒切り合いの住居群の南東部で最下位に位置し、SC52・27に切られる。平面プランは方形で長軸方向はN-20°-Eに、規模は 4.7×4.5 mで床面積は 19.1 m²、深さは5cm程を測る。柱穴は径 $20 \sim 40$ cm程のものが十数個有るが定型化された位置にはない。東壁南側に1.4m程晴溝がある。竈は持たない。

SC44出土遺物 (fig. 54 Pl. 30)

須恵器 54はⅢ A期の坏蓋小片で、外面体部境と口唇内面に沈線を、体部1/2以上に回転ヘラケズリを施す。胎土は細かな石英粒を少量含み精良。焼成良好で灰色を呈す。55はⅢ A期の坏身立ち上がり小片で、口唇内面が段を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成良好で暗灰～灰色呈す。

土師器 56は甕で、口縁小片で、外反する口縁端は薄く、頸部は厚い。内面頸部以下に粗いケズリを

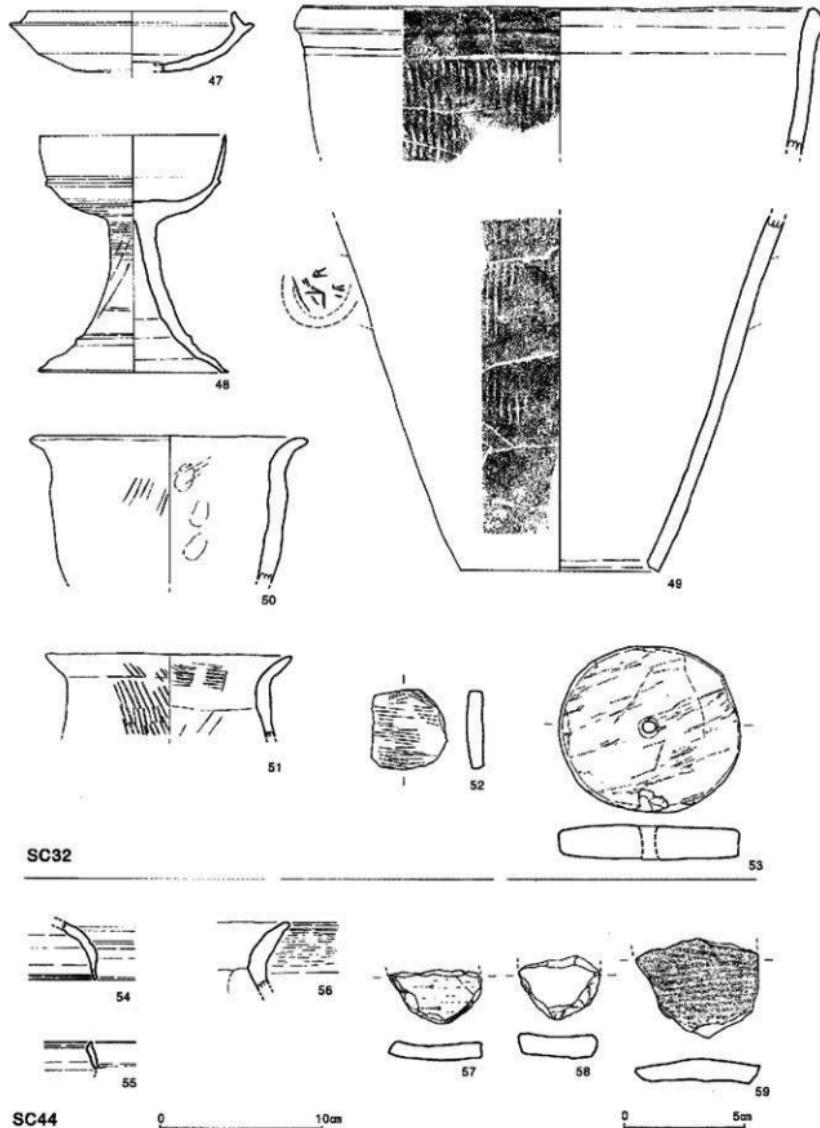


Fig.54 SC32・44出土遺物実測図(1/3,1/2)

施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、内面は暗黄褐色外面は黒褐色で煤ける。

土製品 57～59は土師器胴部片を用いた土器片円盤で、何れも打裂で円形に整形する。57は径3.8厚0.7cm、一部を磨って整形する。58は径3.4厚0.9cm。59は径5.0厚0.7cmを測る。何れも断面は摩滅し、半分を欠損する。

時期はⅢA期である。

(18) SC52 (fig. 52)

SC52はSC44の東側に位置し、これを切り、SC32・27に切られる。平面プランは大型の方形で長軸方向はN-12°-Eに、規模は8.9m+α×4.9m+αで、深さは15cm程を測る。柱穴は壁近くに径20～40cm程のものが十数個有るが定型化された位置にはない。竈は東壁中央近くに0.7×0.3mの範囲に焼土が広がる。

SC52出土遺物 (fig. 55・56 Pl. 30・31)

須恵器 60はⅢA期の壺身で、復元受部径15.6・器高4cmを測る。体部外面の1/2以下に回転ヘラケズリを施す。胎土は粗い石英粒を含み、焼成良好、暗灰色呈す。61はⅡ期の縁か小壺の口縁部で、復元口径15.0cm。小さく外反した口縁下に低い三角突帯を2条施し、この間2段に櫛描波状文を施す。胎土は細かな石英粒を含む。焼成良好で自然釉が掛かり暗灰色を呈す。62は大甕の頸部片で、器壁は薄く、低い突帯1条・沈線2条のセットを2カ所施し、この間上段に2段、下段に1段の櫛描波状文を施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成良好で自然釉が掛かり暗灰色を呈す。

土師器 63～68は甕で、63は復元口径13.2・胴径23.0cm。外面はタテハケが残り、内面頸部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、にぶい橙色を呈す。64は口唇外面に沈線を施す。復元口径14.6・胴最大径は上位にあり25.0・器高約25cm。外面はタテハケ後緩いナデ、口縁内面はヨコハケ頸部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒・赤色粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈す。65は復元口径12.2胴最大径は中位にあり16.7cm。外面は細かなハケ調整、口縁内面はヨコナデ頸部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈す。66は復元口径15.6・胴径18.5cm。外面は粗いタテハケが残り、内面頸部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈す。67は小型の甕で、口径12.0・器高15.7cm。外面は粗いハケメが残り、内面はナデを施す。胎土は粗い石英粒を含み、にぶい黄橙色を呈す。外底を中心に黒く煤ける。68は大型の脚付鉢の底部で、復元径16cm。調整は不明。胎土は粗い石英粒を少量含み、橙色を呈す。69・70は高坏で、69は坏部完形で、径16・器高6cm。調整は不明。胎土は粗い石英粒を多く含み、橙色を呈す。70はほぼ完形の脚で、径12.6・高7.2cm。調整は不明。胎土は細かな石英粒・赤色粒を含み、橙色を呈す。71は瓶口縁小片で、器壁は薄く、内外にハケメを残す。胎土は粗い石英粒を含み、橙色を呈す。72～78は坏で、72は口径11.8器高約7cm、外底はケズリ、他はナデを施す。73はほぼ完形で口径13.3器高5.1cm。外面は粗いハケ後ナデ下半はヘラナデ、他はナデを施す。底部は内外が黒変する。74はほぼ完形で口径12・器高5.4cm。外面上半は粗いタテハケ、体部下半を手持ちケズリ後緩いヨコナデ、外底は平底で板压痕が残る。75は復元口径14.4・器高7.5cm。調整は不明。76は完形で口径11.8・器高6.1cm。外面下半にケズリ、他はナデを施す。77は復元口径10器高5cmで調整は指頭圧とナデ、口唇は薄く体部は厚い。78は口径7.8器高6.8cm、外底はハケ内面はヘラナデを施す。

土製品 79・80は土師器胴部片を用いた土器片円盤で、打裂で円形に整形する。79は径4厚1.2cm重量20gを測る。80は径3.8厚1.0cm重量27gを測る。何れも断面は摩滅する。

時期はⅢA期である。

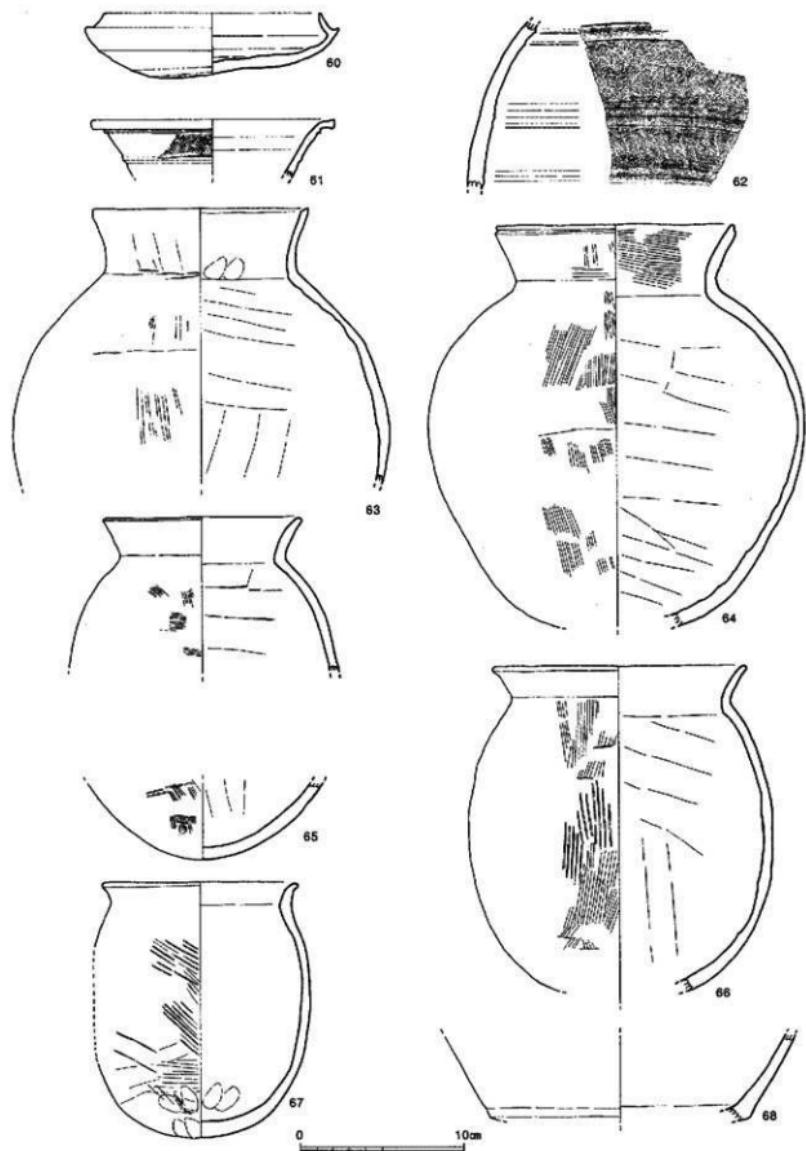


Fig.55 SC52出土遺物実測図.1(1/3)

(19) SC27 (fig. 52)

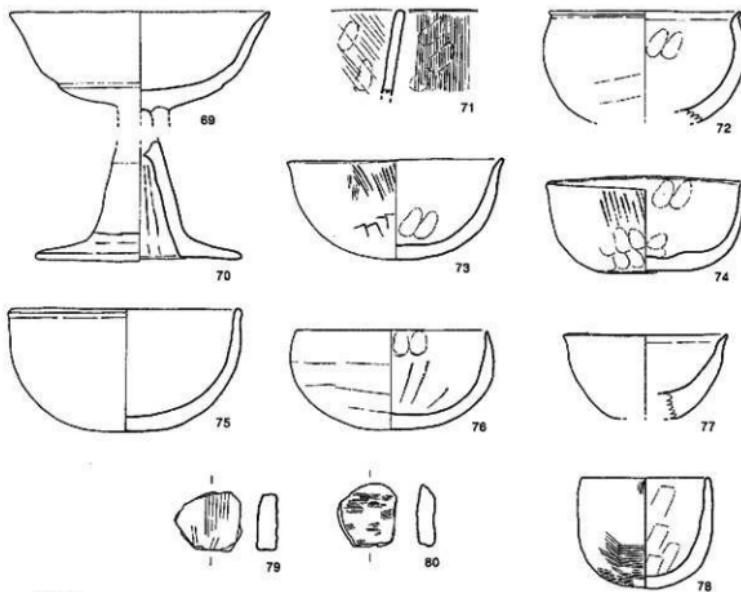
SC27は11軒切り合いの南で最上位に位置し、SC44・52を切り、古代溝SD17に切られる。平面プランは長方形で長軸方向はN-46°-Wに、規模は6.1m×4.5mで、深さは5cm程、床面積約21m²を測る。主柱穴は中央の径20~40cm程、柱間1.8~2.2mの4穴が対応する。竪は持たない。

SC27出土遺物 (fig. 56)

須恵器 81・82は环身で、81はⅢB期で復元受部径14.4cmを測る。胎土は粗い石英粒を含み、焼成良好、暗青灰色を呈す。82はⅢB期で復元受部径14.2cmを測る。胎土は細かな石英粒を含み、右回転ナデを施す。焼成良好、青灰色呈す。

土器 83は壺で復元口徑15.2cmを測る。調整不明。胎土は粗い石英粒を多く含み、暗褐色を呈す。

時期はⅢB期である。



SC52

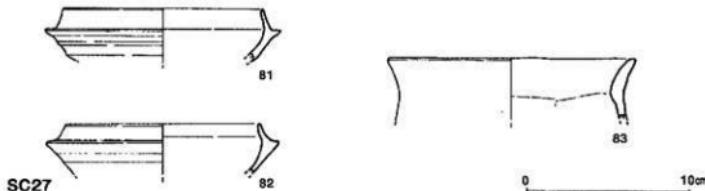


Fig.56 SC52・27出土遺物実測図 (1/3)

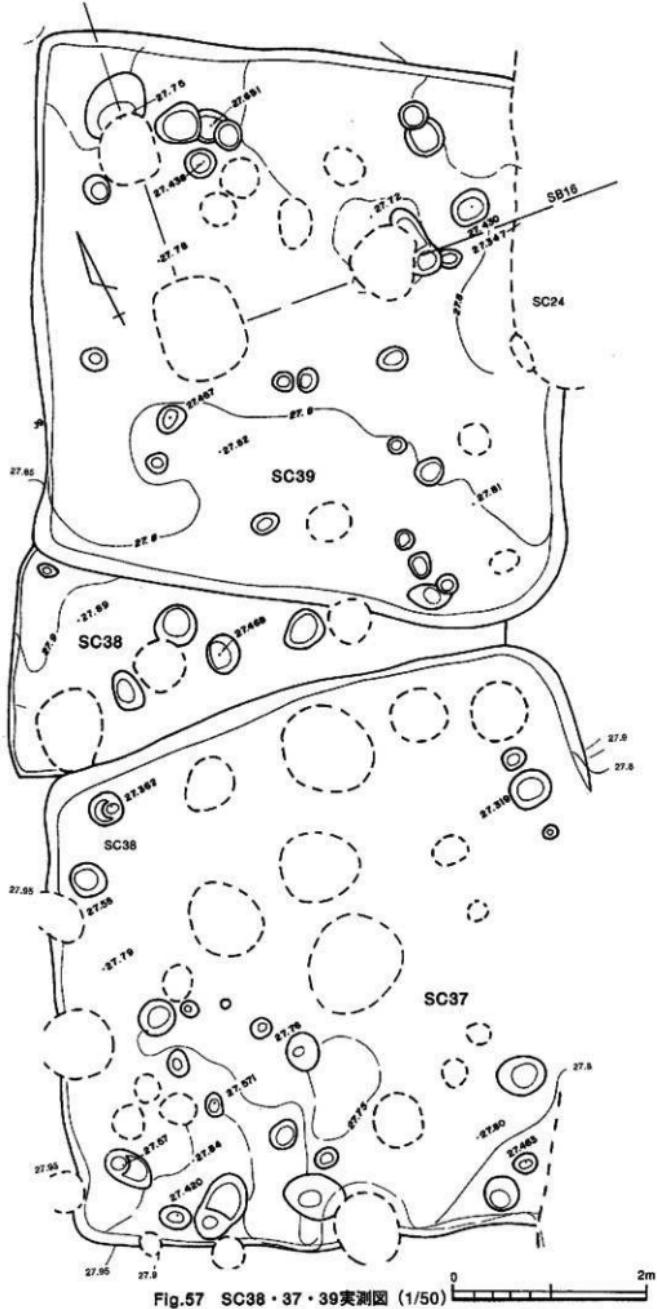


Fig.57 SC38・37・39実測図 (1/50)

(20) SC38 (fig. 57)

SC38は11軒切り合いの西側で最下位に位置し、SC37・39に切られる。平面プランは長方形で長軸方向はN-59°-Wに、規模は $5.1\text{m} \times 2.4\text{m} + \alpha$ で、深さは5cm程を測る。切り合いが著しく主柱穴・竈の有無は不明である。

SC38出土遺物 (fig. 58 Pl. 31)

須恵器 84はⅢA期の壺身で、復元受部径14.6。器高4.8cmを測る。外面体部1/2以下には左回転ケズリを施す。内底には同心円状具痕がある。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成良好、暗灰色を呈す。

土師器 85は高壺の壺部小片で、外面はナナメハケ後これをナデ消す。胎土は細かな粗い石英粒と赤色粒を含み、橙色を呈す。

時期はⅢA期である。

(21) SC37 (fig. 57)

SC37は11軒切り合いの最西端に位置し、SC38を切る。平面プランは方形で長軸方向はN-18°-E

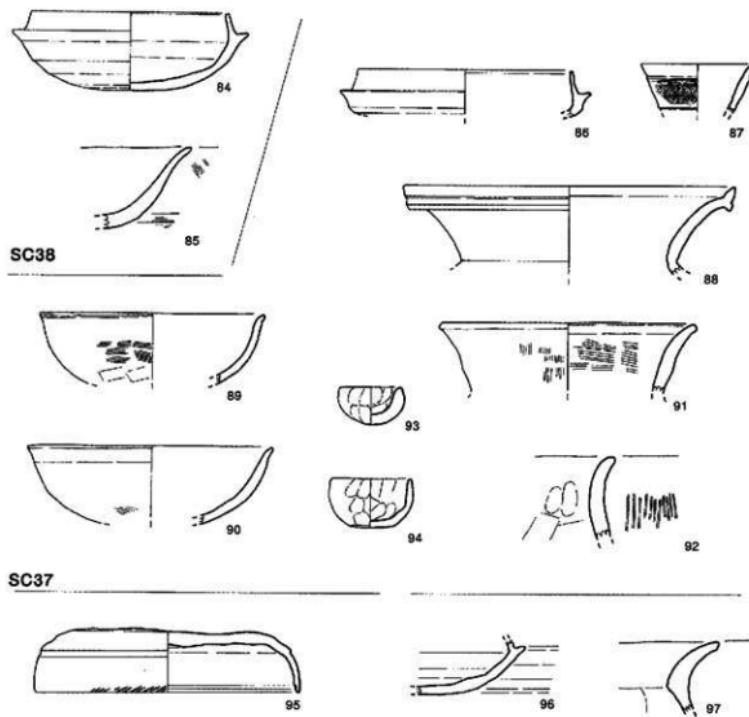


Fig.58 SC38・37・39出土遺物実測図 (1/3)

に、規模は $5.9\text{m} \times 5.6\text{m}$ で、深さは15cm程・床面積31.9m²を測る。柱穴は壁近くに径20~50cm程のものが十数個有るが定型化された位置にはない。竈は持たない。

SC37出土遺物 (fig. 58 Pl. 31)

須恵器 86はⅢA期の坏身で、復元受部径15.4cm。外面体部の大部分に回転ケズリを施し、口唇内面には沈線を施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成良好、灰色を呈す。87は壺で復元口径7cm。外面に低い三角突帯を2条、この間に櫛描波状文を施す。胎上は細かな石英粒を少量含み、焼成良好、自然釉が掛かる。88は壺で、上下に突出して肥厚した平坦口縁に沈線を施す。復元口径20.4cm。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成良好、外面は黒色内面は灰が被る。

土師器 89・90は壺で、89は復元口径13.8cm。外面に粗いヨコハケが残り、底面はケズリを施す。

胎土は細かな石英粒を含み、外底が焼ける。90は復元口径15cm。外面にハケメが若干残る。他はヨコナデ。胎土は粗い石英粒と赤色粒を含み、橙色を呈す。91・92は壺口縁部で91は復元口径15.4cm。外面にタテ内面にヨコハケが残る。胎土は粗い石英粒を含み淡褐色、外面が焼ける。92は口縁小片で外面に粗いタテハケ内面頸部以下にケズリを施す。胎上は粗い石英粒と赤色粒を含み淡褐色を呈す。93・94は壺のミニチュアで、93は口徑3.7器高2.3cm。指頭とナデで整形。胎土は粗い石英粒と赤色粒を含み橙色を呈す。94は口徑4.8器高3cm。指頭と内面はヘラナデで整形。胎土は細かい石英粒を含み橙色を呈す。

時期はⅢA期以降である。

(22) SC39 (fig. 57)

SC39はSC37北側に位置し、SC38を切り、SC24・建物SB16に切られる。平面プランは方形で長軸方向はN-30°-Eに、規模は $5.7 \times 5.4\text{m}$ で、深さは5cm程・床面積約30.3m²を測る。主柱穴は中央寄りの径30cm程の柱間2.3~2.6mの4穴が対応する。竈は持たない。

SC39出土遺物 (fig. 58)

須恵器 95はⅢA期の坏壺で、復元口径16.2器高3.9cm。外面体部境に沈線を天井部に回転ケズリ、口唇をカキメ板で調整し、「口唇内面には沈線を施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成良好、灰色を呈す。96はⅢB期の坏身の小片で受部径14cm程。外面体部境に沈線を以下に回転ケズリを施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成良好、灰色を呈す。

土師器 97は壺口縁小片で内面頸部以下にケズリを他はナデを施す。胎土は細かい石英粒を多く含み浅黄橙色を呈す。

時期はⅢB期である。

(23) SC33 (fig. 59)

SC33は11軒切り合いの北西隣に位置する。SC34・建物SB19に切られる。平面プランは方形で長軸方向はN-22°-Wに、規模は $5.4 \times 4.9\text{m}$ で、深さは5cm程・床面積約25.2m²を測る。柱穴は径20~40cm程のものが十数個有るが定型化された位置にはない。竈は持たない。

SC33出土遺物 (fig. 61)

須恵器 98はⅢB~Ⅳ期の坏身小片で、蓋受けが短い。粗い石英粒を少量含み、焼成良好、灰色を呈す。

他に須恵器・土師器の小片があるが図化に堪えない。時期はⅢB期か。

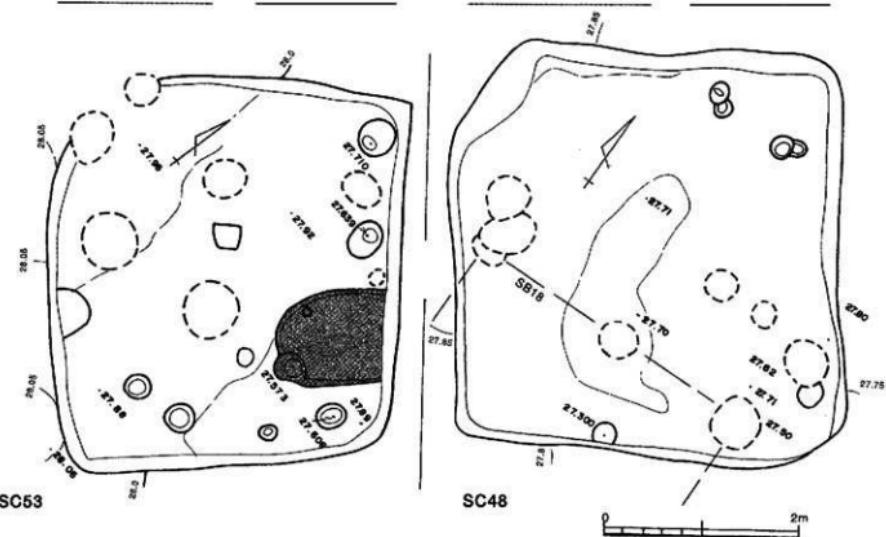
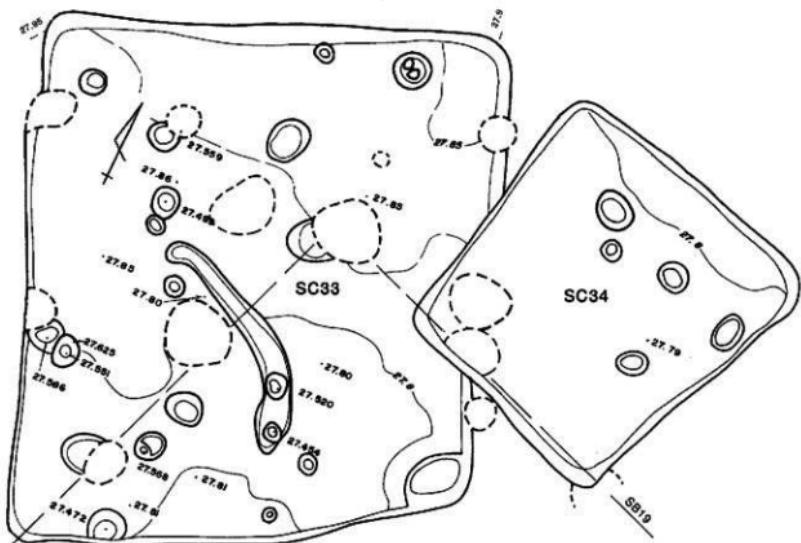


Fig.59 SC33・34・53・48実測図 (1/50)

(24) SC34 (fig. 59)

SC34はSC33の東に位置し、これを切り建物SB19に切られる。小型の住居で平面プランは方形、長軸方向はN-13°-Eに、規模は3.2×3.1mで、深さは5cm程・床面積7.0m²を測る。柱穴は北寄りに径20~40cm程のものが5個有るが定型化された位置にはない。竈は持たない。

SC34から出土遺物は無く、SC33を切ることから時期はⅣ期以降と思われる。

(25) SC53 (fig. 59)

SC53はSC33の西に単独で位置する。小型の住居で平面プランは方形、長軸方向はN-37°-Eに、規模は4.1×3.6mで、深さは15cm程・床面積13.6m²を測る。柱穴は東半部に径20~40cm程のものが数個有るが定型化された位置にはない。竈は北東壁中央に1.1×1mに焼土が広がる。

SC53出土遺物 (fig. 61 Pl.31)

土師器 100・101は壺で、100は復元口径12・器高5.3cm。内外面に粗いヨコケズリ縁いヨコナデを施す。胎土は粗い石英粒を含み、橙色を呈す。101はほぼ完形で口径12.5・器高5.1cm。外底部は手持ちヘラケズリで、他はヨコナデ。胎土は粗い石英粒・赤色粒を含み、橙色を呈する。

時期は方位がSC39に近く、ⅢB期か。

(26) SC48 (fig. 59)

SC48はSC33・34の北東に隣接して位置し、古代の建物SB18に切られる。小型の住居で平面プランは方形、長軸方向はN-34°-Wに、規模は4.1×4.0mで、深さは15cm程・床面積15.7m²を測る。柱穴は南北に径20cm程のものが数個有るが定型化された位置にはない。竈は持たない。

SC48出土遺物 (fig. 61 Pl.31)

須恵器 99はⅢB期の壺蓋で、復元口径14.9器高4.8cm。外面体部1/2以上に回転ケズリ、口唇端に沈線を施す。胎土は粗い石英粒を含み、焼成良好、暗灰色を呈す。

時期はⅢB期である。

(27) SC22 (fig. 60)

SC22はSC48の東に隣接して単独で位置する。小型の住居で平面プランは方形、長軸方向はN-3°-Eに、規模は4.1×3.8mで、深さは5cm程・床面積13.3m²を測る。柱穴は径20~40cm程のものが十数個有るが定型化された位置にはない。竈は持たない。

SC22出土遺物 (fig. 61 Pl.31)

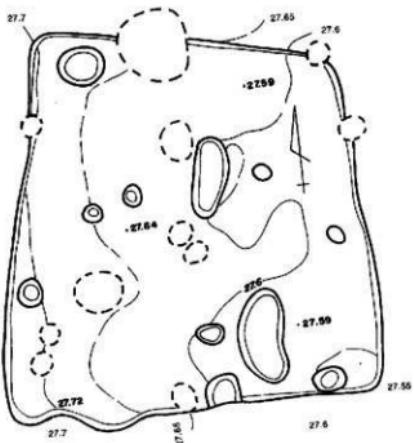
須恵器 102は壺身立ち上がり小片で、胎土は細かな石英粒を含み、焼成良好、暗灰色を呈す。

土師器 103は壺口縁小片で内外面にハケメ後、継ぐナデる。胎土は粗い石英粒・赤色粒を少量含み、淡灰褐色を呈す。104は壺で復元口径15.4・器高4.6cm。外面下位にケズリ様の粗いハケを施す。胎土は細かい石英粒を少量含み、淡黄褐色を呈す。

時期はⅢB期か。

(28) SC24 (fig. 60)

SC24は1軒切り合いの中央で最上位に位置し、SC39・40を切り、古代の建物SB16に切られる。平面プランは方形、長軸方向はN-21°-Eに、規模は5×4.8mで、深さは10cm程・床面積21.4m²を測る。柱穴は径20~30cm程のものが十数個有るが定型化された位置にはない。北西隅に1.7×1.5m程の室内



SC22

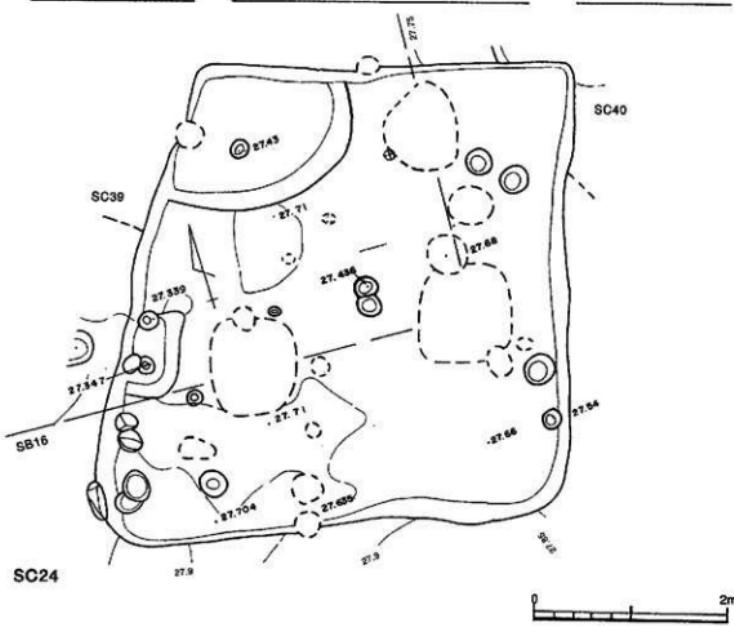


Fig.60 SC22・24実測図 (1/50)



98

SC33



99



100

SC48



102



103



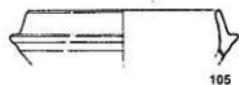
101

SC53

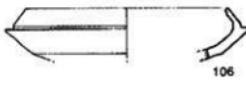


104

SC22



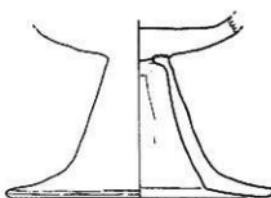
105



106



107



108



110



111

SC24



Fig.61 SC33・53・48・22・24出土遺物実測図(1/3,1/2)

土壤を持つ。竈は持たない。

SC24出土遺物 (fig. 61 PL31)

須恵器 105・106はⅢA期の坏身で、105は復元受部径14.0cm。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成良好、青灰色を呈す。106は復元受部径15.0cm。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成良好、青灰色を呈す。107は壺頸部小片で外面に木口直交叩き・内面に同心円当具痕が残る。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成良好灰色を呈する。

土師器 108は壺で復元口径14.6・器高6.3cm。外面下半はケズリを施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、橙色を呈す。109は高壺で壺部上半を欠く。脚径16.6cm。調整は不明。胎土は細かな石英粒を含み、赤褐色を呈する。110は肩の張る壺で復元口径19.6cm。内面頸部以下にケズリを施す。他の調整は不明。胎土は粗い石英粒を含み黄橙色を呈す。

鉄滓 111は小剣にした鉄冶滓で、下面に粘土が薄く着着し、上面は錫が若干浮き細かな気泡が開く。

時期はⅢA期である。

(29) SC18 (fig. 62)

SC18は11軒切り合いの北東に隣接する、5軒切り合いの北端で最下位に位置する。SC17・18・溝S D14に切られる。平面プランは方形、長軸方向はN-20°-Eに、規模は $4.9 \times 4.7\text{m} + \alpha$ で、深さは20cm程を測る。柱穴は径40cm程のものが斜め位置に2穴有る。東壁に幅60cm程のベッド状遺構を持つ。竈の有無は切り合いのため不明である。

SC18出土遺物 (fig. 63)

土師器 112は壺口縁で、復元口径21.0cm。内外面はヨコナデ、内面頸部以下にケズリを施し、稜を成す。器壁は厚い。胎土は粗い石英粒を多く含み、橙色を呈し、外側が煤ける。

須恵器の出土は無く、ⅢA期のSC14に切られており、これ以前である。

(30) SC17 (fig. 62)

SC17はSC18の南でこれを切り、SC15・14に切られる。平面プランは方形、長軸方向はN-2°-Wに、規模は $4.0 \times 3.3\text{m} + \alpha$ で、深さは5cm程を測る。主柱穴は不明。竈は北壁中央付近に壁から若干離れて、径60cmほど焼土が広がる。

SC17からは遺物の出土は無く、ⅢA期のSC14に切られており、これ以前である。

(31) SC14 (fig. 62)

SC14は5軒切り合いの南端で最上位に位置する。SC17の南でこれを切り、溝SD15・14に切られる。平面プランは方形、長軸方向はN-2°-Wに、規模は $6.2 \times 5.9\text{m}$ で深さは20cm程を、床面積33.3m²を測る。主柱穴は径40~60cm程のものが、3.1~3.5mの柱間で4穴有る。切り合があり、一度建て替えを行っている。竈の有無は不明。

SC14出土遺物 (fig. 63 PL32)

須恵器 113はⅢA期の壺蓋で復元口径15.0器高3.0cm、胎土は石英粒を少量含み、焼成良好。内面に当具痕が残る。青灰色を呈す。114・115は壺身で114はⅢA期で復元受部径15.4cm。器壁は薄く胎土は石英粒を少量含み、焼成はあまり。灰白色を呈す。115はⅢB~Ⅳ期で復元受部径13.0cm。胎土は石英粒を少量含み、焼成はあまり。灰白色を呈す。116はⅡ~ⅢA期の小型高壺脚部で復元径7.4cm。三

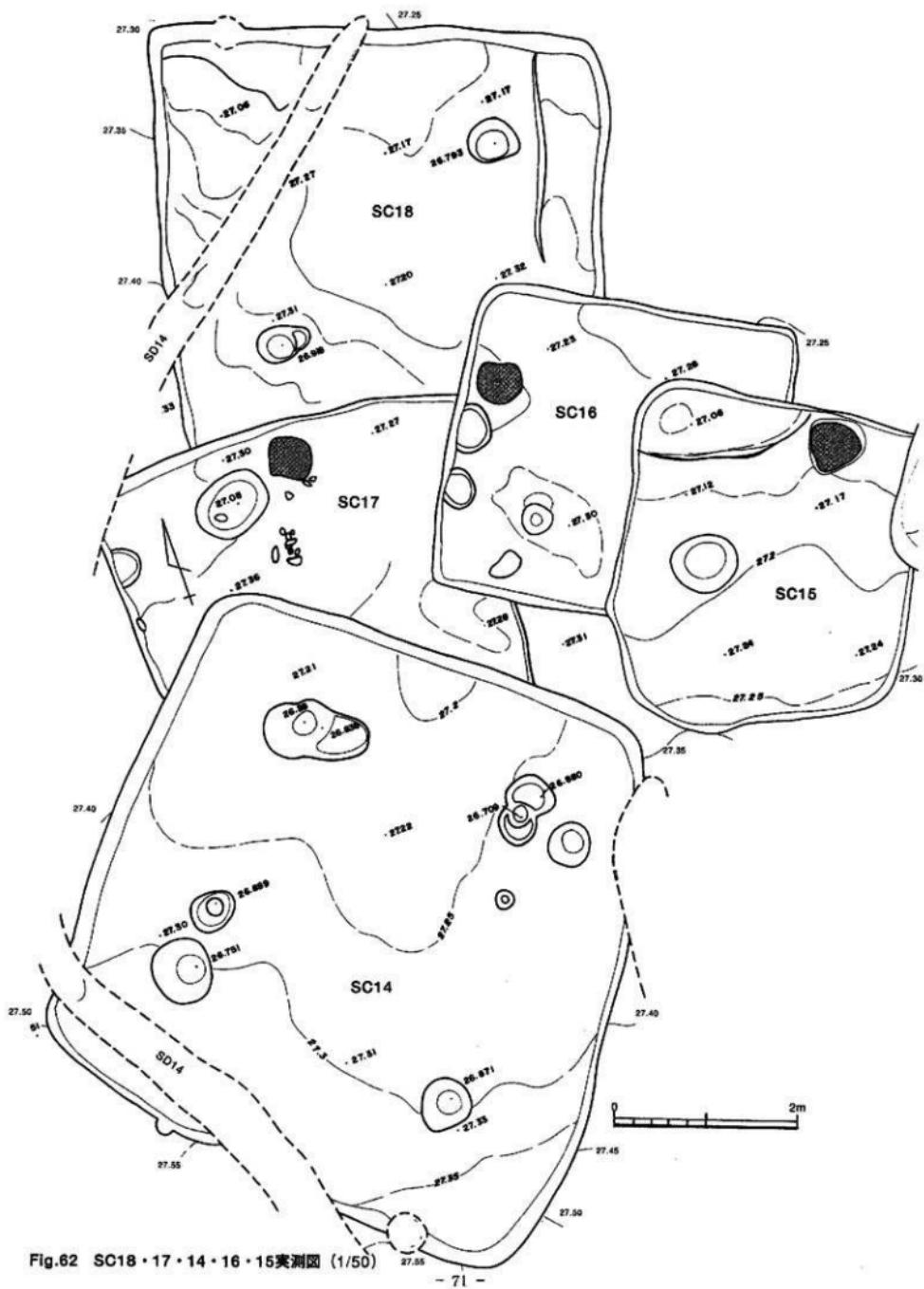


Fig.62 SC18・17・14・16・15実測図 (1/50)

角透かしを三方に、裾部は3段に整形し以上にカキメを施す。胎土は精良で焼成良好、青灰色を呈する。117は器台の脚部で復元口径17.6cm。外面中央に低い突帯上下に拗接波状文を施す。胎土は精良、焼成は甘く、灰白色を呈する。

土師器 118は壺で復元口径16.6cm。調整は不明。胎土は粗い石英粒が多く含み、にぶい橙色を呈す。

鉄器 119は刀子と思われ、残存長6.9・刃幅1.2・中茎幅0.6cmを測る。

鉄滓 120は小割にした鍛冶滓で、下面に粘土が接着し、上面は細かな気泡が開く。重量168.7g.

時期はⅢA期と思われる。

(32) SC16 (fig. 62)

SC16は5軒切り合いの中程に位置し、SC17・18を切り、SC15に切られる。小型の住居で平面プランは方形、長軸方向はN-60°-Wに、規模は3.6×3.4mで深さは10cm程度、床面積約11.8m²を測る。主柱穴は径40cm程度のものが西側に3穴有るが不明確。窓は西壁北寄りに壁から若干離れて、径60cmほど焼土が広がる。

遺物は須恵器小片1点、土師器小片20数片で図化に堪えない。ⅢA期のSC15に切られており、時期はこれ以前である。

(33) SC15 (fig. 62)

SC15は5軒切り合いの中程で最上位に位置し、SC16を切り、土壙SK18に切られる。小型の住居で平面プランは方形、長軸方向はN-30°-Wに、規模は3.7×3.3mで深さは5cm程度、床面積約9.7m²を測る。柱穴は径60cm程度のものが西側に1穴有る。窓は北壁東寄りに壁から若干離れて、径60cmほど焼土が広がる。

SC15出土遺物 (fig. 63 Pl. 32)

須恵器 121はⅢA期の壺蓋で、口縁部を欠くが復元口径は15cmを超える。外面体部の1/2以上に右回転ケズリを施し、天井中央に木目直交の平行叩き痕が残る。胎土は粗い石英粒が多く含み、焼成良好、暗青灰色を呈する。122・123は壺身で、122はⅢA期で、復元受部径15.0cmを測る。胎土は粗い石英粒が多く含み、焼成良好、青灰色を呈する。123はIB期で、復元受部径12.8・器高4.8cmを測る。外面体部の1/2に右回転ケズリを施し胎土は石英粒を含み、焼成はややあまい。明灰色を呈する。124はIB期の小型高杯脚部で復元径11.0cm。裾部に沈線を2条、円形透かし孔を三方に施す。胎土は精良で焼成良好、灰色を呈する。

土師器 125～127壺で、125は復元口径23.0cmを測る。内外面にヨコナデを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み黄褐色を呈する。126は復元口径18.2cmを測る。器面が荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒を含み暗褐色を呈する。127は復元口径14.2cmを測る。器面が荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒を多く含み灰褐色を呈す。

時期はⅢA期である。

(34) SC80 (fig. 64)

SC80はA群中央寄り北側に、SC22・48に隣接して単独で位置する。大型の住居で平面プランは方形、長軸方向はN-72°-Wに、規模は8.4×7.3m+αで、前半で北側の一部を欠損する。深さは10cm程度、床面積約61m²を測る。柱穴は南北の壁寄りに径20～50cm程度のものが少數穴有るが、定型化された位置には無い。窓は持たない。

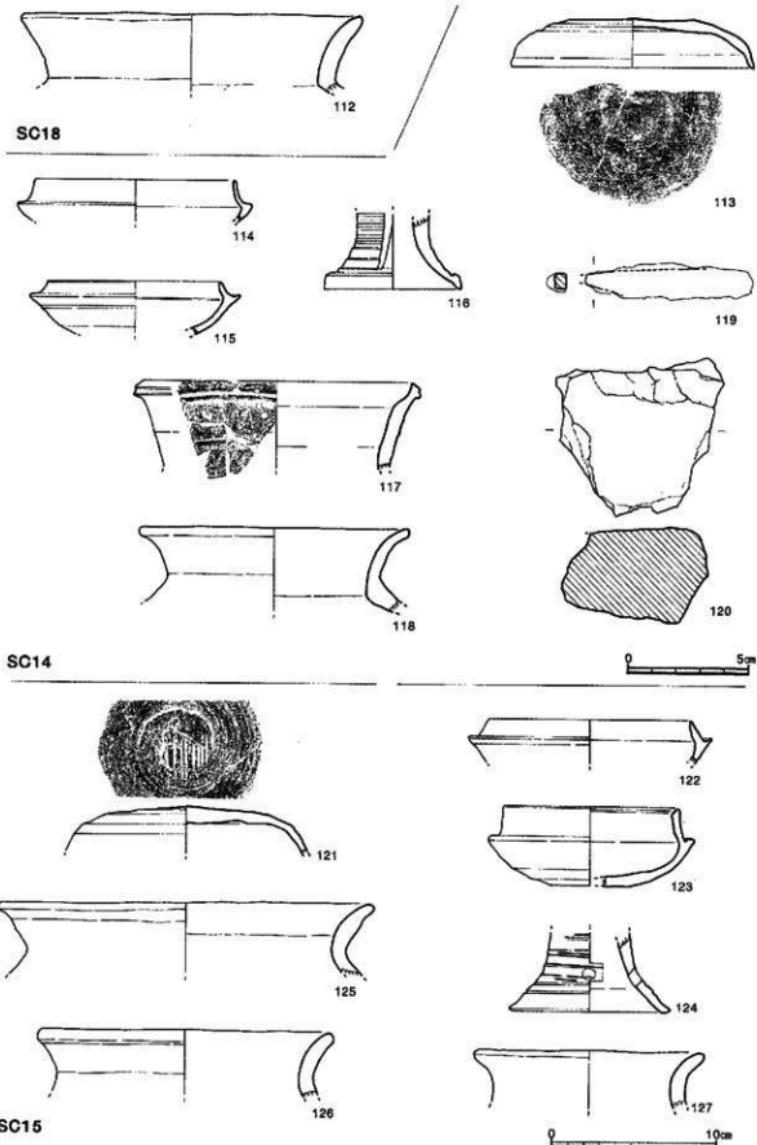


Fig.63 SC18・14・15出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SC80出土遺物 (fig. 65 Pl. 32)

須恵器 128・129はⅢA期の坏身で、128は口縁全周の1/4が残存し、復元受部径15.2・器高5.2cmを測る。外面体部の1/2に右回転ケズリを施し、胎土は粗い石英粒を含み、焼成は良好である。外面が灰を被り灰色を呈する。129は口縁全周の1/8が残存し、復元受部径13.8・器高4.4cmを測る。外面体部の2/3以下に右回転ケズリを施し、内面には芯材を用いた同心円当具痕が3重になって残る。胎土は粗い石英粒を少量含み精良である。焼成は良好で、明灰色を呈する。130は壺胴部片で、外面には木口直交平行叩き後ヨコカキメを施す。内面には平行弧の当具痕が残る。胎土は粗い石英粒を含み、焼成は

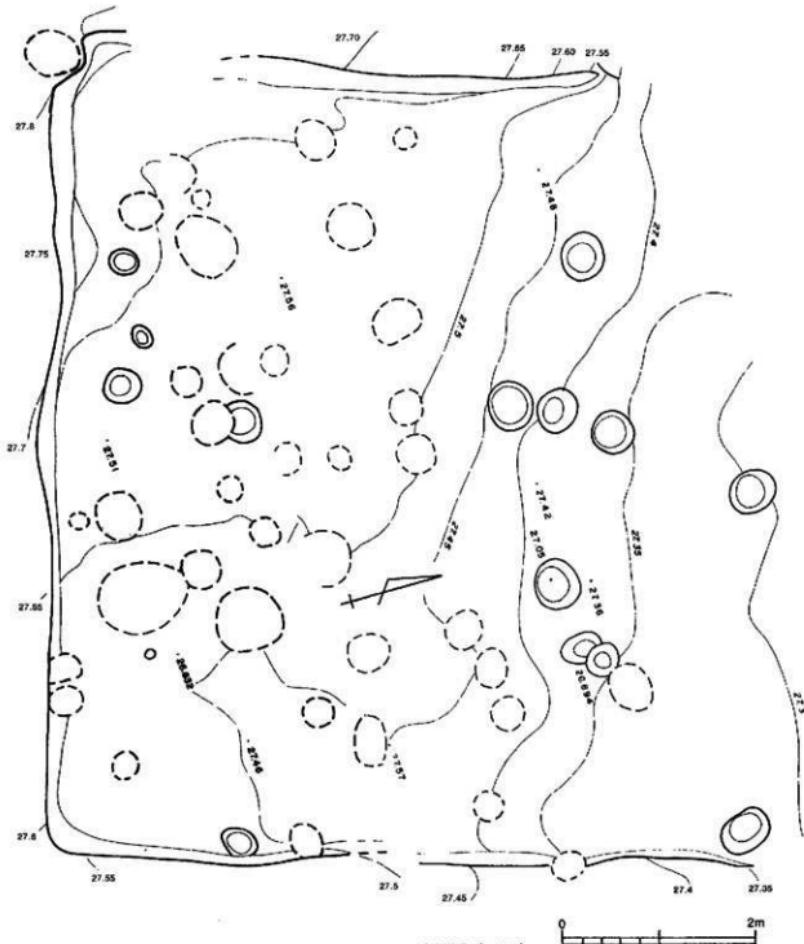


Fig.64 SC80実測図 (1/50)

還元焼成が不十分で、淡赤灰色を呈する。131は把手付土器の口縁部で口縁全周の1/8が残存し、復元口径13.0cmを測る。續く張る胴部に低い三角突帯を2条施す。把手はこの間に施すことが多い。薄い器壁で、胎土・焼成ともに良好である。

土師器 132～135は壺で、132は頸部の締まる器形で口縁全周の1/3が残存、復元口径18.8cmを測る。口唇端に凹線を施し、外面は丁寧なヨコナデ調整で、器壁は薄く、口縁部は須恵器を模している。胴部外面にはタテハケが残り、内面頸部下は粗いヨコケズリを施す。胎土は粗い石英粒を含み、にぶい橙色を呈する。133は口縁全周の1/2弱が残存し、復元口径15.6cmを測る。外面調整はヨコナデ後緩いケンマで、丁寧な造作である。胎土は粗い石英粒を含み、暗灰褐色を呈する。134は口縁全周の1/2弱が残存し、復元口径12.2cmを測る。小型の壺で、最大径は胴下位にあり、径17cmで部分的に稜を成す。外面はタテイタナデ後緩いナデ・ケンマ、内面は頸部以下にケズリを施し、器壁は比較的の薄い。胎土は粗い石英粒を含み、にぶい橙色を呈する。外面が焼ける。135は口縁全周の1/8が残存、復元口径21.0cmを測る。口縁は緩く内湾して外反し、胴部外面は粗いタテハケ、内面はケズリを施す。胎土は粗い石英粒を若干含み精良。灰褐色を呈す。136は軟質系の緩い平底を呈する壺で、全周の1/2弱が残存し、径7cmを測る。底部際は屈曲して稜を成す。外底にハケメ、内面はケズリ後ナデを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含む。外面は火熱でにぶい赤褐色を呈し、器壁が危れ、煤ける。内面はにぶい橙色を呈する。137・140は壺で、137は小型の壺ではほぼ完形。口径6.4器高5.2cmを測る。外面にヨコナデ後、外底にヘラケズリを施す。胎土は石英粒を少量含み、淡赤橙色を呈する。140は緩い平底の大振りの壺で、口縁全周の1/2弱が残存し、復元口径14.6器高5.5cmを測る。胎土は石英粒を少量含み、赤橙色を呈する。138・139は小型の窓脚部で、139は径11.8cmを測る。胎土はともに石英粒を少量含み、赤橙色を呈する。

土製品 141～143は土師器胴部片を用いた土器片円盤で、主に外面からの打製で円形に整形する。141は長径5厚1.1cm重量24gを測る。142は長径5.6厚0.7cm重量18gを測る。143は長径5.6厚1.2cm重量47gを測る。何れも断面は摩滅する。142は特に若しい。

石器 144は凝灰質安山岩ホルンフェルス製の仕上げ砥石で、節理に沿って破損し、両端面が砥面となっている。高さ8.7cmを測る。

時期はⅢA期である。

(35) SC19 (fig. 66 Pl. 17)

SC19はA群の北側に分布する4軒の大型住居群の、南端に単独で位置する。平面プランは方形で、長軸方向は真北にとる。規模は3.8×3.4mで、深さは35cm程を測り、比較的の残りはよい。床面積は12m²を測る。柱穴は南北の壁寄りに径15～40cm程のものが7穴有るが、定型化された位置には無い。深さは15cm程で浅い。北西隅に径80・深さ10cm程の浅い2段掘りの屋内土壤を持つ。竈は北東隅寄り65×45cmほどの範囲に焼土が広がる。南壁に幅20cm程の壁溝を持つ。床から10cm程浮いて長さ50cm前後の炭化材が3本出土しているが、出土する遺物に完形品は無く、住居廃絶後の廃物処理に使われた可能性が高い。

SC19出土遺物 (fig. 67 Pl. 33)

須恵器 145はⅣ期の壺身で、復元受部径13.0・器高2.6cm。外面体部の1/2にカキメを施し、内面に放射状組織痕が見える同心円当具痕が残る。胎土・焼成ともに良好。暗灰色を呈する。

土師器 146～149。は壺で、146は口縁が緩く外反する壺で、口径14.0器高約6.5cmを測る。外面にヨコナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい橙色を呈す。147は深手の壺で、

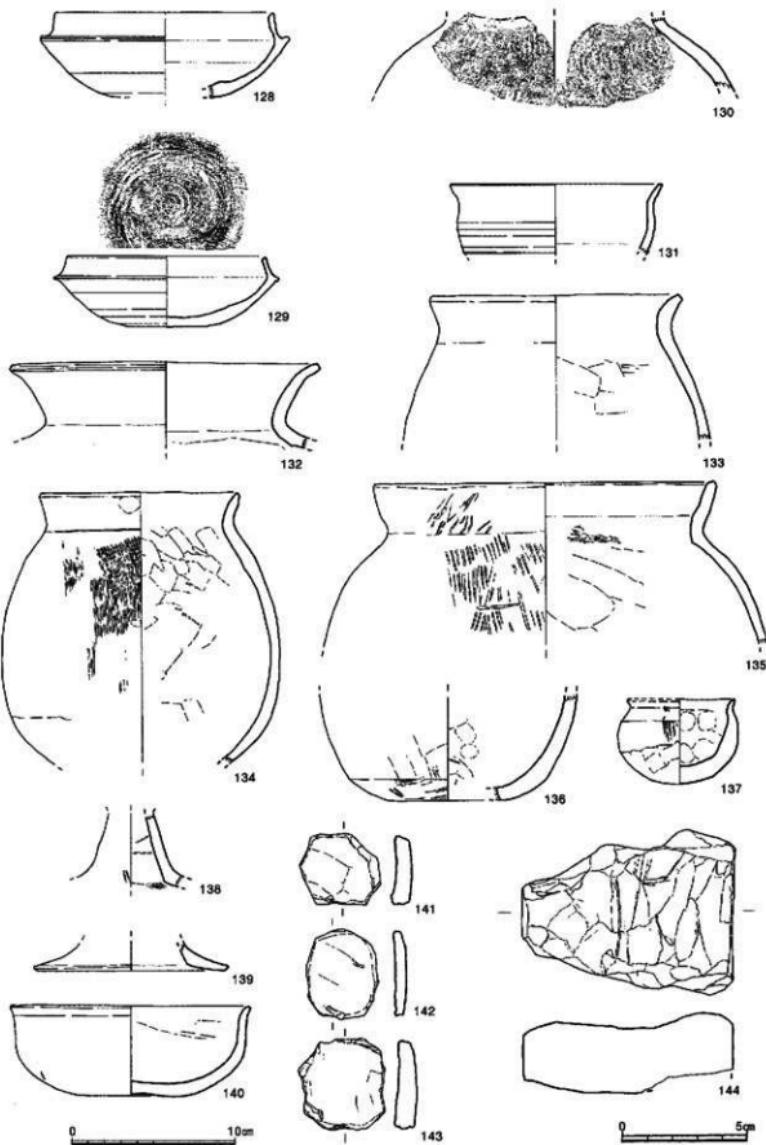


Fig.65 SC 80出土遺物実測図 (1/3・1/2)

口径13.0器高約6.7cm。外面は極めて粗いタテハケ後、底部に手持ちケズリを施し、さらに境目をヨコハケで整形する。内面はケズリ後緩いヨコナデ・ケンマを施す。148は大振りの坏で、口径16.6・器高約5.7cm。外面は粗いタテハケ後内外面にヨコナデ・ケンマを施す。胎土は粗い石英粒を若干含み、橙色を呈す。149は平底の小振りの坏で、口径10.0・器高約4.7cmを測る。内外面はケズリ後緩いヨコナデ。胎土は粗い石英粒を含み、橙色を呈する。150は高坏で復元口径15.6cm。外面はタテハケ後内外面にヨコナデ・ケンマを施す。胎土は粗い石英粒を含み、橙色を呈す。

土製品 151は半島系の算盤玉形の結錆車で、径4.1・高1.8・軸孔径0.8cm・重量40gを測る。全面をナデ調整した後側面をケンマする。胎土は砂粒を含まず精良。焼成は須恵質で、暗灰色を呈す。

時期はⅣ期である。

(36) SC20 (fig. 66 Pl. 18)

SC20は4軒の小型住居群の中央、SC19の北側に単独で位置する。平面プランは方形で、長軸方向はN-6°-Wにとる。規模は3.3×3.1mで、深さは40cm程を測り、残りはよい。床面積は10.1m²を測る。柱穴は北壁寄りに径30cm程のものが3穴、南西隅に1穴有るが、定型化された位置には無い。深さは15cm程で浅い。竪は北壁中央に接して95×95cmほどの範囲に焼土が広がり、上面に坏159・162がある。竪を除く四壁に幅25・深15cm程の壁溝が巡る。遺物は坏を中心に完形品が多く、壁周辺に散布しており、北西側では焼土が遺物を覆っており焼失家屋の可能性がある。

SC20出土遺物 (fig. 68・69 Pl. 33)

須恵器 152はⅡ～ⅢA期の坏蓋小片で、口唇内面が段を成す。胎土・焼成ともに良好。青灰色を呈する。他には内面ナデ消しの甕や壺小片が4片有るのみである。

土師器 153は完形の甕で、口径9.9・器高14.9cm。外面胴上半には縱方向の平行タタキ後ヨコナデ、下半には横方向の粗い平行タタキを施し、内面には丁寧なナデを施す。胴部の器壁が厚く最大1.8cmを測る。胎土は石英粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈す。外底は火然のため赤化し、以上に炭化物が付着しており、煮沸に用いる。154～164は坏で、154は復元口径14.0器高4.8cm。外面は口縁にヨコナデ後以下に手持ちヘラケズリ、内面はヨコナデを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、にぶい赤褐色を呈す。155は復元口径13.5器高5.8cm。内外面にヨコハケ後II縁外面はヨコナデ、内面はヨコナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、にぶい橙色を呈す。156はほぼ完形で、口径10.0器高6.2cm。口縁外面はヨコナデ、以下をヘラケズリ後ナデ、内面はヨコナデ後ケンマを施す。器壁は厚い。胎土は粗い石英粒・赤色粒を多く含み、灰黄褐色を呈す。157は完形で、口径14.0器高5.7cm。口縁外面はヨコナデ、以下をヘラケズリ後緩いナデ、内面はヨコナデ後ケンマを施し、底面にヘラ当て痕が残る。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、褐灰色を呈す。158は復元口径12.8器高6.6cm。内外面にヨコナデ後ケンマを施す。胎土は石英粒・赤色粒を少量含み精良。赤褐色を呈す。159は復元口径14.6器高5.6cm。調整は器壁が荒れ不明。胎土は石英粒・赤色粒を含み、赤褐色を呈す。160は復元口径12.6器高約6cm。内外面にヨコナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み精良。にぶい赤褐色を呈す。161はほぼ完形で、口径12.5器高5.6cm。調整は器壁が荒れ不明。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、灰黄褐色を呈す。162は口縁全周の1/3が残存し、復元口径14.6器高5.6cm。調整は器壁が荒れ不明。胎土は石英粒を含み、赤褐色を呈す。163はほぼ完形で、口径16.4器高5.6cm。内外面にヨコナデ後ケンマを施す丁寧な造作で、胎土は石英粒・赤色粒を若干含み精良。赤褐色を呈す。164は脚の欠落した高坏の坏部で、破断面を面取し坏として利用する。II縁全周の2/3が残存し、II径16.0器高5.6cm。調整は器壁が荒れ不明。胎土は粗い石英粒を多く含み、にぶい赤褐色を呈す。165は口縁全周の1/2強

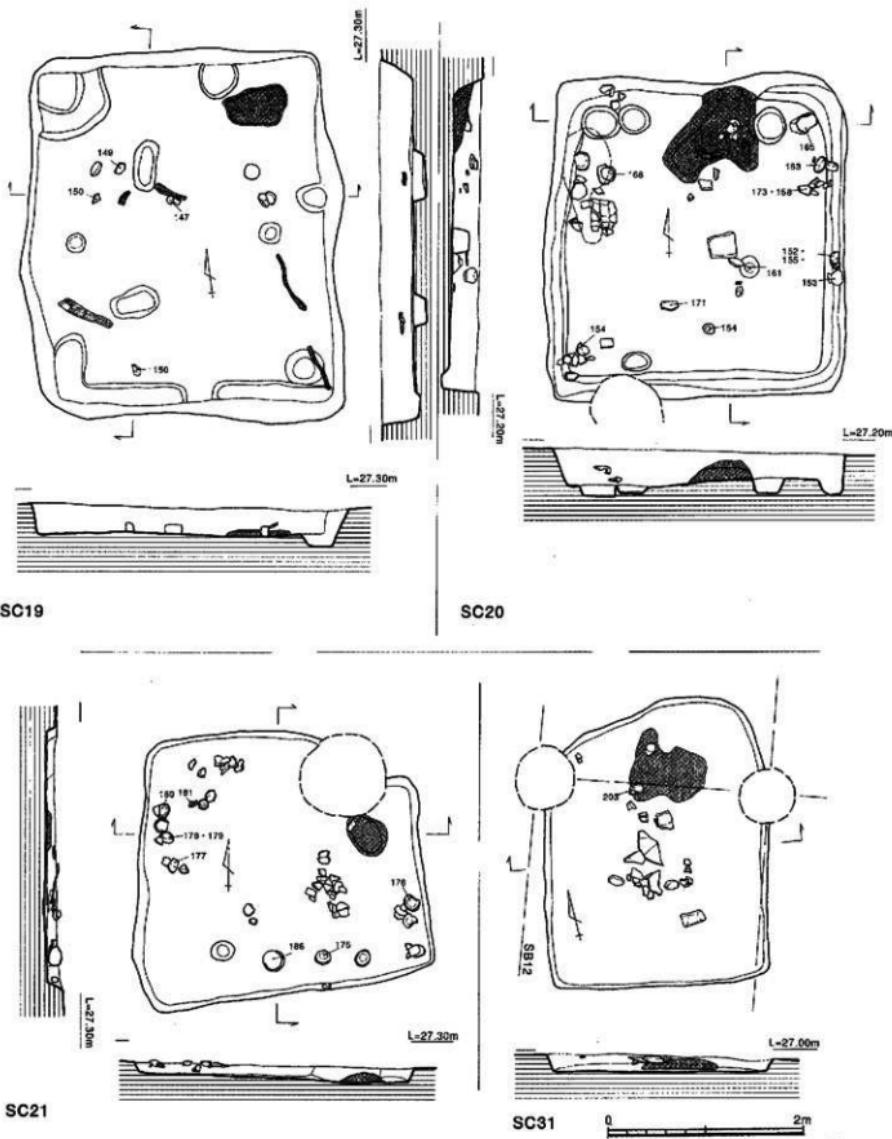


Fig.66 SC19・20・21・31実測図 (1/50)

残存する緩い平底の鉢で、口径16.5器高9.5cm。内外面にヨコナデ後ケンマを施す。胎土は細かな石英粒を少量含み精良。にぶい赤褐色を呈す。166はミニチュアの坏で小さな平底を持つ。口径約5器高2.8cm。手捏ねで整形後ナデを施す。胎土は石英粒を少量含み、にぶい赤褐色を呈す。167は高坏の坏部片で、復元口徑17残存高6.2cm。調整は器壁が荒れ不明。器壁は厚く、最大1.2cmを測る。胎土は粗い石英粒を少量含み、にぶい橙色を呈す。168～173 (fig. 69) は壺。168・169は頸部の縮まる器形で、168は復元口径17cm。調整は粗く、口縁内外はヨコナデ脇外面は横方向の平行タタキ後ヨコナデ、内面頸部以下にケズリを施す。口頸部の器壁は厚く、最大1.3cmを測る。胎土は粗い石英粒を多量に含み、灰黄褐色を呈す。169は復元口径15.4cm。調整は丁寧で、口縁内外はヨコナデ脇外面はヨコナデ後ケンマ、内面頸部以下にケズリを施す。口頸部まで器壁は薄い。胎土は粗い石英粒を多く含み、赤褐色を呈す。170～172は口頸部の短い開く器形で、170は復元口徑14.6cm。外面は粗いタテハケ後緩いヨコナデ、内面は頸部以下にケズリを施し緩くナデる。胎土は粗い石英粒を少量含み精良。明褐色を呈す。171は復元口徑19cm。外面口縁はヨコナデ脇部はヘラナデ、内面はヨコイタナデ後緩いヨコナデ脇部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒を多く含む。黄灰褐色を呈す。172は復元口径12.6cm。外面はタテハケ後口縁部をヨコナデ、内面は口縁部にヨコハケ後緩いヨコナデ脇部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、にぶい赤褐色を呈す。173はミニチュア上器で復元口径6.6cmを測る。内外面に丁寧なナデを施す。胎土は精良で赤褐色を呈す。

鐵津 (pl. 33) 546は鍛冶溝の破片で、上面はなめらかで下面に粘土が熔着し、破断面は被熱で融解している。重量15g。

時期はⅡ期か。

(37) SC21 (fig. 66 Pl. 19)

SC21はSC20の北側に単独で位置する。平面プランは方形で、長軸方向はN-83°-Eにとる。規模は3.1×2.8mで、深さは10cm程、床面積は7.8m²を測る。柱穴は南西隅に径25cm程のものが1穴有るが、定型化された位置には無い。深さは15cm程で浅い。窓は北東の壁近くに50×35cmほどの範囲に焼土が広がる。遺物は床から5cmほど浮いて、坏を中心に破損品が多く検出される。

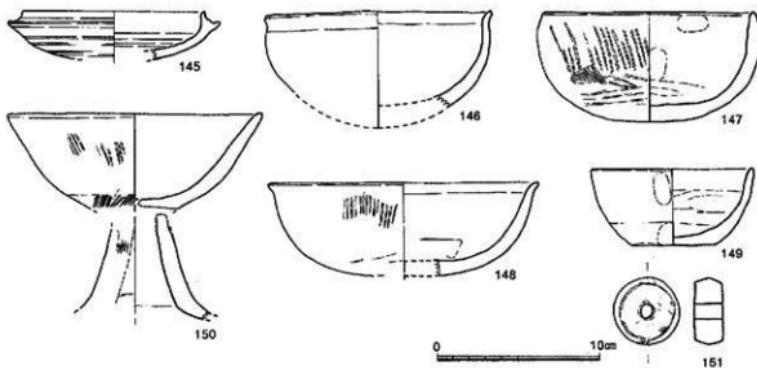


Fig. 67 SC 19出土遺物実測図 (1/3)

SC21出土遺物 (fig. 70・71 Pl. 34・35)

須恵器 174は壺身で、口唇を欠くが復元部径12.0cmを測る。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好。暗灰色を呈する。外面受部下1.5cmまで回転ケズリが施されており、Ⅱ期と思われる。

土師器 175～181は壺で、175は完形で口径14.5器高4.8cmで縁い平底を成す。器壁は荒れ調整不明。最大0.9cmと厚みがあり重い。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい橙色を呈す。176は大振りで復元口径16.0器高7.0cm。外面にヨコナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、にぶい橙色を呈す。177は深い器形で復元口径12.6器高9.2cm。外面口縁以下にケズリを施し、他は器壁が荒れ不明。胎土は粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み、にぶい橙色を呈す。178も大振りで復元口径15.5器高5.2cm。器壁が荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい赤褐色を呈す。179は復元口径13.6器高7.4cm。外面は粗いタテハケ後縁いヨコナデ、底面に手持ちヘラケズリを、内面はヨコナデ後縁いケンマを施す。器壁は厚めで、胎土は粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み、内外側面は暗

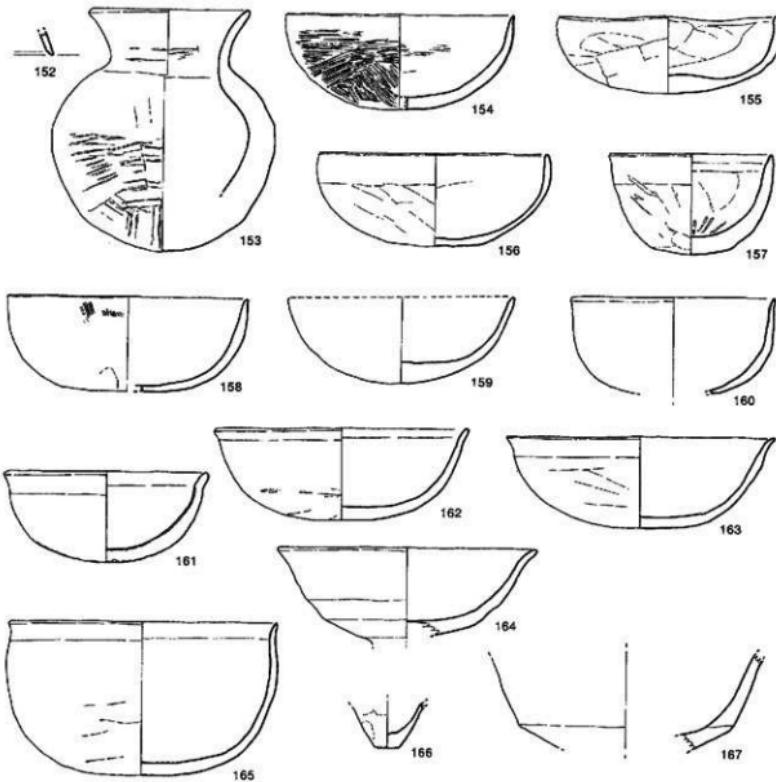


Fig.68 SC20出土遺物実測図.1 (1/3)

灰褐色底部は黄褐色を呈す。180はほぼ完形で口径13.4器高7.3cm。外面はタテハケ後縫いヨコナデ、底面に手持ちヘラケズリを、内面はヨコナデ後縫いケンマを施す。器壁は厚めで、胎土は粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み、内外側面は暗褐～黒褐色底部は黄褐～淡褐色を呈し、179に似る。181は小型で復元口径10.6器高7.0cm。口縁内外をヨコナデ後外面は以下をケズリ、内面はケズリ後ナデ・ケンマを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、灰白色を呈す。182～185は壺。182は復元口径11.5cm。整形・調整は極めて粗く歪みが目立つ。内外面はケズリ後粗いヨコナデを施す。胎土は極めて粗い石英粒を多量に含み、灰黄褐色を呈し被熱で煤ける。183～185は頸部が縮まり胴が大きく張る器形で、183は復元口径18cm。外面はヨコナデ後縫いケンマを、口縁内面はヨコナデ頸部以下にケズリ後縫いナデを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、灰白色を呈す。184は復元口径16cm。口縁外面はヨコナデ、胴部は粗いタテハケ後縫いヘラナデを、口縁内面はナナメハケ後ヨコナデ頸部以下にケズリ後縫いナデを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、暗黄灰色を呈す。185は復元口径16.4cm。外面はヨコナデ後縫いケンマを、口縁内面はヨコナデ、頸部下2.5cmからヨコケズリを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈す。186はほぼ完形の釣瓶形の無頭の鉢で口径17.0器高15.9cm。底部は緩い平底を呈す。外面はタテハケ後縫いヨコナデ、内面は粗いケズリを施す。口縁下2.5cmの対面位置に焼成前に径1.5cmの孔を穿つ。明確な紐すれば無く、長期使用したものではない。孔の上方は口縁よ

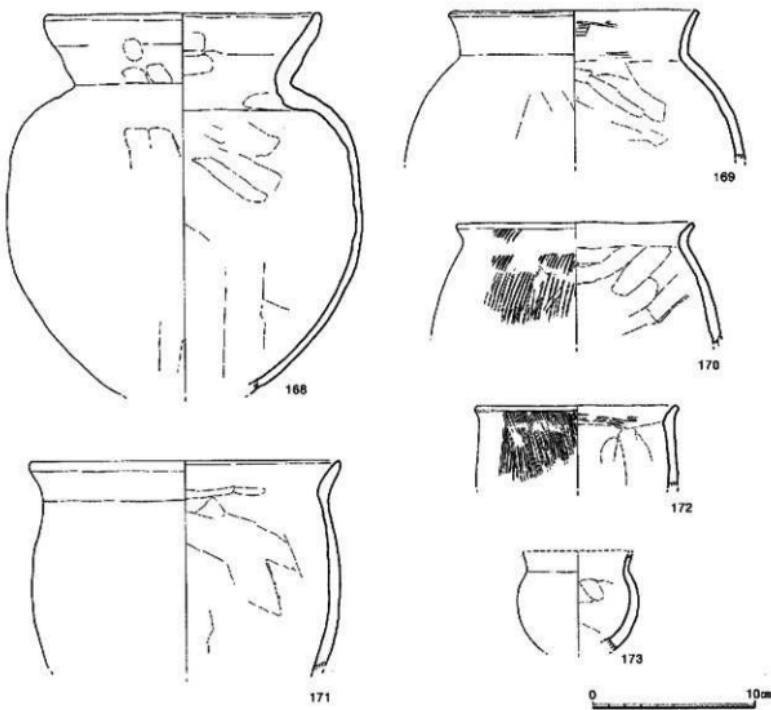


Fig.69 SC20出土遺物実測図.2 (1/3)

り5mm程高く整形し補強している。胎土は粗い石英粒を多量に含み、淡灰褐色を呈す。

鉄器 187は刀子の刃部で、残存長3.4刃幅1.2厚0.3cmを測る。

鉄滓 188は流出孔滓で、 5.9×4.0 厚1.7cm・37gを測る。表面は比較的滑らかで中央が瘤み気泡は見られない。裏面と縁部が孔と炉壁を転写しており、径は大きく5.2cmを測る。190は炉壁様の薄い焼土塊で残存長 6.1×7.8 厚1.1cmを測る。上下方向に3.3cm間隔で1.2cm程の棒状の圧痕があり表面もこれに沿っている。胎土は粗い石英粒を少量含み土器と変わりない。にぶい橙色を呈す。191はが底滓で 9.2×4.1 厚5.7cm・222gを測る。表面は流動状で気泡が多い。裏面は大きめの滴下状、一側面に炉壁が熔着

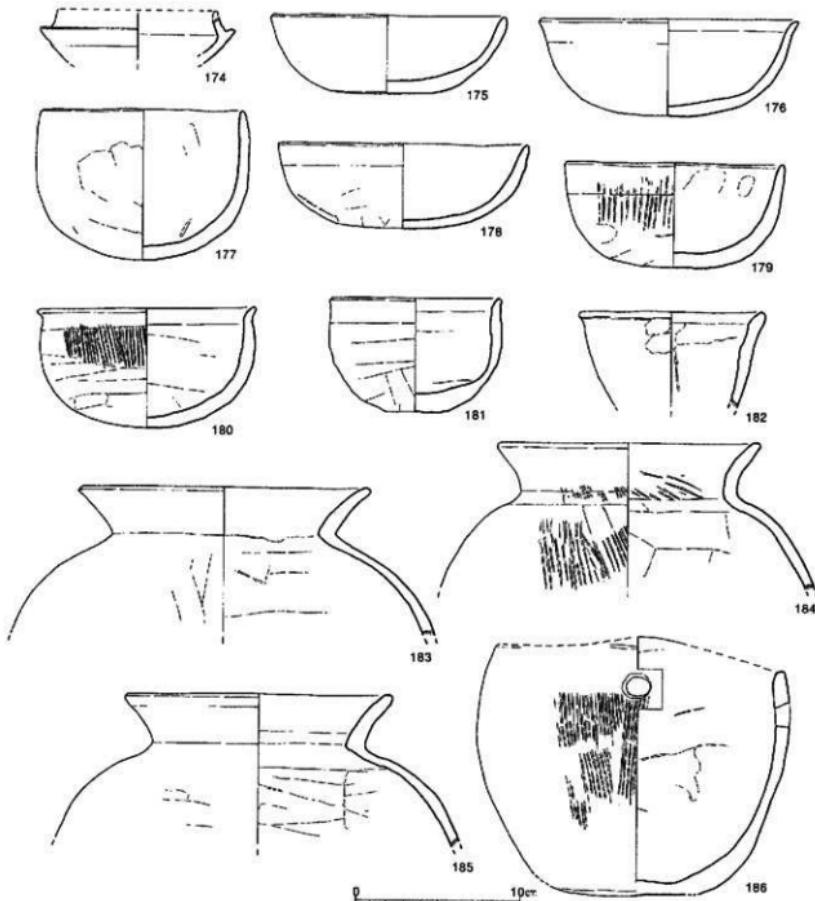


Fig.70 SC21出土遺物実測図.1 (1/3)

する。192は炉壁で、 4.5×5.3 厚1.9cm・31gを測る。表面は津化して気泡が多い。裏面にはスサ痕が多く残る。193は椀形滓で 5.6×8.0 厚2.8cm・113gを測る。表面は比較的滑らかで一部酸化土砂が付着する。裏面はやや消し下し酸化土砂が付着する。

石器 194・195は砥石。194は淡黄灰色凝灰質砂岩製の仕上げ砥で、 4.9×5.5 cmの方柱状で、半折し残存長9.4cmを測る。小II以外の全面を使用しており中央が最大1.5cm痩む。瘤みの中央が5.5cm位置であり11cm前後的小品と思われる195はさらに肌理の細かい黄白色凝灰質砂岩製の仕上げ砥で全長18高7.1cm。節理に沿って両側が欠損しており幅4cm程になっているが、この面を刃幅7mmの鑿で粗く削り面取りして再利用を図っている。

時期はII期と思われる。

(38) SC31 (fig. 66 Pl. 16)

SC31はSC21の東側に単独で位置し、 2×2 間の建物SB12に切られる。平面プランは方形で、長軸方向は真北にとる。規模は 3×2.3 mで、深さは15cm程、床面積は6.5m²を測る。柱穴は検出されなかつた。竈は北側中央の壁近くに 75×75 cmほどの範囲に焼土が広がる。上面に須恵器高杯203が破損して検出される。他の遺物は中央部の1mほどの範囲に床から5cmほど浮いて、須恵器を中心に破損品が多く検出される。

SC31出土遺物 (fig. 72・73 Pl. 36)

須恵器 196~201は壺蓋。196はI期で口縁全周の2/3が残存し、口径12.4・器高4.2cmを測る。外面体部の壺は縦を成し、この近くまで左回転ケズリを施し、天井はハケで緩くナデる。口唇端が部分的に溝状に痩む。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で、暗灰色を呈す。197はIII期で口縁全周の1/4が残存し、復元口径14.4・器高約4cmを測る。外面体部の1/2程に左回転ケズリを施し、口唇内面に浅い沈線を施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成は良好で、明灰色を呈す。198はII期で

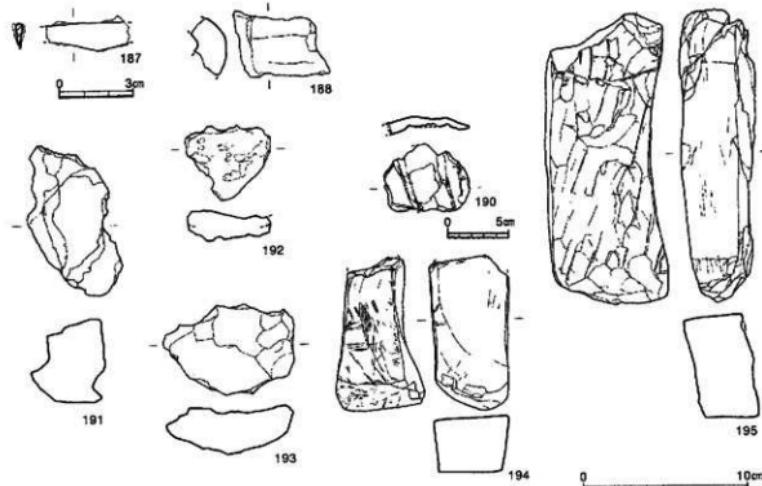


Fig.71 SC21出土遺物実測図.2 (1/2・1/3・1/4)

口縁全周の1/4が残存し、復元口径13.3・器高4.2cmを測る。外面体部の2/3程に右回転ケズリを施し、体部との境に浅い沈線を施す。口唇内面に浅い沈線を施し、内底に当具痕が残る。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈す。199はⅠB期で口縁全周の1/3が残存し、口径11.4・器高4.9cmを測る。外面体部の境は段を成し、この近くまで左回転ケズリを施す。口唇内面に浅い沈線を施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で灰色を呈す。200はⅡ期で口縁全周の1/4が残存し、口径11.4・器高約5cmを測る。外面体部の1/2程に右回転ケズリを施し、体部との境は段を成す。口唇内面には浅い沈線を施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。201はⅢB期で口縁全周の3/4が残存し、口径14.8・器高4.2cmを測る。外面体部の1/3程に右回転ケズリを施し、口唇内

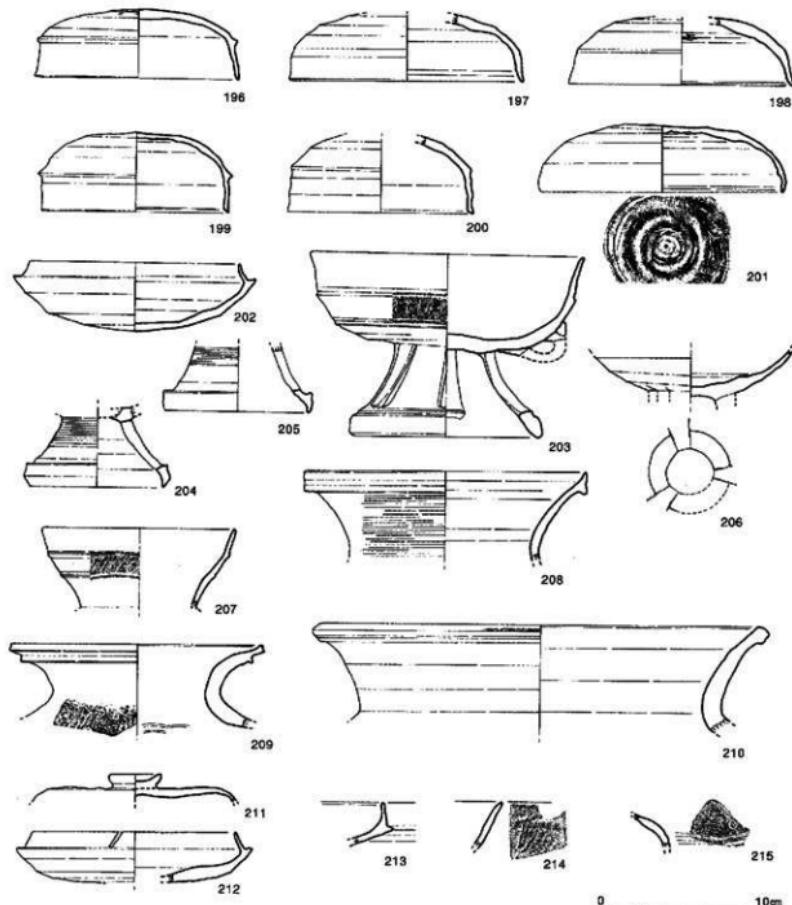


Fig.72 SC31出土遺物実測図.1 (1/3)

面には浅い沈線を施す。内底には当具痕が残る。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で褐色を呈す。202はⅢA期の坏身で口縁全周の1/3が残存し、復元受部径12.8・器高約4.2cmを測る。外面部の1/3程に左回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。203～206は高坏で、203はⅠB期の無蓋高坏のほぼ完形品で、口径16.8脚径11.8cmを測る。体部外面に低い三角突帯と沈線のセットを2カ所施し、この間に櫛描波状文を施文する。下位の沈線と坏部下面にかけて径3cm程の把手を1カ所設けるが欠落する。脚部には方形透かしを5カ所穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で明灰色を呈す。全面に自然釉がかかる。204はⅠB期の高坏脚部で、全周の1/4が残存し、復元径8.2・残存高約4.3cmを測る。外面上位にカキメを施し、方形透かしを4カ所穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。205もⅠB期の高坏脚部で、全周の1/4が残存し、復元径8.8cmを測る。外面上位にカキメを施し、方形透かしを3カ所穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈す。206はⅠ期の坏下半部で脚径5cmを測る。外面下位に右回転ケズリを施す。脚との接合部に三角突帯を施し、これを切って方形透かしを3カ所穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈す。薄い器壁で陶質土器の可能性も考えられる。207はⅠB期の甌の口縁部で口縁全周の1/2弱が残存し、復元口径11.8・残高4.8cmを測る。外面部の2カ所に低い三角突帯を施し、この間に櫛描波状文を施文する。胎土は粗い石英粒を少量含み、器

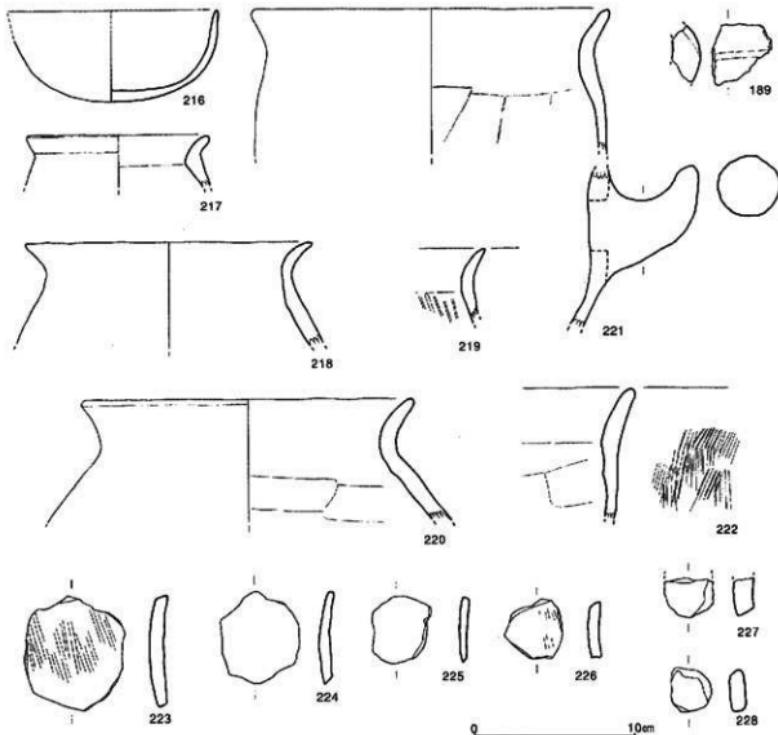


Fig.73 SC31出土遺物実測図.2 (1/3)

壁は薄い。焼成は良好で、暗灰色を呈し灰が被る。208～210は甕で、208は口縁全周の1/8が残存し、復元口径17.4・残高約5.3cmを測る。口唇端部は上下に肥厚し幅1.4cmを測る。頸部外面にカキメを施す。器壁は薄く、胎土は粗い石英粒を少量含む。焼成はややあまく外面は灰褐色を内面は暗灰色を呈す。209はⅡ期で口縁全周の1/3が残存し、復元口径15.4・残高約4.6cmを測る。口唇部は薄く、端部に凹線を施し、口縁下に小さな三角突帯を1条施す。頸部外面には縱方向の平行叩きを施し、内面に無文の当具痕が残る。胎土は精良で焼成は良好、口縁外面は黒灰色、他は灰色を呈し、上面に灰が被る。210は大甕の口縁で全周の1/6が残存し、復元口径28・残高約5.5cmを測る。口唇外面が「コ」状に肥厚し凹線を1条施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、口縁外面は黒灰色、内面は灰が被り灰色を呈する。211～215は陶質系の土器で、211・212は有蓋高坏。211は蓋で平坦な天井部の1/3が残存する。天井部のみ左回転ヘラケズリを施し、中央に径3.3cmの鉤状つまみが付く。内底にカキメが残る。口径14cm前後と思われる。器壁は薄く、胎土は石英粒を少量含む。焼成は良好で灰色を呈し、上面に灰が被る。212は有蓋高坏の坏部で口縁全周の1/4が残存し復元受部径14.4・残存高3.1cmを測る低い器体で、体部底面に左回転ヘラケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で明灰色を呈す。213は同じく有蓋高坏の坏部小片で、立ち上がりは真っ直ぐに高く、体部は右回転ナデで直線的にのびる。低い器体で、胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で明灰色を呈す。214は無蓋高坏口縁の小片で外面に3×1cm程の花弁状の薄い粘土版を貼付する。胎土は精良で焼成はややあまく灰白色を呈し、古代の混入品の可能性もある。215は瓦質の蓋肩部小片で、径12cm前後と思われる。肩部外面に浅い沈線を2条施し、その上に径5mmの円形刺突文を施す。胎土は精良で焼成はあまく、黒灰色を呈する。

土師器 (fig. 73 pl. 36) 216は坏で口縁全周の1/2弱が残存し、復元口径13・器高5.6cmを測る。器壁は荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、橙色を呈す。217～220は甕で、217は小型の甕で復元口径11.2cm。口縁内外面はヨコナデを、頸部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、橙色を呈し被熱する。218は復元口径17.4cm。外面は調整不明、口縁内面はヨコナデ、頸部以下にケズリを施すが彼は成さない。胎土は粗い石英粒を少量含むが精良。にぶい黄橙色を呈す。219は口縁小片で、口縁内外面はヨコナデを、頸部以下に粗いケズリを施す。胎土は粗い石英粒・赤色粒を多く含み、橙色を呈す。220は218と同器形で復元口径20.4cm。外面・口縁内面はヨコナデを、内面頸部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒・赤色粒を多く含み橙色を呈す。221・222は甕で、221は復元口径22cm。外面は調整不明、口縁内面はヨコナデ、頸部以下にケズリを施す。把手は径4cm程の牛角状である。胎土は極めて粗い石英粒を多量に含みにぶい橙色を呈す。222は口径25cm前後の直口気味の器体で、外面はタテハケ後口縁内外はヨコナデ、頸部以下にケズリを施し、稜を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含みにぶい橙色を呈す。

土製品 223～228は土師器胴部片を用いた土器片円盤で、主に外面からの打裂で円形に整形する。223は長径7厚0.9cm重量25gを測る。224は長径5.6厚0.7cm重量23gを測る。225は長径4.2厚0.5cmを測り、両端部を欠損する。226は長径3.7厚0.7重量10gを測る。227は長径3厚1.2cmを測り、半分を欠損する。228は長径2.7厚0.9cm重量9gを測る。何れも断面は摩滅する。これらは各遺構から何点も出土しており、また、吉武遺跡群が特別多い訳でもない。縄文時代以降、どの遺跡でも通常にみられるもので、出土破片数が増える弥生時代以降は多くの未整理の胴部破片の中に現もれている資料と思われる。189は鶴の羽口先端近くの小片で復元外径6cm内径2.8cmを測る。表面が還元焼成され、内側から赤褐・浅黄橙・暗灰色を呈す。胎土は粗い石英粒を多量に含む。

資料はIBからⅡ期の資料がまとまっており、時代は該期と思われる。

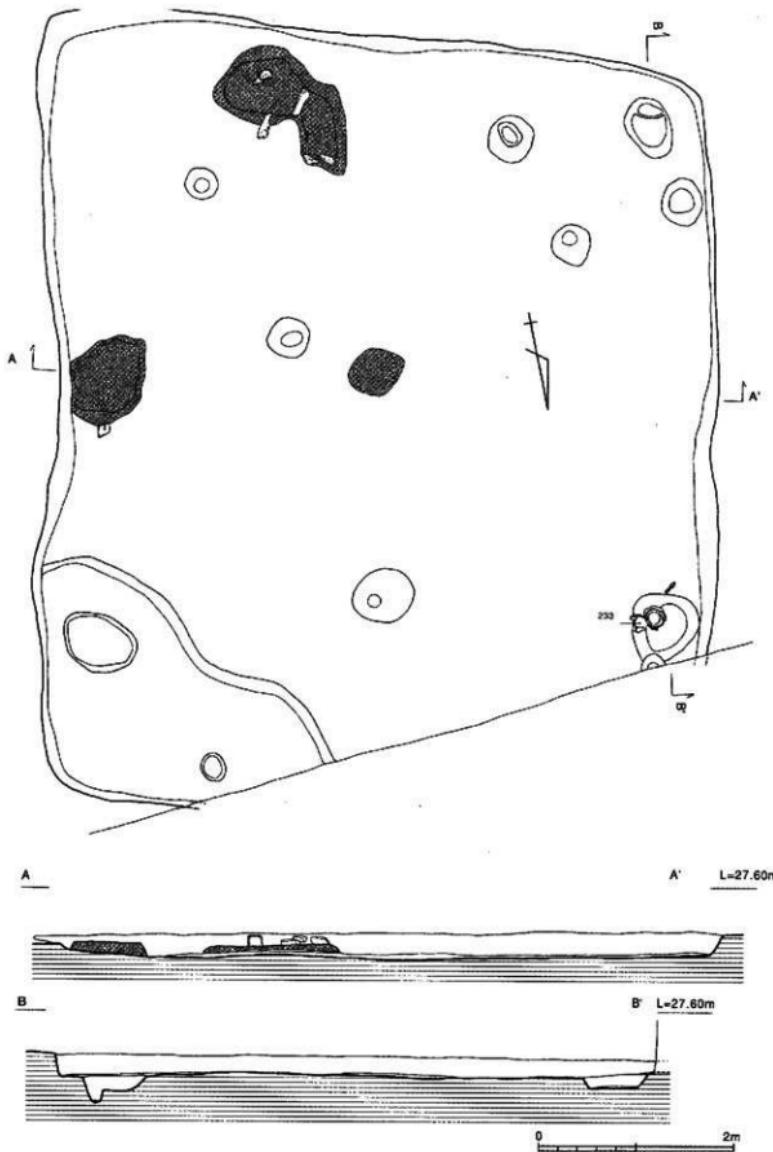


Fig.74 SC43実測図 (1/50)

(39) SC43 (fig. 74 Pl. 19)

SC43はA群の北端に他と離れて単独で位置する大型住居で、平面プランは長方形で、長軸方向はN-72°-Wにくる。規模は8.2×7.1mで、深さは25cm程、床面積は約57m²を測る。柱穴は径30~60cmのものが10穴程検出された。定型的な位置には無いが各隅に位置するものが主柱と思われる。深さは15cm程で浅い。北東隅は3.5×1.9mで深さ5cm程一段下がる。竈は東壁中央近くに100×80cmほどの範囲と、南壁中央で壁から15cm程離れて145×75cmの範囲に、また、中央の60×50cm程の範囲の3カ所に焼土が広がる。遺物は北西隅に須恵器壺が、南の竈上に須恵器壺229・230土師器壺233が検出された。

SC43出土遺物 (fig. 75 Pl. 37)

須恵器 229はⅡ期の壺蓋で口縁全周の1/2弱が残存し、復元口径12.2・器高4.9cmを測る。外面体部の境は段を成し、体部の2/3程左回転ケズリを施す。口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で、暗灰色を呈す。230はⅡ期の壺身小片で、外面体部の1/2程に回転ケズリを施す。蓋受け立ち上がりは高く、口唇内面に沈線を施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で、明灰色を呈す。

土師器 231~233は壺で、231は口縁全周の2/3が残存し、復元口径11.8・器高4.7cmを測る。器壁は荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい橙色を呈す。232は口縁全周の1/5が残存し、復元口径14.2・器高3.4cmを測る。器壁は荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、橙色を呈す。233は黒色土器で、復元口径12.0・器高5.0cmを測る。外面は器壁が荒れ調整は不明、内面はナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい褐色を呈す。

鉄器 234は刀子で切先を欠き、残存長9.9刃幅1.1厚0.5cmを測る。

時期はⅡ期である。

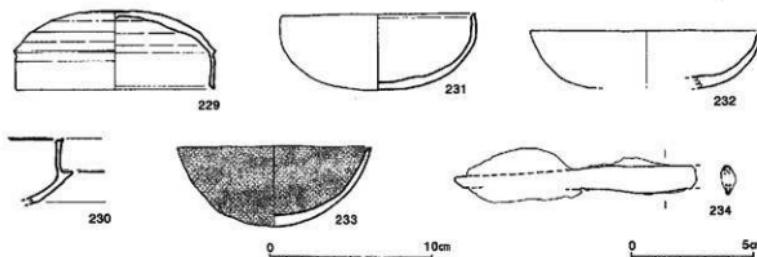


Fig. 75 SC43出土遺物実測図 (1/3・1/2)

2). B群

B群は竪穴住居群の中部、標高26~27m付近に南西から北東方向の幅50m程の範囲に26軒が分布し、A群程の過密な集中は見ないが、北・中・南の3カ所に7~9軒のまとまりがある。

各住居同士の切り合いは少なく、切り合いの最大で3軒である。

北側に一辺4~6mの中型住居が多く集中し、以南に小型住居が散漫に分布する傾向が見られる。

(1) SC25 (fig. 77)

SC25はB群の南西にSC26と位置する中型住居で、古代の建物SB08に切られる。検出・平板での測量時はSC26に切られ、4×4m程の方形プランであったが、航空測量図では不整長方形の土壌状になっている。長軸方向はN-83°-Wにくる。規模は4.3×3.2mで、深さは20cm程、平板図での床面積は約15m²を測る。柱穴は径20~40cmのものが中央部を中心に20穴程検出されたが、定型的な位置には無い。竪は持たない。出土遺物は多いが全て破損・欠損している。

SC25出土遺物 (fig. 78~79 pl. 37)

須恵器 235~239は坏蓋で、235はⅠ期の口縁小片で、外面体部の境は後を成し、口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成はややあまい。灰白色を呈す。236もⅠ期で、口縁全周の1/6が残存し復元口徑11.0cmを測る。外面体部の境は後を成し、口唇端面は沈線を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好。暗灰色を呈し、外面に自然釉がかかる。237はⅡ期で、口縁全周の1/2が残存し、口径12.7・器高4.7cmを測る。外面体部の境は段を成し、口唇端面は沈線を成す。外面体部の2/3程に左回転ケズリを施す。内底には当具痕が若干残る。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で灰色を呈す。238はⅠ期で、口縁全周の1/2が残存し、口径12.8・器高4.6cmを測る。外面体部の境はやや緩く、口唇端面は沈線を成す。外面体部の2/3程に左回転カキメを施す。天井部で径3cmほどカキメをナデ消しており、つまみが付く可能性がある。胎土は石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。239はⅢ期で、口縁全周の1/3が残存し、口径13.6・器高4.0cmを測る。口唇内面は広い段を成す。外面体部の1/3程に右回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で明灰色を呈す。240~243は坏身で、240はⅠB~Ⅱ期で口縁全周の1/6が残存し、復元受部径13.0・器高5cm弱を測る。外面体部の1/3程に回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で黒灰色を呈す。242はⅠB期で口縁全周の1/4が残存し、復元受部径13.6・器高5cm弱を測る。外面体部の境は高い後を成し、口唇内面は沈線を成す。外面体部の1/2程に回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を若干含み、焼成は良好で体外面は黒灰色を他は明灰色を呈す。243はⅣ期で口縁全周の1/8が残存し、復元受部径13.0cmを測る。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で体外面は黑色を他は暗灰色を呈す。241・244は高坏で、241はⅡ期の有蓋高坏の坏部で口縁全周の1/3が残存し、復元受部径15.8・残高5・脚上径5cm弱を測る。外面体部の3/4程に左回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で体外面は黒灰色を他は灰色を呈す。244はⅡ期の脚部で全周の2/3が残存し、径11.0・残高7.7cmを測る。外面には粗いカキメを施し三角透かしを4カ所、この間に縱沈線を4カ所施す。上面の接合部には部品の密着を図るヘラ切り痕がボジに転写されている。胎土は粗い石英粒を若干含み、焼成は良好で体外面は黒灰色を他は明灰色を呈す。246は蓋の脚部で復元径14.5・残高9.2cmを測る。外面肩部を境に調整が分かれ、この部位で別個に整形したものを接合する。肩以上にはカキメ、以下は縱方向の平行タタキ後カキメ、3/4以下にケズリを施し全体をナデる。底部も径7cm程の円盤を接合している。胎土は石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。

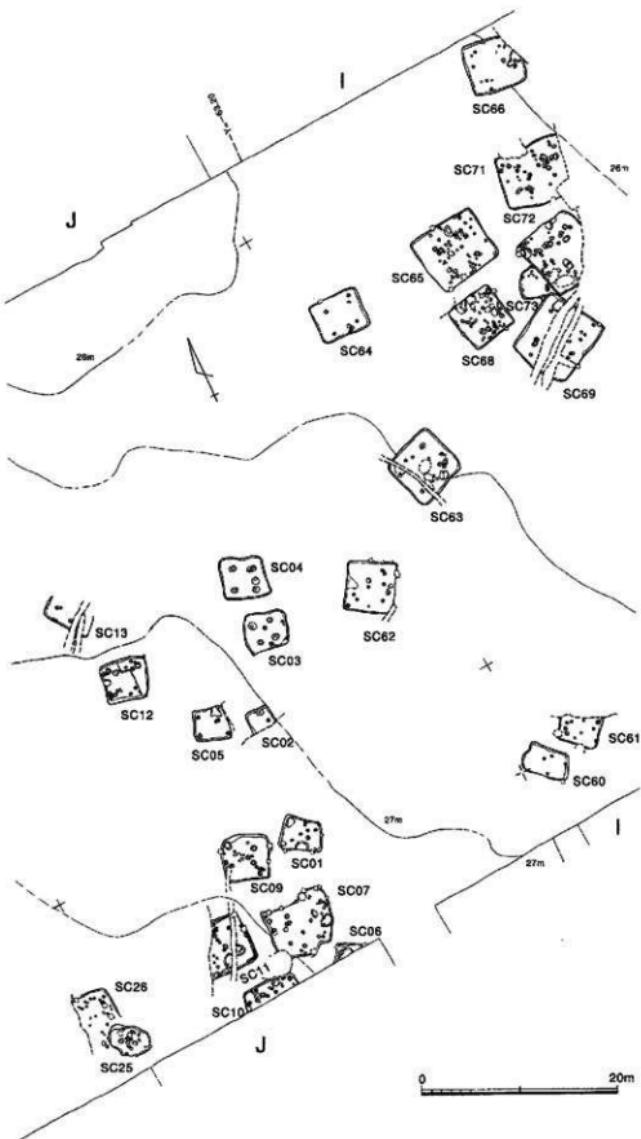


Fig.76 B群堅穴住居分布図 (1/500)

土師器 247~249は壺で、247は復元口径17.2・器高約6cm。外面はタテハケ後緩いヨコナデ、口縁内面はヨコハケ、以下にケズリ後ナデを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、外面にはぶい橙色を呈す。248は黒色土器で口径13.6・器高5.0cmを測る。緩い平底で、内外面はヨコナデ後緩いケンマを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、褐~暗褐色を呈す。249は黒色土器で復元口径13.4・器高約6.8cm。外面はハケ後ヨコナデ、口縁内面は粗いケズリ後緩いナデを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、外面は暗褐色内面にはぶい黄橙色を呈す。250は壺で復元口径11.6cm。器壁が荒れ調整不良。胎土は粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み橙色を呈す。251~255は壺で、251は復元口径16.0cm。内面頸

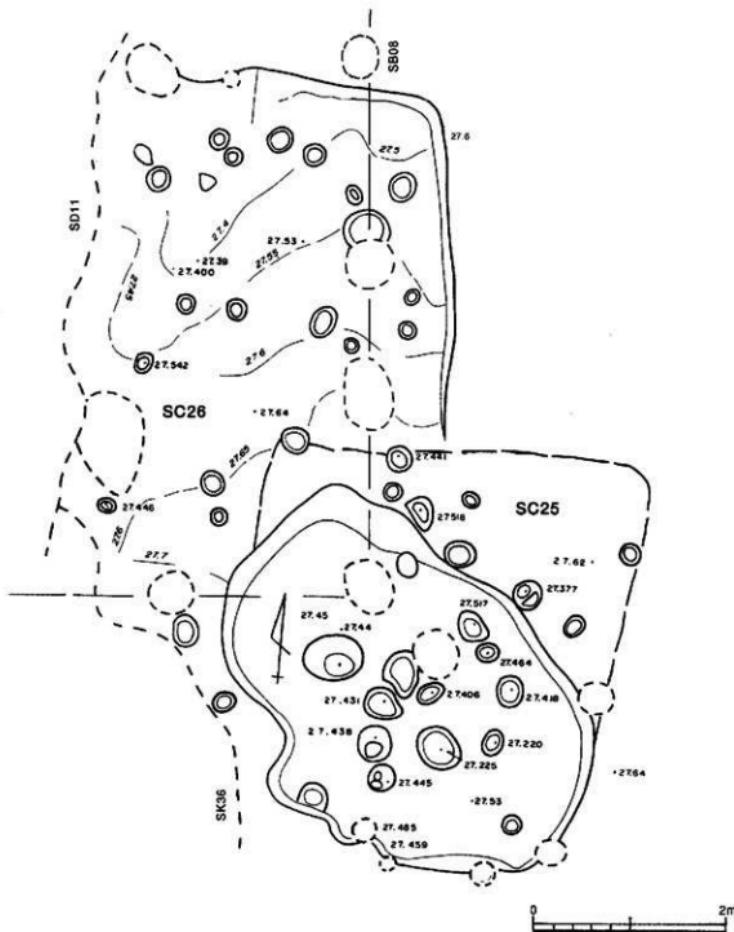


Fig.77 SC25・26実測図 (1/50)

部以下にケズリを施し稜を成す。他は器壁が荒れ調整不明。器壁は厚く、胎土は粗い石英粒を多く含み外面にはぶい橙色を呈し被熱する。252は復元口径19.0cm。外面はタテハケ後口縁内外面にヨコナデ、内面頸部以下にケズリを施すが稜は成さない。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、灰褐色を呈す。253は小型で復元口径12.2cm。内面頸部以下にケズリを施し稜を成す。他は器壁が荒れ調整不明。腹部器壁が薄く、胎土は粗い石英粒・赤色粒を少量含み、外面は灰赤色を呈し被熱する。254は復元口径18・胴径26.7cm。口縁内外面はヨコナデを、内面頸部以下に粗いケズリを施す。胎土は粗い石英粒・赤色粒を多く含み、橙色を呈す。255は復元口径32.6cm。外面はタテハケ後ヨコナデを、口縁内面はヨコハケ後ヨコナデ、頸部以下に粗いケズリを施し稜を成す。胎土は粗い石英粒を多く含み灰褐色を呈す。256は瓶で復元口径27.6cmを測る。内面頸部以下にケズリを施し稜を成す。他は器壁が荒れ調整不明。腹部上位に亀頭状の把手を付ける。胎土は粗い石英粒を多く含み灰白色を呈す。

土製品 257・258は土師器胸部片を用いた土器片円盤で、主に外面からの打製で円形に整形する。257は長径6.6厚1.1cm重量46gを測る。258は長径5.9厚1.3cm重量52gを測る。

以上、時期はⅠB～Ⅱ期と思われる。

(2) SC26 (fig. 77)

SC26はSC25の北側に隣接し、検出時はこれを切っていることが確認されている。古代の建物SB08・満SD11に切られる。検出時の平面は方形プランで、長軸方向はN-3°-Wにとる。検出時の規模は約 $4 \times 4.0m + \alpha$ で、深さは10cm程、床面積は約16m²を測る。柱穴は径20~30cm程のものが壁に沿って20穴程検出されたが、四隅に近い柱間3.4~2.5mの4穴が主柱と思われる。竪は持たない。出土遺物は少ない。

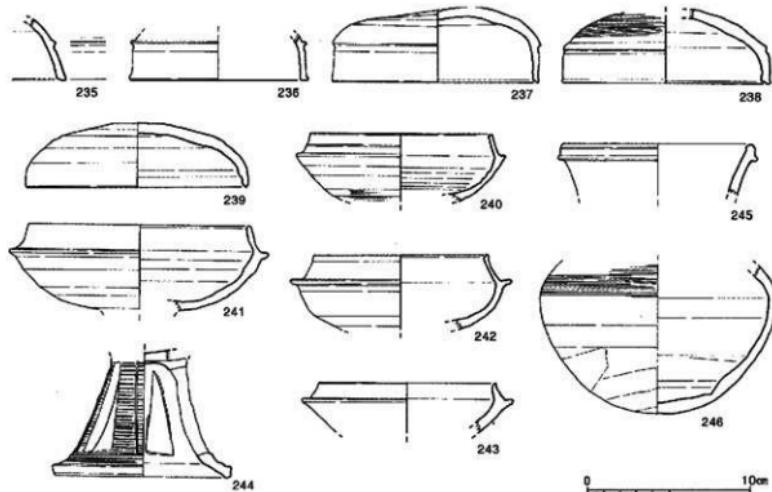


Fig.78 SC25出土遺物実測図.1 (1/3)

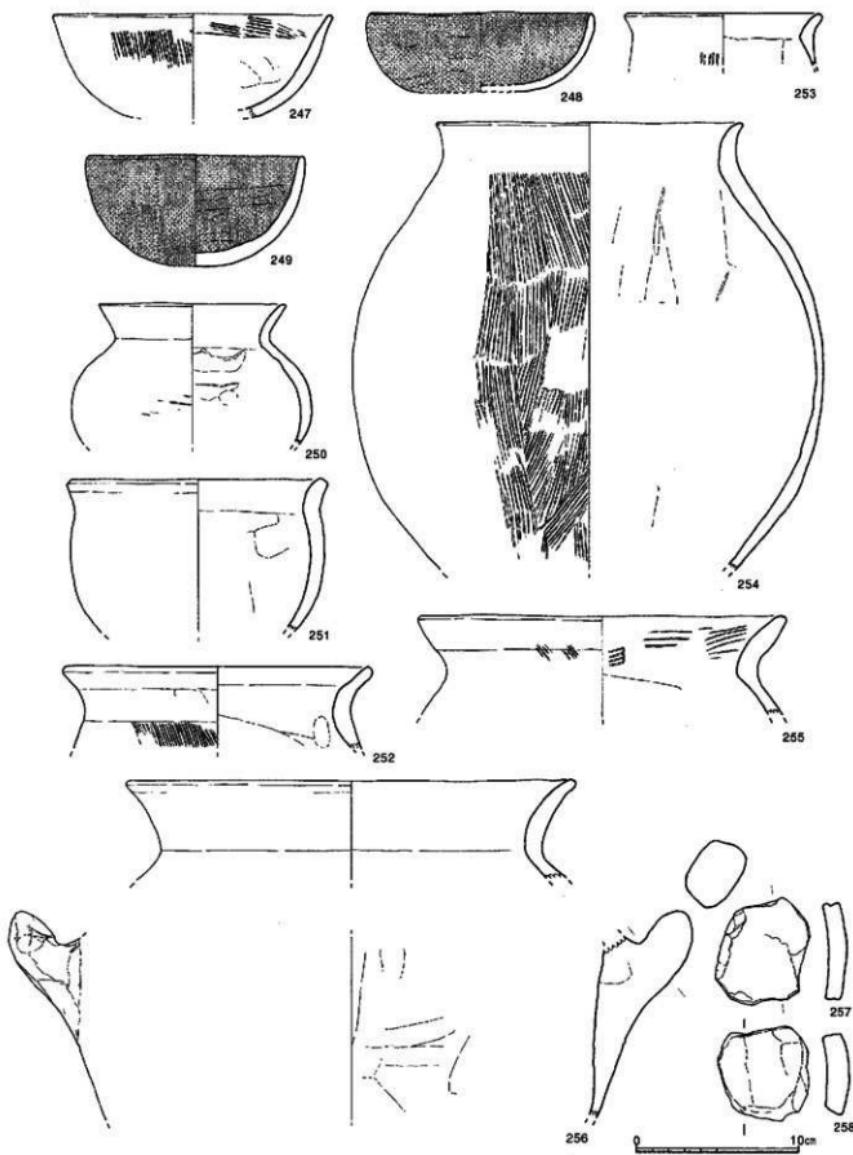


Fig.79 SC25出土遺物変測図.2 (1/3)

SC26出土遺物 (fig. 80 pl. 38)

須恵器 259・260は壺蓋で、259はⅢB期で、復元口径14.8cmを測る。体部外面の1/3程に左回転削りを施し、口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好。暗灰色を呈す。260はⅢA期で、復元口径15cmを測る。外面体部の境は段を成し、口唇内面は沈線を成す。体部外面の2/3程に回転削りを施し、口唇内面は沈線を成す。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成は良好。灰色を呈す。261はⅣ期の壺身で、復元受部径12.8cmを測る。体部外面の下位に右回転削りを施す。胎土は細かな石英粒をやや多く含み、焼成は良好。暗灰色を呈す。

時期はⅣ期と思われる。

(3) SC10 (fig. 81 pl. 20)

SC10はB群南部の6軒グループの南端に位置し、大半が調査区外にある。古代の建物SB06・土塙SK295に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-87°-Eにとる。規模は約5.85×1.9m + αで、深さは10cm程を測る。西壁に沿って幅60cm程の壁溝状の段落ちがある。柱穴は径20~30cm程のものが壁に沿って十数穴程検出されたが、定型的な位置には無い。竈の有無は不明。

SC10出土遺物 (fig. 83 pl. 38)

須恵器 262はⅡ期の壺蓋で、復元口径12.8cmを測る。口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み精良、焼成は良好。暗灰色を呈し灰を被る。263・264は壺身で、263はⅠB期で、復元受部径12.4cmを測る。外面体部の境は高い稜を成し、以下2/3程に回転ケズリを施す。口唇内面は緩い沈線を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み精良、焼成は良好で青灰色を呈し、体外面は灰を被る。264はⅡ期で、復元受部径12.8・器高4.6cmを測る。口唇内面は緩い沈線を成す。外面体部の1/2程に右回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗青灰色を呈す。265は壺の口縁で14.2cmを測る。若干肥厚した口唇外間に緩い沈線を1条施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成はややあまく青灰色を呈す。

土師器 266は壺で、復元口径21.2cmを測る。内面頸部以下にケズリを施し稜を成す。他は器壁が荒れ調整不明。器壁は厚く、胎土は粗い石英粒を多く含み明褐灰色を呈する。

時期はⅡ期と思われる。

(4) SC06 (fig. 81 pl. 20)

SC06はB群南部の6軒グループの南端に位置し、大半が調査区外にある。平面は方形プランで、長軸方向はN-67°-Wにとる。規模は3.2m + α × 2.1m + αで、深さは20cm程を測る。北壁に沿って幅25cm程の壁溝が1.2m程、北壁から80cm程離れて、ベッド状遺構に沿うように西壁に幅40cm程の壁溝が巡る。検出範囲が狭小のため主柱穴・竈の有無は不明。

SC06出土遺物 (fig. 83 pl. 38)

須恵器 267はⅢA期の壺身で、復元受部径14.4cmを測る。体部外面の1/3に左回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。268は壺の口縁と思われ、復元口径13.8cmを



Fig.80 SC26出土遺物実測図 (1/3)

測る。外面屈曲部が稜を成し以下に構造波状文を施す。器壁は薄い。胎上は細かな石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰を呈する。

鉄津 269は炉壁で 3.5×3.5 厚1.0cm・9gを測る。高熱でスラグ化し、暗灰～黒褐色を呈する。表面は比較的滑らかで裏面は一部が滴下する。

時期はⅢA期である。

(5) SC07・08 (fig. 82 pl. 20)

SC06はB群南部の6軒グループの中央に位置し、2軒の切り合いであるが前後関係は押さえられていない。建物SB04・05に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-89°-Eにとる。規模は西側の07が 5.5×4.2 m程で、東側の08が 5.8×3.2 m程、深さは20cm程を測る。柱穴は径20～40cm程の

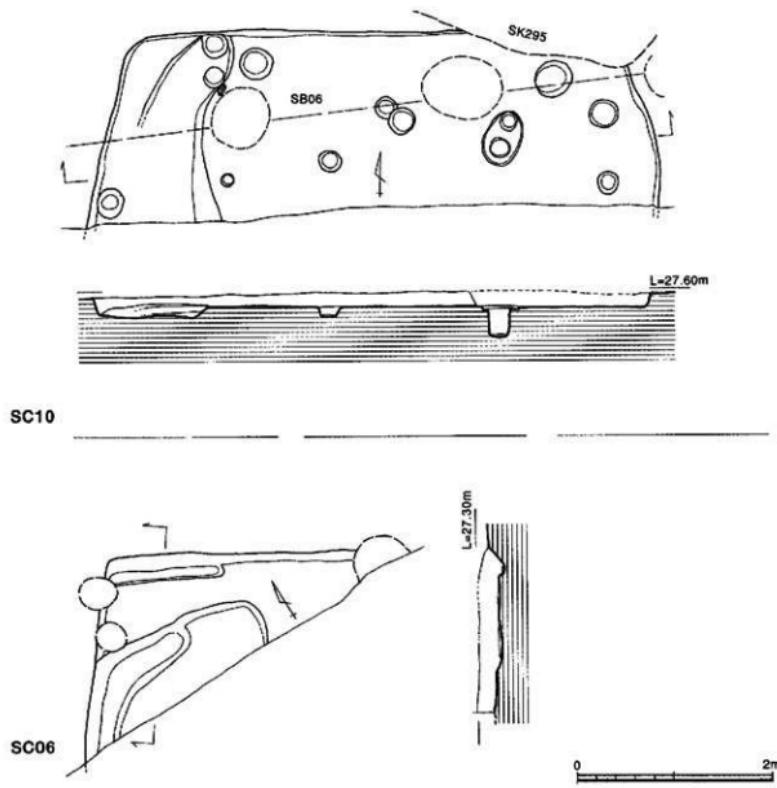


Fig.81 SC10・06実測図 (1/50)

ものが壁に沿って20数穴有るが、定型的な位置には無い。竈は08の東壁中央に 1.4×0.9 mの範囲に焼土が広がる。

SC08出土遺物 (fig. 83)

須恵器 270はⅢA期の壺蓋で、復元口径14.2器高5.0cmを測る。外面体部の境は凹線化し、体部外面の1/3程に右回転ケズリを施し、口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好。暗灰色を呈す。

SC07からの遺物出土は無く、時期はⅢA期である。

(8) SC11 (fig. 84 pl. 20)

SC11はB群南部の6軒グループの西に位置し、半分近くを古代の溝SD01・16に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-2°-Eに沿る。規模は5.6×5.0m+αで、深さは10cm程度を測る。壁に沿って幅20・深5cm程度の略溝が巡る。主柱穴は北西が欠けるが、中央寄りの径20~40cm程度柱間2.7~2.8mの4柱式と思われる。深さは30cm前後を測る。竪の有無は不明。

SC11からは須恵器・土師器の小片・鉄滓等が出土しているが時期を確定できるものは無い。住居の形態は4柱で定型的であり、I～II期の可能性がある。

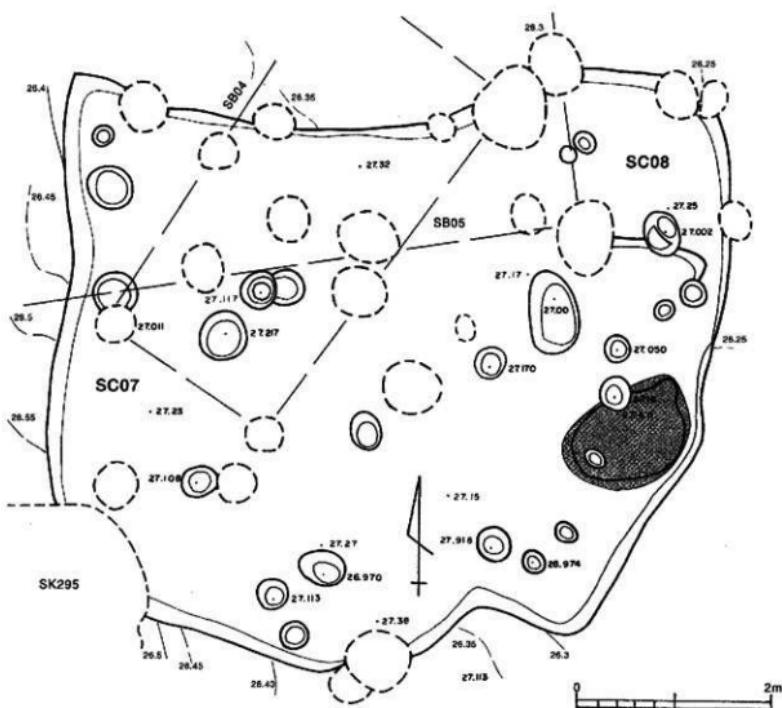


Fig.82 SC07・08実測図 (1/50)

(7) SC01 (fig. 85 pl. 20)

SC01はB群南部の6軒グループの北東に位置する小型の住居。平面は方形プランで、長軸方向はN-38°-Eにとる。規模は $4.4 \times 3.6\text{m} + \alpha$ で床面積は13.6m²、深さは20cm程を測る。柱穴は径20~40cm程のものが10数穴有るが、定型的な位置には無い。竪は南壁の中央に $1.3 \times 0.9\text{m}$ の範囲に焼土が広がり、大きな比率を占める。

SC01出土遺物 (fig. 86 pl. 38)

須恵器 271・272は壺蓋で、271はIV期で復元口径12.0・器高4.3cmを測る。外面体部1/2程に右回転ケズリを施す。天井部にヘラ記号が有る。胎土は粗い石英粒を若干含み、焼成は良好。青灰色を呈す。272はV期で復元口径12.5cmを測り、内面に高い返しが付く。胎土は粗い石英粒を含み、焼成は良好。青灰色を呈す。273~276は壺身で、273はIV期で、復元受部径12.4を測る。体外面2/3には回転ケズリを施す。胎土は石英粒を少量含み精良、焼成は良好で暗灰色を呈す。274はIII期で、復元受部径14.0cmを測る。胎土は石英粒を少量含み精良、焼成は良好で明青灰色を呈す。275はIA期で復元受部径13.0cmを測る。口唇を欠くが外面体部の境の稜は高く、蓋受けは外溝して高く立上がる。外面体部の3/4程に右回転ケズリを施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈す。276はIB~II期で復元受部径15.0cmを測る。外面体部の施の後は非常に高く、蓋受けも高い。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成は良好で外面は暗灰色を呈す。277はIB期の高壺で、復元受部径14.0器高15.5cmを測る。壺部下面から脚上部にカキメを施し、中央の2条の四線下にヘラ記号を記す。278はIB期の大形の壺の腳部で径15.6cmを測る。2条の沈線間に櫛歯列点文を施す。以下に左回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を含み、焼成は良好で灰色を呈す。279はIB期~II期の高壺形器台の脚部で残存径で17.5cmを測る。低い三角突帯2段に4カ所方形透かしを穿ち、透かし間に2本単位の縦沈

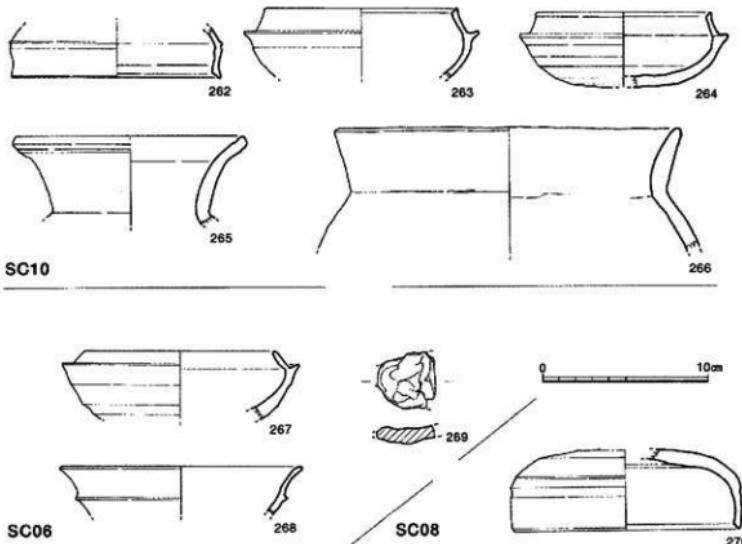


Fig.83 S C10・06・08出土遺物実測図 (1/3)

線を施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で青灰色を呈す。

土師器 280~283は壺で、280は軟質系の壺で復元口径20.8cm。肥厚する口唇外面に沈線を施す。器壁が荒れ調整不明。胎土は粗い石英粒を多く含みにぶい橙色～明褐灰色を呈す。281は口縁部小片で、内面頸部以下にケズリを、他はナデを施す。器壁は薄く、胎土は極めて粗い石英粒を多く含みにぶい橙色を呈し、外面は焼ける。282も軟質系の壺で復元口径28.0cmを測る。口唇外面に沈線を施す。器壁が荒れ調整不明。胎土は粗い石英粒・赤色粒を多く含み橙～灰白色を呈す。283は軟質系の壺胴部で281と同個体の可能性もある。復元口径28.0cm。外面には木目直交の平行タタキが、内面には平行線当具痕が残る。胎土は粗い石英粒をやや多く含み明褐灰色を呈し、外面は焼ける。284~287は壺で284は復元口径15.2・器高6cm。外面はタテハケ後緩いヨコナデ、内面はナデ。胎土は粗い石英粒を少量含み、にぶい橙色を呈す。286は復元口径11.2・器高7.8cm。口縁部のヨコナデ以外は器壁が荒れ調整不明。胎土は粗い石英粒を少量含み、にぶい橙色を呈す。287は手捏ねのミニチュアで、口径5・器高3.7cm。内外を指頭で整形後ナデる。胎土は粗い石英粒を多く含み、灰褐色を呈す。285は高壺で復元口径15.0cm。器壁が荒れ調整不明。胎土は粗い石英粒を若干含み精良、橙色を呈す。

鉄滓 288は鉄塊系遺物で $2.7 \times 2.5 \times 2.2\text{ cm} \cdot 14\text{ g}$ を測る。表面を錆が覆い、ひび割れする。

石器 289は凝灰質砂岩製の仕上げ砥で、 8.1×6.8 ・復元で長25cm前後を測る。小口以外の4面を使用し、最大1.5cmは研ぎ減る。黄白色を呈し両側面は荒れる。

時期はIV期と思われる。

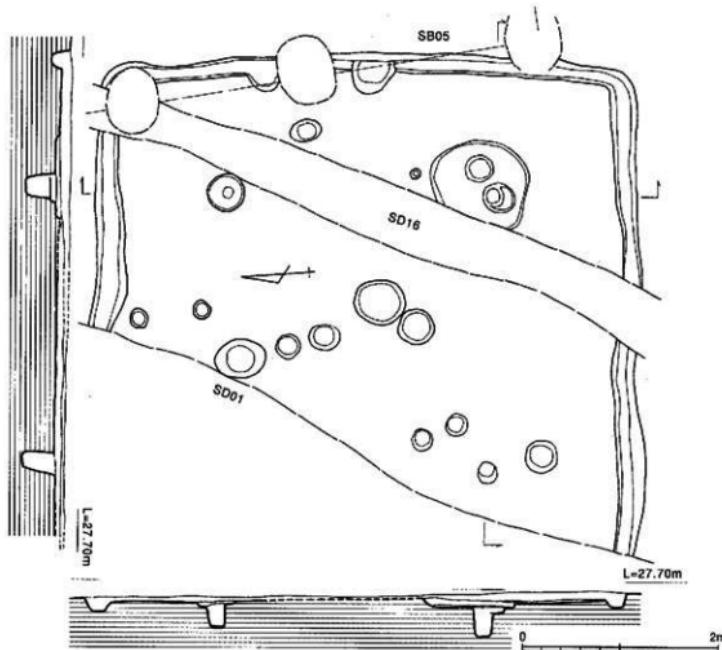


Fig.84 SC11実測図 (1/50)

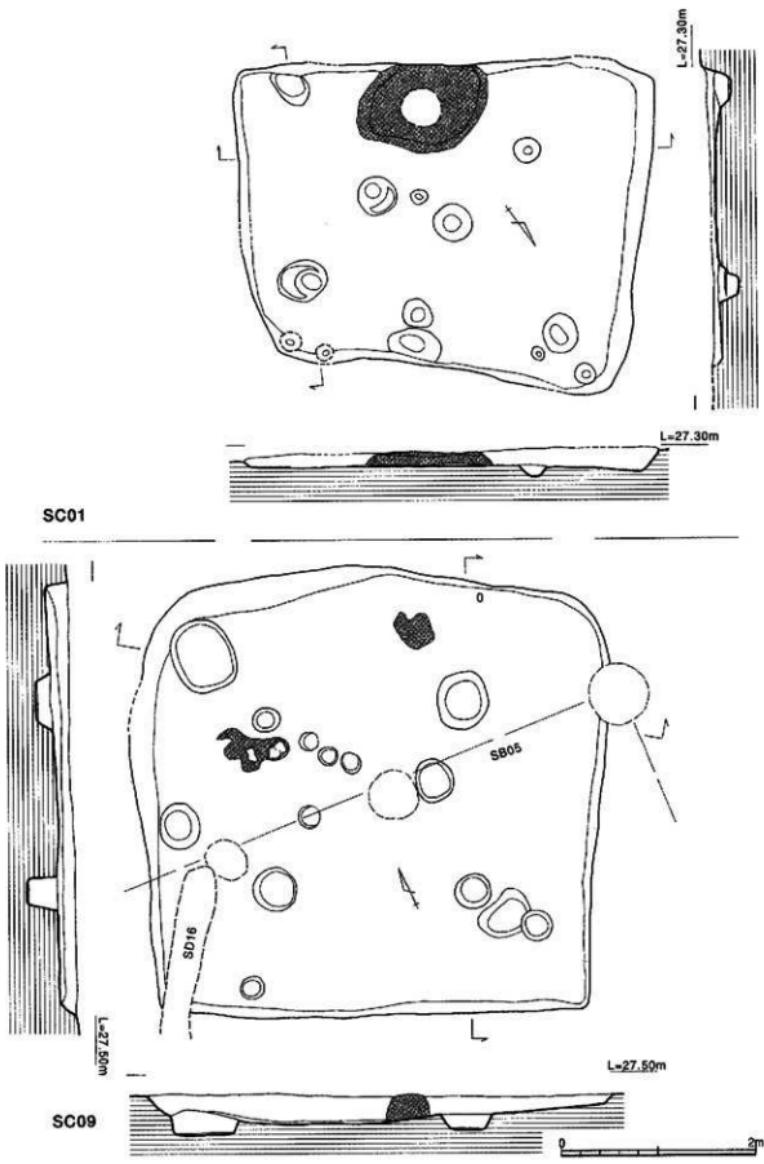


Fig.85 SC01・09実測図 (1/50)

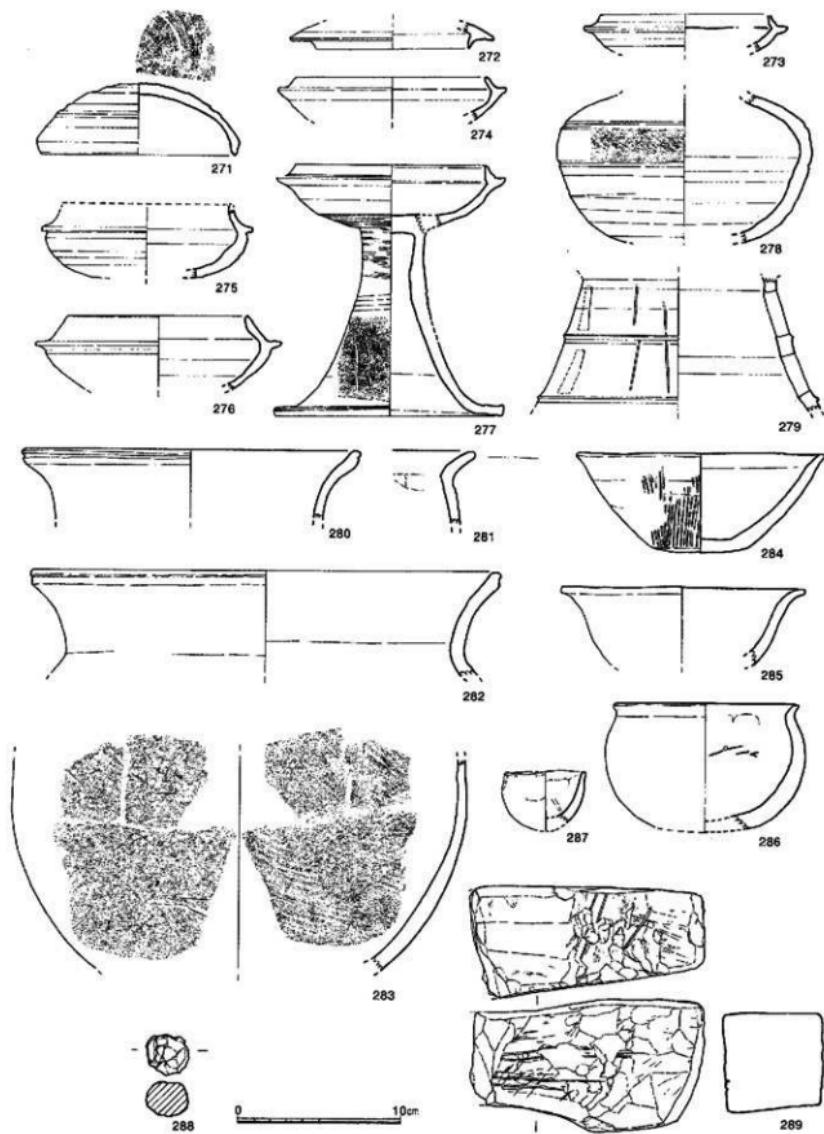
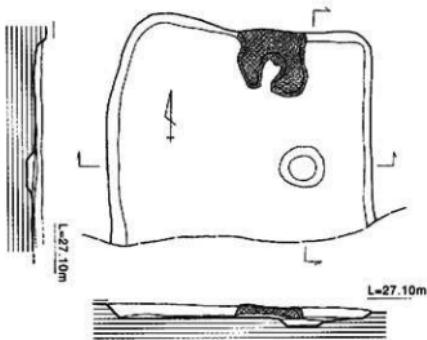


Fig.86 SC01出土遺物実測図 (1/3)

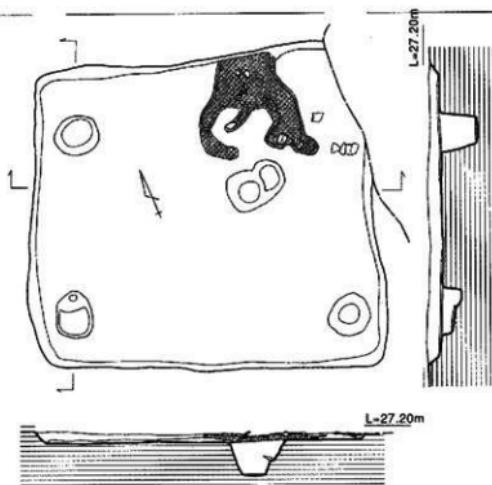
(8) SC09 (fig. 85 pl. 20)

SC09はB群南部の6軒グループの北端に位置する中型住居で、古代の建物SB05と溝SD16に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-72°-Eにとる。規模は4.9×4.9mで床面積は21m²、深さは15cm程を測る。主柱穴は中央寄りの径20~50cm程・柱間1.9~2m程の4穴が対応し、深さ30cm程で浅い。竈は中央北西の75×45cmと北寄りの45×40cmの範囲の2カ所に焼上がり広がる。

遺物の出土は無いが、住居の形態は竈を持つ4柱で定型的であり、I~II期の可能性がある。



SC02



SC05

Fig.87 SC02・05実測図 (1/50)



(9) SC02 (fig. 87 pl. 21)

SC02はB群中央の6軒グループの南端に位置する小型住居で、古代の溝SD03に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-3°-Wにとる。規模は $2.7 \times 2.3\text{m} + \alpha$ で、深さは10cm程を測る。柱穴は中央南東の径50cm・深5cmの1穴のみである。竈は北壁中央の $70 \times 65\text{cm}$ の範囲で焼土が広がり、焚口と燃焼部が10~17cm開く。

SC02出土遺物 (fig. 89)

土師器 291は壺で、復元口径12.0cmを測る。内外面にヨコナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み精良、器壁は薄い。ぶい赤褐色を呈す。290は壺で復元口径15.0cmを測る。口縁内外はヨコナデ、胸部外面はタテハケ内面頸部下は粗いケズリを施し、稜を成す。胎土は極めて粗い石英粒を多量に含み、器壁は薄い。褐色を呈し、外面は煤ける。

須恵器は竈から壺が1片のみ出土しているが、I~II期と思われる。

(10) SC05 (fig. 87 pl. 22)

SC05はB群中央の6軒グループの南端に位置し、SC02の西側に隣接する小型住居で、古代の溝03に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-13°-Eにとる。規模は $3.7 \times 3.3\text{m}$ で、深さは15cm程・床面積約 12.3m^2 を測る。主柱穴は北東が溝に切られ欠失するが、四隅近くの径40cm前後・柱間1.9~2.8m程の4柱式で、深さ20~40cmを測る。竈は北壁中央の $1.25 \times 1.15\text{m}$ の範囲で焼土が広がり、焚口が30cm焼焼部が65cm程開く。この上面・周囲に遺物は集中する。

SC05出土遺物 (fig. 89)

須恵器 292はII期の壺蓋で、復元口径12.8・器高4.2cmを測る。外面体部境は段を成し、以下1/2程に右回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好。灰色を呈し、外面は灰が被る。293は壺の胸部で復元径28.6cmを測る。外面は細めの継ぎの平行タタキ、内面は同心円当具痕を緩くナデ消している。器壁は薄く、胎土は粗い石英粒を若干含み精良、焼成は良好で。灰色を呈する。

土師器 294・295は壺で、294は復元口径13.4器高6.4cmを測る。内外面にヨコナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み精良、器壁は薄い。外面はぶい橙色、内面は黒色を呈す。竈から出土しているが古代の混入の可能性もある。295は復元口径12.4cmを測る。内外面にヨコナデ後丁寧なケンマを施す。胎土は粗い石英粒を若干含み精良、器壁は薄い。外面は灰褐色内面赤褐色を呈す。296は短頸の壺で復元口径8.6cmを測る。内面頸部下は粗いケズリを施し、他は器壁が荒れ調整不明。胎土は極めて粗い石英粒を多量に含み、器壁は薄い。赤~褐灰色を呈し、外面は煤ける。297は鉢で復元口径17.8cmを測る。外面にはヨコハケ後ヨコナデ、内面はヨコナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒を若干含み精良、器壁は薄く、灰褐色を呈す。

時期はII期である。

(11) SC12 (fig. 88 pl. 22)

SC12はB群中央の6軒グループの西寄りに位置し、SC05の西側に隣接する。平面は方形プランで、長軸方向はN-78°-Wにとる。規模は $4.65 \times 4.6\text{m}$ で、深さは15cm程・床面積 19.2m^2 を測る。主柱穴は中央寄りの径30~40cm・柱間2.5~2.1m程の4柱式で、深さ15~30cmを測る。北東側に矩形に幅1.5m高さ10cm弱のベッド状遺構を設ける。竈は西壁中央の $1.1 \times 0.75\text{m}$ の範囲で焼土が広がる。

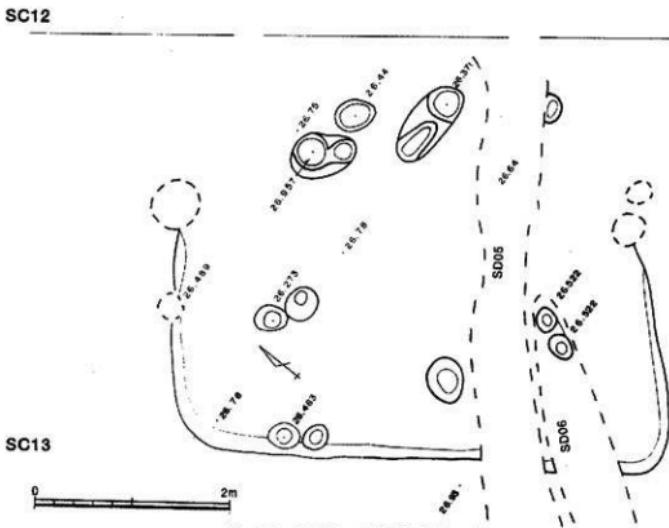
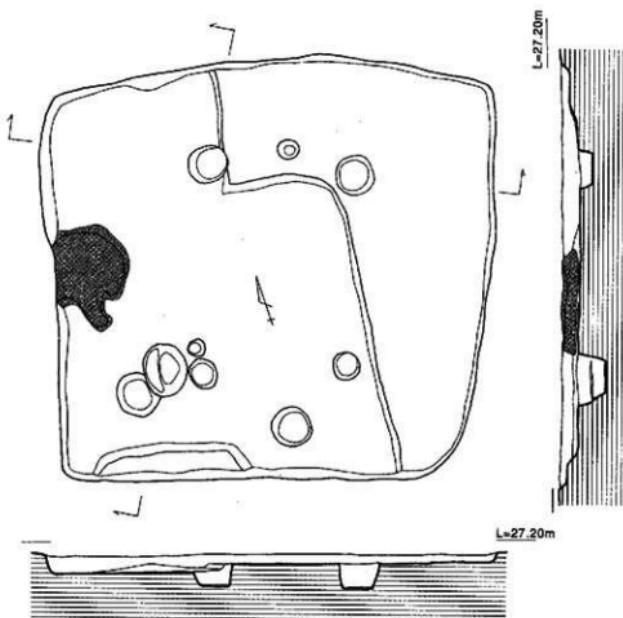


Fig.88 SC12・13実測図 (1/50)

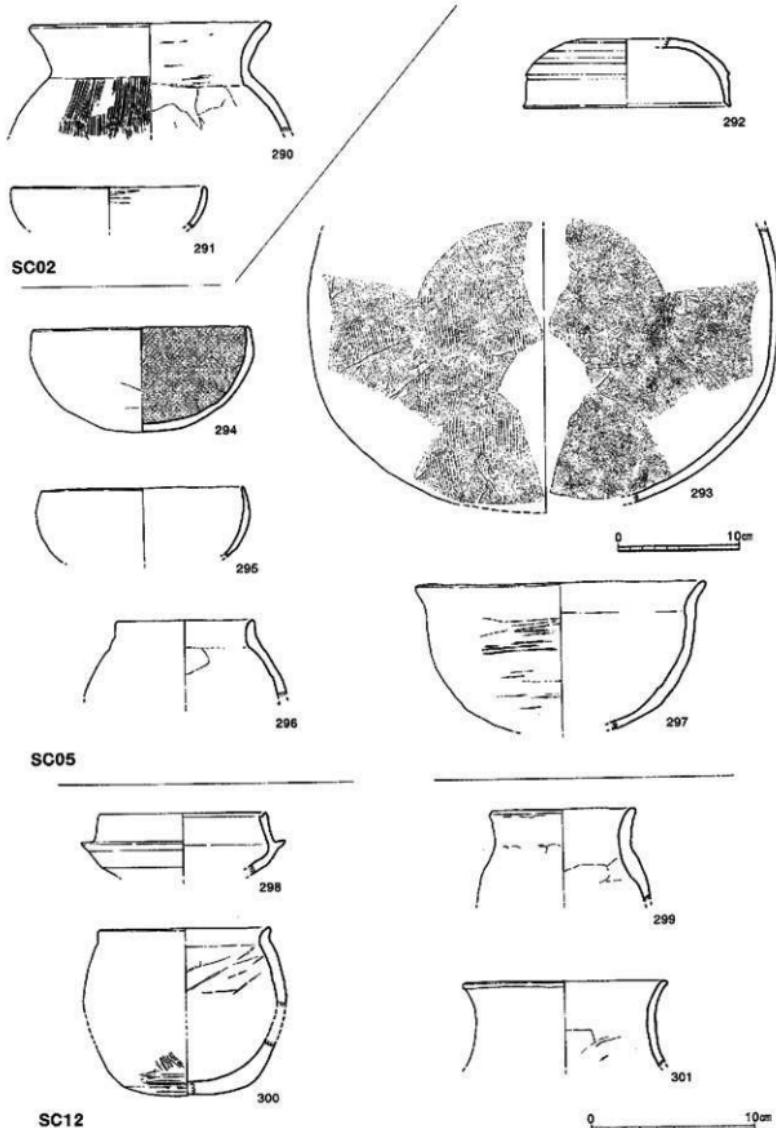


Fig.89 SC02・05・12出土造物実測図 (1/3・1/4)

SC12出土遺物 (fig. 89 pl. 39)

須恵器 298はⅠB期の坏身で復元受部径12.4cm。外面の稜は高く、以下2/3には左回転ケズリを施す。口唇内面は沈線を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で体外面は黒灰色を呈す。

土師器 299～301は小型の壺で、299は復元口径9.0cm。内面頸部以下にケズリを、他は器壁が荒れ調整不明。胎土は粗い石英粒をやや多く含み褐灰色を呈す。300は復元口径10.4・器高約10cm。外面はハケ後ヨコナデ口縁内面はヨコナデ、頸部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み褐灰色を呈し、外面は煤ける。301は復元口径12.6cm。内面頸部以下にケズリを、他はヨコナデを施し、器壁は薄い。胎土は粗い石英粒をやや多く含み褐灰色を呈す。

鉄滓 (pl. 39) 544は小削した緻密な炉底塊で $2.4 \times 2.4 \times 1.5\text{cm}$ 15gを測る。

時期はⅠB期である。

(12) SC13 (fig. 88)

SC13はB群中央の6軒グループの西端に位置し、溝SD05・06に切られ、東部は削半される。平面は方形プランで、長軸方向はN-36°-Wにとる。規模は $5.0 \times 2.2\text{m} + \alpha$ で、深さは15cm程。主柱穴は中央寄りの径30～40cm・柱間1.5～2.5m程の4柱式である。竈の有無は不明。

遺物は須恵器の小片等のみだが、住居の形態は4柱で定型的であり、Ⅰ～Ⅱ期の可能性がある。

(13) SC03 (fig. 90 pl. 23)

SC03はB群中央の6軒グループの中央に位置し、建物SB03に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-85°-Wにとる。規模は $4.6 \times 4.1\text{m}$ で、深さは10cm程。床面積は15.1m²を測る。主柱穴は中央寄りの径50～75・深35～50cm・柱間1.6～1.8m程のしっかりした4柱式である。竈は西壁中央に85×60cm程の範囲に焼土が広がる。

SC03出土遺物 (fig. 91 pl. 39)

須恵器 302はⅢA期の坏身で口縁全周の1/10が残存し、復元受部径15.2cmを測る。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成はあまり。明青灰色を呈す。303は高环脚で径12.4cmを測る。脚端内面に返しが付く。胎土は細かな石英粒を少量含み精良。焼成は還元焼成がなされず、浅黄橙色を呈す。

土師器 304は坏で、ほぼ完形。口径14.7器高約6cm。ヨコナデ後ケンマを施すが、煮沸に用いて外底は燃せて器壁が荒れる。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、外面はにぶい赤橙色内底面は黒褐色を呈す。305はほぼ完形の壺で、口径29.6器高28.2cm。外面はタテハケ後綾いヨコナデ、内面は頸部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み褐灰色を呈す。外面は煤ける。306は軟質系の瓶で、復元口径10.4器高約10cm。肩部外面は縱位の平行タタキ、内面はケズリ後丁寧なナデを施す。底部には径1.5cm程の蒸氣孔を数個穿つ。胎土は粗い石英粒・赤色粒を多く含み明褐灰色を呈す。

土製品 307は土師器胴部片を用いた土器片円盤で、長径3.5厚0.7cm重量8gを測る。

時期はⅢA期である。

(14) SC04 (fig. 90 pl. 24)

SC04はB群中央の6軒グループの北に位置する。SC03に隣接し、これに類似する。平面は方形プランで、長軸方向はN-75°-Wにとる。規模は $4.75 \times 4.15\text{m}$ で、深さは5cm程。床面積は15.1m²を測る。主柱穴は中央寄りの径60cm前後・柱間2～2.2m程のしっかりした4柱式である。深さも50～75cmとしっかりしている。竈は西壁中央に若干離れて110×60cm程の範囲に焼土が広がる。

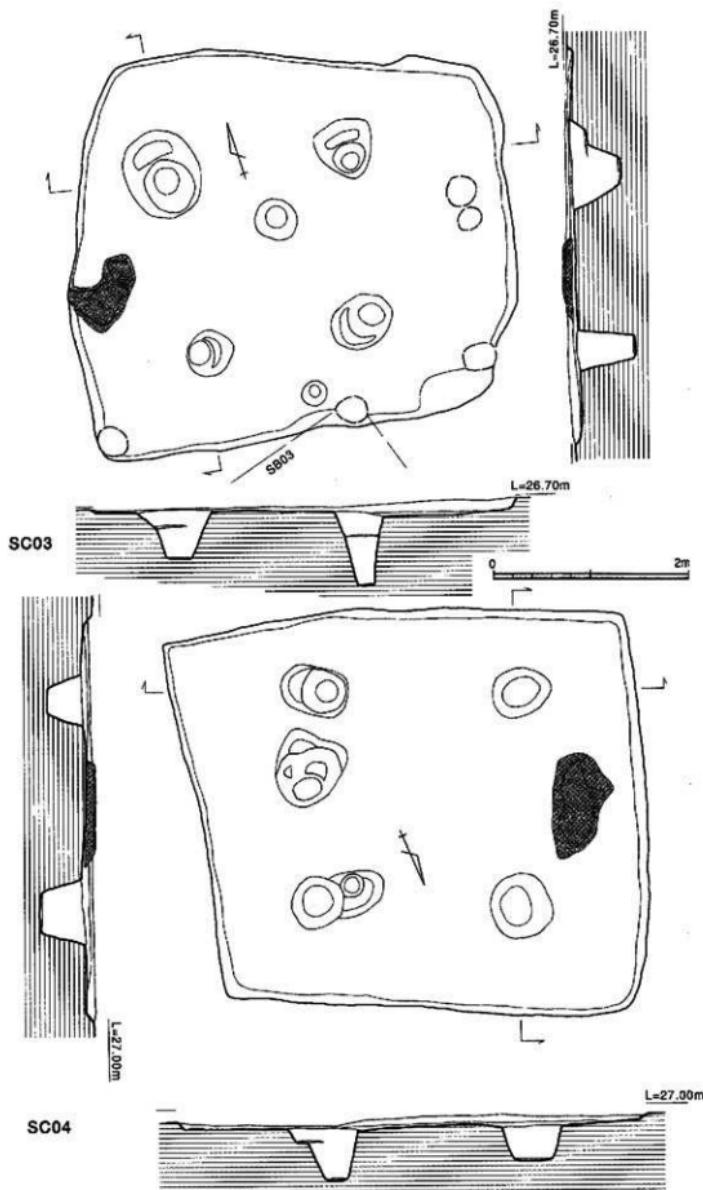


Fig.90 SC03・04実測図 (1/50)

SC04出土遺物 (fig. 91)

須恵器 308はⅢA期の坏蓋で復元口径13.2・器高3.0cmを測る。外面体部境は沈線を成し、以下1/2程に回転ケズリを施す。口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好。外面暗灰色、内面紫灰色を呈す。309はⅢA期の坏身で復元受部径13.6cmを測る。胎土は粗い石英粒を少量含み、器壁は薄い。焼成は良好で、明灰色を呈し体外面は暗灰色を呈す。

縄釉陶器 310は径12~14cm程の壺胴部の小片で、 3.5×2.7 厚0.7cmを測る。胎土は精良で灰色、釉は明緑色で、外面は厚く内面は薄く施釉する。焼成は須恵質で良好。住居内から古代の資料は検出されていないが、周囲に古代の遺構も多く、混入品の可能性も否めない。

時期はⅢA期である。

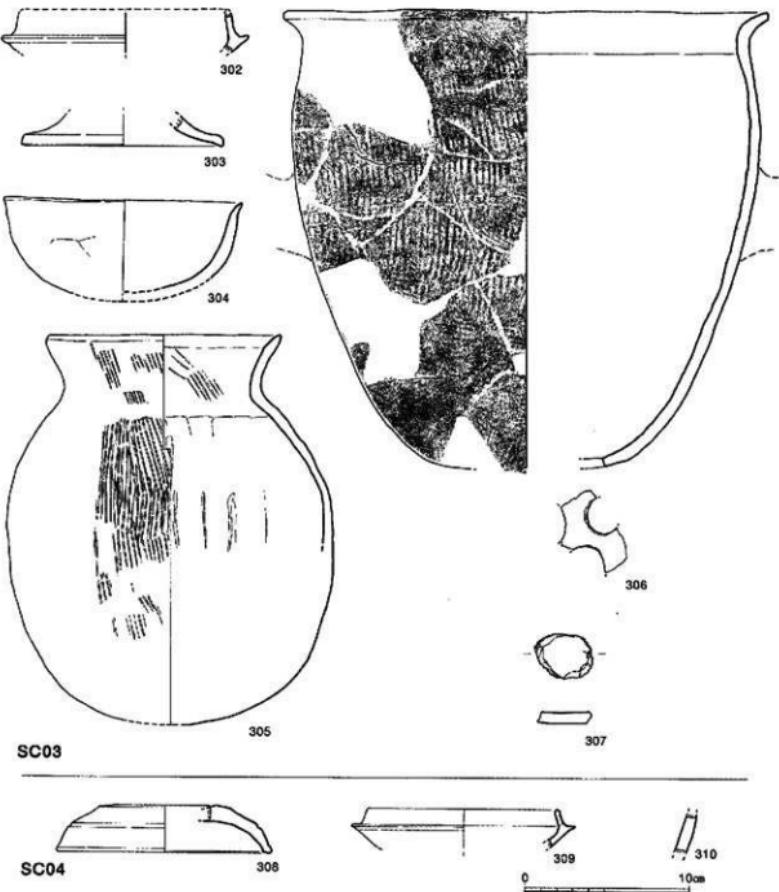


Fig.91 SC03・04出土遺物実測図 (1/3)

(15) SC60 (fig. 92)

SC60はB群南東にSC61と2軒で位置する。古代の建物SB28に切られる。平面は長方形プランで、長軸方向はN-49°-Wにくる。規模は4.9×3.0mで、深さは15cm程。床面積は11.9m²を測る。柱穴は径20cm前後のものが4穴有るが、主柱穴は明確でない。窓は持たない。

SC60出土遺物 (fig. 93)

須恵器 311はⅠB～Ⅱ期の坏蓋で復元口径11.6cmを測る。口唇内面には沈線を施す。胎土は石英粒を少量含み精良。焼成は良好で、灰色を呈す。312はⅠB期の高坏脚部で復元径10.2cmを測る。幅2.2cmの方形透かしを穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈す。

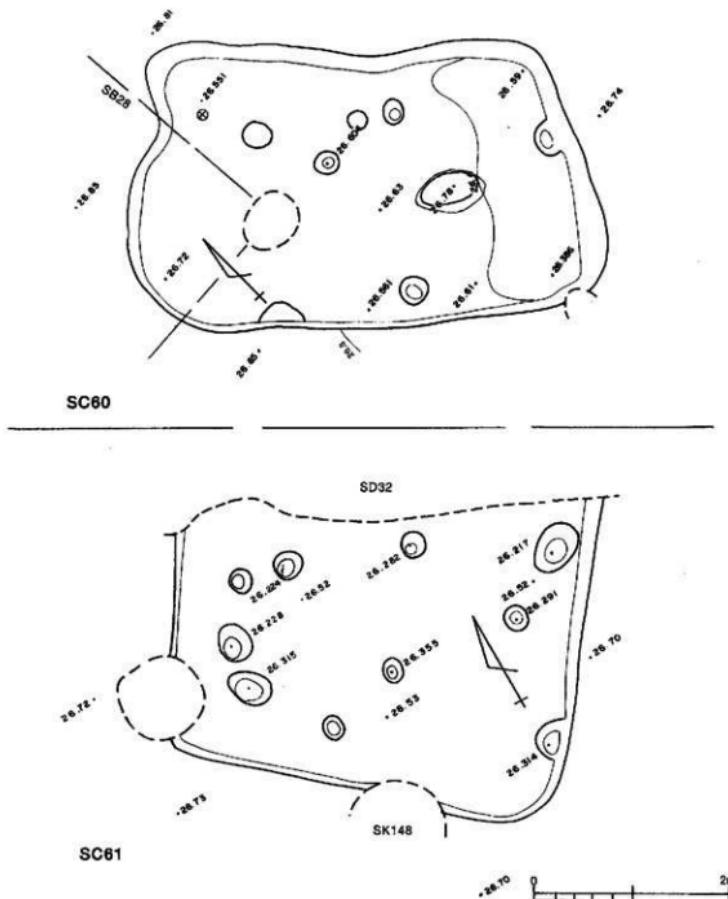


Fig.92 SC60・61実測図 (1/50)

土器 313は小型の短頸壺で、口径13~14cm前後を測る。口縁内外はヨコナデ、内面頸部以下に粗いケズリを施し、稜を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み外面はぶい赤褐色内面は黒褐色を呈す。外面は焼ける。314は壺で、復元口径10.2器高約6.5cmを測る。外底と内面下半にケズリ痕が残るが、他は器整が荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒・赤色粒を多く含み、浅黄褐色を呈す。315は大型の壺で、復元口径25.4cmを測る。口縁内外はヨコナデ、胴部外面は粗いタテハケ、内面頸部以下にケズリを施す。胎土は極めて粗い石英粒を多く含み、外面は橙色・内面は暗褐色を呈す。

時期はⅡ期と思われる。

(16) SC61 (fig. 92)

SC61はB群南東にSC62と2軒で位置する。古代の溝SD32・上塙SK148に切られる。平面は長方形プランで、長軸方向はN-51°-Wにとる。規模は4.2×3.4mで、深さは15cm程を測る。柱穴は径20~40cm前後のものが10穴有るが、定型的な位置にはない。竪は持たない。

SC61出土遺物 (fig. 93 pl. 39)

土器 316・317は壺で、316は復元口径12.9器高5.2cmを測る。外面はヨコナデ後2/3以下をケズリ、内面はヨコナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み、淡黄褐色を呈す。317は復元口径10.8器高約7cmを測る。外面はヨコナデ後下半をケズリ、口縁外面は面取りする。内面は下半をケズリ後ヨコナデを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、淡黄褐色を呈す。

須恵器は出土していないが、I~II期か。

(17) SC62 (fig. 94)

SC04はB群の中央で、SC03の東側に位置する中型住居。建物SB31に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-61°-Wにとる。規模は5.0×5.2mで深さは10cm程、床面積は26.2m²を測る。柱穴は径20~50cm前後のものが10数穴有るが、定型的な位置にはない。竪は西壁中央に1.1×1.0mの範囲に焼土が広がる。

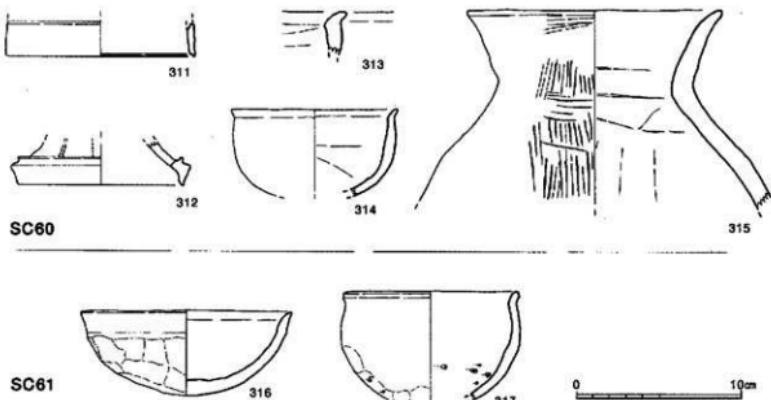


Fig.93 SC60・61出土遺物実測図 (1/3)

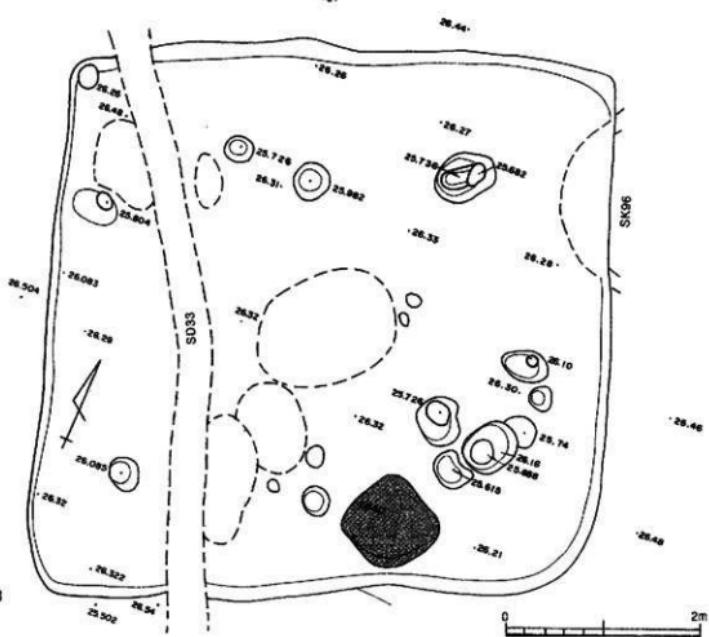
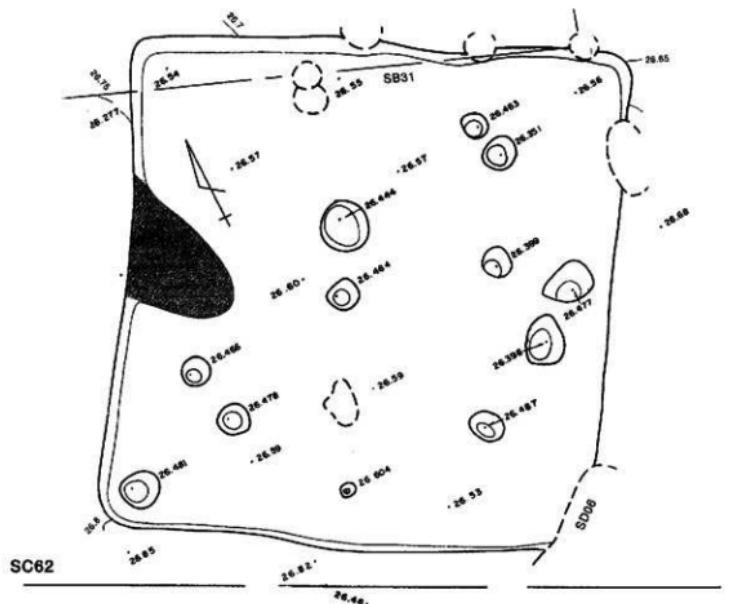


Fig.94 SC62・63実測図 (1/50)

SC62出土遺物 (fig. 95 pl. 39)

須恵器 318・319は壺蓋で、318はⅠB～Ⅱ期の口縁小片で外面にカキメ、口唇内面には沈線を施す。胎土は細かな石英粒を少量含み精良。焼成は良好で灰色を呈す。319はⅣ期で復元口径12cm。口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で灰色を呈す。320は大壺のII縁で、端部が肥厚し外面に突出する。上位にカキメ後横描波状文を、下位の凹線上にカキメ工具の連続刺突文を施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で外面は黒灰色を内面は暗灰色を呈す。

土師器 321・322は壺で、321は復元口径14.4器高5.5cm。外面はヨコナデ後下半にヨコハケ内面はヨコナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み橙色を呈す。322は復元口径12.3器高4.6cm。外面はヨコナデ後下半にケズリ内面はヨコナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含みにぶい橙色を呈す。323～326は高壺、323は壺部で復元口径15.5残存高5.5cm。外面はハケ後ヨコナデ内面はヨコナデ後緩いケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含む。煮沸に転用しており外面は火熱のため暗赤褐色を呈し焦げる。内面II縁部は炭素を吸着し黒褐色を呈す。324も壺部の転用品で復元口径16.4残存高6cm。外面はタテハケ後緩いヨコナデ・ケンマ内面はヨコハケ後ヨコナデ・緩いケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含みにぶい橙色を呈す。325も壺部の転用品ではほぼ完形。口径17.3残存高5.7cm。外面はタテハケ後ヨコナデ内面はナナメ・ヨコハケ後ヨコナデを施す。脚破断面は軽く面取りする。胎土は粗い石英粒を少量含み精良。にぶい黄橙～橙色を呈す。326は復元口径13.8残存高5.3cm。

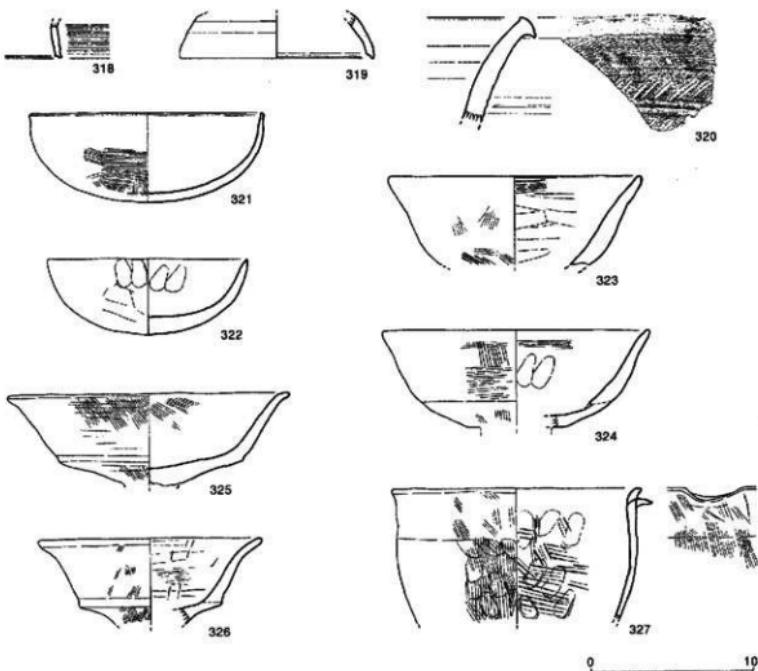


Fig.95 SC62出土遺物実測図 (1/3)

体部境は稜を成し、粗い調整でタテハケ後緩いヨコナデ内面はヨコハケ後ヨコナデ・ケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含みにぶい橙色を呈す。327は壺で復元口径15.8cm。調整は粗く口縁内外はヨコナデ後口唇を3.5cm程歪めて片口をつくり、外面体部はタテハケ内面頸部下にはケズリを施す。器壁は薄い。胎土は粗い石英粒・赤色粒を少量含み灰褐色を呈し外面が焼ける。

時期はⅣ期である。

(18) SC63 (fig. 94 pl. 24)

SC63はB群の中央で、SC62の北側に位置する中型住居。土壙SK96を切り、古代の溝SD33に切られる。平面は方形プランで長軸方向はN-20°-Wにとる。規模は5.8×5.8mで深さは20cm程、床面積は31.3m²を測る。柱穴は径50cm前後で柱間2.5mの、北東・南東隅に近い2穴が対となる4柱式と思われる。窓は南壁中央付近に0.95×1.0mの範囲に焼土が広がる。

SC63出土遺物 (fig. 96 pl. 40)

須恵器 328・329は壺蓋で、328はⅠB期で復元口径12.8器高4.5cmを測る。体部外縁の稜は緩く、体部の1/3に回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。外面は灰を被る。329はⅠB期で復元口径11.6cmを測る。体部外縁の稜は緩く、口縁内面は沈線を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。Ⅳ期で復元口径12cmを測る。口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で灰色を呈す。330～332は壺身で、330はⅠB期で、復元受部径13.2cmを測る。体外面2/3には回転ケズリを施す。胎土は石英粒を少量含み精良、焼成は良好で淡灰色を呈す。331はⅠB期で、復元受部径12.6・器高4.2cmを測る。境の稜は高く口唇内面は沈線を成す。体外面1/2には回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈す。332はⅠB期で、復元受部径12.6cmを測る。境の稜は高く口唇内面は面取りする。体外面1/2には回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色、体外面は暗灰色を呈す。333～335は高脚壺で、333はⅠB期で復元径8.3cm。高い返しの脚端上に方形透かしを3カ所穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色、外面は灰を被る。334は脚端部が丸く肥厚する古い器形で、径14～15cm前後。方形と思われる透かしを穿つ。胎土は精良。焼成は良好で暗灰色、断面紫灰色を呈す。ⅠA期か。335はⅠB期で復元径9.2cm。返しのある脚端上に円形透かしを3カ所穿つ。胎土は細かい石英粒を少量含み、焼成は良好で淡灰色を呈す。

土器 336・337は壺で、336は復元口径14.6器高5.1cm。内外面はヨコナデ後緩いケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み橙色を呈す。337はほぼ完形で口径12.2器高5.3cm。内外面はヨコナデ後緩いケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み外縁は橙色内面は黄橙色を呈す。338～343は壺で、338は短頭で球形の胴に小さな平底が付く。1/2弱が残存し、復元口径13.3・胴径23・器高23.6cmを測る。口縁内外はヨコナデ、胴部外面は木目直交の平行タタキ後下半を緩いヨコナデ、内面頸部以下にケズリを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、暗黄橙色を呈す。339は復元口径15cmを測る。内面頸部以下にケズリを施し、他はヨコナデを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい黄橙色を呈す。340は口縁全周の3/4が残存し口径17.8cmを測る。内面頸部以下にケズリを施し、他は器壁が荒れ調整は不明。胎土は細かな石英粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈す。341は口縁が高く延び、口縁全周の1/6が残存し、復元口径18.6cmを測る。口縁内外はヨコナデ、胴部外面はタテハケ後ヨコナデ、内面頸部以下にケズリを施す。胎土は細かな石英粒を多く含み、にぶい橙色を呈す。342は短頭の小型品で、口縁全周の1/6が残存し復元口径12.6cmを測る。内面頸部以下にケズリを施し、他はヨコナデを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、外面は火熱のため橙色を、内面はにぶい褐色を呈す。343は短頭

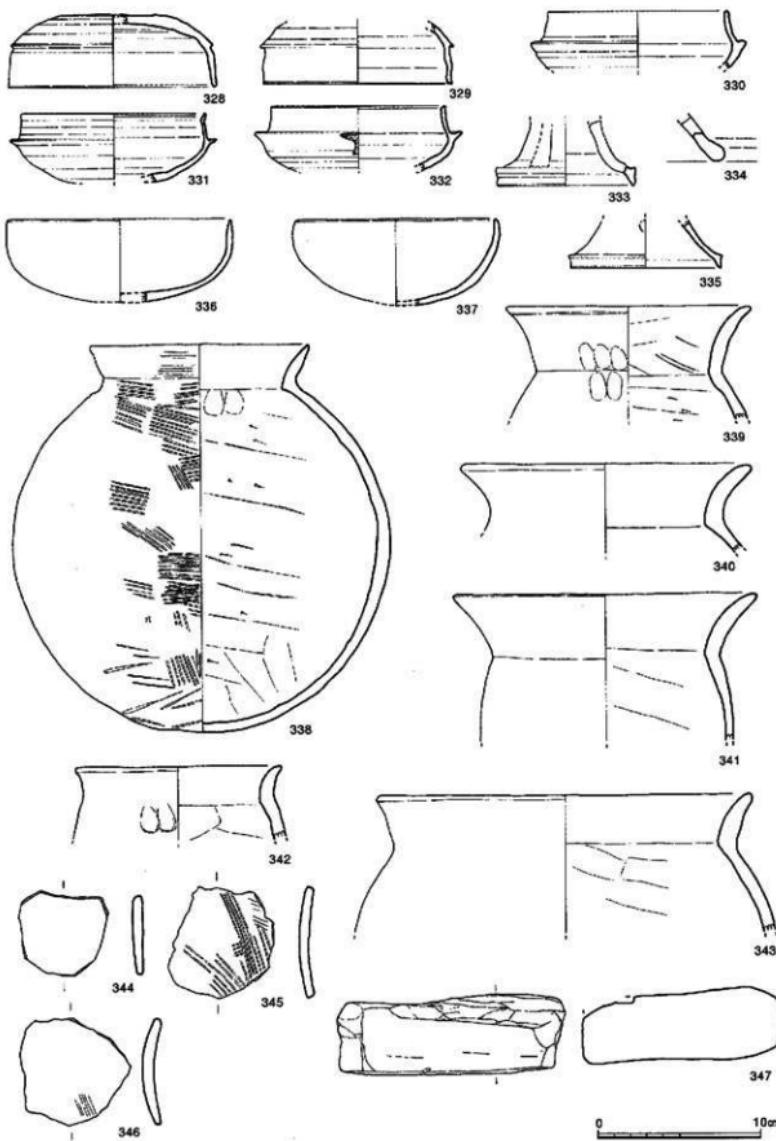


Fig.96 SC63出土遺物実測図 (1/3)

の大型品で、口縁全周の1/6が残存し復元口径23cmを測る。内面頸部以下にケズリを施し、他は器壁が荒れ調整は不明。胎土は細かな石英粒をやや多く含み、にぶい黄橙色を呈す。

土製品 344～346は土師器胴部片を用いた土器片円盤で、主に外面からの打裂で円形に整形する。344は一部を欠くが、長径5.5厚0.6cm重量26gを測る。345も一部を欠くが、長径6.8厚0.6cm重量37gを測る。346は長径6.6厚0.7cm、一部を欠くが重量37gを測る。

石器 347は暗灰色の凝灰質安山岩ホルンフェルス製の仕上げ砥石で、節理に沿って破損し、上面のみが砥面としている。残存で高12.3幅4.3長14.0cmを測る。

時期はⅠB期である。

(19) SC64 (fig. 97 pl. 25)

SC64はB群の北側、8軒グループの西に位置する中型住居で、平面は方形プランで長軸方向はN-2°-Eにくる。規模は5.1×4.8mで深さは10cm程、床面積は21.4m²を測る。主柱穴は中央寄りの径20～30cm・柱間2.1～2.6m程の4穴が対応する。竈は北壁中央の90×90cmの範囲に焼土が広がる。

遺物の出土は無いが、住居の形態は竈を持つ4柱で定型的であり、Ⅰ～Ⅱ期の可能性がある。

(20) SC68 (fig. 97 pl. 25)

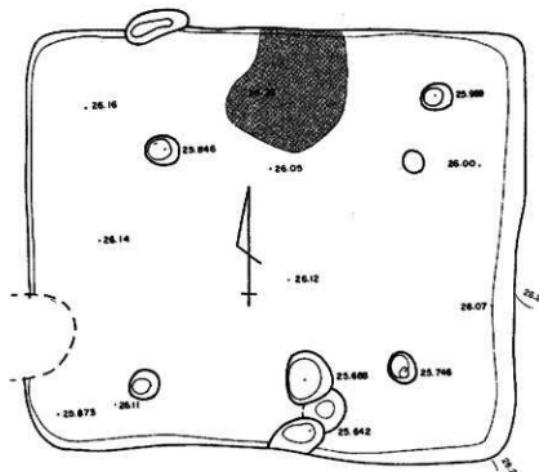
SC68はB群の北側8軒グループの集中部西に位置し、土壌SK105を切る。平面は方形プランで長軸方向はN-13°-Wにくる。規模は5.1×5.1mで深さは5cm程、床面積は24.5m²を測る。四壁に沿って柱穴が多数有るが、主柱穴は中央寄りの一回り大きな径35～60cm柱間2.3～2.9m程の4穴が対応すると思われる。竈は北壁中央の100×90cmの範囲に焼土が広がる。

SC68出土遺物 (fig. 98 pl. 40)

土師器 348・349は环で、348は口径12.4器高5.8cmを測る。内外面はヨコナデ後継いケンマを施し、体外面下半はヘラケズリを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、にぶい橙色を呈す。内外ともに器壁が荒れる。349は口径13.2器高5.0cmを測る。体外面下半はヘラケズリを施し、他は器壁が荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒を少量含み、にぶい橙色を呈し外底は灰黄褐色を呈す。350～354は甕で、350は口縁が高く延び、復元口径24.4cmを測る。外面はタテハケ後口縁部と肩部下半に継ぐヨコナデ、口縁内面はヨコナデ、頸部以下にケズリを施す。器壁は薄い。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい橙色を呈す。351は復元口径13cmを測る。外面はタテハケ後口縁部に継ぐヨコナデ、口縁内面はヨコナデ、11唇内面を面取りする。頸部以下にケズリを施す。器壁は薄い。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、暗灰褐色を呈す。内外ともに器壁が荒れる。352は口径12.8cmを測る。口縁外面が肥厚し、口唇内面はくぼむ。口縁内面はヨコナデ後継いケンマ、頸部以下にケズリを施し、他は器壁が荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、外面はにぶい赤褐色を、内面は黒褐色を呈す。353は短頸の甕で、口径12.2cmを測る。頸部以下にケズリを施し、他は器壁が荒れ調整は不明。胎土は石英粒を多く含み、外面はにぶい赤褐色を、内面は黒褐色を呈す。354は短頸の甕で、口径・胴径とも17cmを測る。外面はタテハケ後口縁部に継ぐヨコナデ、口縁内面はヨコナデ、頸部以下にケズリを施す。器壁は薄い。胎土は極めて粗い石英粒を多く含み、外面は黒灰色内面はにぶい橙色を呈す。

土製品 355は土師器胴部片を用いた土器片円盤で、主に外面からの打裂で円形に整形する。長径5.0厚1.0cm重量30gを測る。破断面は摩滅する。

石器 356は上質の滑石製の沈子で、7.3×4.1×2.0cm72.2gを測る。平面三角形を呈し、上方側面に径8～5mmの孔を貫通させ、紐を絞る様に側面上方に紐受けの溝を彫る。正面下位中央には径7mmの孔



SC64

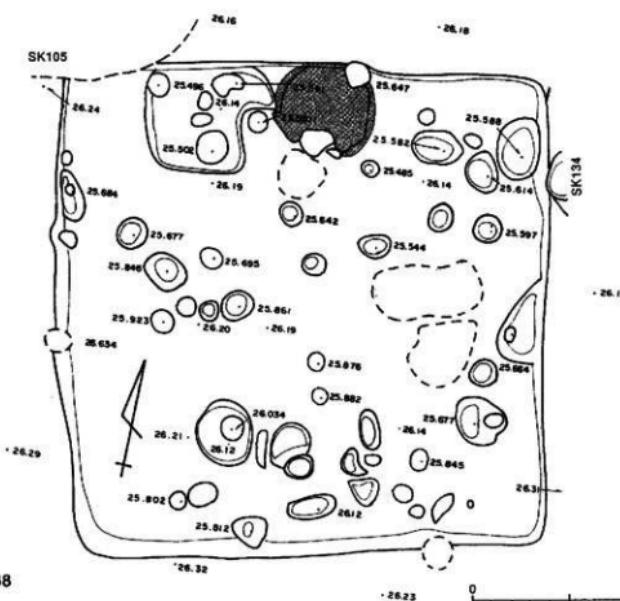


Fig.97 SC64・68実測図 (1/50)

を貫通させ、同位置の両側にこれと平行する幅1~2mmの細い溝を彫る。

他に須恵器の小片が数点出土するが、時期はI~II期と思われる。

(21) SC73 (fig. 99)

SC73はB群の北側8軒グループの集中部中央に位置し、3軒切り合ひの最下位に有り、SC69・72に切られる。平面は方形プランで長軸方向はN-77°-Wにとる。規模は3.1×3.5m + αで深さは20cm程を測る。北側に柱穴が集中するが、主柱穴は明確でない。竪の有無は不明。

SC73出土遺物 (fig. 100 pl. 41)

須恵器 357はI期の壺身で、口縁部を欠く小片で、復元受部径は11.5cm前後を測る。体部境の後は高く、体外面2/3には左回転のケズリを施す。胎土は石英粒を少量含み精良、焼成は良好で暗灰色を呈する。

土師器 358はほぼ完形の壺で、球形の胴に口縁が高く延び、口唇部が緩いS字状を成す。口徑13.9・胴径17.3・器高16.6cmを測る。口縁内外はヨコナデ、胴部外面はタテハケを施し、内面頸部以下はケズリ後緩くナデる。胎上は粗い石英粒を多く含み、にぶい褐色を呈する。外面は火熱のため器壁が荒れ焦げる。359は円筒状の瓶で、同個体と思われる口縁部と底部は接合しない。全周の1/6が残存し復

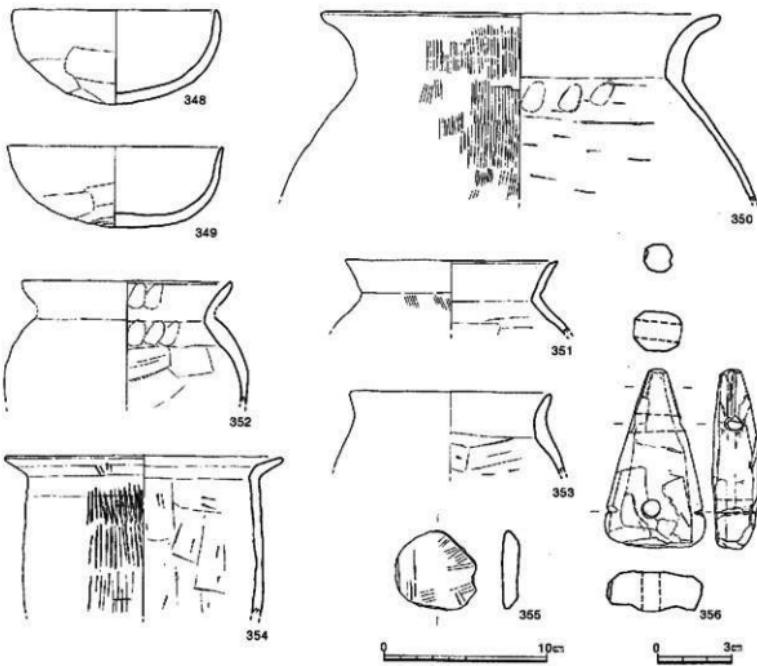


Fig. 98 SC68出土遺物実測図 (1/3・1/2)



Fig. 99 SC73・72・69実測図 (1/50)

元口径30・底径20.6cmを測る。口縁内外はヨコナデ、頸部外面はタテハケを施し、内面頸部以下は軽いケズリを施す。外面体部に把手を付けると思われる。胎土は極めて粗い石英粒・赤色粒を多量に含み、外面は灰黄褐色を内面はにぶい褐色を呈する。

時期はIB期である。

(22) SC72 (fig. 99 pl. 26)

SC72はB群の北側8軒グループの集中部中央に位置し、SC73を切り古代の溝SD40に切られる。平面は方形プランで長軸方向はN-20°-Wにとる。規模は7.1×6.4mで深さは20cm程・床面積約43.4m²を測る。径20~60cm程の柱穴が多数有るが定型的な位置にはなく、主柱穴は不明確。窓は持たない。南西の土壙SP309は弥生中期初頭の遺構である。(fig. 128)

SC72出土遺物 (fig. 100 pl. 41)

須恵器 360はIB期の坏蓋で、全周の1/4が残存し復元口径11.8cmを測る。体部外面境の後は鋭く、体部の3/4に左回転ケズリを施し、口唇内面は凹線を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈する。外面は灰を被る。361はIB期の坏身で全周の1/6が残存し復元受部径10.8cmを測る。体部外面境の後は緩く、体部の1/2に右回転ケズリを施し、口縁内面は緩い沈線を施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈する。362はIB期の無蓋高环坏部小片で外面の三角突帯と沈線間に簾状文を施し、沈線下に回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、焼成は良好で灰色を呈する。363はIB期の高环脚で全周の1/4が残存し復元径7.8cmを測る。端部は返しが袋状に高く伸び、脚外面下半にカキメを施し、方形透かしを4カ所穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み精良、焼成は良好で暗灰色を呈する。

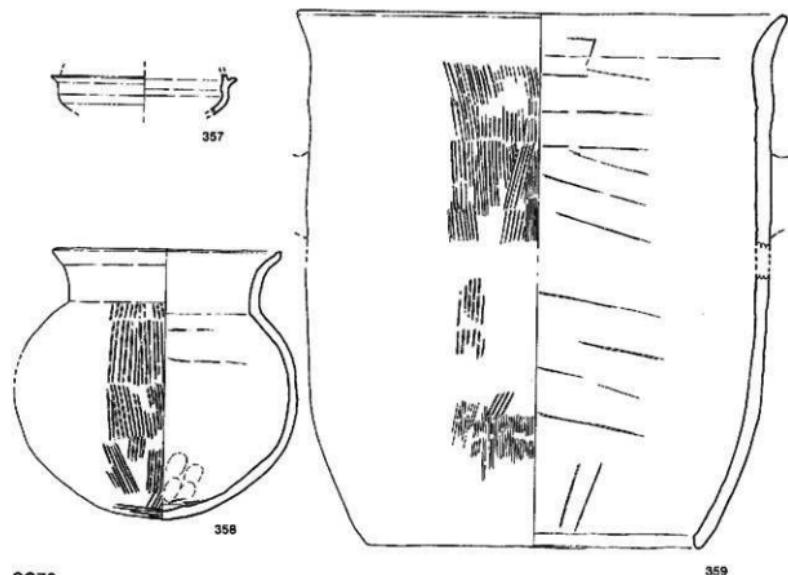
土師器 364・365は坏で364は口径11.0cmを測る。内外面はヨコナデを施し、体外面下半はヘラケズリを施す。胎土は粗い石英粒を含み橙色を呈す。365は口径12.4cmを測る黒色土器で、内外面にナデ・ケンマを施す。胎土は細かな石英粒を含み、暗灰褐色を呈す。366は壺で、口縁外壁が肥厚し下部が段を成す。復元口径17.4cmを測り、口縁内外面はヨコナデ、内面頸部以下にケズリを施す。胎土は極めて粗い石英粒を多く含み外面は暗褐色、内面はにぶい橙色を呈す。369は秋賀系の大型甕形瓶の底部片で、丸底に径3cm程の蒸気孔を数個穿つ。外面はナデ内面はケズリを施す。器壁は厚さ1cmと厚く、胎土は極めて粗い石英粒を多く含み、にぶい橙色を呈す。

土製品 370~373は土器片円盤で、370は須恵器壺脚部片を用いたもので、1/3を欠損するが長径4.7厚0.7cm重量16gを測る。371~373は土器脚部片を用いたもので、371は長径3.5厚0.6cm重量7gを測る。打製で円形に整形後面取りする。372は長径6.0厚0.6cm重量28gを測る。373は長径5.0厚0.6cm重量17gを測る。全て破断面は摩滅する。

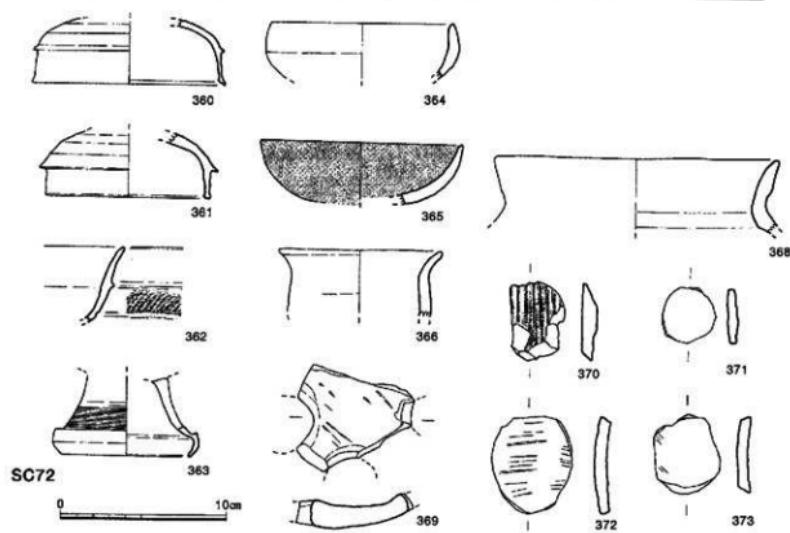
時期はIB期である。

(23) SC69 (fig. 99 pl. 25)

SC69はB群の北側8軒グループの集中部東側に位置し、SC73を切り古代の溝SD37・38に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-62°-Eにとる。規模は7.4×6.7mで深さは30cm程・床面積約48.7m²を測る。主柱穴は四隅から2m程中央寄りの径30cm前後・柱間3.2~3.8m程の4穴が対応するとと思われる。溝に住居中央を切られるため、窓の有無は不明である。出土遺物は完形品も含め多い。



SC73



SC72

Fig.100 SC73・72出土遺物実測図 (1/3)

SC69出土遺物 (fig. 101・102 pl. 41・42)

須恵器 374～377は坏蓋で、374はⅡ期で、ほぼ完形で口径12.4・器高4.9cmを測る。体部の1/2に右回転ケズリを施し、内底には当具痕が残る。口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒を多く含み、焼成は良好で暗灰色を呈する。外面は灰を被る。375はⅠB期で、復元口径12.2cmを測る。体部境の稜は緩く口唇内面は凹線を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で内面は暗灰色を、外面は灰を被り黒灰色を呈する。376はⅠB期で、復元口径11.6cmを測る。体部境の稲は緩く口唇内面は段を成す。体部の3/4に右回転ケズリを施し、胎土は石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈する。377はⅠB期で、復元口径12.6cmを測る。体部境の稜は鋭く口唇内面は凹線を成す。胎土は石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈し外面は灰を被る。378～381は坏身で、378はⅠB期で復元受部径12.0cmを測る。体部外面境の稜は高く、体部の3/4に右回転ケズリを施し、口縁内面は沈線を成す。胎土は石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈する。379はⅡ期で復元受部径12.5・器高4.5cmを測る。体部外面境の稜は緩く、体部の3/4に左回転ケズリを施し、口縁内面は段を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で灰色を体外面は黒灰色を呈する。380はⅡ期で復元受部径13.0・器高4.4cmを測る。体部外面境の稜は緩く、体部の1/2弱に左回転ケズリを施し、口縁内面は沈線を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成はややあく淡灰色を呈する。381～384は高坏で、381は半島系の坏部で、復元受部径13.0・残高2.7・脚上径約8cmを測る。低い器體で、外底部に左回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は還元焼成が成されず、浅黄橙色を呈する。382はⅠB期ではほぼ完形。受部径12.3・残高8.5・脚径約8.8cmを測る。体部外面境の稜は高く、体部の1/3に回転ケズリを施し、口縁内面は段を成す。脚部にはカキメを施し、三角透かしを3ヵ所穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成はややあく、灰～灰白色を呈する。383は同期の脚で、復元脚径8.0残高5.0cmを測る。脚端部の返しは高く、沈線を1条施し、上に方形透かしを3ヵ所穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色、外面は灰を被る。384はⅡ期で、復元脚径8.8cmを測る。カキメを施し、方形透かしを穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈す。385はⅠB期の高环形大型器台の脚部で、復元脚径25cmを測る。据の肩曲部に三角突帯を施しこの上下に櫛描波状文を施す。脚下段には方形透かしを8ヵ所穿つ。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で明灰色を呈す。386は壺の口縁部で復元口径20.8cmを測る。口唇外面下に銳い三角突帯を貼付する。胎土精良で、焼成は良好、暗灰色を呈す。387・388は壺で、387はⅢB期の胴部片で復元径10.4cmを測る。肩部が稜を成して屈曲し、以下にカキメ工具による連続刺突文を施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、焼成は良好で暗灰色を呈し、外面が灰を被る。388はⅠB期の胴部片で、復元径10.0cmを測る。体部はナデ調整で、球形の胴の上位に櫛描波状文を施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で灰色を呈す。

土師器 389～397は壺で、389は軟質系の口縁小片で口縁の端部上下が肥厚して銳い稜を成し、外面端部に凹線を施す。器壁が荒れ調整は不明で、胎土は粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み、にぶい橙色を呈す。器壁は薄い。390も軟質系で、全周の1/6が残存し復元口径15.4cm。同じく口縁端部上下が肥厚して銳い稜を成し、面取りした外面端部に沈線を施す。器壁が荒れ調整は不明で、胎土は粗い石英粒・赤色粒を多く含み、橙色を呈す。器壁は薄め。393も軟質系で、全周の1/6が残存し復元口径19.2cm。口縁端部が湾曲し、端部を面取りして両端が銳い稜を成す。内外面はヨコナデを施し、胎土は粗い石英粒をやや多く含み、浅黄橙色を呈す。394は復元口径24cm。口縁内外面はヨコナデを施し、外面胴部にはハケメが残る。内面頸部下はケズリを施し稜を成す。胎土は粗い石英粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈す。395は復元口径17.2cm。外面はタテハケ後ヨコナデを、口縁内面はヨコハケ後ヨコナデを施し、頸部下は粗いケズリを施し稜を成す。粗い調整で指頭圧痕が残る。胎土は粗い石英粒を

多く含み、にぶい黄橙色を呈す。396は短腹の壺で復元口径14.6cm。口縁外面はヨコナデを、頸部下は粗いケズリを施し縁を成す。粗い調整で指頭圧痕が残る。胎土は粗い石英粒が多く含み、外面はにぶい黄橙色を内面は黒褐色を呈す。397は全周の1/6が残存し復元口径15.2cm。外面はタテハケ後ヨコナデを施し口縁下に浅い沈線を1条施す、口縁内面はヨコナデ後、頸部下はケズリを施し縁を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、器壁は厚い。にぶい黄橙色を呈す。391は高壺で全周の1/2が残存し、復元口径16.8脚径11.0器高11.4cmを測る。体部境は高い段を成し、脚上位は円柱状を呈す。器壁が荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒を多く含み、下半の器壁は厚い。外面はにぶい黄橙色を、内面は橙色を呈す。392は軟質系の緩い平底の大型の鉢で、全局の1/4が残存し、復元口径32底径11器高15cmを測る。外湾する口縁端部を面取りして両端が鋭い稜を成す。口縁内外面はヨコナデ、外面胴部は粗いナメハケ後緩いナデを施し、外底には右燃りの紐圧痕・種子圧痕がある。内面頸部下はケズリを施す。胎土は極めて粗い石英粒・赤色粒を多く含み、器壁は薄い。外面は火熱のため荒れ暗灰褐～暗赤褐色を、内面は黄橙色を呈する。398～400は壺で、398は黒色土器で復元口径12.2器高5.3cmを測る。内外

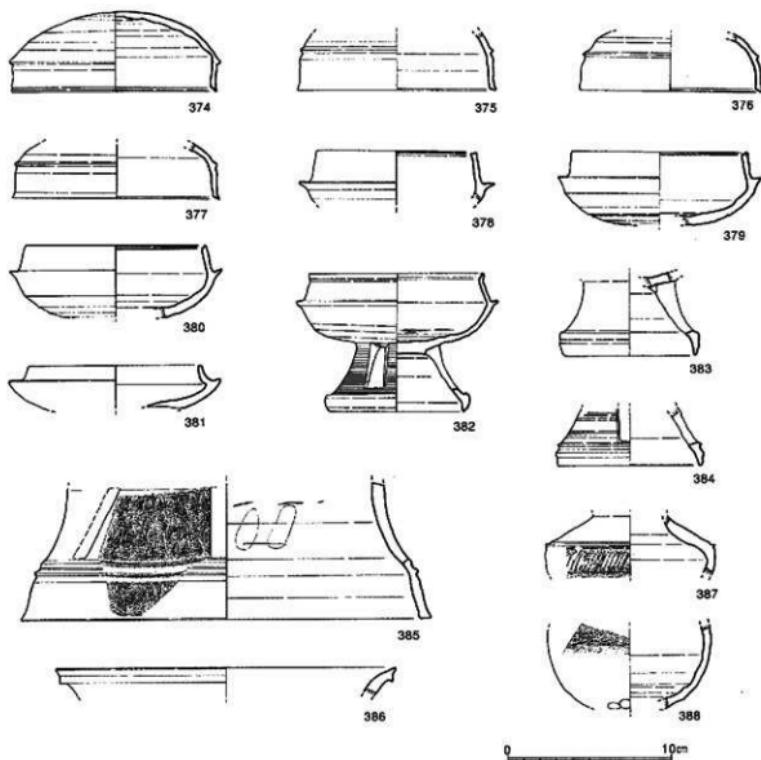


Fig.101 SC69出土遺物実測図.1 (1/3)

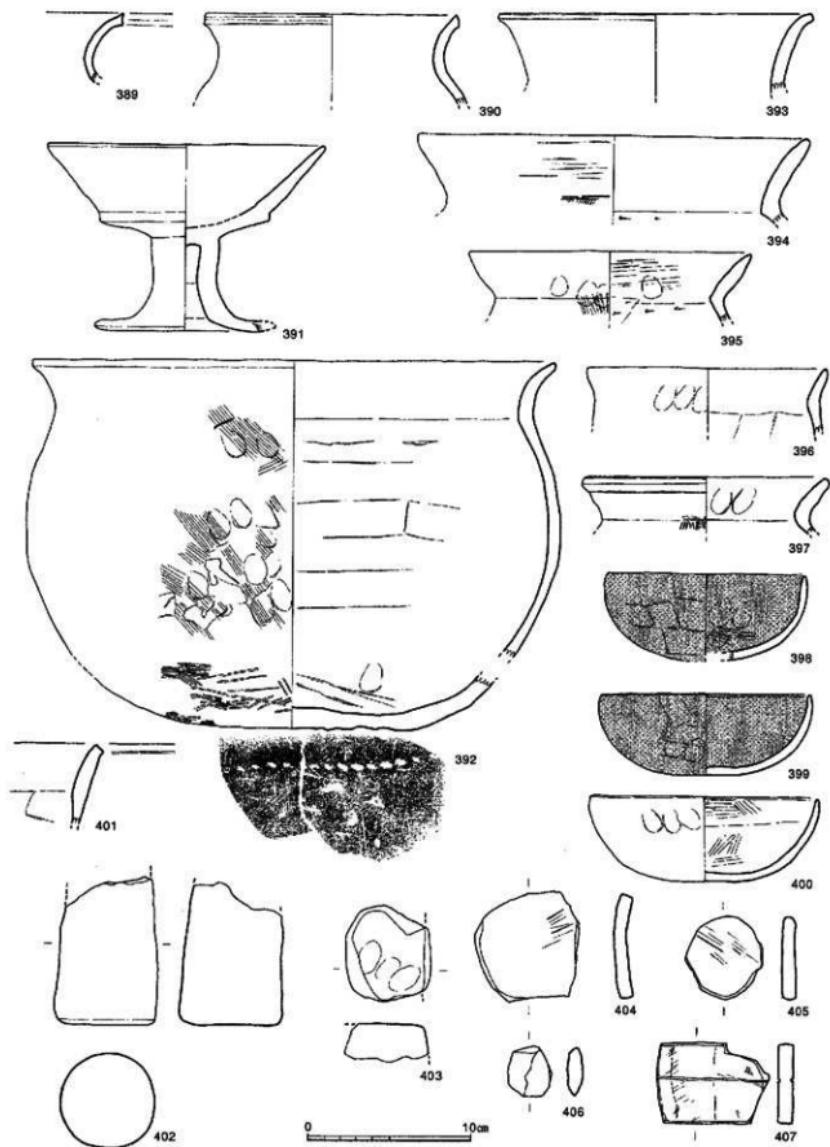


Fig.102 SC69出土遺物実測図.2 (1/3)

面はハケ・ヨコナデ後綾いケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、外面は灰黒色内面は暗褐色を呈す。399も黒色上器で復元口径12.6器高5.0cmを測る。内外面はヨコナデ後綾いケンマを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、外面は灰黒色内面は暗褐色を呈す。内外ともに器壁が荒れる。400はほぼ完形で綾い平底を呈す。II径14.0器高3.4cmを測る。外面はヨコナデ後下半をケズリ、綾いケンマを施す。内面はハケ後ヨコナデ、綾いケンマを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい橙色を呈す。内外ともに器壁が荒れる。401は円筒形瓶II縁部小片で、直口気味の口縁内外面にナデを内面口縁下にヨコケズリを施す。胎土は粗い石英粒を含み、にぶい黄橙色を呈す。402・403は支脚で、402は円柱状で径4.2残高5.9cmを測る。胎土は粗い石英粒を少量含み、にぶい橙色を呈す。器壁が荒れる。403は6角錐状で径5.5残高6.1辺約4cmを測る。胎土は粗い石英粒を多量に含み、にぶい黄橙色を呈す。器壁が荒れる。

土製品 404～406は土器片円盤で、上部器脇部片を用いたもので、404は欠損するが長径7.5厚0.8cm重量50g、405は長径5.0厚0.8cm重量52g、406は長径3.0厚0.8cm重量8gを測る。

石器 407は明灰色の凝灰質安山岩ホルンフェルス製の仕上げ砥石で、4.6×3.3×0.6cmを測る。

時期はIB期～II期である。

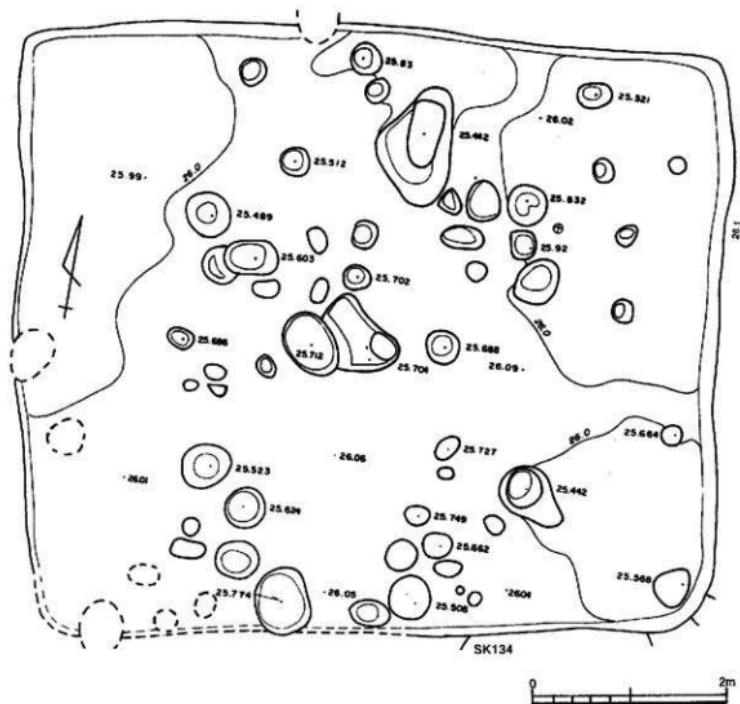


Fig.103 SC65実測図 (1/50)

(24) SC65 (fig. 103 pl. 25)

SC65はB群の北側8軒グループの集中部西側に位置する中型の住居で、SC68の北側に隣接し、土塙SK134を切る。平面は方形プランで、長軸方向はN-81°-Eにくる。規模は7.2×6.3mで深さは10cm程・床面積約44.2m²を割る。主柱穴は四隅から2m程中央寄りの径40cm前後・柱間2.6~3.3m程の4穴が対応すると思われる。竈は持たない。出土遺物は少ない。

SC65出土遺物 (fig. 104 pl. 41)

須恵器 408はI期の壺身で、復元受部径12.6・器高5.3cm。体部外面境の後は高く体部の2/3に左回転ケズリを施し、口縁内面は浅い沈線を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成はややあまく灰色を呈す。409はI期の把手付鉢で、復元口径10.4cm。肩部に緩い三角突帯2条、体部に1条施し、この間に櫛指波状文を施す。胎土は精良で紫灰色を呈し、内外面は暗灰色を呈する。

土師器 410は軟質系の壺で、口縁全周の3/4が残存し口径22.8・底径8.2cmを測る。平底の底部とは接合しない。高く延びる口縁端部上下が肥厚して上端は鋭い稜を成し、内面をくぼませる。面取りした外縁端部に凹線を施す。内面頸部下はケズリで棱を成し、他はヨコナデを施す。器壁は薄く、胎土は極めて粗い石英粒・赤色粒を多く含み、浅黄橙色を呈し、外面は煤ける。

土製品 411は土器片円盤で、土師器胴部片を用いたもので、長径6.0厚0.6cm重量28gを測る。

時期はI期である。

(25) SC71 (fig. 105 pl. 26)

SC71はB群の北側8軒グループの集中部北側に位置する中型の住居で、SC72の北側に隣接し、古

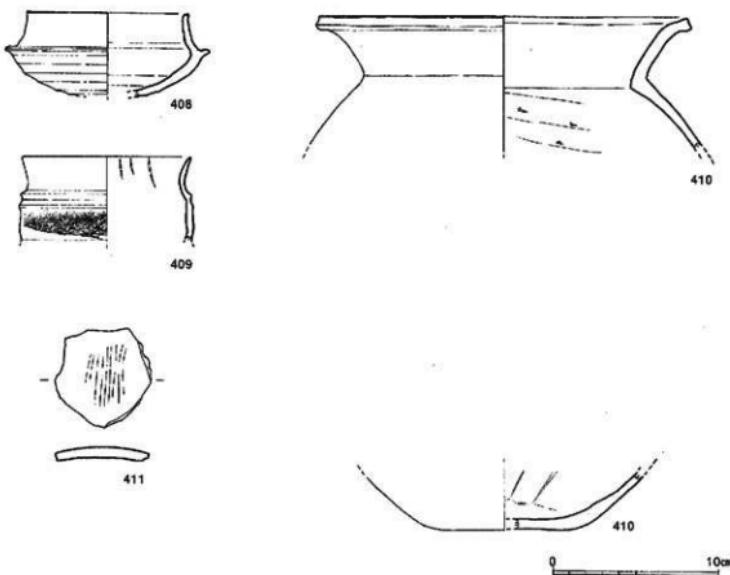


Fig.104 SC65出土遺物実測図 (1/3)

代の溝SD40と土塙SK132に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-6°-Eにとる。規模は6.3×6.9m + αで深さは10cm程・床面積約39.3m²を測る。主柱穴は四隅から2m程中央寄りの径20~50cm前後・柱間2.9~3.4m程の4穴が対応すると思われる。竪は南壁中央に1.4×1.8mの範囲に焼土が広がる。

出土遺物は同化に堪えない須恵器・土師器小片で、遺物は少ない。住居の形態は竪を持つ4柱で定型的であり、I~II期の可能性がある。

(26) SC66 (fig. 106 pl. 26)

SC66はB群の北側8軒グループの北端に位置する中型の住居で、SC71の北側に隣接し、古代の溝SD40に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-79°-Wにとる。規模は5.85×5.5mで深さは30cm程・床面積約30.1m²を測る。柱穴は径20~30cm前後のものが10数穴有るが定型的な位置はない。竪は西壁中央に1.7×1.3mの範囲に焼土が広がる。歪な平面を呈しており、廃棄時に破壊されたもの様である。出土遺物は多い。

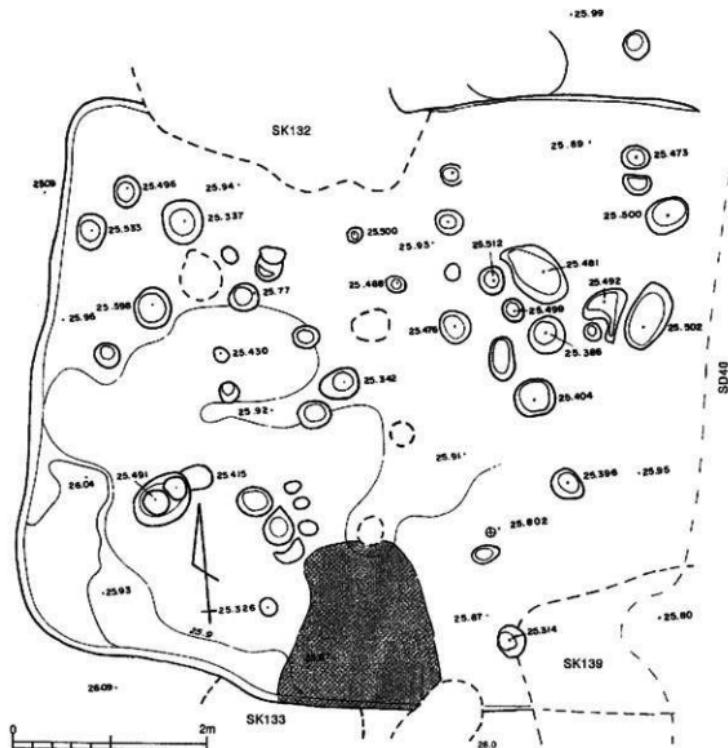
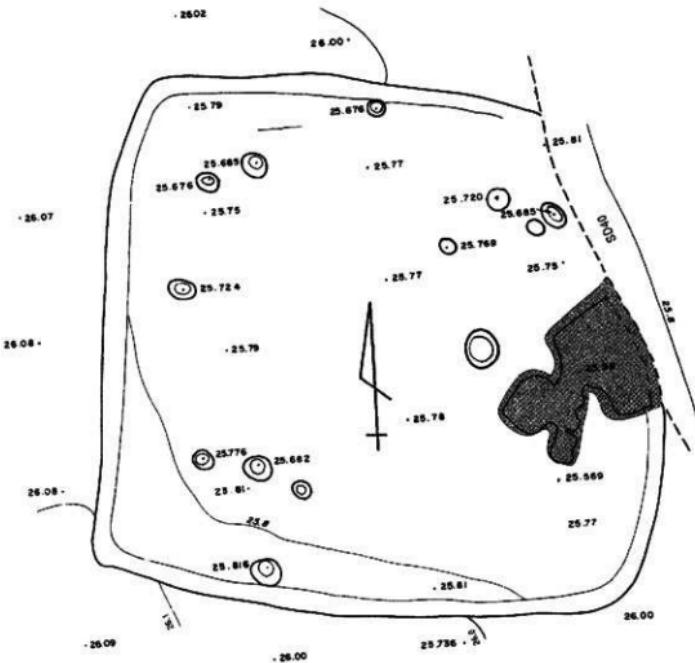
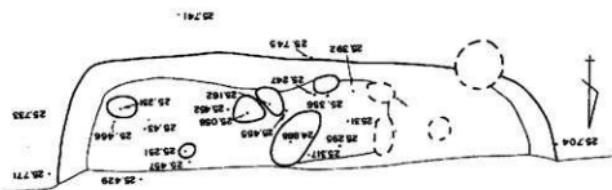


Fig.105 SC 71実測図 (1/50)



SC66



SC100



Fig.106 SC66・100実測図 (1/50)

SC66出土遺物 (fig. 107 pl. 42)

須恵器 412～414は壺蓋で、412はⅡ期で、復元口径12.0cmを測る。外面体部の境は段を成し、上位にカキメを施す。体部の1/2強に回転ケズリを施し、口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で外面は暗灰色、内面は灰色を呈する。413はⅢB期で、復元口径13.2cmを測る。外面体部の1/3強に右回転ケズリを施し、口唇は丸く仕上げ内側に沈線を施す。胎土は石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈する。414はⅢB期で、復元口径13.7・器高約5cmを測る。外面体部の1/3弱に右回転ケズリを施し、口唇は丸く仕上げ内側は高い段を施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、焼成は良好で灰色を呈する。415はⅡ期の壺蓋で、復元口径10.0・器高5.2cmを測る。外面体部の境は段を成し、体部の2/3に右回転ケズリを施し、口唇内面は段を成す。天井部には摘みが付くと思われる。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、器壁は薄い。焼成は良好で灰色を呈する。416はⅠB～Ⅱ期の無蓋高壺の坏部小片で、体部中位に緩い三角突帯2条を施し、以下に櫛描波状文を施文する。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈する。417はⅠB期の高壺脚部で、復元口径9.5・残高5.8cmを測る。脚端部の返しは高く、この上に三角透かしを4カ所穿つ。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で内外面は黒灰色を断面は紫灰色を呈する。418・419はⅠB～Ⅱ期の小壺で、418は平底で肩が張り、復元口径6.3・胴径8.8・器高5.6cmを測る。外面肩部と口唇内側に沈線を施し、肩部の上下には櫛描波状文を施文する。体部下位から肩部にかけて把手の痕跡がある。外面底部脇から底面にかけては手持ちのヘラケズリを施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈し、外面は灰が被る。419は球形の胴で、復元口径6.0・胴径7.5cmを測る。肩部に櫛描波状文を施文し、ここから体部下位にかけて把手の痕跡がある。外面底部脇には手持ちのヘラケズリを施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈し、上面に自然釉が掛かる。420は瓶の頸部で、頸径7.8cmを測る。口縁の屈曲下に櫛描波状文を施文する。胎土は細かな石英粒を少量含み、器壁は薄い。焼成は良好で暗灰色を呈す。

土師器 421～425は壺で、421は短頸の小型品で復元口径11cmを測る。口縁内外はヨコナデ内面頸部下はケズリ後緩いナデを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、外面はにぶい黄橙色内面はにぶい橙色を呈す。422は軟質系の口縁の高い大壺で、復元口径27cmを測る。口唇端部を面取りして外方が鋭い後を成す。外面は器壁が荒れ調整は不明、内面はヨコナデ後緩いケンマを施す。器壁は薄く、胎土は粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み、橙色を呈す。423は極めて調整の粗い壺で、復元口径15.5cmを測り頸が若干括れる。外面は粗いナデで凹凸が激しく、内面は粗くケズリ放しである。胎土は極めて粗い石英粒を多く含み、外面はにぶい赤褐色で焼け、内面は暗灰褐色を呈す。424は復元口径20cmを測る。外面はタテハケ後ヨコナデ・ケンマ、口縁内面はヨコハケ後ヨコナデ・ケンマ頸部下はケズリ後緩いナデを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、橙色を呈す。425は短頸で復元口径11.8cmを測り、胴が大きく張る。内外面はナデ後ケンマを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、外面はにぶい黄橙色内面は暗灰褐色を呈す。426は平底の手捏ねのミニチュアで、口径6.3・器高5.3cm。内外を指頭で整形後外面はタテハケ後ナデする。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい黄橙色を呈す。427は大型の瓶の底部片で、径20cm程の平底に、径7～8cm前後の大きな楕円形の蒸気孔を3孔穿つものと思われる。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい黄橙色を呈す。

時期はⅢB期か。

(26) SC100 (fig. 106 pl. 26)

SC100はB群の北東端に位置する。造構の大半が調査区外で全景が明らかでないが、平面は方形ブ

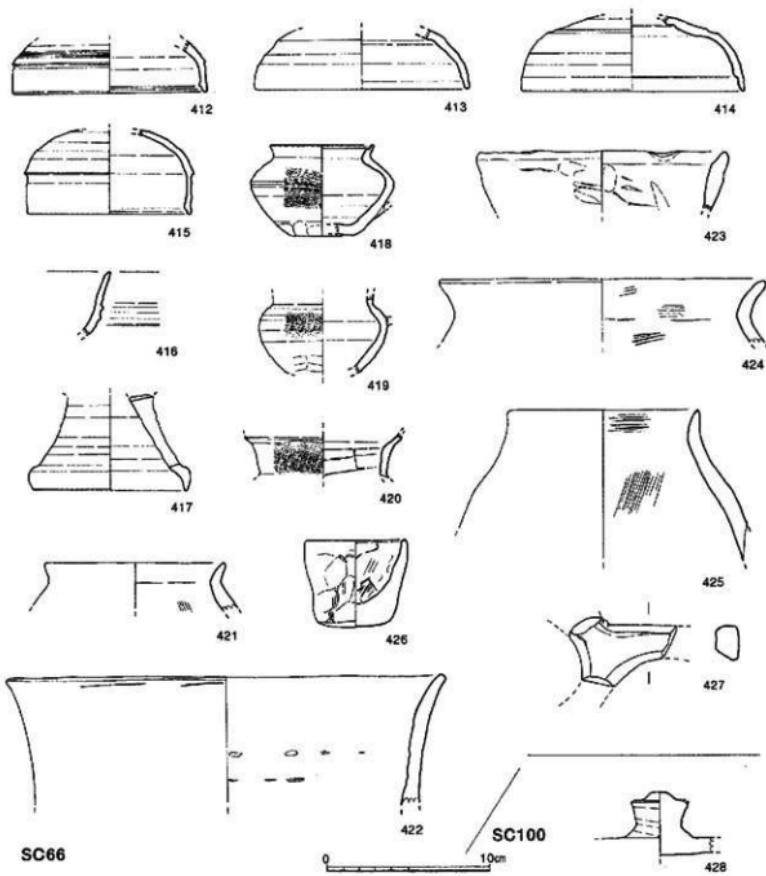


Fig.107 SC66・100出土遺物実測図 (1/3)

ランで、長軸方向はN-87°-Wにとる。規模は $5.1 \times 1.3\text{m} + \alpha$ で深さは30cmを測る。検出が一部であるため主柱穴・竈の有無は明確でない。

SC100出土遺物 (fig. 107 pl. 42)

土器類 428は軟質系の大型土器の蓋小片で、平坦な天井部中心に径3.4高2.8cmの鉗状摘みを左回転ナデで貼付する。内面はタテナデ後縦いケンマを施す。胎上は石英・赤色粒をやや多く含み、外面は暗赤褐色内面は淡褐色、断面淡灰褐色を呈する。

時期はI～II期と考えられる。

3). C群

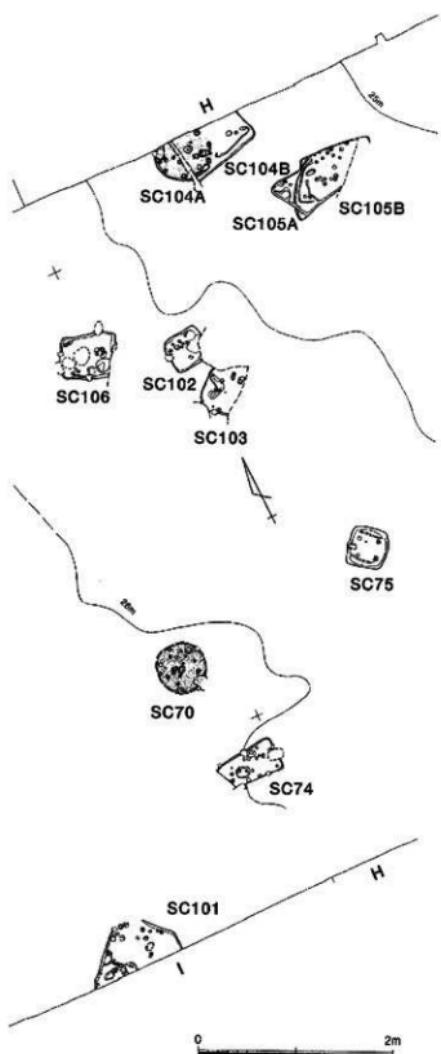


Fig.108 C群竪穴住居分布図 (1/500)

*アミカケは先史時代

C群は竪穴住居群の周縁にあたる東部の、標高25~26m付近に南西から北東方向の幅30m程の範囲にSC101~SC104の8軒が散漫に分布し、北側に5軒のまとまりがある。

各住居同士の切り合いは無いが、分布域は弥生時代の住居群と重なっており、北端の2軒がこれらを切っている。

(1) SC101 (fig. 109)

SC101はC群の南端に位置する大型住居で、遺構の半分が調査区外にある。平面は方形プランで、長軸方向はN-37°-Eにとる。規模は $8.3 \times 7.2\text{m} + \alpha$ で深さは20cm程を測る。柱穴は多数有るが、西に寄り、隅から2m程離れた洋50~70cm前後柱間2.9~3.9mの一回り大きな3穴が、定型的な4柱の一角を成すものと思われる。

また、遺構の検出が一部で有るため、竪の有無は不明である。

遺構から時期を明示する遺物の出土は無いが、主柱穴が定型的な4柱式のものであるとすれば、I~II期頃の比較的古い時期の住居である可能性が考えられる。

(2) SC74 (fig. 110)

SC74はC群の南側にあり、SC101の北20m程に位置する。上層SK144に切られる。平面は長方形プランで、長軸方向はN-75°-Eにとる。規模は $6.3 \times 3.5\text{m}$ で深さは5cm程、床面積は17.2m²を測る。柱穴は西半部にまとまって10数穴有るが、定型的な位置には無く、主柱は明確ではない。竪は持たない。

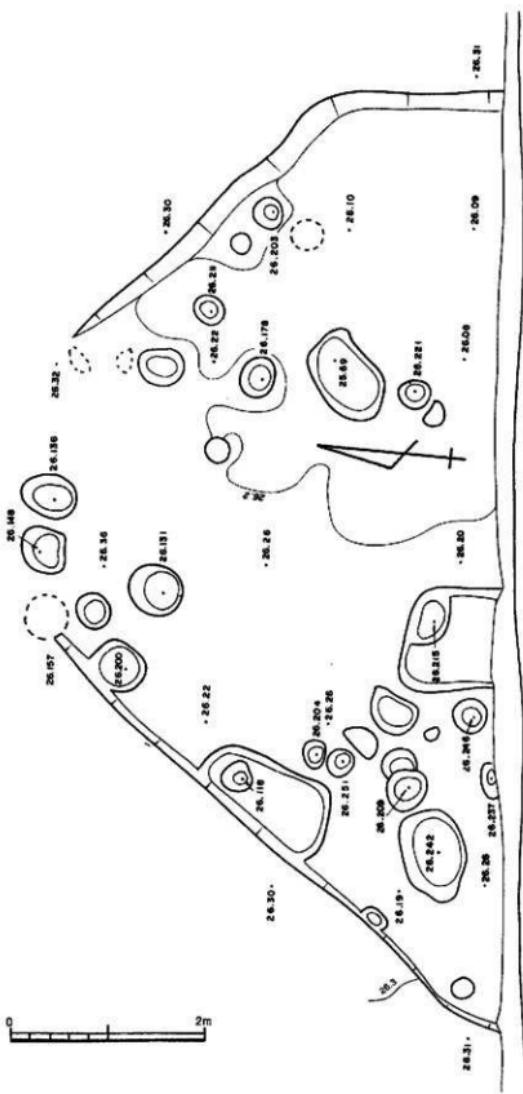


Fig.109 SC101実測図 (1/50)

SC74出土遺物 (fig. 111 pl. 43)

須恵器 429は壊身小片で、口縁部を欠くが受部に稜が無く、径が15cm前後と思われ、ⅢA期と思われる。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成はややまく明灰色を呈する。

土製品 430は太鼓形の土師質の土製紡錘車で、上面径3.3・胴径4.4・厚2.5・軸孔径0.9cm・重量52gを測る。全面に工芸なナデを施し、胎土は粗い石英粒をやや多く含み、にぶい黄褐色を呈する。

時期はⅢA期と思われる。

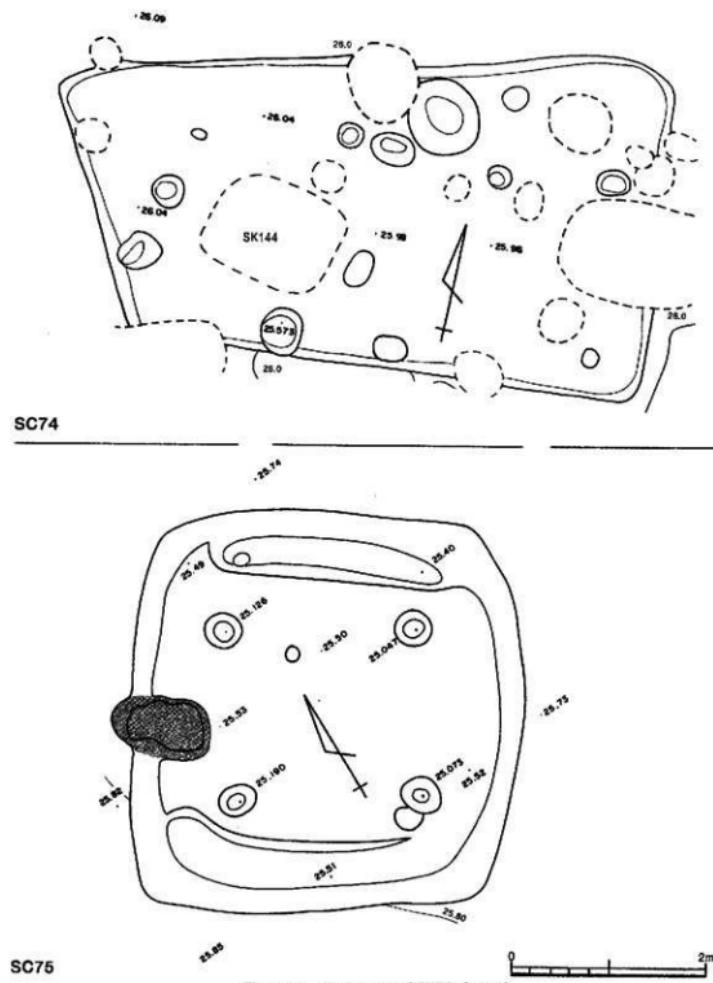


Fig.110 SC74・75実測図 (1/50)

(3) SC75 (fig. 110)

SC75はC群の中央東側にあり、SC74の25m程北東に位置する小形住居である。平面は方形プランで、長軸方向はN-60°-Wにとる。規模は4.15×4.05mで深さは20cm程、床面積は14.8m²を測る。主柱穴は四隅から1.2m程離れた位置の、径40cm前後柱間1.8~1.95mの定型的な4穴が対応する。竪は西壁中央に幅25cm程の櫛出しを持って、1.0×0.6m程の範囲に焼土が広がる。南北両壁には幅70cmほどの壁溝が設けられる定型的な住居である。上面には須恵器壊の破片が散布し、資料の殆どは北壁溝SP136からまとめて出土している。

SC75出土遺物 (fig. 111)

須恵器 431・432は壺蓋で、431は半島系で復元口径11.0・器高約4cmを測る。外面体部の境の稜は明瞭で、体部上位にカキメを施し、これを回転ナデで消す。胎土は石英粒を若干含み精良で、器壁は極めて薄い。焼成は良好、明灰色を呈する。432はIB期で、復元口径12.4・器高4.3cmを測る。外面体部の境の稜は緩く、体部の1/2弱に左回転ケズリを施し、口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で明灰色を呈する。433はII期で、復元口径14.3・器高4.8cmを測る。外面体部の境は段を成し、体部の1/2強に回転ケズリを施し、口唇内面は緩い凹線を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で明灰色を呈する。外面が灰を被る。434・435は壺身で、434は半島系で復元受部径13.0・器高3.2cmを測る。立ち上がりが高く平たい器形を呈す。体部外面の1/3にカキメを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。435はII期で、復元受部径14.1・器高4.5cmを測る。外面境の稜は高く体部外面の1/3に回転ケズリを施し、ヘラ記号を記す。II唇内面には沈線を施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。体部外面が灰を被る。

SP136出土遺物 (fig. 111・112 pl. 43)

住居内の北壁溝からの出土で、436~442は壺蓋。436はIB期の大型の蓋の天井摘み部分で径3.5cmを測る。内面には当具痕が残る。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。体部外面が灰を被る。437はIB期で、復元口径12.2・器高5.1cmを測る。外面体部の境の稜は緩く、体部の1/2強に回転ケズリを施し、口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成はややあまく灰色を呈する。438はIB~II期で、復元口径12.8・器高5.0cmを測る。外面体部の境は段を成し、体部の1/2強に左回転ケズリを施し、口唇内面は凹線を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で内面は灰色、外面は暗灰色を呈する。439はII期で、復元口径12.6・器高4.0cmを測る。外面体部の境は緩い段を成し直下が沈線化する。体部の1/2弱に左回転ケズリを施し、口唇内面は四線を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成はあまく明灰色を呈する。440はII期で、復元口径12.6・器高4.0cmを測る。外面体部の境は段を成し直下に沈線を施す。体部の1/2に左回転ケズリを施し、口唇内面は凹線を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成はあまく明灰色を呈する。441はIB~II期で、復元口径12.6・器高4.0cmを測る。外面体部の境に沈線を2条施し、体部の1/2強に左回転ケズリを施し、口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で内面は灰色、外面は暗灰色を呈する。442はIII期で、復元口径14.0・器高約4cmを測る。外面体部の境に明瞭な沈線を施し、体部の1/2強に回転ケズリを施し、II唇は丸く収め内面に凹線を施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈する。443~446は壺身で、443はIB期で復元受部径13.8cmを測る。外面境の稜は高く、口唇内面は段を成す。器壁が薄く、胎土は粗い石英粒を若干含み精良、焼成は良好で内面は灰色を外面は暗灰色を呈す。444はIB期で、復元受部径13.2cmを測る。外面境の稜は高く体部外面の1/3に回転ケズリを施し、口唇内面は段を成す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で内面は灰色を体部外面は暗灰色を呈す。445はIB期で、復元受部径13.0cmを測る。外面境の稜は高く、体部

外面の1/3に回転ケズリを施し底面にヘラ記号を記す。口唇内面は凹線を施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で内面は灰色を体部外面は暗灰色を呈す。446はI B～II期で、復元受部径13.4cmを測る。外面の境は緩い稜を成し、体部外面の1/3強に回転ケズリを施す。口唇内面には沈線を施す。胎土は粗い石英粒・赤色粒を少量含み、焼成はあまり還元焼成が成されず、橙色を呈す。447～449は高坏で、447はII期の有蓋高坏蓋で復元口径12.6・残高4.2cmを測る。体部外面の境に沈線を2条施し、体部の1/2弱に左回転ケズリを施す。天井中央に径4.2cmの四方透かし付の摘みを貼付するが、欠損し破断面を丁寧に面取りして坏として転用している。口唇内面は凹線を成す。胎土は粗い石英粒を若干含み精良、焼成はあまり明灰色を呈す。448はII期の脚で、復元脚径9.2・残高5.8cmを測る。端部の返しは厚く端部に凹線を施す。脚体部外面はカキメ後回転ナデを施し、方形の透かしを4カ所穿つ。器

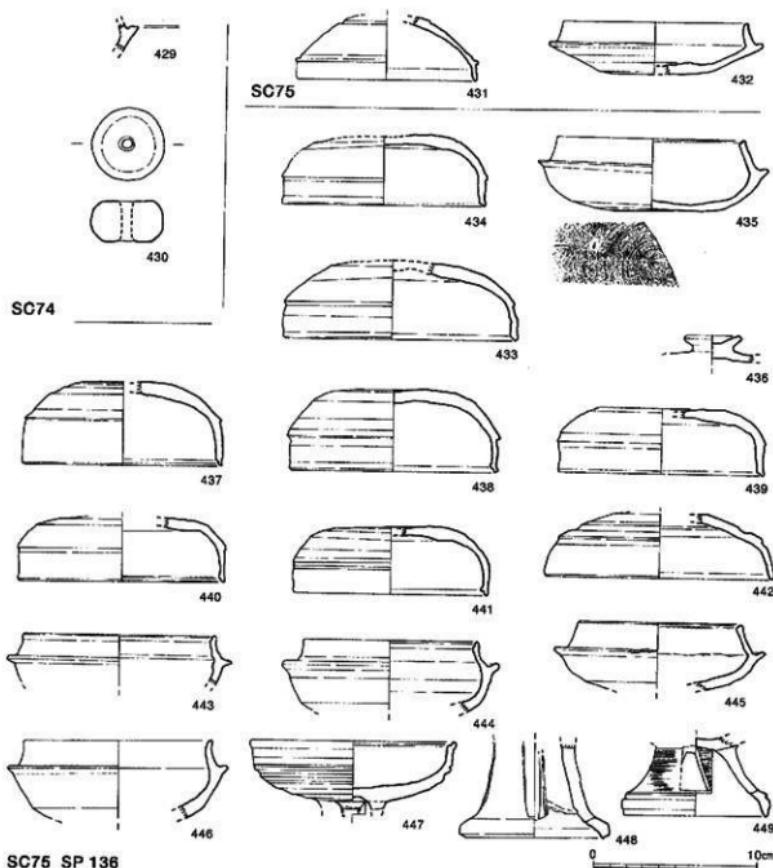


Fig.111 SC74・75出土遺物実測図.1 (1/3)

壁は厚めで胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で暗灰色を呈す。449はⅡ期の脚で、復元脚径9.9・残高4.8cmを測る。端部の返しは高く外面に沈線1条、脚部外面にカキメを施し、台形の透かしを3カ所穿つ。胎土は石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈す。

土師器 450・451は壺で、450は小さな平底の壺で復元口径11.8器高3.2cmを測る。内面はヨコナデ後ケンマを施し、外面は器壁が荒れ調整不明。胎土は粗い石英粒を多く含み、にぶい橙色を呈す。451は黒色土器で復元口径9.6cmを測る。内面はヨコナデ後ケンマを施し、外面は器壁が荒れ調整不明。胎土

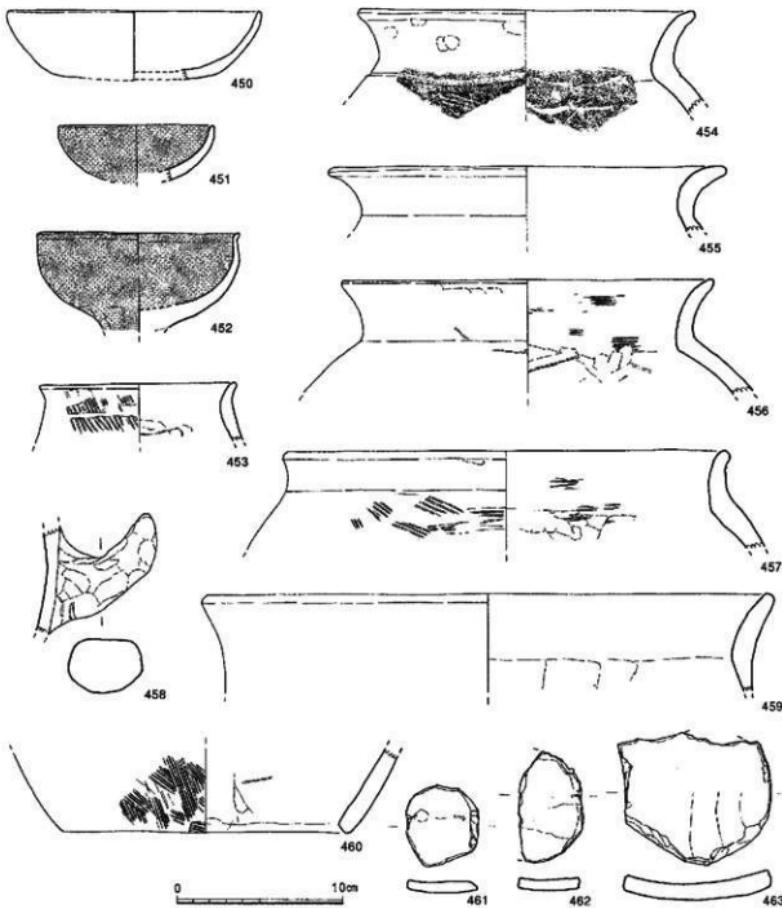


Fig.112 SC75出土遺物実測図.2 (1/3)

は石英粒・赤色粒を少量含み、褐灰色を呈する。452は黒色土器の小型高坏坏部で、口径12.5残高6cmを測る。内外面はヨコナデ後ケンマを施し、脚破断面は面取りして坏として転用している。胎土は粗い石英粒を少量含み、内外面は黒褐色断面は橙色を呈する。453~457は壺で、453は瓶頸の小型品で復元口径12cmを測る。外面は粗いタテハケ後ヨコナデ、口縁内面はヨコナデ内面頸部下はケズリ後緩いナデを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、外面は暗褐色内面にはぶい黄橙色を呈する。454は軟質系の壺で、復元口径20.6cmを測る。口縁端部外表面が肥厚して玉縁状を成しナデを、体部には横位の平行叩き後頸部下に凹線を施す。口縁内面はヨコナデ後ケンマ、頸部下はケズリ後緩いナデを施し、粘土接合痕が残る。器壁は厚く胎土は極めて粗い石英粒を多く含み、外面は淡褐色内面は暗褐色を呈する。455は軟質系の壺で、復元口径24.4cmを測る。口縁は強く外反し、体部には横位の平行叩きを、内面頸部下はケズリ後緩いナデを施し他は器壁が荒れ調整不明。胎土は粗い石英粒を多く含み、外面は暗黄灰色内面にはぶい黄橙色を呈する。456は復元口径22.8cmを測る。外面はタテハケ後ヨコナデ・ケンマ、口縁内面はヨコハケ後ヨコナデ・ケンマ頸部下はケズリ後緩いナデを施す。胎土は粗い石英粒・赤色粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。457は復元口径27.4cmを測る。外面はナナメハケ後ヨコナデ、口縁内面はヨコハケ後ヨコナデ頸部下はケズリ後緩いナデを施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。458~460は壺で、458は牛角状の把手部で、内面のタテケズリ以外は調整不明。胎土は極めて粗い石英粒・赤色粒を多く含み、外面は淡黄赤褐色内面は淡黄灰色を呈する。459は口縁部で復元口径35cmを測る。内面頸部下のヨコケズリ以外は器壁が荒れ調整不明。胎土は粗い石英粒を多く含み、にぶい橙色を呈す。460は底部で、径18cm程の平底に、径7~8cm前後の大きな楕円形の蒸気孔を3孔穿つものと思われる。外面はナナメハケ後緩いナデ、内面はケズリ後緩いナデを施す。胎土は粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み、外面はにぶい黄橙色内面は灰褐色を呈する。

土製品 461~463は土器片円盤で、土師器胴部片を用いたもので、461は長径5.0厚0.6cm重量18gを測る。462は長径6.9厚0.8cmを測り、半分を欠損する。463は大型で長径9.5厚1.1cmを測り、半分以上を欠損する。

時期はⅡ期の資料がまとまる。

(4) SC106 (fig. 113)

SC106はC群の北側、5軒グループの西に位置する小型住居である。平面は方形プランで、長軸方向はN-77°-Wによる。規模は5.4×4.7mで深さは30cm程、床面積は22.6m²を測る。柱穴は径20~60cm前後のものがいくつか壁付近に有るが定型的な位置はない。竈は持たない。

遺物の出土は無く、時期を確定できないが、不定型な柱配置等からしてⅢ期以降と思われる。

(5) SC102 (fig. 113)

SC102はC群の北側、5軒グループの南中央に位置する小型住居で、土壤SK214に切られる。平面は方形プランで、長軸方向はN-75°-Eによる。規模は4.05×3.75mで深さは25cm程、床面積は14.4m²を測る。柱穴は径20~40cm前後のものがいくつか北側に寄るが、定型的な位置はない。竈は東壁中央に1.9×1.5m程に焼土が広がる。

遺物は今山製の磨製石斧が1点出土したのみで、時期を確定できないが、不定型な柱配置等からしてⅢ期以降の可能性が高い。

(8) SC103 (fig. 114)

SC103はC群の北側、5軒グループの南東に位置し、SC102に隣接する。溝SD41や土塁SK201・214等に切られる。平面は長方形プランで、長軸方向はN-34°-Eにとる。規模は5.9×4.4m程で深さは15cm程、床面積は24.4m²を測る。柱穴は径20~40cm前後ものがいくつあるが、定型的な位置に

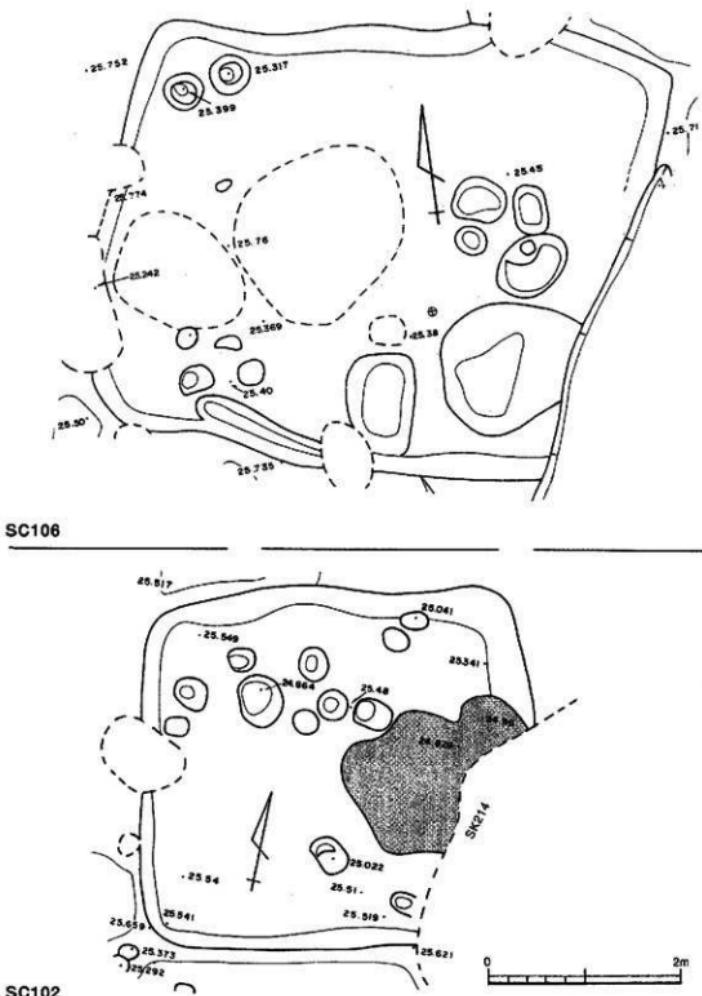


Fig.113 SC106・102実測図 (1/50)

はない。魔は持たない。

遺物は図化に堪えない須恵器・土師器小片が数点出土したのみで、時期を確定できないが、不定型な柱配置等からしてⅢ期以降の可能性が高い。

(7) SC105A + B (fig. 115)

SC105はC群の北側、5軒グループの北東に位置する。溝SD41に切られる。平面は長方形プランの古墳時代住居と円形の弥生時代住居の切り合いをそれと気づかず一緒に掘削したもので、本報告の整理中に確認した。弥生時代の円形住居部分をA、古墳時代の方形住居部分をBとする。

Aは全周の1/3程の壁と壁溝が残るもので、円弧より復元すると径13m程の大型住居となる。復元した円弧に沿って2mほどの間隔で柱穴が巡る傾向にある。壁溝の幅は30~60cmを測る。中心部を溝SD41に切られるため炉の有無は不明。

Bは平面が長方形プランで、長軸方向はN-86°-Eに据る。規模は4.6×4.9m + αで深さは15cm程度を測る。柱穴は径20~40cm前後ものがいくつか中央に寄るが、定型的な位置ではない。竪は持たない。

SC105A出土遺物 (fig. 116 pl. 43)

資料はBの古墳時代のものと一緒に採り上げられているが、弥生の遺構を切らない他の古墳時代住居からのまとまった弥生土器の検出はないため、これと分離して取り扱った。

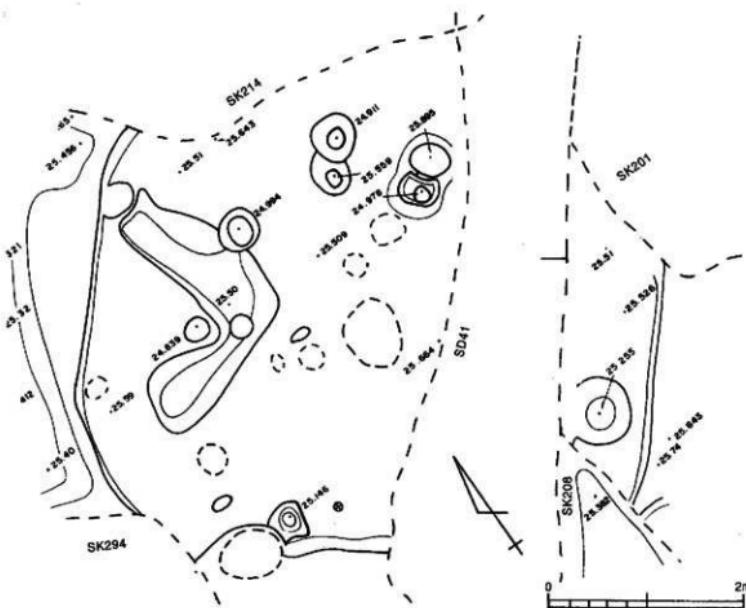


Fig.114 SC103実測図 (1/50)

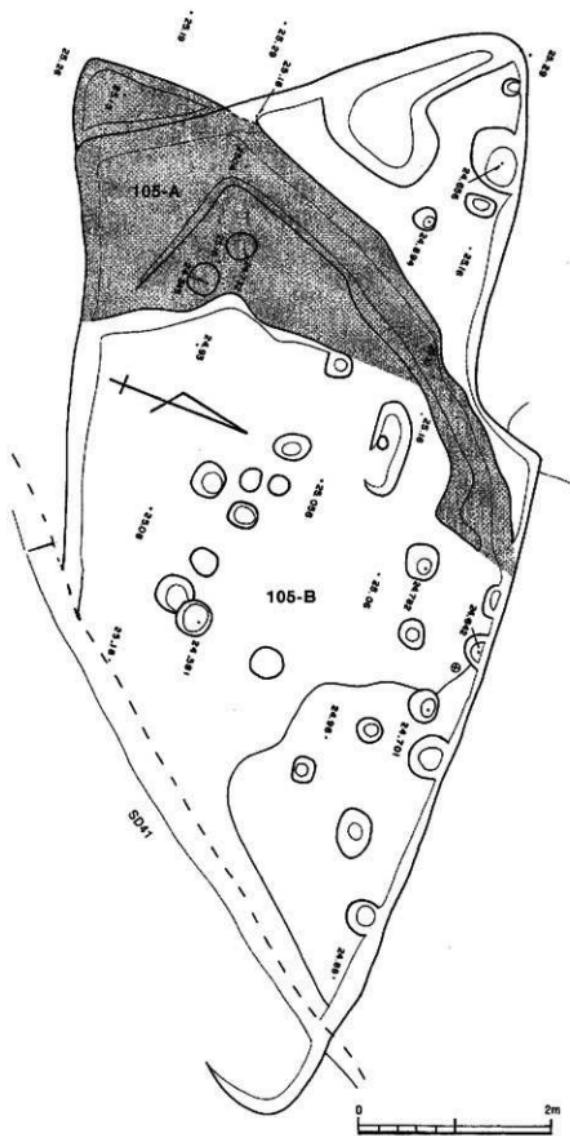


Fig.115 SC105A + B実測図 (1/50)

弥生土器 464は壺の口縁部小片で、如意状に外反した端部の内側に粘土帯を貼って断面を「T」字状に仕上げる。全面にヨコナデを、外面端部には凹線を施す。胎土は粗い石英粒を多く含み、黄灰～暗赤褐色を呈する。465～467は壺で、465は断面「L」字状の口縁部小片で、平坦面が若干外方に傾く。調整は不明で、胎土は粗い石英粒を多量に含み、淡赤褐色を呈する。466は復元径9.5cmを測る。外底が強く張り、内底は強い上底となる底部で、外面はタテハケ後ヨコナデを施す。胎土は粗い石英粒を多量に含み、外面は淡赤褐色を呈する。467は径7.6cmを測る。外底がやや張り、内底は強い上底となる底部で、外面はタテイタナデ後ヨコナデを施す。胎土は粗い石英粒を多量に含み、外面は暗赤褐色を内面は黒褐色を呈する。

時期は中期初頭である。

SC105B出土遺物 (fig. 116 pl. 43)

須恵器 468はⅢB期の壺身で、復元受部径13.0・器高3.7cmを測る。体部外面の1/4に手持ちヘラケズリを施す。器壁が厚く胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で灰色を呈す。

土師器 469は壺で、復元口径14.0cmを測る。内外面はヨコナデ後ケンマを施し、口唇外面に沈線を施す。胎土は石英粒・赤色粒を少量含み、淡赤褐色を呈す。

時期はⅢB期である。

(8) SC104A・B (fig. 117)

SC104はC群の北側、5軒グループの北端に位置する。SC105同様方形プランの古墳時代住居と円形の弥生時代住居の切り合いをそれと気づかず一緒に掘削したもので、本報告の整理中に確認した。弥生時代の円形住居部分をA、古墳時代の方形住居部分をBとする。

Aは全周の1/2程の壁と壁溝・柱穴列が残るもので、径6m深さ30cm程の円形住居となる。径25~40

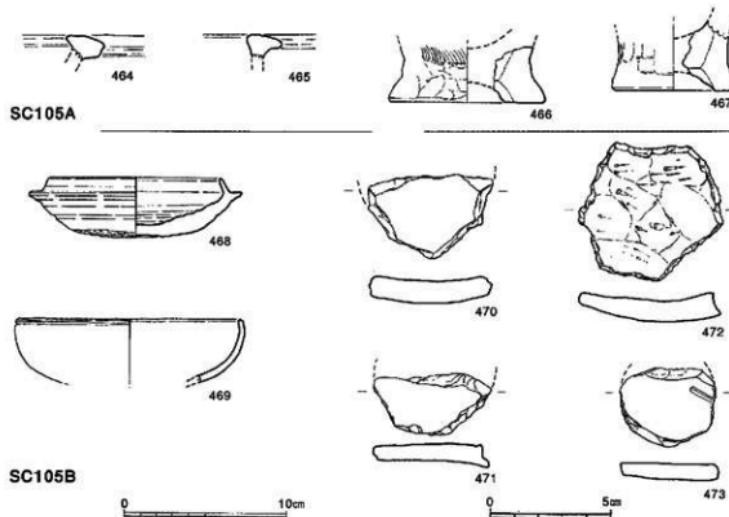


Fig.116 SC105A・B出土遺物実測図 (1/3・1/2)

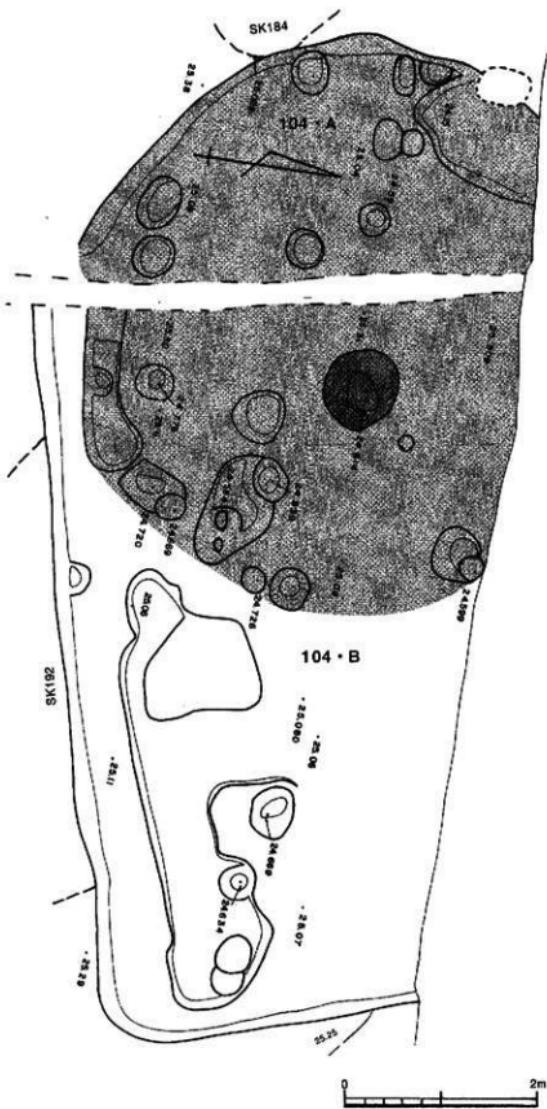
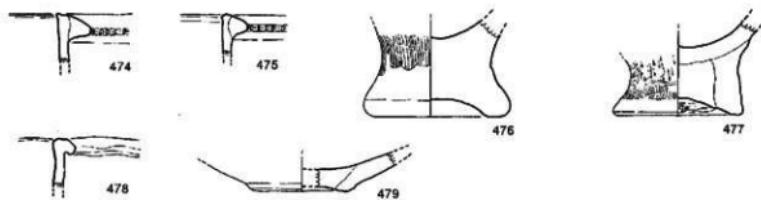
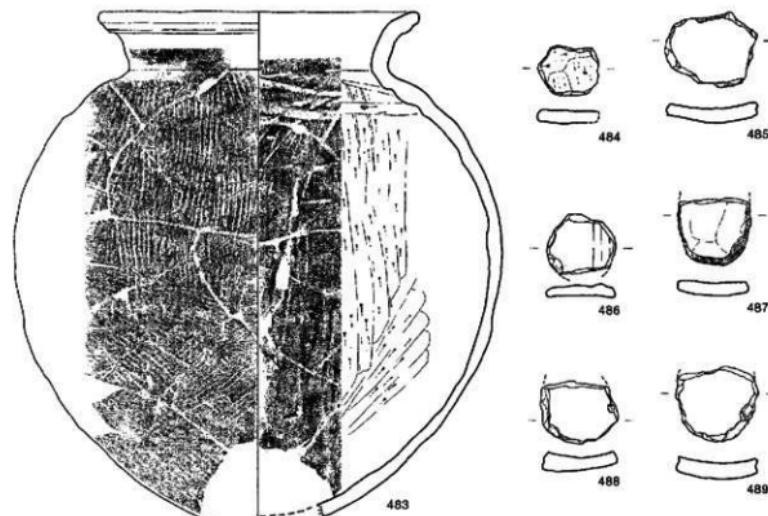
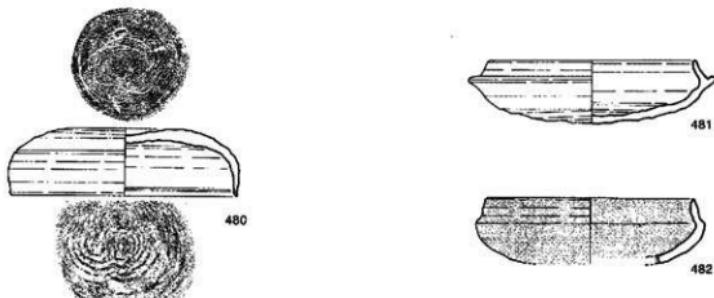


Fig.117 SC104A・B実測図 (1/50)



SC104A



SC104B

Fig.118 SC104A・B出土遺物実測図 (1/3)

cm程の柱穴が円弧に沿って1.5~2 mほどの間隔で巡る。墻溝は2 m前後残る。中央に径80cm程の穴があり炉穴と思われる。

Bは平面が方形プランで、長軸方向はN-70°-Eにとる。規模は8.3×5.0m + αで深さは25cm程を測る大型住居である。主柱穴は隅から2.5m程離れた径40cm前後柱間4.1mの2穴が4柱の一角を成すと思われる。大半が調査区外であるため竈の有無は不明。

SC104A出土遺物 (fig. 118 pl. 43)

SC105同様、Bの古墳時代のものと一緒に採り上げられているが、これと分離して取り扱った。

弥生土器 474~477は壺で、474は厚1.6cmの断面三角形の口縁部小片で、口唇外面に小さな刻目を施す。器壁が荒れ調整は不明で、胎土は細かな石英粒をやや多く含み、暗灰褐色を呈する。475は厚2.0cmの断面三角形の口縁部小片で、口唇外面に小さな刻目を施す。器壁が荒れ調整は不明で、胎土は粗い石英粒を多量に含み、外面は黄灰色を内面は暗赤褐色を呈する。476は復元径9.0・内底高4.8cmを測る。外底が強く張り、内底は強い上底となる底部で、外面はタテハケ後ヨコナデを施す。胎土は粗い石英粒を多量に含み、外面は黒灰~黄灰を内面は黒褐色を呈する。477は径8.0・内底高4.2cmを測る。外底がやや張り、内底は上底となる底部で、外面はタテハケ後タテケズリ・ヘラナデを施す。胎土は粗い石英粒を多量に含み、外面は暗黄灰色を内面は黒褐色を呈する。479は壺の底部で復元径6.0cmを測る。外底から5mm上で緩く括れ、底面が緩い上底となる。内外面とも器壁が荒れ調整は不明。胎土は粗い石英粒を多く含み、外面は淡灰褐色を内面は明黄灰色を呈する。

無文系土器 478は口縁端部を外面下方に折込む壺の小片で、器壁が荒れ細かな調整は不明であるが、粗い整形で口縁は波打つ。胎土は石英粒を多量に含み、外面は灰褐色を内面は黒灰色を呈する。

時期は中期初頭である。

SC104B出土遺物 (fig. 118 pl. 43)

須恵器 480はⅢ期の壺蓋で、復元口径14.0・器高4.2cmを測る。体部外面の境に沈線を施し、体部の1/4に右回転ケズリを施す。口唇は丸く收め内面に沈線を施す。器壁がやや厚く胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で灰色を呈す。481はⅢ期の壺身で、復元受部径15.2・器高4.0cmを測る。体部外面の1/3弱に右回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で暗灰色を呈す。土師器 482は黒色土器の壺身で須恵器を模し蓋受部がある。復元受部径14.0・器高約4 cmを測る。内外にヨコナデ後ヨコケンマを施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、暗褐色を呈す。483は軟質系の壺で、復元口径19.6胴径29.8器高31.5cmを測る。口唇外面を肥厚させて凹線を施し、口縁内外面はヨコナデ、胴は上下で調整が異なり、上半外面は継位の平行叩き後タテハケ内面はタテケズリ、下半は不定方向の平行叩き後不定方向ハケ内面はナナメケズリで、別個に整形したものを中位で組みている。胎土は粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み、外面口頭部は淡黄灰~淡赤褐色以下暗褐色を、内面上半は黄灰下半は淡褐色を呈す。

土製品 484~489は上器片円盤で、土師器胴部片を用いたもので、484は長径3.7厚0.8cm重量11gを測る。485は長径5.6厚0.9cm重量27gを測る。486は長径4.2厚0.7cmを測り、一部を欠損する。487は長径4.5厚0.8cmを測り、一部を欠損する。488は長径4.6厚1.1cmを測り、一部を欠損する。489は長径5.0厚1.0cmを測り、一部を欠損する。

石器 (pl. 43) 545は黄灰色凝灰質砂岩製の仕上げ砥で、高4.5幅4.5残存長9.7cmを測る。小口以外の全面を使用し、最大2 cm研ぎ減る。全長15cm程か。

時期はⅢA期である。

4). 4区

4区は3区の北西約100m、第12次（野方・金武線8次）調査I'区の東に隣接する。標高は29m程度である。現地表の等高線と第11次調査・2号排水路1区で検出された小河川を合わせると、2・3区が立地する低台地の北に位置する、別個の低台地に立地している。

516m²の狭い調査区に、竪穴住居3軒・大型建物1棟や2×5間の大型をはじめとする建物群8棟以上と、古墳時代の遺構の集密度は高い。

竪穴住居は3軒検出され、調査区の東側に、大型住居SC422を中心にはば南北方向に切り合わず分布している。

(1) SC420 (fig. 120 pl. 27)

SC420は住居群の北側に位置する中型住居で、平面は方形プランで、長軸方向はN-30°-Eにとる。規模は5.5×5.2mで深さは10cm程、床面積は24.1m²を測る。主柱穴は四隅から1.5m程離れた径40cm前

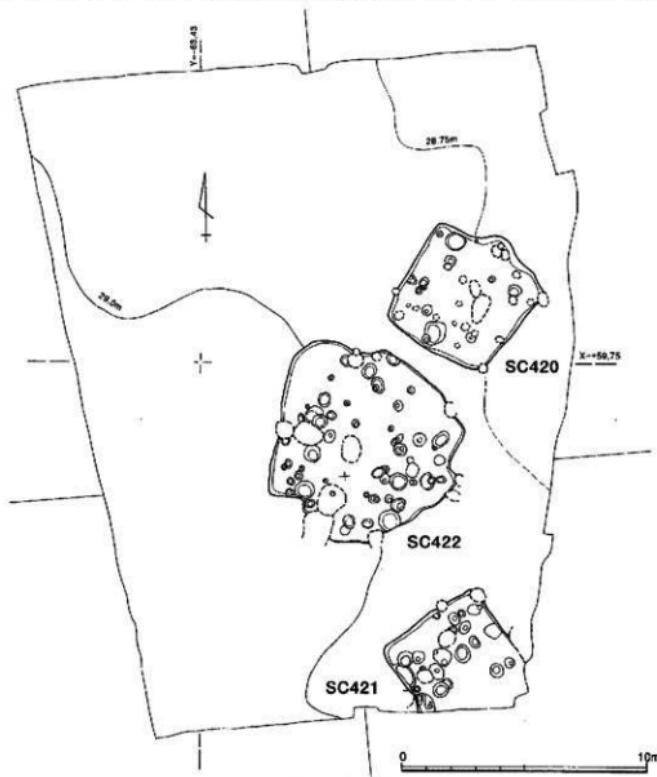


Fig.119 4区住居分布図 (1/200)

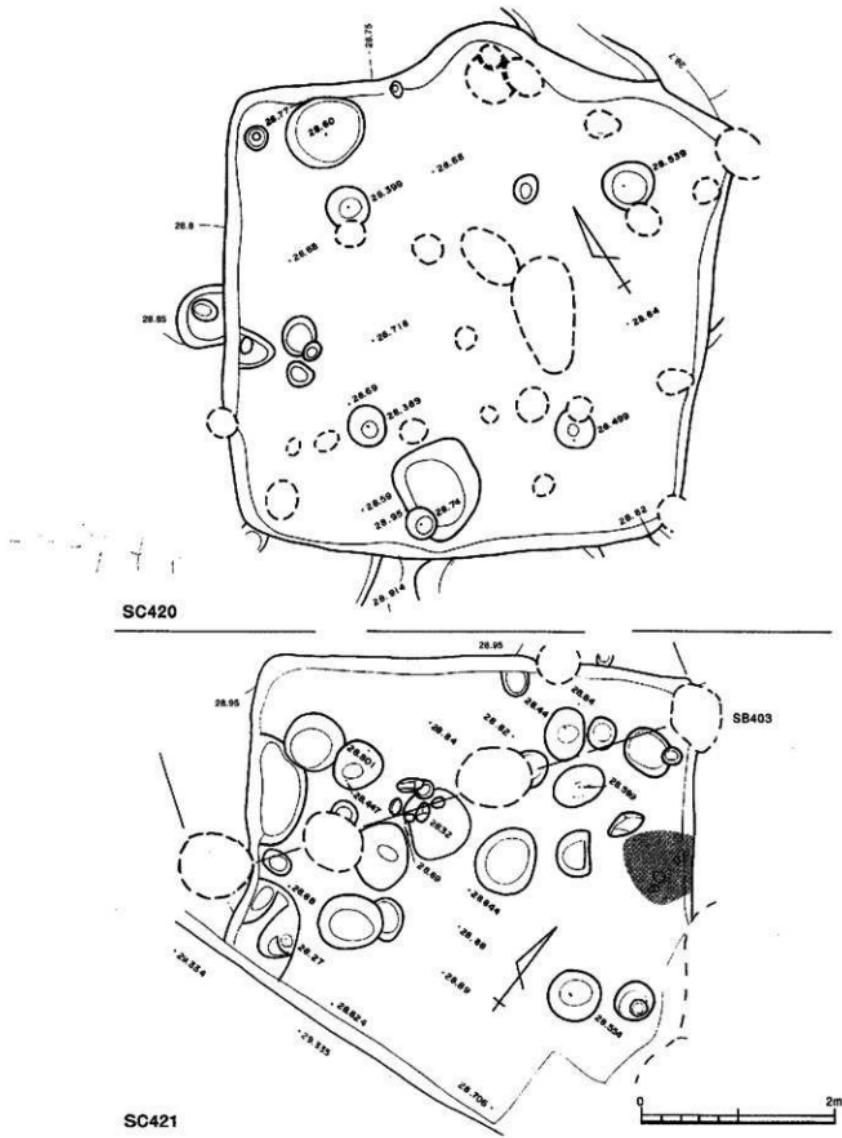


Fig.120 SC420・421実測図 (1/50)

後柱間2.1~2.6mの4穴が対応する。竈は明確ではないが、北壁中央が幅50cm程突出しており、竈があった可能性がある。

SC420出土遺物 (fig. 121 pl. 44)

須恵器 490はⅢA期の坏身で、復元受部径15.2cmを測る。口唇は丸く收め内面に沈線を施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で暗灰色を呈する。491は口縁を欠くがⅢA期の坏身で、復元受部径15.2残高2.5cmを測る。体部外面の1/2弱に左回転ケズリを施す。調整は全体に粗い。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で灰色を呈する。

土師器 492は黒色上器の坏蓋で、須恵器を模し体部境の段があり、直下に沈線を施す。口唇は丸く收める。復元口径13.4cmを測る。内外にヨコナデ後ヨコケンマを施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、外面は黒褐色を内面は暗褐色を断面は赤橙色を呈する。493~495は壺で、493は復元口径19.6cmを測る。口唇上面を面取りし、外面は粗いタテイタナデ後ヨコナデ、口縁内面はヨコナデ、下位に四線を1条施し、頸部下にヨコケズリを施す。胎土は極めて粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み、にぶい橙色を呈し、肩外面は煤ける。494は復元口径22cmを測る。内面頸部下にヨコケズリを施して接を成し、他はヨコナデを施す。胎土は極めて粗い石英粒・赤色粒を多く含み、橙色を呈する。495は短頸の小型の壺で復元口径14.2・器高13.8cmを測る。最大径は肩下位にあり、継い平底を成す。外面はヨコナデと思われるが、火熱のため器壁が著しく荒れる。口縁内面はヨコナデ、頸部下にヨコケズリを施す。全体的に整形は粗い。胎土は粗い石英粒・赤色粒を多量に含み、外面は暗赤褐~暗灰褐色を内面は上半は暗灰褐色下半は黄橙色を呈する。

土製品 496は土器片円盤で、土師器胴部片を用い、長径5.5厚1.4cmを測る。一部を欠損する。

鉄器 497は断面台形の鋳造鉄斧の欠損品で、S27号墳石室内からも2点検出されている。残存長7.0断面長辺4.3短辺3.2高1.8cmを測る。上下両端部を欠損する。

石器 498は淡緑灰色粗粒砂岩製の砾砥で、在地、姪浜のものを用いている。高7幅8.8残存長14.7cmを測る。小口と底面以外の3面を使用し、最大1.5cm研ぎ減る。全長25cm程か。

時期はⅢA期である。

(2) SC421 (fig. 120 pl. 27)

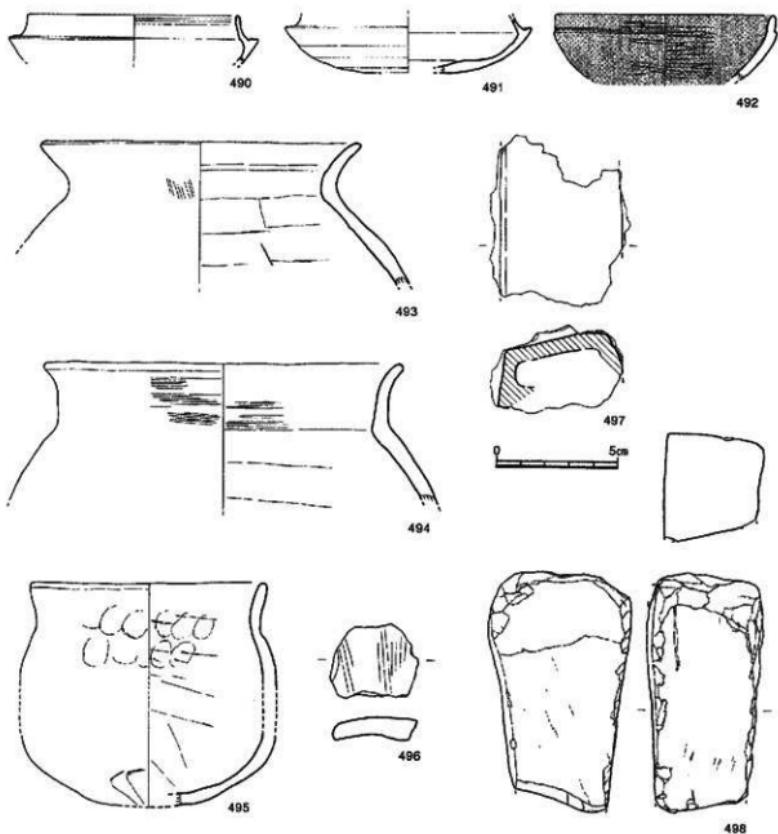
SC421は住居群の南側に位置する中型住戸で、平面は方形プランで、建物SB403に切られる。長軸方向はN-56°-Eにとる。規模は4.6×4.1mで深さは10cm程、床面積は18.8m²を測る。主柱穴は四隅から1.2~1.5m程離れた径40~60cm前後柱間1.6~2.4mの3穴が4柱に対応するが、南西隅は定位置から60cm程ずれる。竈は東壁中央に70×70cmの範囲に焼土が広がっている。

SC421出土遺物 (fig. 121 pl. 44)

須恵器 499はⅢB期の坏蓋で、復元口径13.4cmを測る。体部境の段は緩く直下の沈線が目立つ。口唇は丸く收め内面に沈線を施す。胎土は粗い石英粒をやや多く含み、焼成は良好で灰色を呈する。500はⅢB期の坏身で、復元受部径11.0・器高3.8cmを測る。外面体部の1/3弱に左回転ケズリを施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好で灰色を体外面は暗灰色を呈する。

土製品 501は土器片円盤で、土師器胴部片を用いており、長径7.5厚0.9cm重量57gを測る。

時期はⅢB期である。



SC420

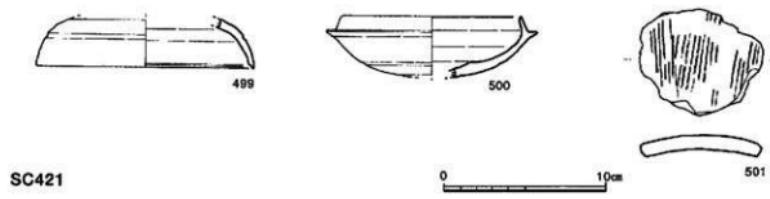


Fig.121 SC420・421出土遺物実測図 (1/3・1/2)

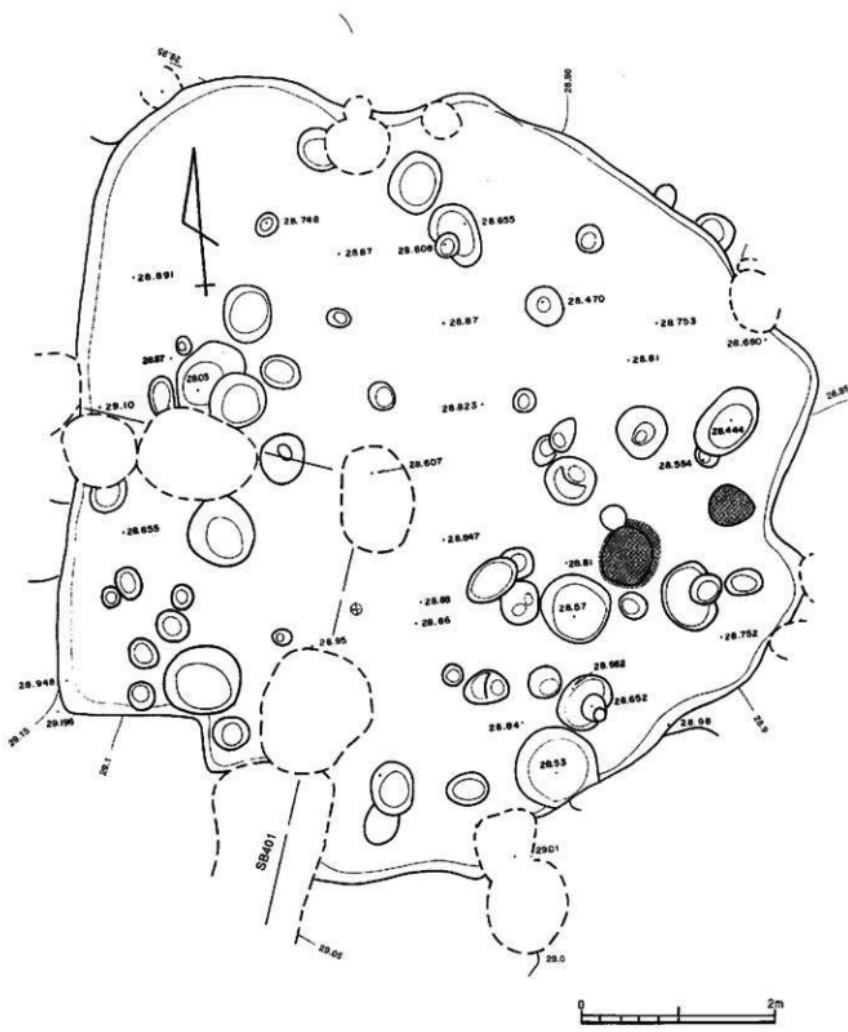


Fig.122 SC422実測図 (1/50)

(3) SC422 (fig. 122 pl. 27)

SC422は住居群の中央に位置する大型住居で、大型建物SB401に切られる。平面は不整方形プランで、長軸方向はN-57°-Wにある。規模は7.6×8.15mで深さは10cm程、床面積は55.1m²を測る。各辺の凹凸が目立ち、壁の残りが良好ではないため、ベッド状遺構から一段下がった床の残りであるのか、数軒の住居の切り合いであるのか明確でない。柱穴は多数検出されているが、壁に沿った直角方向の4本柱は見いだしづらい。竪は東壁中央近くに50×50cm程の焼土部分が確認されているが、竪とするには面積が狭い。

遺物の出土は少ない。

SC422出土遺物 (fig. 123 pl. 44)

須恵器 502はⅢB～Ⅳ期の壺身小片で、胎土は精良で焼成は良好。黒灰色を呈する。

土師器 503・504は壺で、503は復元口径16.8cmを測る。口縁外面はヨコハケ後ヨコナデ、頸部はタテハケ後ヨコナデ、口縁内面はヨコナデ、口唇上面に門線を1条施し、頸部下にケズリを施す。胎土は極めて粗い石英粒をやや多く含み、淡褐色を呈し口縁外面は暗褐色を呈する。504は口径16・胴径21cmを測る。口縁外面は玉縁状に肥厚し、ヨコハケ後ヨコヘラナデ、頸部はナナメハケ後ヨコヘラナデを施す。口縁内面はヨコハケ後ヨコナデ・ケンマ、頸部下にケズリ後粗いヨコハケ・ヘラナデを施す。胎土は粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み、外面は暗褐色を内面は黄褐色を呈する。

時期はⅢB～Ⅳ期と思われる。

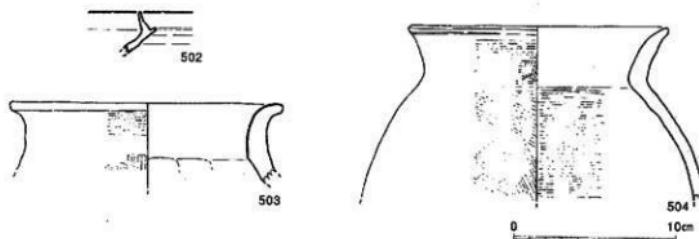


Fig.123 SC422出土遺物実測図 (1/3)

5). 2号支線排水路1・2区

2号支線排水路区は本体I:事区1～3区の南に接して、東西方向に幅3m長さ510mにわたる調査区で、本体3区の西側130m程までを1区、本体1区の東60～90mの範囲を2区とした。

1区は本体3区との間に小河川をはさんでおり、地形的には4区と同一の低台地に立地する（fig. 2）。古墳時代の遺構は2基の円墳S27・28号墳、土壙・掘立柱建物とともに、中央の拡張部分を中心に後線に沿って竪穴住居3軒を検出している。1軒は古墳の周溝を切って検出された。調査区はS27号墳を中心に第12次調査区と交差する。標高は29m程である。

2区は本体1区の東に幅60m程、旧河川が北に湾曲した部分をはさんで、本体調査区と同一低台地状に立地する（fig. 3）。標高は23m程である。古墳時代の遺構は多数の土壙とともに竪穴住居を1軒を検出した。

（1）1区SC01 (fig. 125)

SC01は調査区中央拡張部で、3軒並ぶ住居群の中央に位置する中型住居で、建物SB01に切られる。平面は方形プランで長軸方向はN-63°-Wにとる。規模は5.3×4.6mで深さは30cm程、床面積は22.7m²を測る。柱穴は中央寄りに径25～60cm前後のものがあるが定型的な位置ではない。深さも10cm弱と浅い。竈は持たない。

出土遺物は須恵器・土師器の小片のみである。

SC01出土遺物 (fig. 126)

須恵器 505はⅢA期と思われる坏蓋小片で、体部外面の境に段をもち、口唇は丸く收める。胎土は精良で焼成は良好。外面は暗灰色を内面は灰色を呈する。

時期はⅢA期か。

（2）1区SC02 (fig. 125)

SC02は調査区中央拡張部で、3軒並ぶ住居群の北側に位置する中型住居で、遺構の大半は調査区外にある。平面は方形プランで長軸方向はN-52°-Wにとる。規模は4.4×2.8m + αで深さは10cm程を測る。柱穴は径30cm前後のもののが多数あるが全体が明らかでないため、主柱穴は確定できない。竈の有無も同様である。

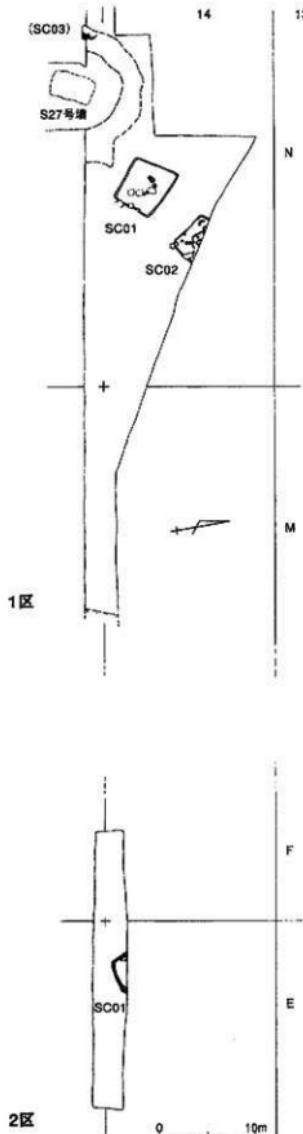


Fig.124 2号排水路住居分布図 (1/500)

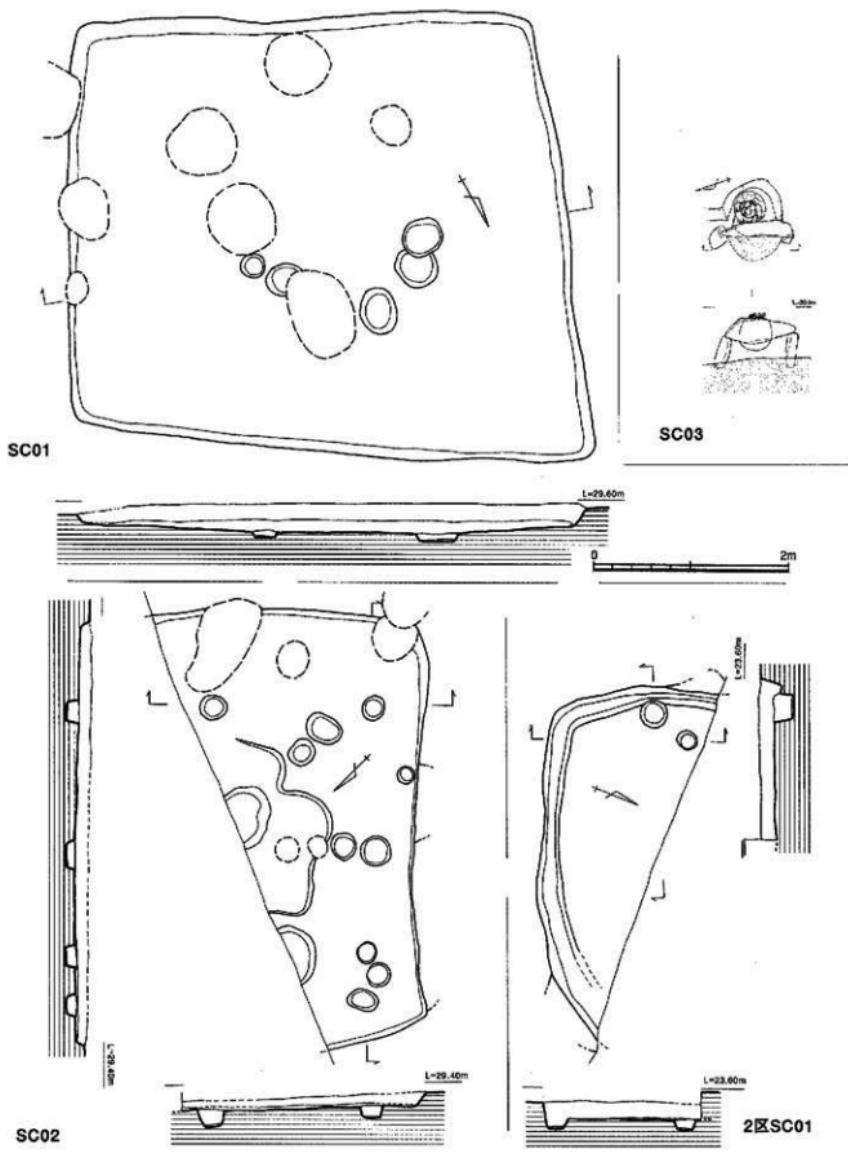


Fig.125 2号排水路1区SC01・02, 2区SC01実測図 (1/50)

SC02出土遺物 (fig. 126)

須恵器 506はⅠA期の壺蓋で、復元口径12.5cmを測る。体部外面の境の段は高く上方に持ち上がる。口唇は丸く收める。胎土は精良で焼成は良好。暗灰色を呈し外面体部は黒灰色を呈する。507はⅣ期の小型無蓋高杯の壺部で、復元口径10.3・残高5cmを測る。体部外面の肩曲部上に沈線を2条施し、以下に左回転ケズリ後カキメ工具の連続刺突文を2条施す。胎土は粗い石英粒を少量含み、焼成は良好。外面は灰色を内面は灰を被り黒灰色を呈する。508はⅢA～B期の蓋小片で、体部外面の境の段は緩く直下の沈線が目立つ。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成は若干あまく、内面は灰色を外面は暗灰色を呈する。

土製品 509は土器片円盤で、土師器胴部片を用いており、長径5.6厚0.9cmを測る。1/3が欠損する。

時期はⅣ期か。

(3) 1区SC03 (fig. 125)

SC03は3軒並ぶ住居群の南側に位置する住居で、円墳S27号墳の周溝を切って竈部分のみ検出された (fig. 124)。775集では1号配石造構として詳報している (775集fig. 106)。壁を径60cm程半円形に掘りくぼめ、この前面に3石組んで焚口部としたもので、内面は火熱のため赤く焼け、土師器高杯を支脚として、軟質系の甕が据えられた状態で検出されており、明らかに竈である。北側1m弱の位置にはコーナー部分も検出されている。この位置から北側を幅2m程の中世溝に切られており、小型住居のため、住居本体部分を失っていると考えられる。

出土遺物の詳報は775集fig. 107と重複するため省くが、ⅢA期の周溝埋没後に設けられており、ⅢB期以降と考えられる。

(4) 2区SC01 (fig. 125 pl. 28)

SC01は2区中央部で、1軒、遺構の南部のみ検出された。遺構の大半は調査区外にある。平面は方形プランで長軸方向はN-54°-Eにとる。規模は $7.3\text{m} + \alpha \times 1.7\text{m} + \alpha$ で深さは15cm程を測る。幅25深さ10cm程の壁溝が巡る。柱穴は西側に径20~30cm前後のものが2穴あるのみで、遺構全体が明らかでないため、主柱穴は確定できない。竈の有無も同様である。遺物は少ない。

SC01出土遺物 (fig. 126 pl. 44)

須恵器 510はⅠ期の把手付鉢の胴部小片で、2本の鋭い三角突帯間に櫛描波状文を施文する。体部下にはカキメを施す。胎土は細かな石英粒を少量含み、焼成は良好。外面は暗灰色を内面は灰を被って淡灰色を断面は紫灰色を呈する。

時期は壁溝を持つなど古い様相が伺え、Ⅰ期と思われる。

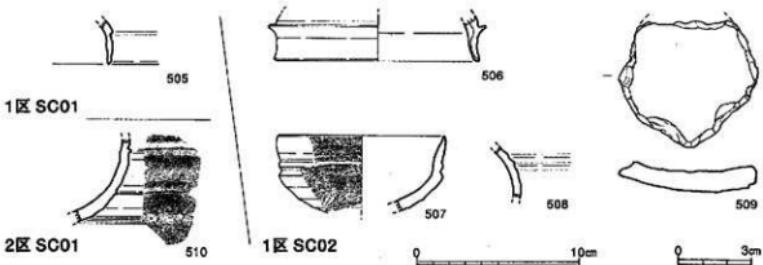


Fig.126 2号排水路SC01・02出土遺物実測図 (1/3・1/2)

3. 混入資料

本遺跡は旧石器時代から中世にわたる複合遺跡であり、各住居内からは縄文～平安時代までの様々な資料が混入して検出されている。以下時代毎に報告する。

1). 縄文時代 (fig. 127 pl. 44)

511～519は縄文土器で、511は阿高式系の深鉢口縁部で胎土に滑石を多量に含み赤褐色を呈す。512は後晩期の粗製深鉢の口縁部で外面に条痕内面にナデを施す。513は晩期前半の粗製深鉢片で外面に貝殻条痕を内面にケズリ様のヨコ条痕を施し胎土には2・3mm前後の気泡が多数ある。514は後晩期の粗製深鉢片で外面にヨコ条痕内面にナデを施す。515は晩期の粗製深鉢底部で径9.6cmを測る。外面は指頭圧後ナデる。516も晩期前半の粗製深鉢の底部で径9.2cmを測る。胎土には2・3mm前後の気泡が多数あき、底面に径3.4mmの堅果類の圧痕がある。517は2号排水路2区の径20cm程のpit内出土の北久根山式系の鉢で、口径14.0底径9.8器高9.9cmを測る。口縁外面の2カ所に幅6cm程の把手を付け上面を沈線・刺突文で飾る。体内外は粗いヨコ貝殻条痕を施す。粗い砂粒を多量に含み黄褐～赤褐色を呈す。底部中央に外方から打欠いて径2.8cmの穿孔を施しており、嬰兒を納めた土器棺の可能性もある。518は後晩期の粗製鉢の口縁で、短く屈曲する口縁の内外をナデる。519は晩期精製浅鉢の屈出した胸部片で褐灰色を呈する。520・521は土製品で、520は筋錐車形土製品で径8.6厚1.5cmで中央に焼成前の径3mm程の孔がある。周辺に指頭圧痕が残る。521は径2.4残存長4.5cmの棒状土製品で下面の一方が7mm程突出し、足先の表現とすると土偶の足の可能性が考えられる。指頭圧とヘラ當て痕が隨所に残り整形は粗い。胎土は粗い石英粒を少量含み黄橙色を呈す。522～525・527はSC75から出土している黒鐘石石器で、住居が製作ユニットを切っている。522・523・525は使用痕を有する剥片で片方の側縁が使用される。524はサイドスクレーパーで、右側縁に両面から刃部を形成している。527は角礫を用いた石核で25×31×30mmを測る。表皮を残す縱方向3面を除いて横3面に主に上下方向から打面を形成せずにランダムに剥離を行っている。使用している剥片にも表皮を多く残す。528は古銅鋳石安山岩製の石鎚で48×24×10mm7.5gを測る。528は今山産玄武岩製の扁平打製石斧で120×66×22mm159gを測る。529は片岩製の磨製石斧で115×58×26mmを測り、刃部の片面が破損する。530は円形に整形した軽石製品で1/4が残存する。浮子と思われる。

2). 弥生時代 (fig. 128 pl. 44)

531～533・367はSC72内の土壤SP303出土。531は壺蓋で口径26器高11.2cmを測る。532は三角口縁の壺で口径20.8cm。全面にナデを施す。533は上げ底の壺底部で径8.4cm。367は広口壺の口縁で口径16cm。内外にハケ後ヨコナデ・ケンマを施す。534はSC69出土の壺で、2/3が残存する。口径25.6底径7.4器高32.3cmを測る。

3). 古墳時代前期 (fig. 128 pl. 44)

数少ない前期資料で、535・536は壺の口縁小片。537は小型器台の脚部で径12cmを測る。538は2重口縁壺で口径17.2cm。539は外来系の大型の器台と思われ口径18.4cmを測る。

4). 平安時代 (fig. 128 pl. 44)

調査区内は多数の平安時代の遺構が重複しており、住居の資料に混入する率は高い。540はSC05竈出土の越州窯系粗製青磁碗で、底径6.6cm。541はSC11出土の土師器壺で口径15.2器高2.9cmを測る。底面はヘラ切り後ケンマ。灰白色を呈す。542はSC21出土の土師器壺で口径15.2器高6.0cm。黄橙色を呈す。543はSC21出土の桶造りの格子目叩平瓦片で厚2.1cm。灰白色を呈す。

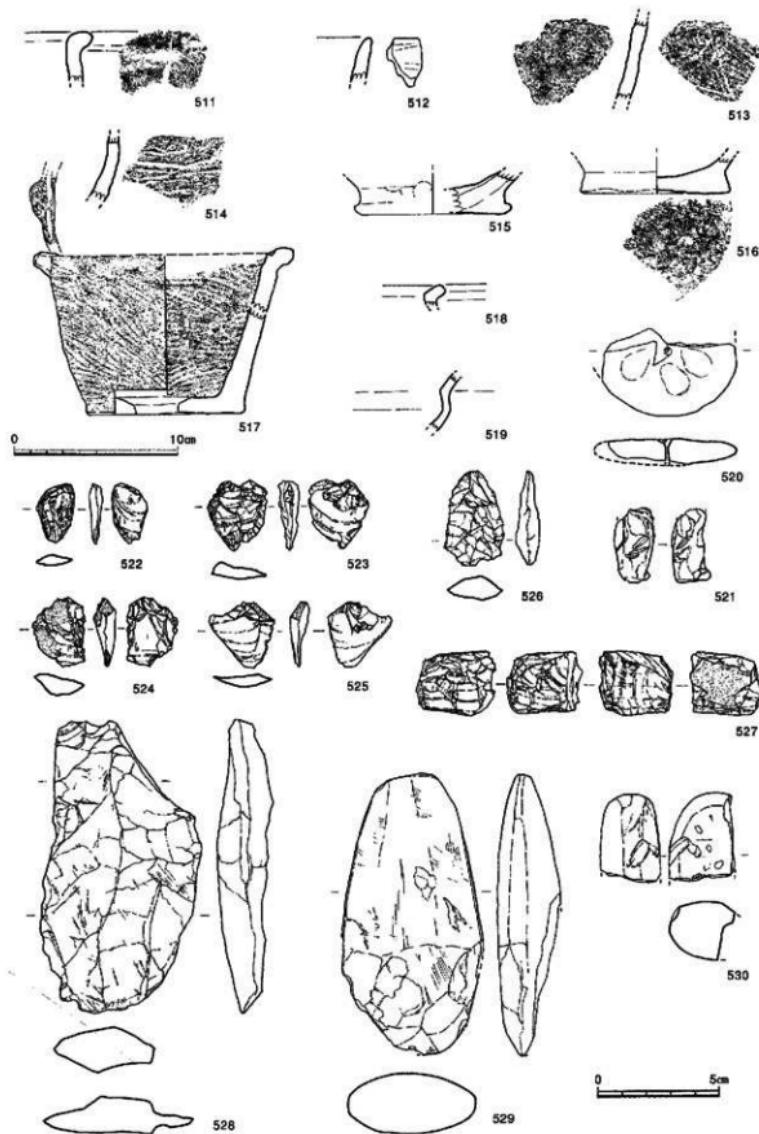


Fig.127 混入資料実測図.1 (2/3・1/2)

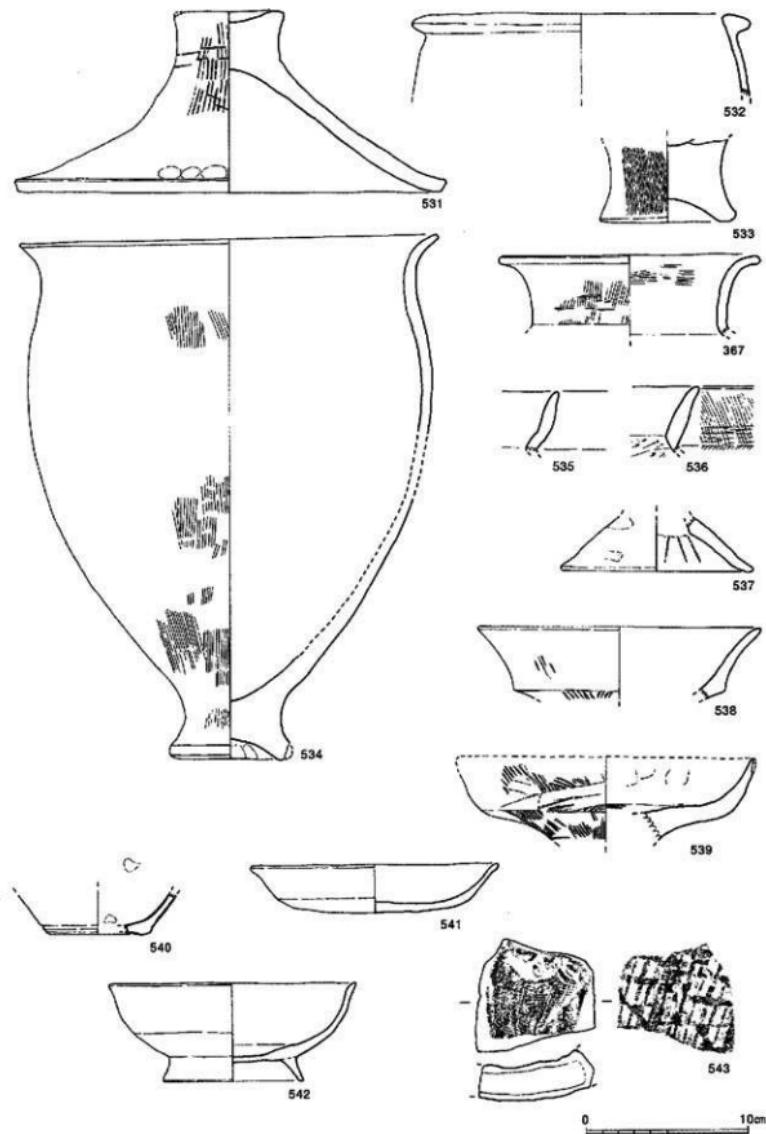


Fig.128 混入資料実測図.2 (1/3)

4. 小結

第9次調査においては、本体工事区の2・3区で78軒・4区で3軒・2号支線排水路1区で3軒・同2区で1軒の計85軒の古墳時代の堅穴住居を検出し、遺跡群内での古墳時代集落の中心域であることを示している。このなかで、第9次調査においての中心域は本体工事区の2・3区で、西から43軒のA群・27軒のB群・8軒のC群の3群に大別され、西から東にかけて減少する傾向にある。

時期別には小田富士雄編年とともに分類しているが、28,000m²もの広大な調査区を、12点もの青銅器を副葬した260基の壇棺・木棺墓群の精査と並行して7ヶ月で掘りあげる調査であり、遺構内の掘削は完形品に近いもの以外は、出土状態の検討なしに採り上げており、細かな時期認定が困難になっている。このため、分類時期を、前期・I・II期・IIIAB期・IV期と大まかにまとめている。

I・II期は33軒検出され、全体の42%を占める。住居規模の度数分布では、時期毎の相対的分布で6.5~13.8m²の小型8軒(SC02・31・21・73・20・16・05・60)、14.8~31.1m²の中型16軒(SC17・75・40・12・09・13・18・100・68・64・11・45・63・10・61・25)、39.3~57m²の大型6軒(SC71・72・65・69・43・101)にまとまる。長幅比は100~74%に収まり平均95%で殆どが方形に近い。ただし各時期1~2軒長大な住居を含む特徴があり、該期ではSC60が61%を示す。属性では4本主柱が、可能性が高いものも含めて17軒(5・9・10・11・12・13・25・63・64・65・68・69・71・75・101・40・45)で52%を占め、龜を持つものは14軒(16・17・20・21・31・43・2・5・9・12・64・68・71・75)で42%を占める。このうち、SC5・9・12・64・68・71・75は双方を備え、全体的に定型的な住居が過半数を占める。分布域では、各群に大型住居が付随し、B群がSC65・69・71・72の4軒の大形住居を北に計19軒の分布を見せて該期の中心を成している。A群は大型住居SC43を北に8軒が分布し、C群はSC101を南に2軒分布する。

III期は34軒検出され、全体の44%を占める。住居規模の度数分布では、7.1m²の小型1軒(SC49)、9.7~33.3m²の中型29軒(SC15・52・22・48・29・47・32・03・44・36・42・04・105・24・38・07・33・51・23・27・39・66・37・50・41・30・14・08・74)と増大し、69~79m²の大型3軒(SC52・80・104)にまとまる。長幅比は100~73%に収まり平均85%でやや偏差が広がる。この中で長大な住居はSC08・74で、長大化が進み55%を示す。属性では4本主柱が、7軒(14・27・39・41・47・03・04)と激減して占める割合は21%となる。このうち、5軒はIII期のもので、III期はSC27・39の2軒のみである。龜を持つものは11軒(15・29・30・32・41・52・53・03・04・08・66)で32%を占めるが、7軒はIII期のもので、III期に住居の不定形化が急速に進む。このうち双方を備えるものはSC41・03・04の3軒でいずれもIII期である。分布域では、中心はB群からA群に移行し、大型住居SC52・80の2軒に計25軒の分布を見せて74%が集中する。B群には大型住居は無く、5軒が分布するのみで、C群は大型住居SC104を北に3~6軒分布する。

IV期は7軒検出されるのみで、激減し、これを埋め合わせるように掘立柱建物が増加する様である。住居も全体的に小型化し、最大で26.2m²で前代の中型の中位程度である。度数分布は、7~13.6m²の小型5軒(SC54・19・26・01・34)、18.0m²の中型1軒(SC35)、26.2m²の大型1軒(SC62)となる。長幅比は100~83%と前代より集約する。この中で長大な住居はSC35で、68%を示す。属性では4本主柱は無く、龜を持つものは4軒(19・54・01・62)で57%を占め前代と比べ大きく増加し、特殊化を伺わせる。分布域は、A群で1軒、B群で3軒が分布し、前代同様西に寄る。

また、多くの半島系土器とともに、I・II期のSC12・21出土の炉底塊等の製鉄資料は注目される。

第四章 おわりに

吉武遺跡群内では、古墳時代堅穴住居はこれまでに第1次調査区で8軒・第4次調査区で8軒・第6次調査区で10軒・第9次調査区で85軒・第11次調査区で1軒の計112軒検出している (Tab. 3)。

遺跡群内は南西から北東方向に小河川によって区切られ、第1次・2次調査区・第9次調査4区・同2号支線排水路1区・第11・12次調査区・樋渡地区の第4次調査区と大石地区の第9次調査1~3区・同2号支線排水路2区・第6次調査LMN区、高木地区の第6次調査D~J区のそれぞれが立地する3つの低台地上に広がっている。それぞれを北から北台地・中台地・南台地と仮称する。

時期毎に概観すると、前期は極めて少なく、今までのところ確認されているのは北台地2次調査区のSC80・中台地4次調査区のSC03の2軒のみで、以降の集落の中心城である9次調査区からは検出されていない。SC80は大型住居である。

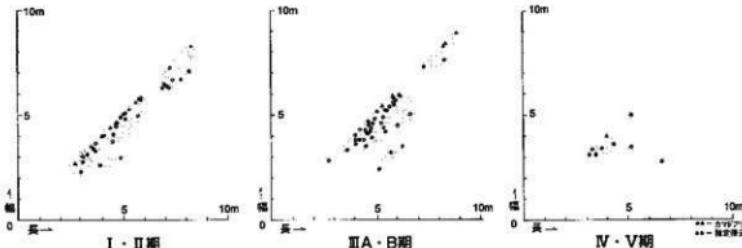
I・II期から本格的に集落の形成が始まり、北台地1次調査区でSC1000・1001・1003の3軒、中台地の4次調査区で北西のSC04・07南東のSC01・02の4軒・第9次調査1~3区の33軒で9次調査区がこの時期すでに中心城となっている。他2号支線排水路2区で1軒・6次調査LMN区でSC17の1軒、南台地の6次調査区東でSC12・13の2軒、総計44軒が分布する (fig.129)。

III期では遺跡群の北半部からは検出されず、北台地の南部9次調査4区でSC420・421・422の3軒・同2号支線排水路1区のSC01・03の2軒・11次調査区のSC01の1軒計6軒、中台地では南半の9次調査1~3区のみで34軒で引き続ぎ中心城となっている。南台地では6次調査区東でSC09・10と西でSC14・15・16の5軒、総計45軒が分布する (fig.130)。

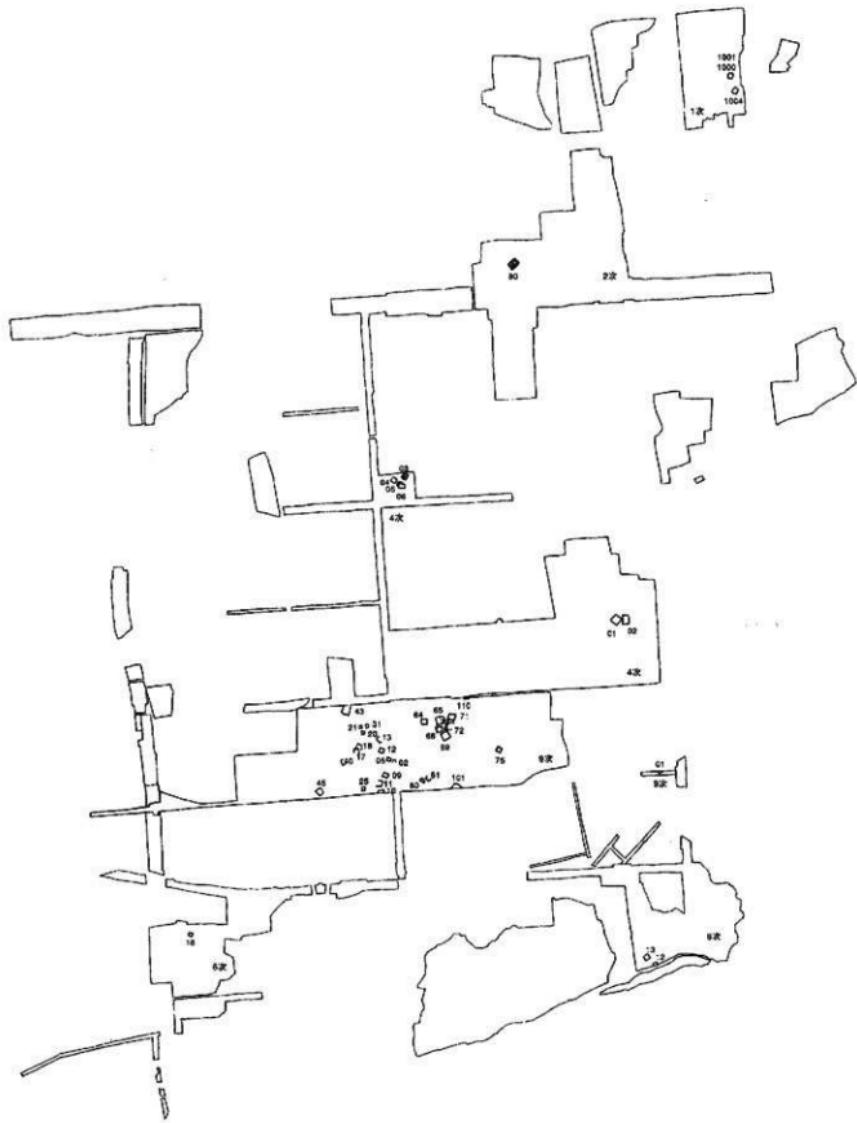
IV・V期では激減し、遺跡群の北半部からは同様に検出されず、北台地の南部2号支線排水路1区のSC02の1軒のみ、中台地でも南半の9次調査1~3区で7軒・6次調査LMN区でSC18の1軒で計8軒。南台地は6次調査区東でSC11の1軒のみで、総計10軒と前代の22%まで減少する (fig.131)。この減少と反比例して掘立柱建物が増加する傾向が見られる。

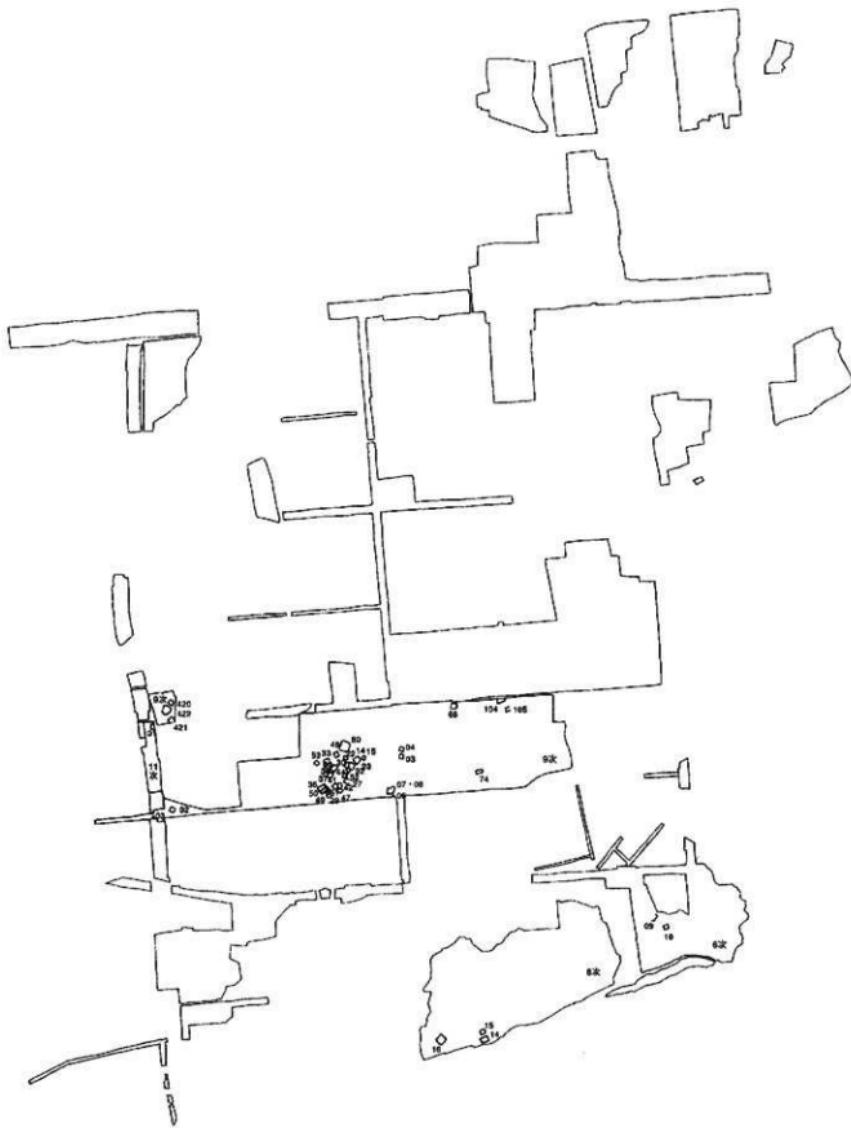
以上、各時期別の堅穴住居の分布を概観したが、あくまでも傾向であってこの状況が当時の様相を全て示すものではない。後代の削平が著しく、第2次調査区ではⅦ・Ⅸ区流路出土の多量の土器からして集落が存在しない訳ではなく、掘立柱建物・土壌等の分布とも重ね合わせて集落の復元を試みるべきで、古墳群と集落との関連・半島カラーの濃さ等次年度に古墳時代の遺構を総括する予定である。

住居の属性は9次調査1~3区と重なりこれを大きく超えるものではない。4・6次調査区でも1・2軒の大型住居が検出される。度数分布表では全体の傾向をより明確にするため、削平や調査区境にかかるて、全体が明らかで無いものは完存する一辺で正方形と見なして点を△で記している。



Tab.2 吉武遺跡群古墳時代堅穴住居密度分布表





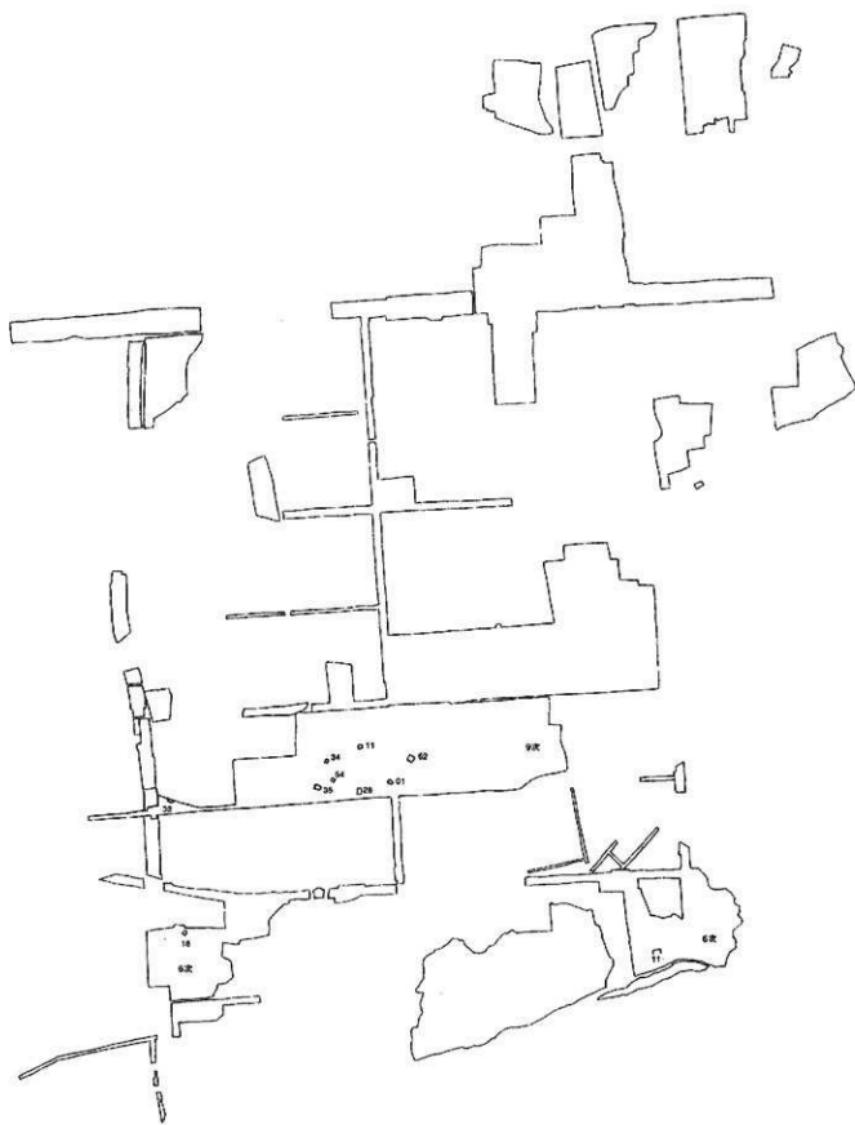


Fig.131 吉武遺跡群IV・V期竪穴住居分布図

Tab.3 吉武遺跡群古墳時代竪穴住居一覧表(1)

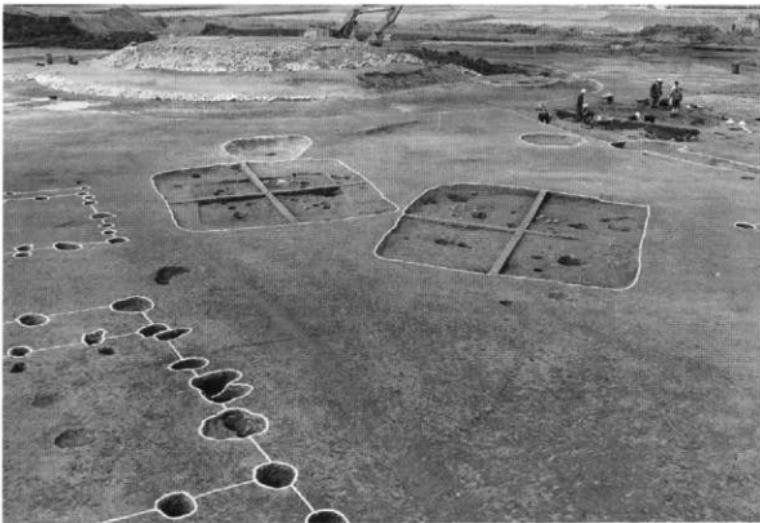
次数	住居番号	グループ	時期	長軸方向	規模 面積×深さ(m)	床面積 (m ²)	支柱穴 数	電 気有無	番号	備考
1	SC1000	C2		N~27°E	3.15×3.0×0.12	9.6	4柱	×	675-9	SC04に切られる
	SC1001	C2		N~72°E	3.6×3.3×0.13	11.9	2柱	×	675-9	壁面を持つ1000mの建て替え
	SC1002	D2		N~96°E	3.8×3.5×0.2	12.0	不定	×	675-8	SC18-19を含む 土蔵に切られる
	SC1003	D2		N~2°W	5.18×1.24×0.1	小定	×	675-9	SC20を含む SC07等に切られる	
	SC1004	C2		N~38°W	4.7×4.5×0.1	21.2	4柱	×	675-8	
	SC1005	C2		N~46°E	3.94×0.25×0.1	2柱	×	675-8	北側削平	
	SC1006	C2		N~40°E	4.3×3.7×0.22	15.9	4柱	×	675-8	狹丈家屋か
	SC1007	D2		N~19°E	3.46×2.56×0.1	6.0	不定	×	675-9	北側削平
2	SC89	G5	歐窓	N~51°E	6.2×7.7×0.14	47.7	3柱	×	675-65	ペラード造構を持つ
4	SC01	F11	Ib	N~39°W	6.6×7×0.15	46.8	4柱	×	831-7	ペラード造構を持つ
SC02	F11	Ib	I	N~4°W	7.84×6.7×0.3	56.7	1柱	×	831-9	南西側を削平される
SC03	I8	前廊	N~32°E	4.55×4.35×0.2	16.0	4柱	×	831-12	壁面を持つ 中央部に複持柱の通方	
SC04	J8	Ib	N~37°W	3.8×4.5×0.1	17.0	不定	×	831-4	廻り土坑の可能性	
SC05	J9	Iby	N~76°W	3.7×3.3×0.25	約1.42	4柱?	×	831-16	SC06に切られる	
SC06	J9	Ib	N~71°W	4.55×4.1×0.2	18.3	4柱	×	831-18	SC05を含む	
SC07	I9	I	N~39°W	3.7×3.8×0.2	約15.3	不定	×	831-20	半面フランジ柱の性格?	
SC08	J9	Ia	N~60°E	5.8×4.7×0.1	約26	不定	×	831-21	牛糞ビームは四脚か	
6	SC09	F16	Ila	N~22°E	5.34×0.24×0.10×0.15	不定	×	831-25	西、北側は削平	
SC10	F17	Ila	N~15°W	4.59×3.75×0.25	17.4	4柱	×	831-25	プランク現象で高臺上焼の可能性	
SC11	F16	IV	N~11°W	6.7×2.8×0.2	約50	4柱?	×	831-28	復元後横7x7.3m	
SC12	F17	I	N~64°E	5.39×0.15	不定	×	831-30	一部が検出		
SC13	F17	Ib	N~53°E	4.53×4.6×0.35	17.2	4柱	×	831-31	ペラード構造、壁構を持つ	
SC14	I18	Ia	N~58°E	5.6×7.4×0.0	29.7	3柱	×	831-34	周囲のみ残る 排水溝小溝	
SC15	I18	Ia	N~26°W	4.54×4.7×0.2	16.2	4柱	×	831-36	周囲が遡る 排水溝	
SC16	I18	Ia?	N~37°E	7.3×7.3X	42.5	4柱	×	831-39	外輪ビーム 2面の溝 排水溝	
SC17	N16	Cb	N~65°W	3.9×2.6×0.1	10.4	4柱	O	831-42	2段と2段半	
SC18	N16	IV~V	N~56°W	3.35×3.35×0.1	11.2	不定	O	831-44	壁に土葬器	
9	SC01	J14	IV	N~38°E	4.4×3.6×0.2	13.6	不定	O	831-85	
SC02	J13	I~II	N~K~W	2.7×2.3×0.20	不定	O	831-87	SD03に切られる		
SC03	J13	Ia	N~85°W	4.6×1.1×0.1	15.1	4柱	O	831-90	SD03に切られる	
SC04	J13	Ia	N~75°W	4.75×4.15×0.05	18.6	4柱	O	831-90	SD03に接続・傾斜	
SC05	I1	I	N~13°E	3.7×3.0×0.15	約12.3	4柱	O	831-87	SD03に切られる 周囲に遺物	
SC06	J14	Ia	N~67°W	3.24×0.21×0.2	不定	○	831-81	ペラード構造あり 壁間に壁構		
SC07	J14	Ia	N~99°E	5.5×4.2×0.2	33.2	○	831-82	2列の切妻合		
SC08	J14	Ia	N~89°E	5.8×3.2×0.2	○					
SC09	J14	I~II	N~72°E	4.94×9.0×0.15	21.0	4柱	O	831-85	SD05-SD16に切られる	
SC10	J14	I	N~93°E	5.85×1.9×0.1	4柱	O	831-86	SD06-SD29に切られる		
SC11	J14	I~II	N~72°E	6.6×5.0×0.1	4柱	O	831-84	半分近付X11-16に切られる		
SC12	J13	Ib	N~75°W	4.65×4.8×0.15	19.2	4柱	O	831-88	北東側へペラあり	
SC13	J13	I~II	N~36°W	5.0×2.2×0.05	4柱?	○	831-88	伝統の形態は定期的		
SC14	K13	Ia	N~40°E	6.2×5.9×0.2	33.3	4柱	×	831-62	1面の建て替えあり	
SC15	J13-K13	Ia	N~90°W	3.7×3.2×0.05	約9.7	不定	O	831-62	SC16を削る SK18に切られる	
SC16	K13	Ia	N~60°W	3.6×3.4×0.1	約11.8	不定	O	831-62	SC17-18を切り SC15に切られる	
SC17	K13	II	N~2°W	4.0×3.3×0.05	3.2以上	○	831-62	SC18を切り SC15-14に切られる		
SC18	K13	I~II	N~20°E	4.94×7.4×0.2	22柱上	2柱	×	831-62	東壁へペラ状構	
SC19	J13	V	N~0°	3.8×3.4×0.36	12.0	不定	O	831-66	炭化材出土	
SC20	J13	II	N~6°W	3.3×3.1×0.4	10.1	不定	O	831-66	施家家地の可能性あり	
SC21	J13-K13	II	N~93°E	3.1×2.8×0.1	7.8	不定	O	831-66	序多し	
SC22	K13	Ib	N~3°E	4.1×3.8×0.05	13.3	不定	×	831-61		
SC23	K13	Ia	N~14°E	5.7×5.4×0.1	28.4	不定	×	831-52	SC32-52に切られる	
SC24	K13	Ia	N~21°E	5.0×4.8×0.1	21.4	不定	×	831-60	SC39-40を切り 番内土坑	
SC25	J14-K14	Ib~II	N~83°W	4×0.02	15.2	4柱	○	831-77	SD08に切られる	
SC26	K14	V	N~5°W	4.0×4.0×0.1	約16	1柱	○	831-77	SK25を切り	
SC27	K14	IIIb	N~46°W	6.1×4.5×0.05	約21.0	4柱	×	831-52	SC44-52を切り SD17に切られる	
SC28	K14	IIIb	N~45°E	4.3×3.8×0.2	15.1	不定	○	831-47	SC09に切る 電線路に沿う片被布	
SC29	K13	Ia	N~71°W	5.9×3.3×0.01	不定	○	831-32	SC40-59に SD23に切られる		
SC31	J13	II~II	N~0°	3.0×2.3×0.15	6.5	黑	O	831-66	破壊品多量出土	
SC32	K13	IIb	N~14°W	4.6×4.5×0.2	12.6	不定	O	831-62	SK23-30-40-52を切り	
SC33	K13	IIb	N~22°W	5.4×4.9×0.05	25.2	不定	×	831-59	SC34-SB19に切られる	
SC34	K13	V	N~13°E	3.2×3.1×0.05	7.0	不定	○	831-59	SC33を切り	

Tab.4 吉武遺跡群古墳時代堅穴住居一覧表(2)

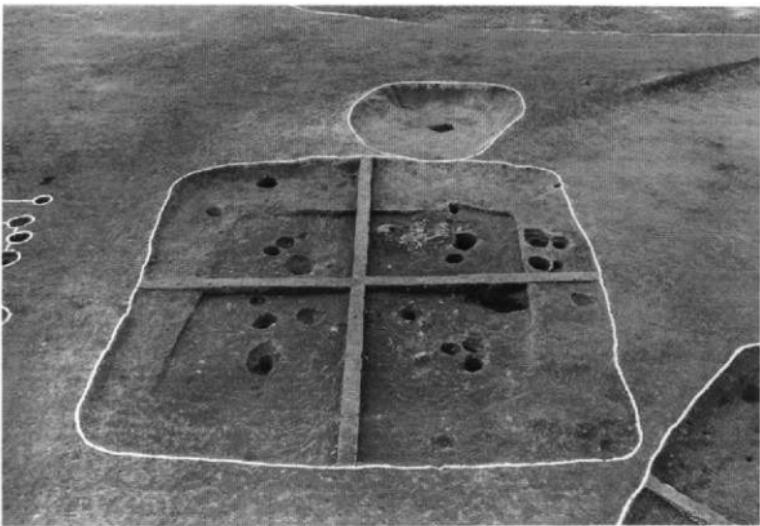
次数	住居番号	グリッド	時期	長軸方向	幅 延	床面積 幅×奥行×深さ(ニ)	柱穴 (m)	主柱穴 有無	津 号	備考
9	SC35	K14	IV	N~7°W	5.2×3.5×0.07	18.0	不定	×	831-47	SC51-50-36に切れる
	SC35	K14	IIb	N~65°E	4.7×2.6×0.07	約13.5	不定	×	831-47	SC50を切るSC35に切られる
	SC37	K13	IIa	N~18°E	5.9×5.6×0.15	約31.9	不定	×	831-57	SC38を切る
	SC38	K18	IIa	N~59°W	5.1×2.4×0.05	不定	×	831-57	SC38を切る	
	SC39	K13	IIa	N~30°E	5.7×5.4×0.05	約30.3	4柱	×	831-57	SC38を切りSC24-SB16に切られる
	SC40	K13	I~L	N~60°E	4.0×3.3×0.01	不定	4柱	831-52		
	SC41	K14	IIa	N~40°W	5.6×5.2×0.1	24.7	4柱	○	831-60	SC42に切られる
	SC42	K14	IIb	N~45°W	4.8×3.9×0.15	14.7	不定	×	831-50	
	SC43	K12	II	N~72°W	8.2×7.1×0.25	約57	不定	○	831-74	大型住居
	SC44	K13	IIe	N~20°E	4.7×4.5×0.05	19.1	不定	×	831-52	SC52-27に切られる東壁南側に壁構
	SC45	K14	II	N~43°W	5.7×5.0×0.3	26.1	4柱	×	831-47	SC50を切りSB05-06に切られる
	SC46	K14	IV?	N~1°W	4.3×3.8×0.04	14.5	2柱	×	831-47	
	SC47	K14	IIa	N~42°E	4.3×4.3×0.04	約17.2	4柱	×	831-50	SC43に切れる
	SC48	K13	IIb	N~34°W	4.1×4.0×0.15	15.7	不定	×	831-59	SB18に切れる
	SC49	K14	IIb~IV	N~48°E	2.8×2.8×0.13	7.1	不定	×	831-47	SC51を切りSC29に切れる
	SC50	K14	IIb	N~47°E	5.7×6.0×0.05	34.2	不定	○	831-47	SC51を切りSC36-35-45に切られる
	SC51	K14	IIb	N~50°W	5.4×1.9×0.017	不定	○	831-47	SC49-50Cに切れる	
	SC52	K13	IIa	N~12°E	8.9×0.9×4.9×0.015	不定	○	831-52	SC44を切りSC32-27に切れる	
	SC53	K13	IIb	N~37°E	4.1×3.6×0.15	13.6	不定	○	831-59	
	SC54	K13~K14	IV	N~7°W	15.3×3.1×0.1	10.1	不定	○	831-47	
	SC60	I14-J14	I	N~49°W	4.9×3.0×0.15	11.9	不定	×	831-92	SB28に切れる
	SC61	I14	I~II	N~51°W	4.2×3.0×0.15	14.3	不定	×	831-92	SD32-SK14Bに切れる
	SC62	J13	IV	N~61°W	5.0×5.2×0.01	26.3	不定	○	831-94	SB31に切れる
	SC63	I13	Ib	N~20°W	5.8×5.8×0.2	31.1	4柱	×	831-94	SK96を切るSD33に切れる
	SC64	I13	I~II	N~49°E	6.1×4.8×0.01	21.4	4柱	○	831-97	
	SC65	I13	Ib	N~81°E	7.2×6.3×0.1	44.6	4柱	×	831-103	SK13に切れる
	SC66	I12	IIb?	N~79°W	5.85×5.5×0.3	約30.1	不定	○	831-106	先秦時代窓を破壊か
	SC68	I13	I~II	N~13°W	5.1×5.1×0.05	24.5	4柱	○	831-97	SK105に切る
	SC69	I13	I~II	N~62°E	7.4×6.7×0.3	48.7	4柱	831-99	SC73を切りSD37-38に切れる	
	SC70	I13	I	N~37°W	8.3×7.2×0.02	不定	4柱	○		
	SC71	I13	I~II	N~6°E	6.3×6.9×0.1	約39.3	4柱	○	831-105	
	SC72	I13	Ib	N~20°E	7.1×6.4×0.2	約43.1	不定	○	831-99	SC73を切りSD40に切れる
	SC73	I13	Ib	N~77°W	31.3×3.5×0.02	不定	831-99			
	SC74	I14	Ia	N~75°E	6.3×3.5×0.05	17.2	不定	×	831-110	SK14Bに切れる
	9 SC75	H13	II?	N~60°W	4.15×4.0×0.2	14.8	4柱	○	831-110	南北側壁に壁構
	SC80	K13	IIa	N~72°W	8.4×7.5×0.02	約61.0	不定	×	831-64	
	SC100	I12	I~II	N~87°W	5.1×1.3×0.03	不定	831-106			
	SC101	H4	I~II?	N~37°W	8.3×7.2×0.02	4柱?	831-109			
	SC102	I13	H~IV?	N~75°E	4.05×3.75×0.25	約14.4	不定	○	831-113	SK124に切られる
	SC103	H13	H~IV?	N~34°E	5.9×4.4×0.15	約244	不定	×	831-114	SM1-SK201-214等に切られる
	SC104B	H12	IIa	N~70°E	8.3×5.6×0.02	4柱?	831-117	先秦時代住居の切り合ひ 方形住居部分		
	SC105B	H13	IIb	N~85°E	4.6×4.9×0.015	不定	×	831-115	先秦時代住居の切り合ひ 方形住居部分	
	SC106	H13-I13	E~N?	N~77°W	5.4×4.7×0.3	22.6	不定	×	831-113	
	SC420	N13	IIa	N~30°E	5.5×5.2×0.1	24.1	4柱	○?	831-120	二重中央が約50cm突出 窓か
	SC421	N13	IIb	N~56°E	4.6×4.1×0.1	約18.8	4柱?	○	831-120	SB403に切れる
	SC422	N13	IIb~IV	N~57°W	7.6×8.1×0.1	55.1	不定	831-122	大連通物SB401に切られる	
2号SC01	N14	IIa	N~63°W	5.3×4.6×0.3	22.7	不定	×	831-125		
2号SC02	N14	IV	N~52°W	4.4×2.8×0.01	不定	831-125				
2号SC03	N14	IIb~IV	N~54°E	7.3±0.1×7.1±0.1	不定	○	775-106	S27号墳周溝を切る 窓部分のみ突出		
2号SC04	R14	I~II	N~54°E	7.3±0.1×7.1±0.1	不定	831-126				
1号SB20	N13	E?	N~20°E	4.5×4.8×0.2	21.8	不定	○	303-7-8	地盤面上の断面	

図 版

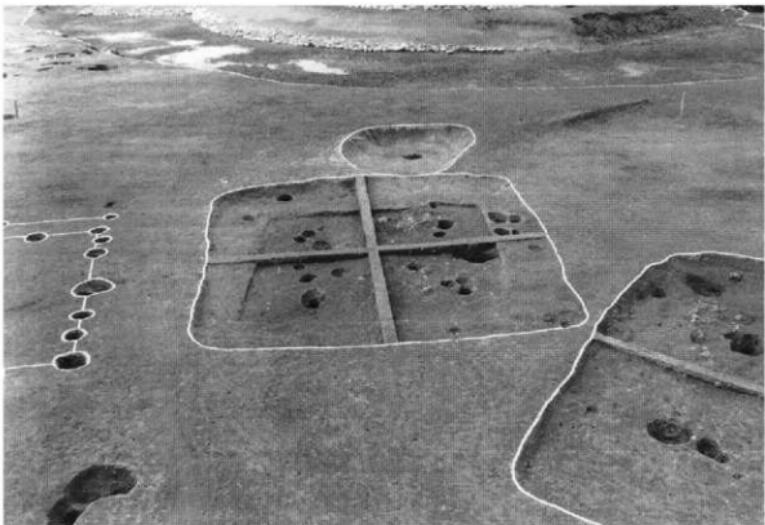
PLATES



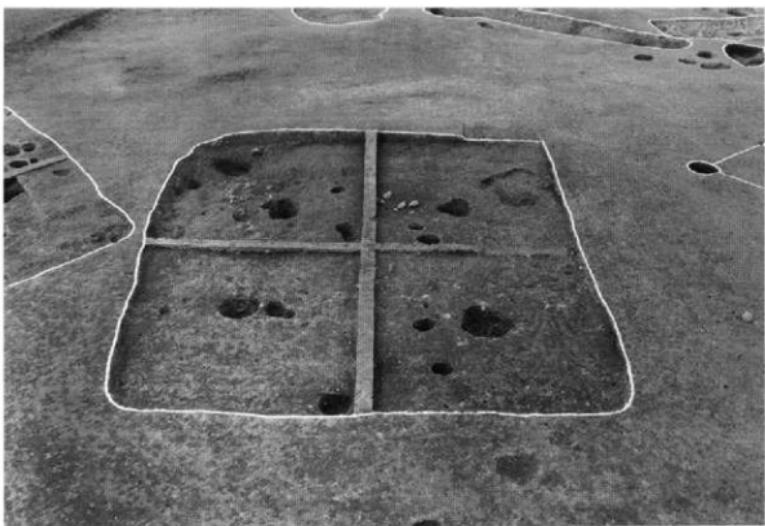
1. SC01・02住居跡検出状況全景（南西から）



2. SC01住居跡検出状況近景（南から）



1. SC01住居跡検出状況遠景（南から）



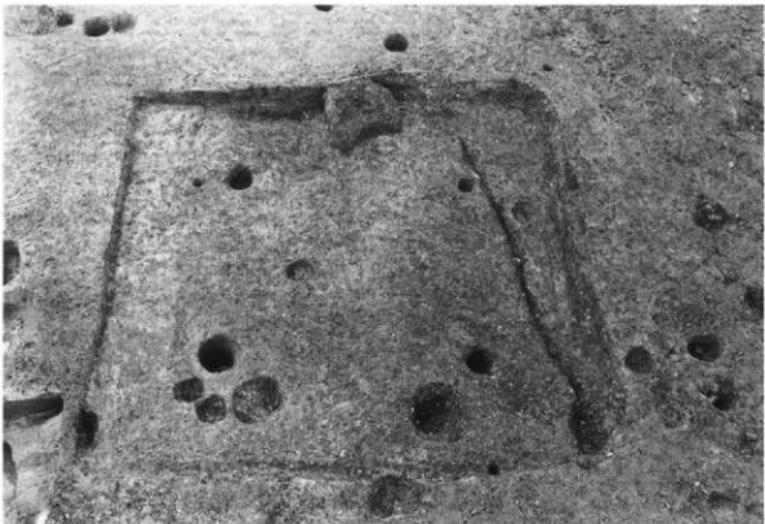
2. SC02住居跡検出状況近景（南西から）



1. SC09住居跡検出状況（西から）



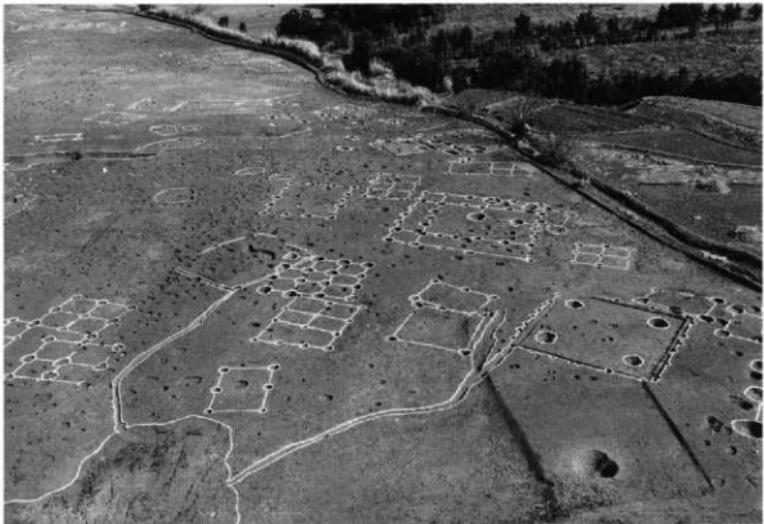
2. SC10住居跡検出状況近景（北から）



1. SC13住居跡検出状況近景（南から）



2. SC16住居跡検出状況遠景（西から）



1. SC16住居跡検出状況遠景（西から）



2. SC17・18住居跡検出状況遠景（北から）



SC17・18住居跡出土状況（南から）

SC01



05001



05006



05005



05003



05002



05004



05007

SC02



05008



05012



05010



05009



05011

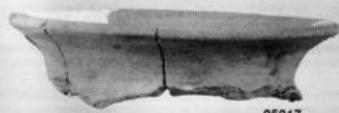


05019



05013

SC02



05017



05015



05016



05014

SC03



05027



05023



05022



05026



05021



05024

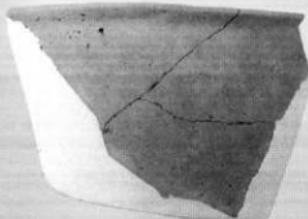


05025

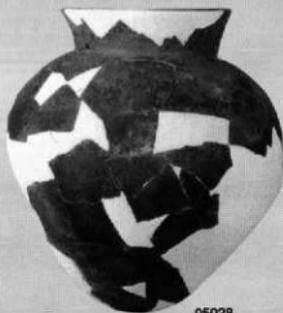


05020

SC03



05029



05028

SC04



05030



05032

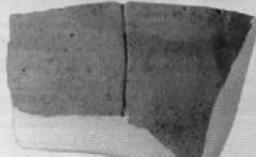


05031

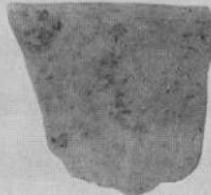
SC05



05033



05034



05035

SC06



05036



05038



05037

SC08



05039

SC09



06001

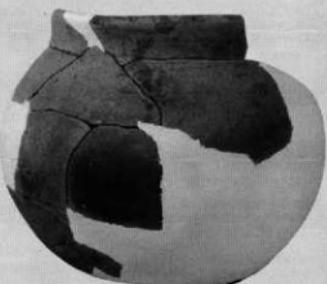
SC10



06003



06002



06008



06004

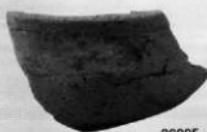


06009



06010

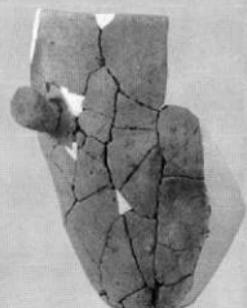
SC10



06005



06006



06011

SC11



06013



06015



16007



06012



06014



06016

SC12



06017

SC10~12住居跡出土遺物

SC13



06019



06021



06020



06018

SC14



06022



06023



06024

SC15



06025

SC16



06026



06027

SC16



06027



06028

SC17



06030



06029



06033



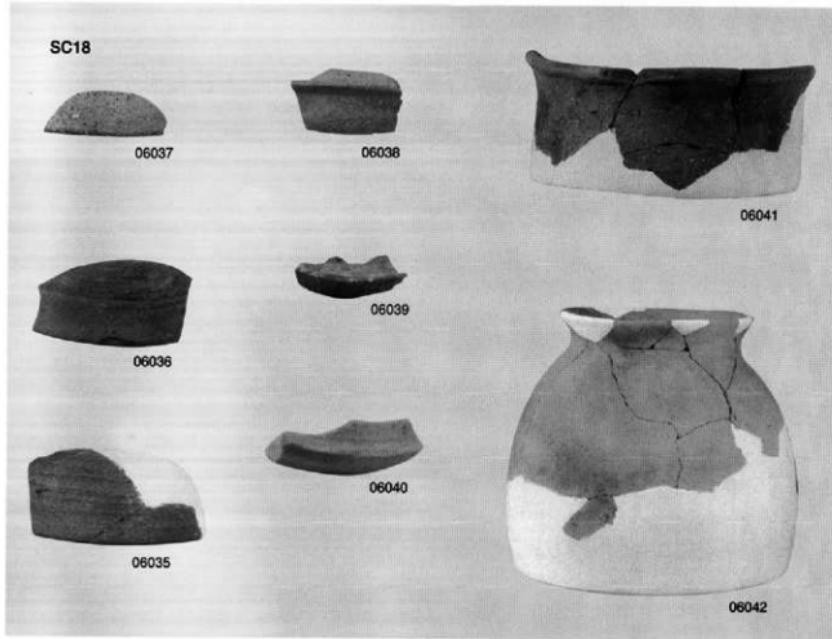
06031



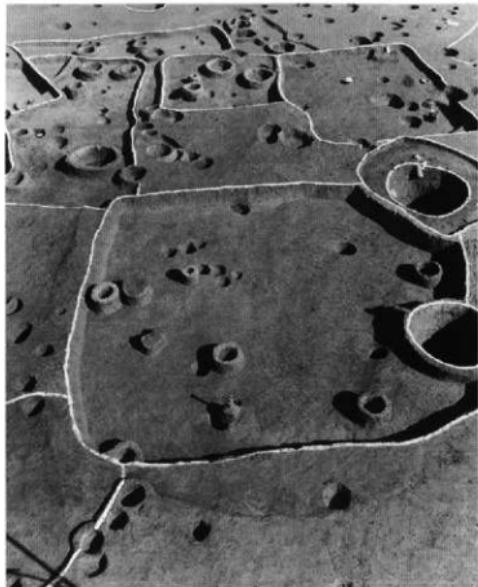
06032



06034



SC18住居跡出土遺物



1. SC45 (手前) 29・49・51・50 (右より、南西から)



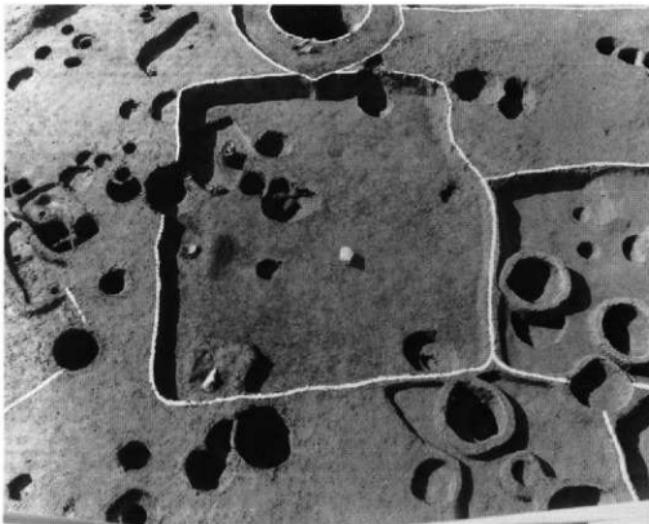
2. SC30 (東から)



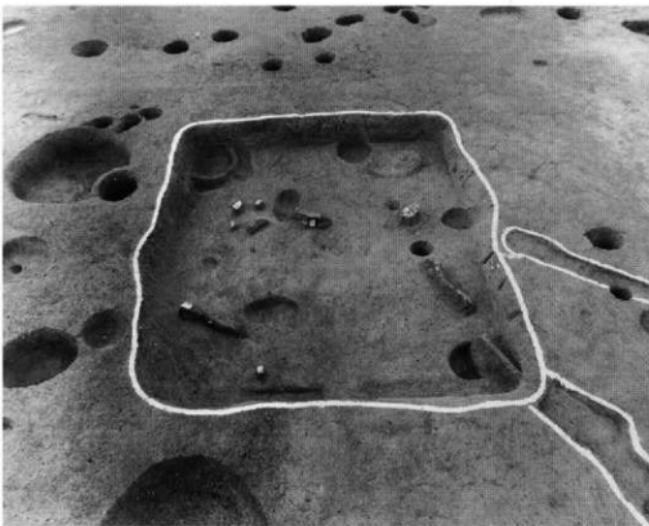
1. SC31土器出土状況（南から）



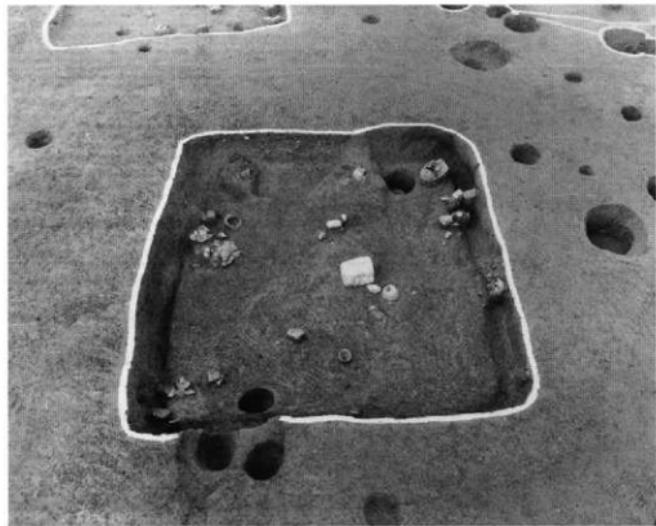
2. SC31軟質系土器甑出土状況（南から）



1. SC29 (北東から)



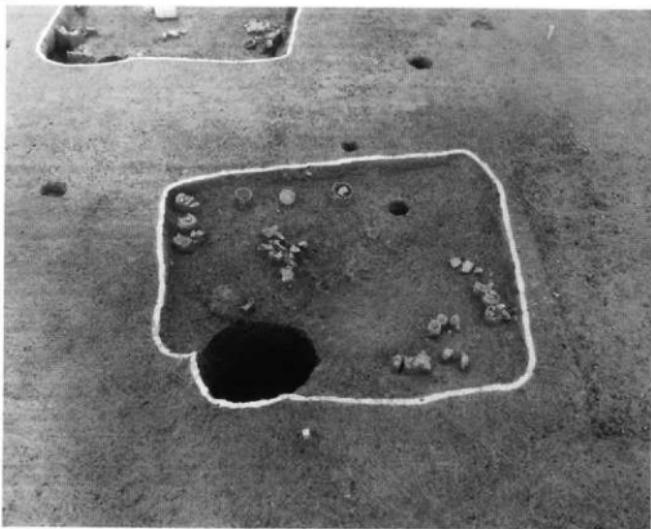
2. SC19 (南から)



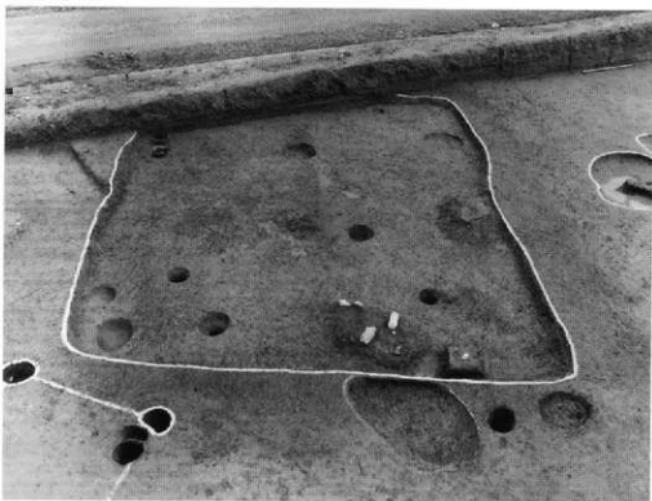
1. SC20 (南から)



2. SC20土器出土状況 (東から)



1. SC21 (北から)



2. SC43 (南から)



1. SC01・09・07・06・11・10（手前右より、東から）



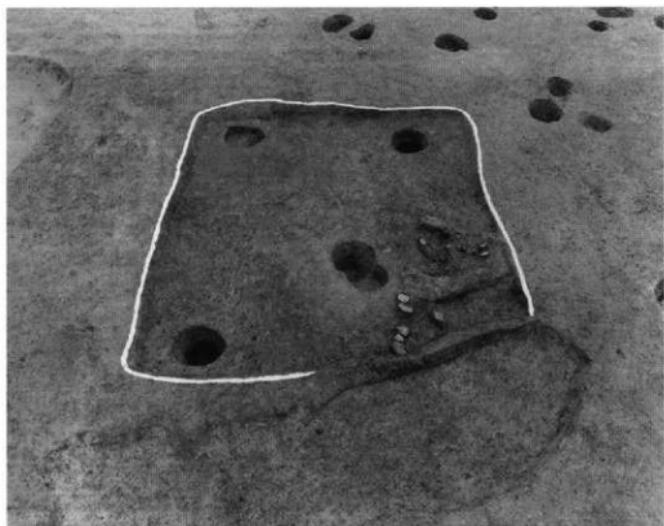
2. SC03・04他J13グリッド住居群（南東から）



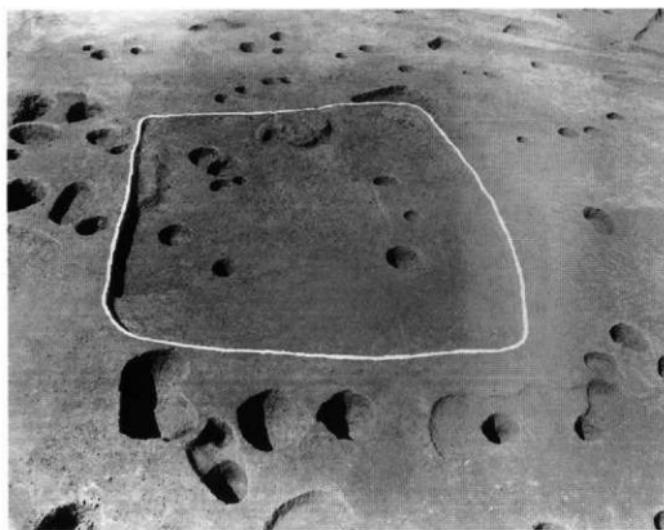
1. SC02 (南から)



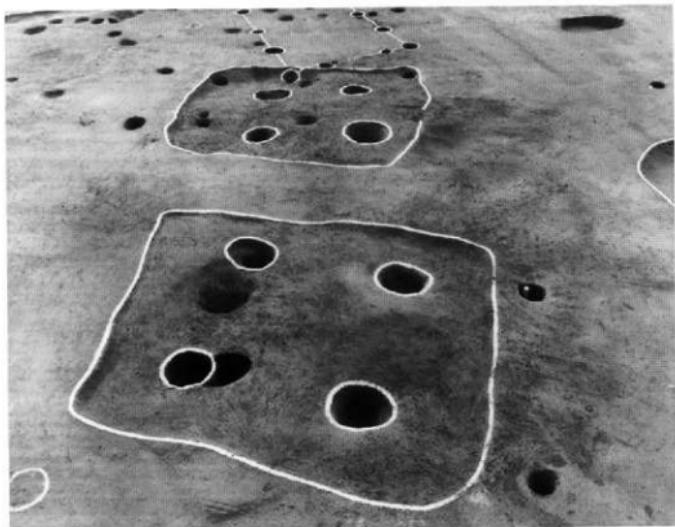
2. SC02 窓部分 (南から)



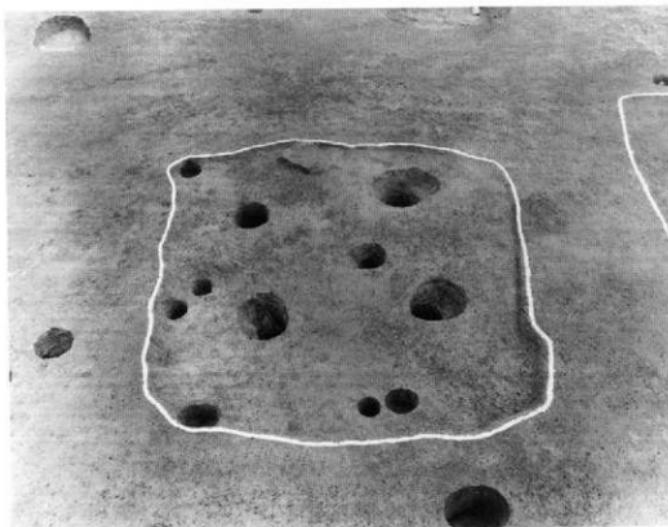
1. SC05 (東から)



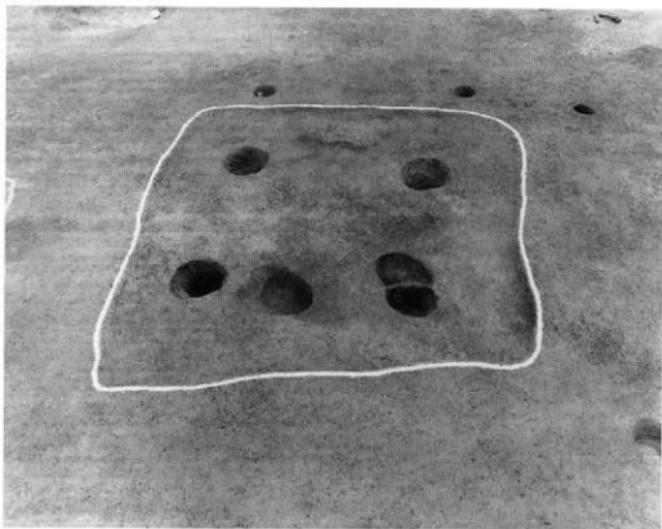
2. SC12 (東から)



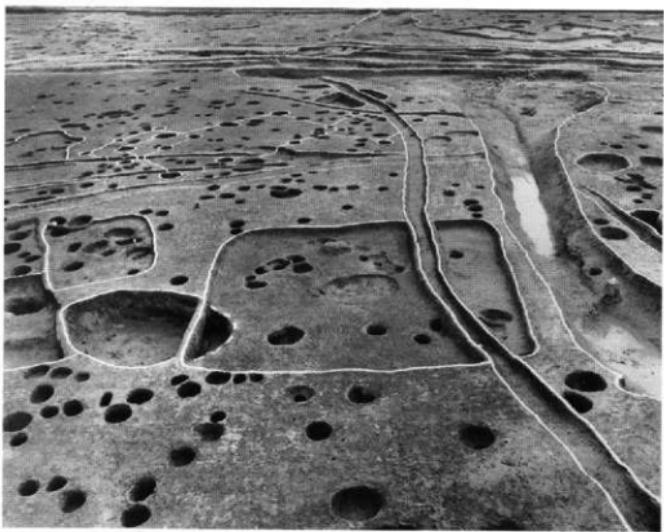
1. SC04・03 (手前より、北から)



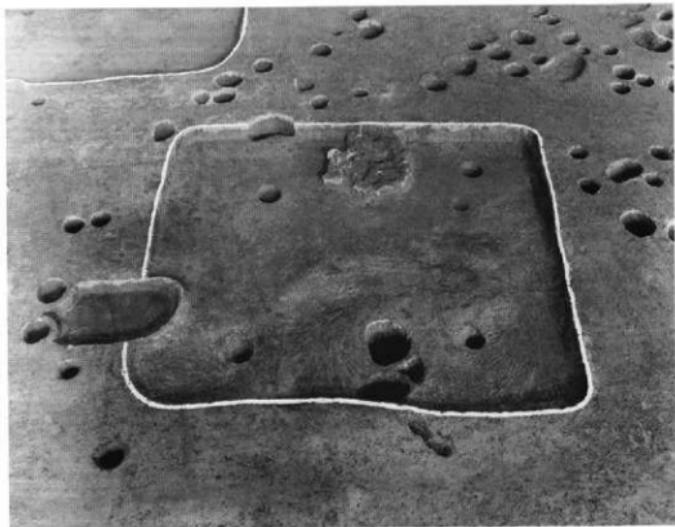
2. SC03 (東から)



1. SC04 (東から)



2. SC63 (北から)



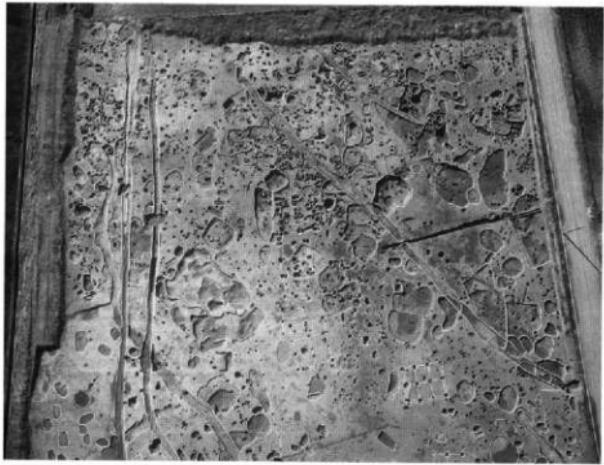
1. SC64 (南から)



2. SC69・68・65 (手前より。南から)



1. SC68・65・72・71 (手前右より、西から)



2. C群住居全景 (東から)



1. 4区遠景（北から）



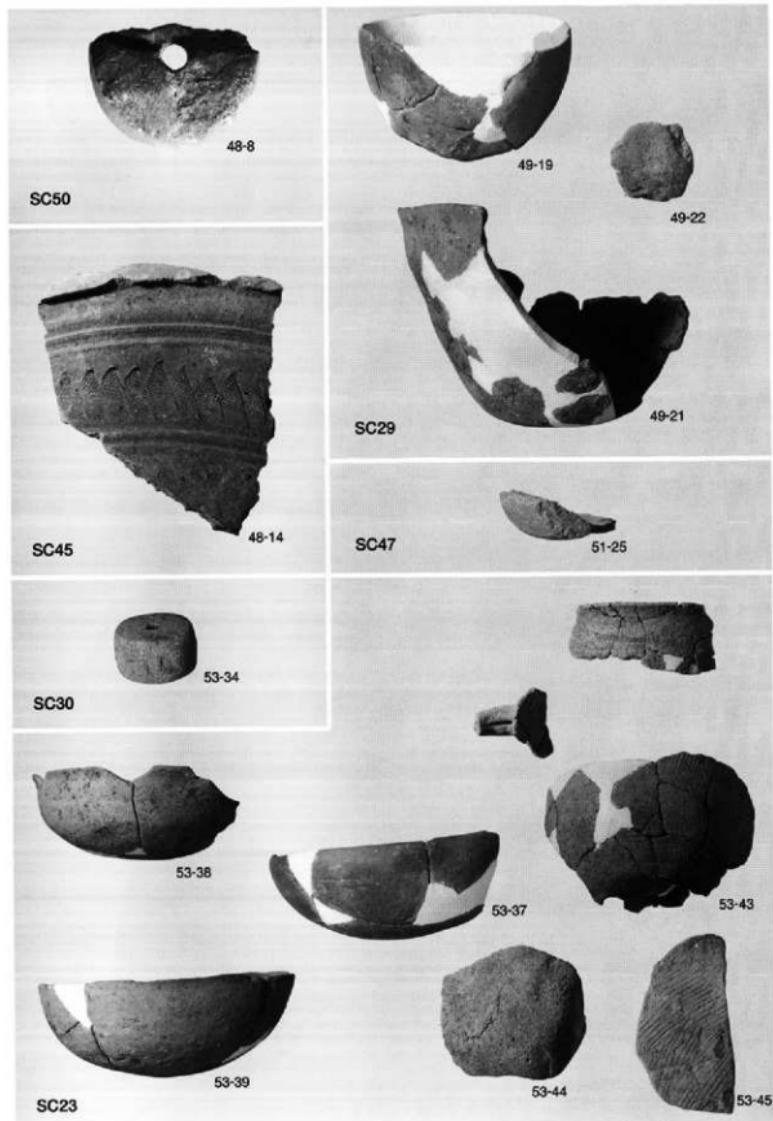
2. SC420・422・421（手前より、北から）



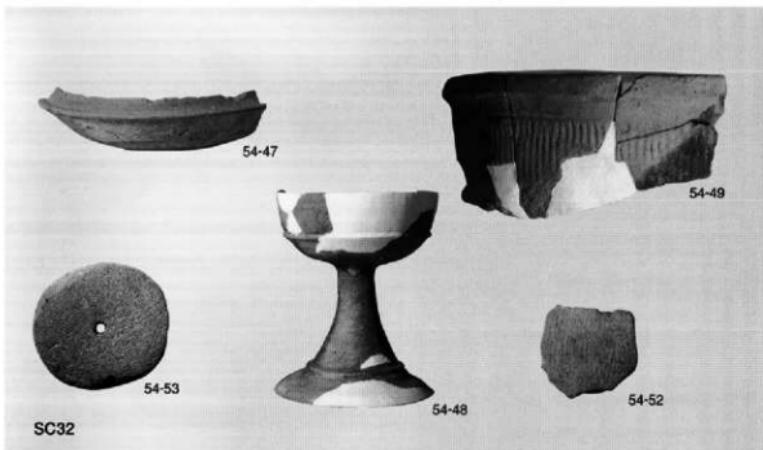
1. 2号排水路2区SC01他（西から）



2. SC01（北から）



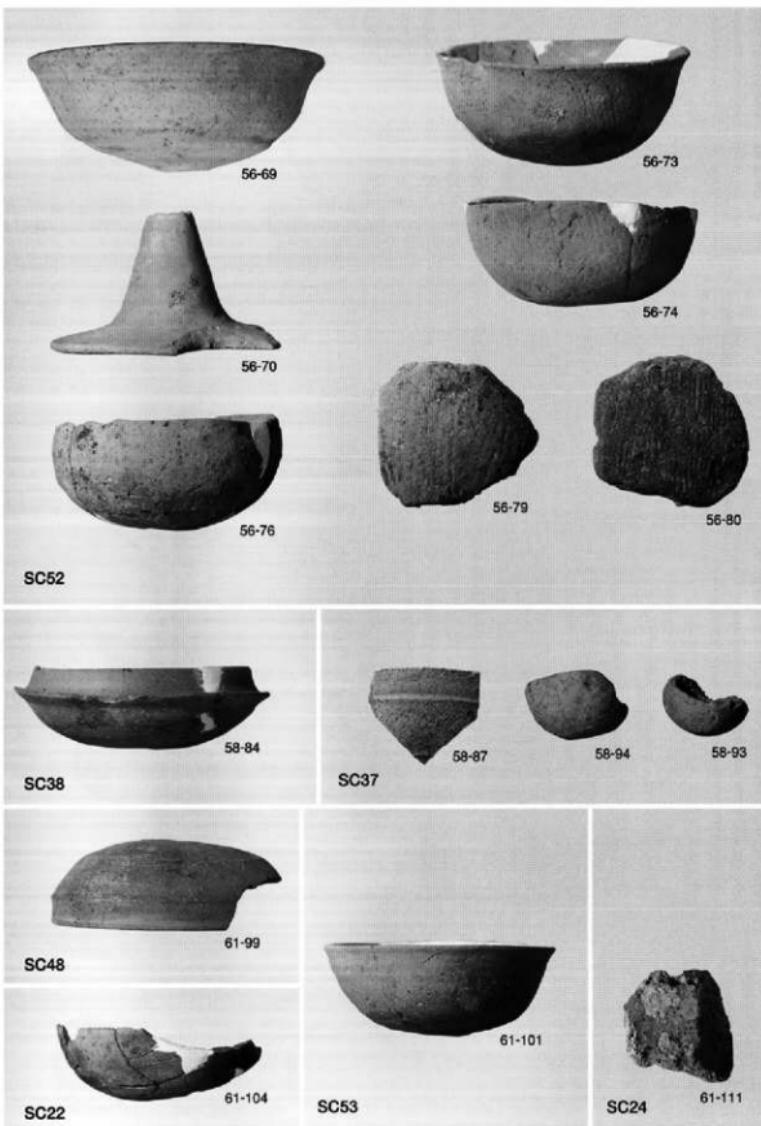
SC50・45・29・47・30・23出土遺物



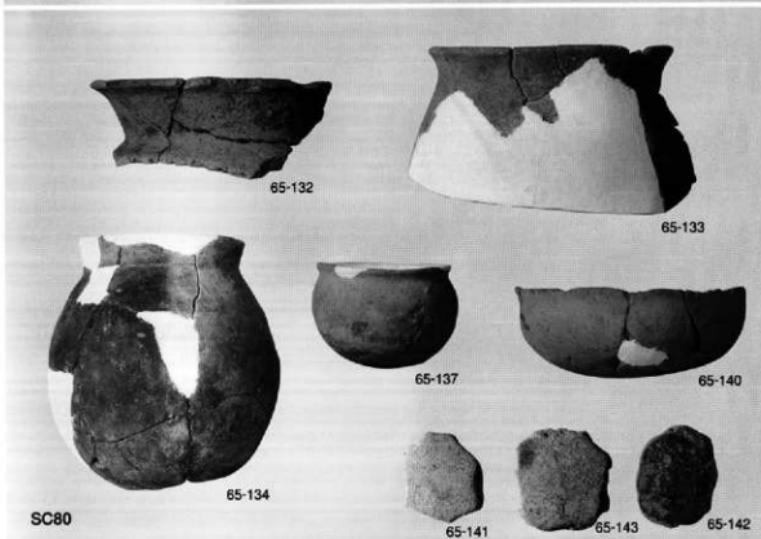
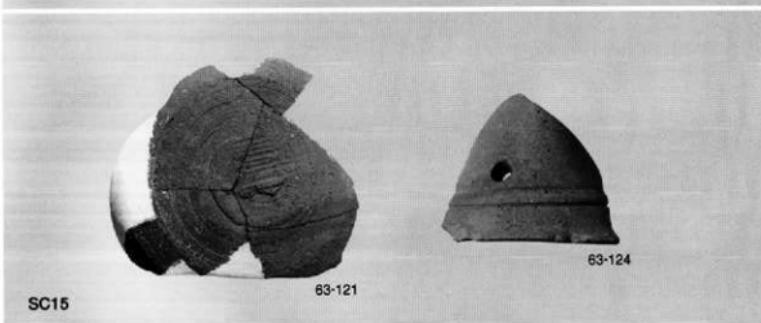
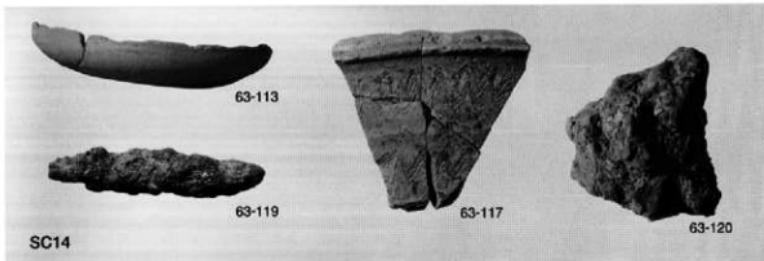
SC32

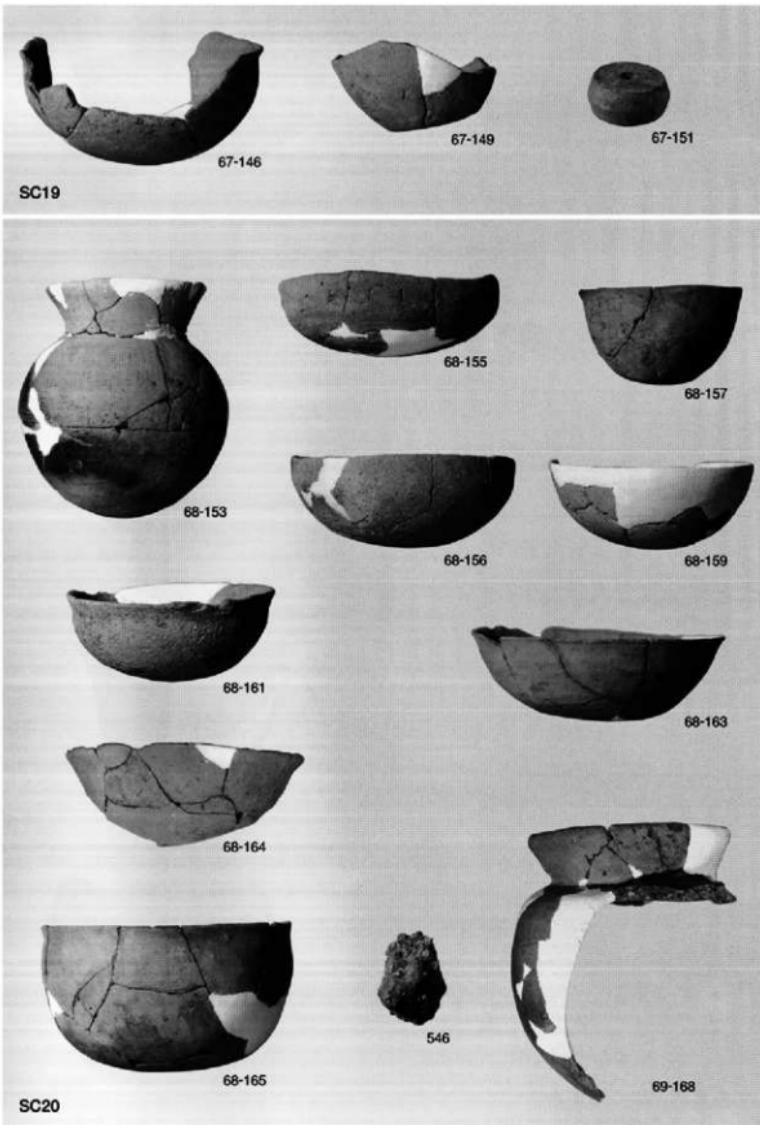


SC52

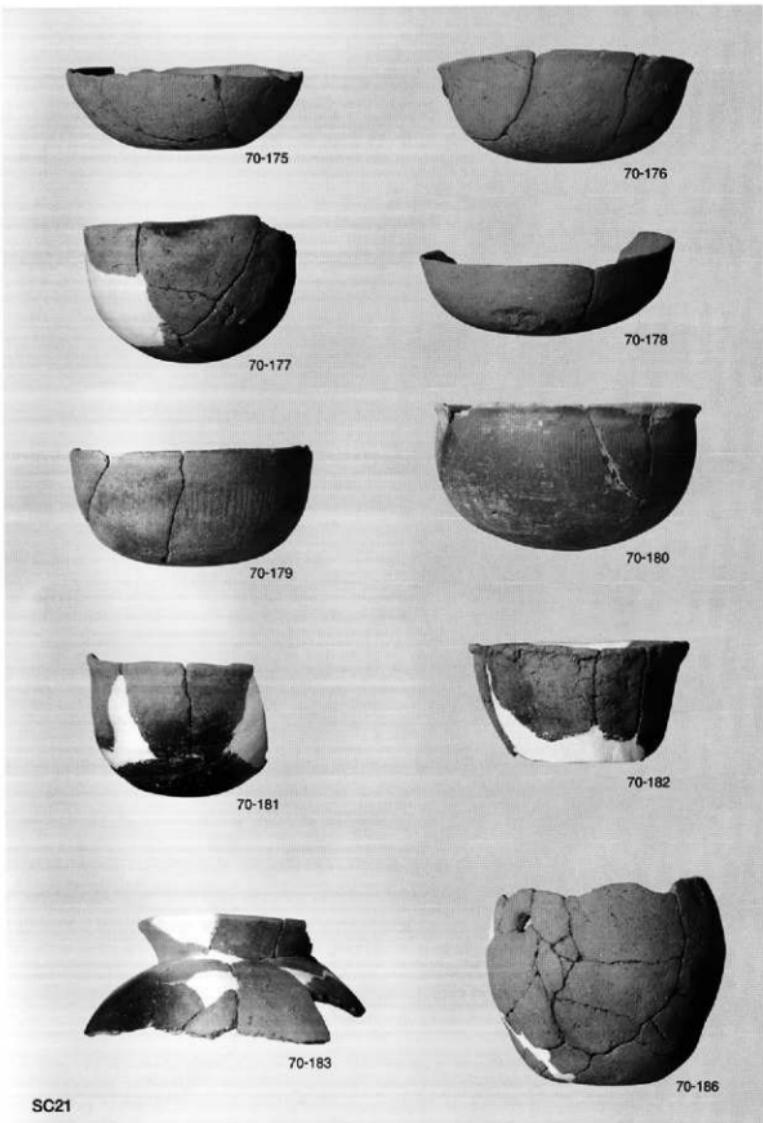


SC52・38・37・48・53・22・24出土遺物



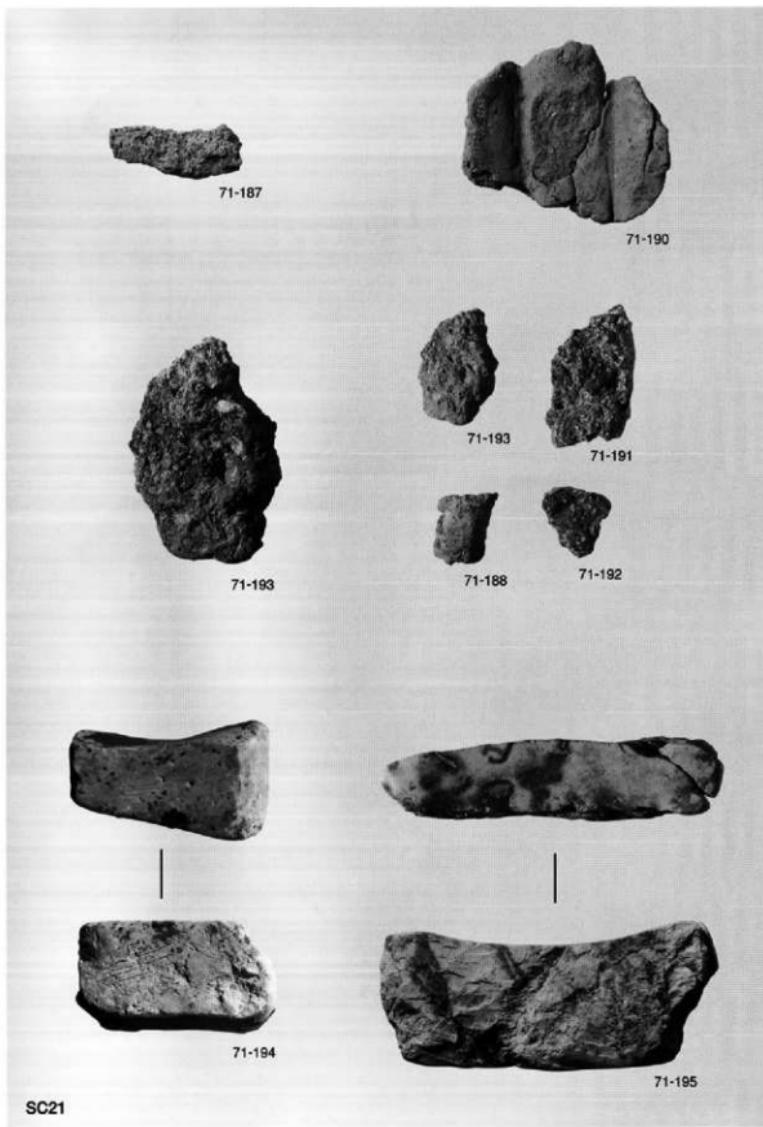


SC19・20出土遺物



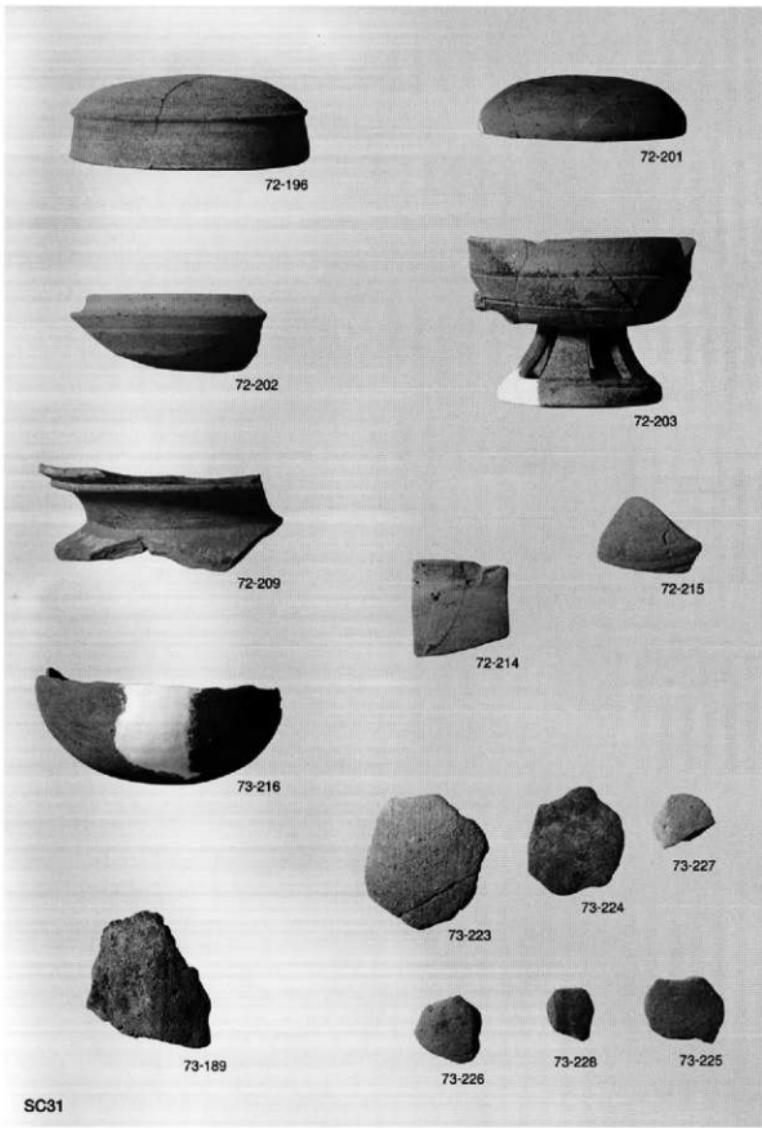
SC21

SC21出土遺物.1



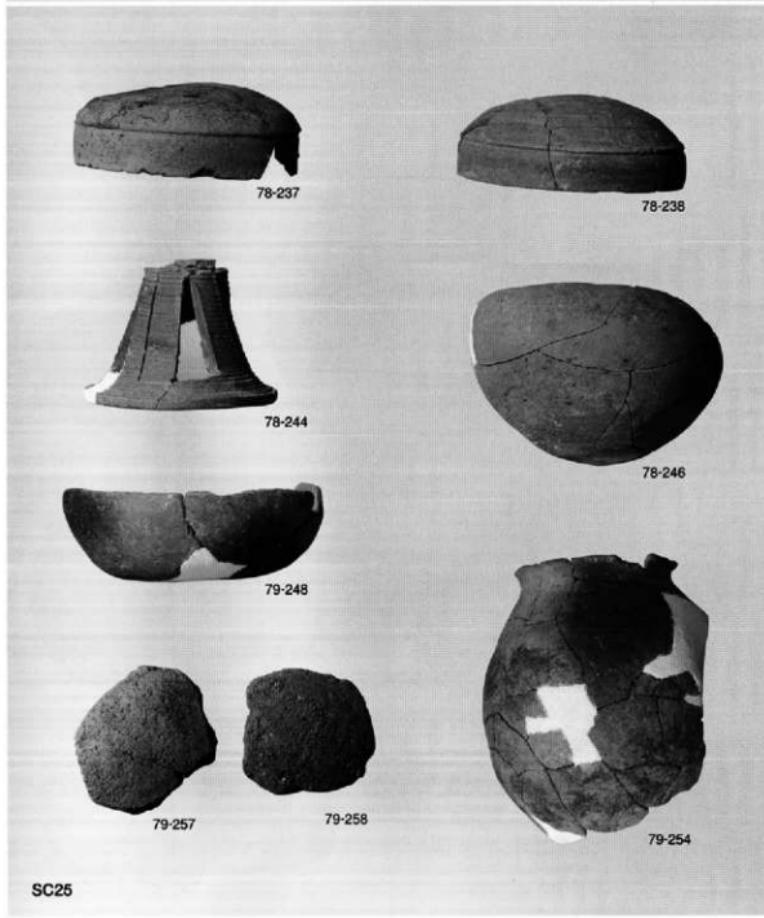
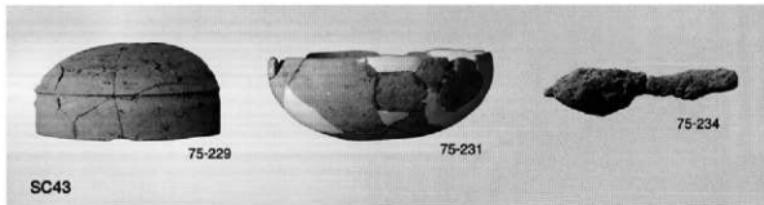
SC21

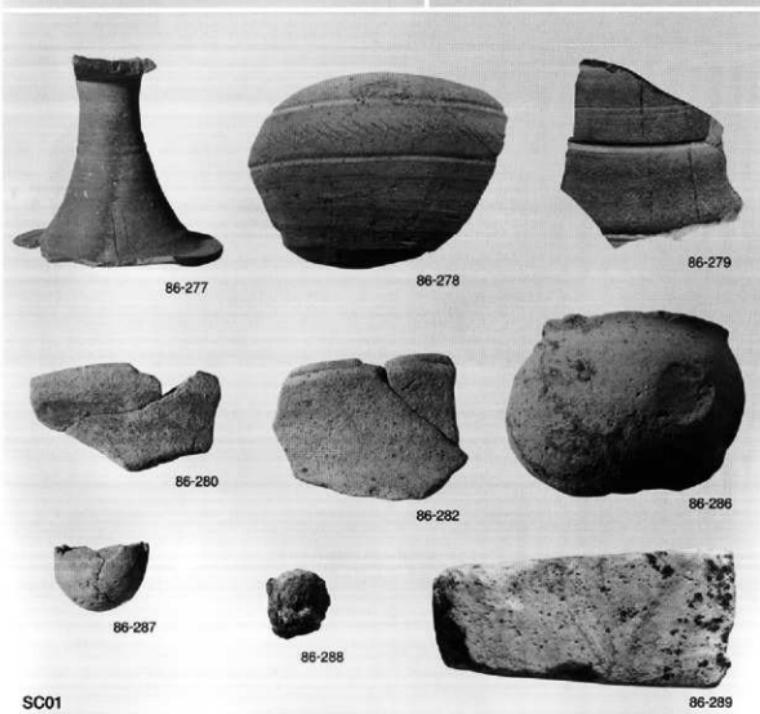
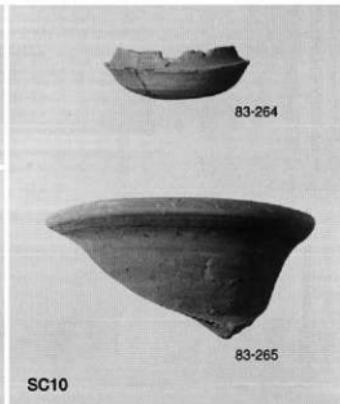
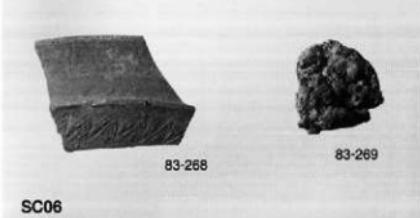
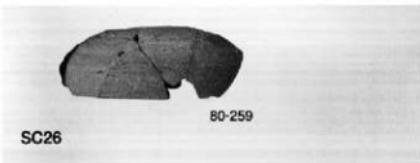
SC21出土遺物.2



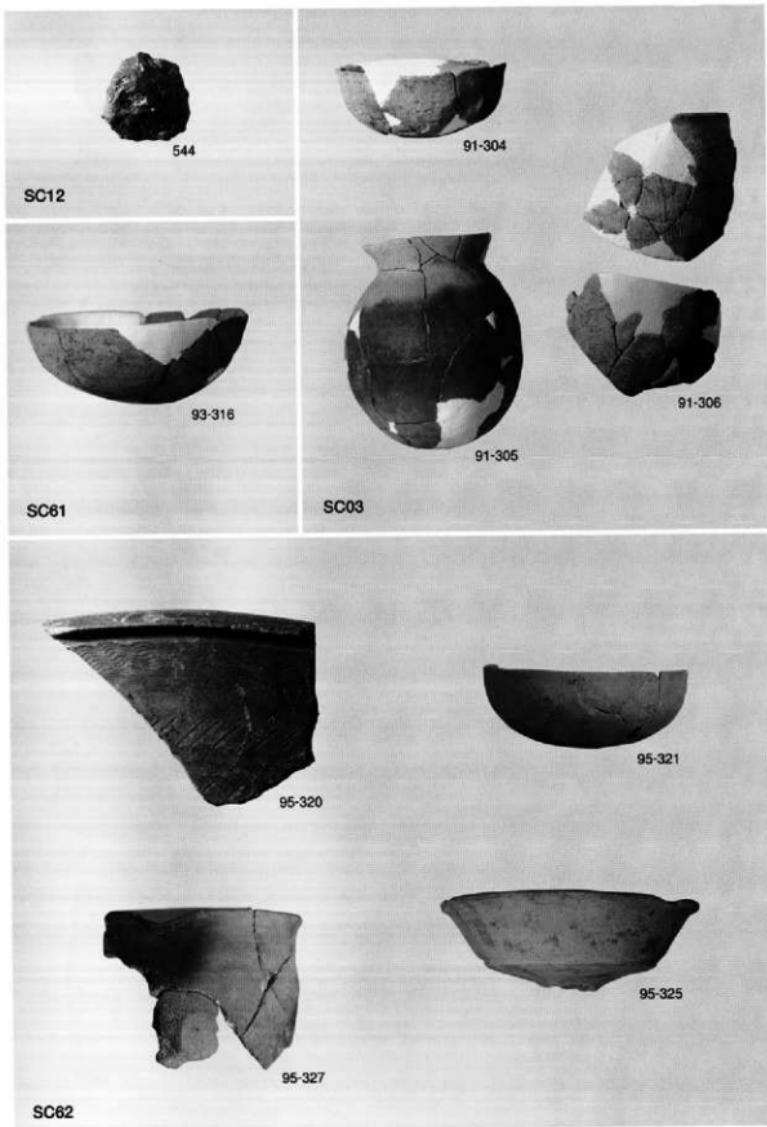
SC31

SC31出土遺物



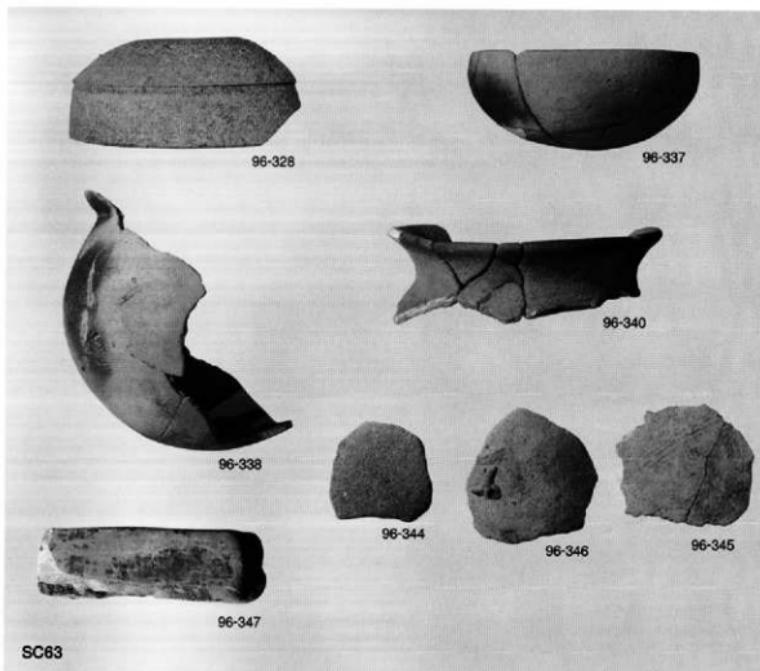


SC01



SC12

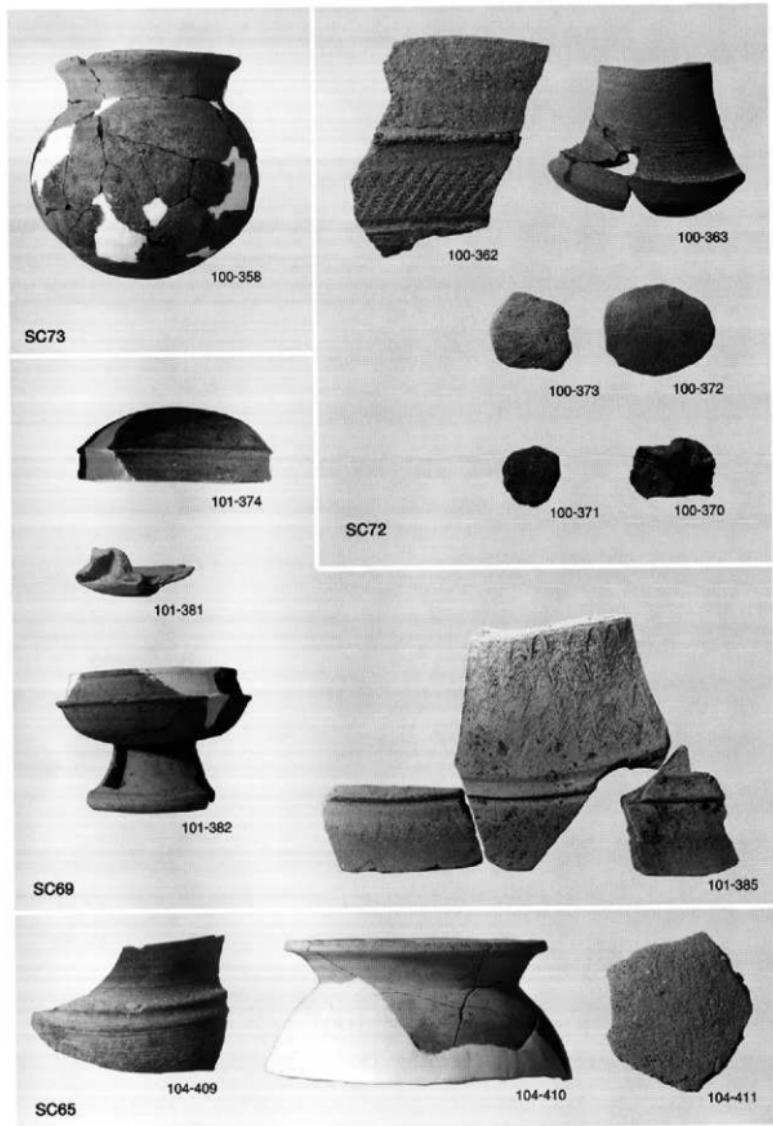
SC12・03・61・62出土遺物



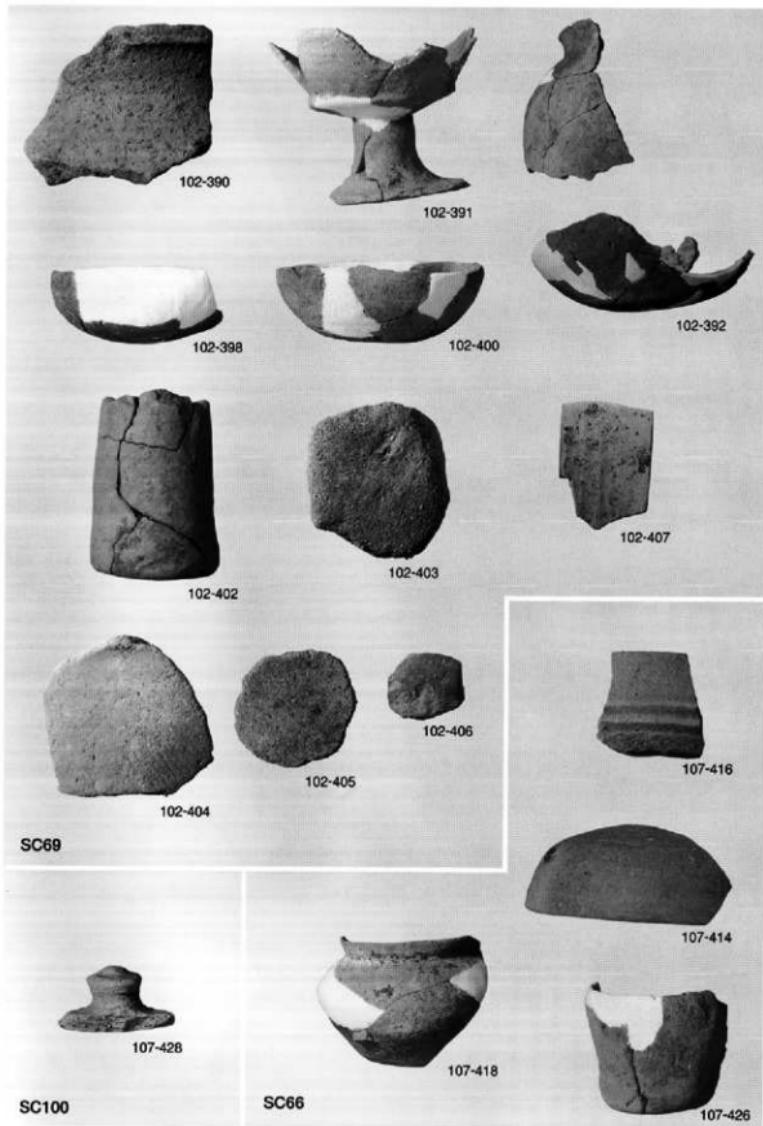
SC63

SC68

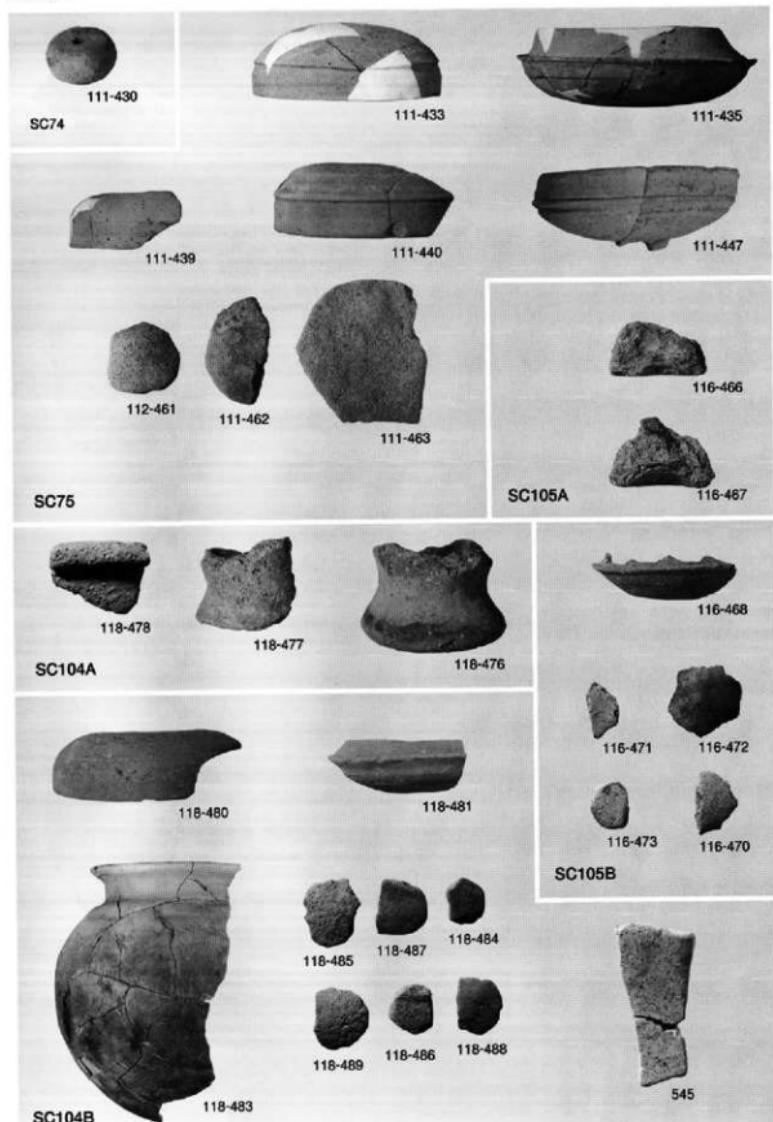
SC63・68出土遺物



SC73・72・69・65出土遺物



SC69・66・100出土遺物



SC74・75・105A・105B・104A・104B出土遺物



混入資料

SC420・421・422・2号排水路2区SC01出土遺物・竪穴住居混入遺物

報告書抄録

ふりがな	よしたけいせきぐん							
書名	吉武遺跡群							
副書名	飯盛・吉武圃場整備関係調査報告書10							
卷次	16							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	831							
編著者名	加藤良彦							
発行機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL092-711-4667							
発行年月日	20040331							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしたけいせきぐん 吉武遺跡群 第4・6・ 9次	ふくおかにししくじゆあざ 福岡市西区大学 よしたけいせきぐん 吉武字高木・ あかねいし 字大石 他	40135	0405	33	130	19830912~	25,000/	圃場整備
				32	19	19840324~		
				27	13	19840701~		
		19850320/	26,000/					
		19850801~	28,000					
		19860331						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
吉武遺跡群	集落	古墳	竪穴住居 103軒		初期須恵器 ・土師器・ 陶質土器・ 鉄滓		初期須恵器とともに 多数の半島系陶質・ 軟質土器の出土と 製鐵関連遺物の出土	

吉武遺跡群 XIV

飯盛・吉武團場整備事業関係調査報告書 10

福岡市埋蔵文化財調査報告書第831集

—古墳時代生活遺構編1—

2004年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 濑川印刷
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番46号